平成２６年度国宝重要文化財等保存整備費補助金
史跡前二子古墳等　地域の特性を活かした史跡等総合活用支援推進事業

大室古墳の教室

古代東国文化シンポジウム

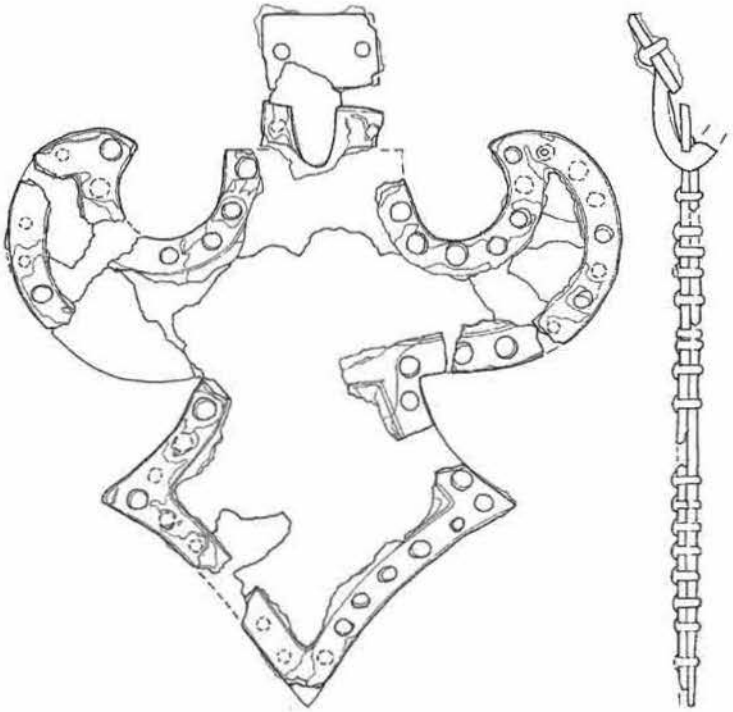
東アジアから見た前二子古墳記録集・資料集

2015.2

前橋市教育委員会

古代東国文化シンポジウム

東アジアから見た
前二子古墳
記録集・資料集



明治11年前二子古墳出土の双葉剣菱形杏葉

はじめに

大室公園にある前二子・中二子・後二子古墳の３基は、６世紀前半から後半にかけて築かれた、大型の前方後円墳です。平成 17 年に整備が完成して以来、多くの市民の皆様に親しんでいただいております。

本市では平成 26 年度から３ヵ年計画で大室公園民家園を中心に、前二子古墳の石室副葬品を再現することなどを目的に実施してきた「前二子古墳石室復元市民プロジェクト」を継承した『大室古墳の教室』事業を展開しております。

『大室古墳の教室』事業では、体験学習として「小学生・夏休み森の考古学教室」「須恵器や馬具を作る～匠の教室～」を実施し、市民ボランティア協力の基で「おおむろ・こふんの藤棚」や民家園土蔵を改装し「大室はにわ館」を開設しました。このほかに、「講座・赤城南麓の考古学 2014」や「須恵器・馬具完成記念考古学講演会」などのメニューを用意しました。

本書の第一部は、古代東国文化サミット～ググッとぐんま・大室古墳フェスタ～の一つとして、平成 25 年 11 月２日（土）に前橋市総合福祉会館おいてシンポジウム『東アジアから見た前二子古墳』の開催結果を収録した記録集です。シンポジウム開催にあたっては、国立歴史民俗博物館名誉教授・大阪府立近つ飛鳥博物館館長の白石太一郎先生をはじめ、宮崎大学名誉教授の柳澤一男先生、専修大学教授の高久健二先生、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事の右島和夫先生には大変お世話になりました。

第二部の資料集には、明治 11 年の調査で出土した前二子と後二子古墳石室の未発表資料を掲載しました。明治 11 年の調査は、明治政府の命令による陵墓探索の一環で、群馬県と西大室村が総力をあげて前・中・後二子古墳石室の解明に努めました。陵墓としての認定はされませんでしたが、出土品はすぐに公開され、全国津々浦々から 5000 名を超える見学者を迎えることができました。また、英国外交官アーネスト･サトウ氏の調査より国外にまで成果が伝えられました。

最後に本書の刊行にあたりまして、文化庁、群馬県文化振興課、群馬県教育委員会文化財保護課をはじめとする多くの関係機関や関係者にお世話になりました。今後も多くの皆さんのご支援をいただきながら、大室古墳群を核とした様々な魅力ある事業を展開して行きたいと思います。

平成27年２月７日

前橋市教育委員会

教育長　佐藤博之

例　言

１　本書は、平成25年11月２日（土）に前橋市総合福祉会館おいて開催したシンポジウム「東アジアから見た前二子古墳」の発表をまとめた記録集を群馬県文化振興課の許可を得て再版したものである。

２　本書には明治11年、平成3、4、14年に実施した前二子・後二子古墳石室調査資料についてもあわせて掲載した。なお、明治11年調査資料は本書で正式に公表するものである。

３　本書の編集は前原　豊（前橋市教育委員会文化財保護課）が行った。原稿執筆は、杉山秀宏（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）と前原があたった。

４　講演およびシンポジウムの文章化については、主として岩丸展久（前橋市教育委員会文化財保護課）が、一部を小林　徹（群馬県文化振興課）が行った。

５　本書の作成にあたっては、倉地啓仁、小川卓也、伊藤孝子、大塚美智子、佐藤佳子、武井洋子、竹内るり子、戸丸澄江、柴崎まさ子、内藤貴美子、舩津弘幸、峰岸あや子、吉田真理子の協力があった。なお、掲載した石室・出土品・絵図写真は、たつみ写真スタジオ、表紙写真は綱島　徹氏（上毛新聞社）の撮影による。

６　本書に掲載した『西大室村古墳出土祭器現形之図』は、群馬県立歴史博物館所蔵品のため引用・転載にあたっては、群馬県立歴史博物館の許可を得る必要がある。

７　本書に掲載した『群馬県陵墓図』は、増田一裕家蔵本のため引用・転載にあたっては、「増田一裕家蔵本『群馬県陵墓図』」と出典を明記する必要がある。

８　本書に掲載した「前二子古墳、中二子古墳、後二子古墳、伊勢山古墳に関連した絵図・古文書」は、斎藤　忠編著1979『日本考古学史資料集成２　明治時代１』斎藤考古学研究所を転載した。

目　　次

巻頭写真　大室古墳群の前二子古墳と後二子古墳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1 ～ 8
記録写真　講演会とシンポジウムの様子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9 ～ 10
遺物写真　明治11年石室出土品（前二子古墳・後二子古墳）・・・・・・・・・・・・・　11 ～ 28
絵図写真　群馬県立歴史博物館蔵「西大室村出土祭器現形之図」・・・・・・・・　29 ～ 31
絵図写真　増田一裕家蔵本「群馬県陵墓図」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　32 ～ 33

第１部　記録集・シンポジウム『東アジアから見た前二子古墳』

Ⅰ　記念講演の記録
「前二子古墳の営まれた時代
～６世紀初頭の畿内と東国～」（白石太一郎）・・・　35 ～ 52

Ⅱ　基調報告の記録
「前二子古墳の二つの調査から～明治・平成の
発掘調査～」　（前原　豊）・・・　53 ～ 62

Ⅲ　基調講演の記録
1　「前二子古墳の頃の東国～上毛野地域を中心とした
初期横穴式石室の様相とその特徴～」（右島 和夫）・・・　63 ～ 70
2　「前二子古墳横穴式石室のルーツを探る
～九州と韓国の横穴式石室～」（柳澤 一男）・・・　71 ～ 79
3　「５・６世紀における朝鮮半島南部の
様相と交流関係」（高久 健二）・・・　81 ～ 94

Ⅳ　パネル・ディスカッションの記録
「東アジアからみた前二子古墳」
（右島・柳澤・高久・前原）・・・　95 ～ 102

第２部　資料集・『前二子古墳石室と後二子古墳石室出土品』

Ⅰ　前二子古墳と後二子古墳の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　103 ～ 112
Ⅱ　明治11年調査の石室出土品－陵墓探索調査－
1　石室出土の土器について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　113 ～ 124
2　石室出土の金属製品・装身具について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　125 ～ 178
Ⅲ　平成４年度の調査－史跡整備に伴う範囲確認調査－・・・・・・・・・・・　179 ～ 189
Ⅳ　平成14年度の調査－史跡整備工事に伴う石室調査－・・・・・・・・・・・　190 ～ 193
Ⅴ　ま　と　め・・　194 ～ 198
付録　『日本考古学史資料集成２　明治時代１』（抜粋）・・・・・・・・・・　199 ～ 208

写真図版

PL. 1 大室公園と大室古墳群…… 1
PL. 2 前二子古墳の石室…… 2
PL. 3 前二子古墳の石室…… 3
PL. 4 前二子古墳石室出土の副葬品(1)…… 4
PL. 5 前二子古墳石室出土の副葬品(2)…… 5
PL. 6 前二子古墳石室出土の副葬品(3)…… 6
PL. 7 前二子古墳石室出土の副葬品(4)…… 7
PL. 8 後二子古墳の石室…… 8
PL. 9 講演会とシンポジウムの様子(1)…… 9
PL. 10 講演会とシンポジウムの様子(2)…… 10
PL. 11 明治11年石室出土品(1)…… 11
PL. 12 明治11年石室出土品(2)…… 12
PL. 13 明治11年石室出土品(3)…… 13
PL. 14 明治11年石室出土品(4)…… 14
PL. 15 明治11年石室出土品(5)…… 15
PL. 16 明治11年石室出土品(6)…… 16
PL. 17 明治11年石室出土品(7)…… 17
PL. 18 明治11年石室出土品(8)…… 18
PL. 19 明治11年石室出土品(9)…… 19
PL. 20 明治11年石室出土品(10)…… 20
PL. 21 明治11年石室出土品(11)…… 21
PL. 22 明治11年石室出土品(12)…… 22
PL. 23 明治11年石室出土品(13)…… 23
PL. 24 明治11年石室出土品(14)…… 24
PL. 25 明治11年石室出土品(15)…… 25
PL. 26 明治11年石室出土品(16)…… 26
PL. 27 明治11年石室出土品(17)…… 27
PL. 28 明治11年石室出土品(18)…… 28
PL. 29 「西大室村古墳祭器現形之図」(1)…… 29
PL. 30 「西大室村古墳祭器現形之図」(2)…… 30
PL. 31 「西大室村古墳祭器現形之図」(3)…… 31
PL. 32 増田一裕家蔵本「群馬県陵墓図」(1)… 32
PL. 33 増田一裕家蔵本「群馬県陵墓図」(2)… 33

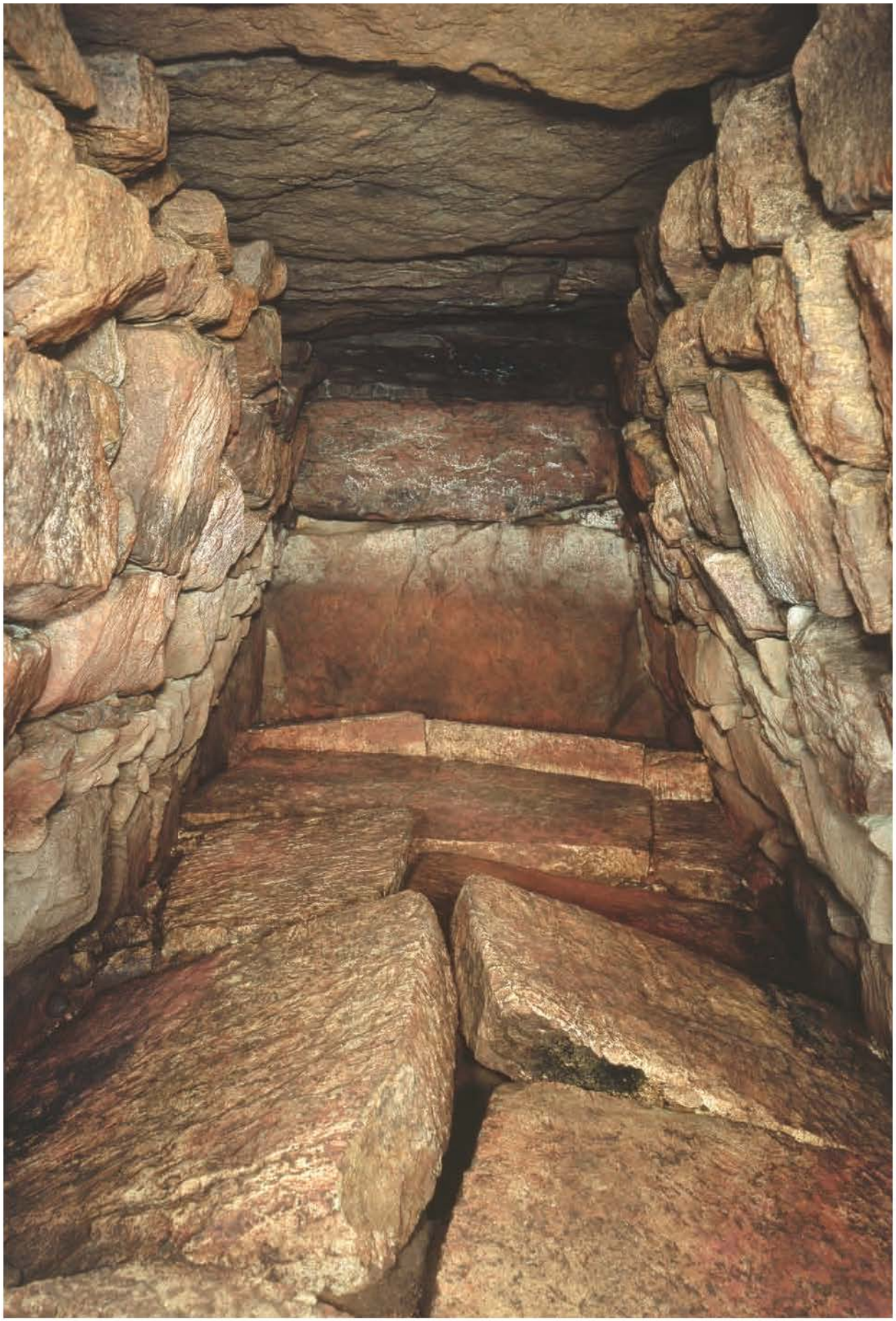
付　表

Tab. 1 明治11年　前二子古墳・後二子古墳
出土品計測表…… 170 ～178
Tab. 2 平成４年度　前二子古墳石室
出土品計測表…… 186 ～189
Tab. 3 平成14年度　前二子古墳石室
出土品計測表…… 193

挿　図

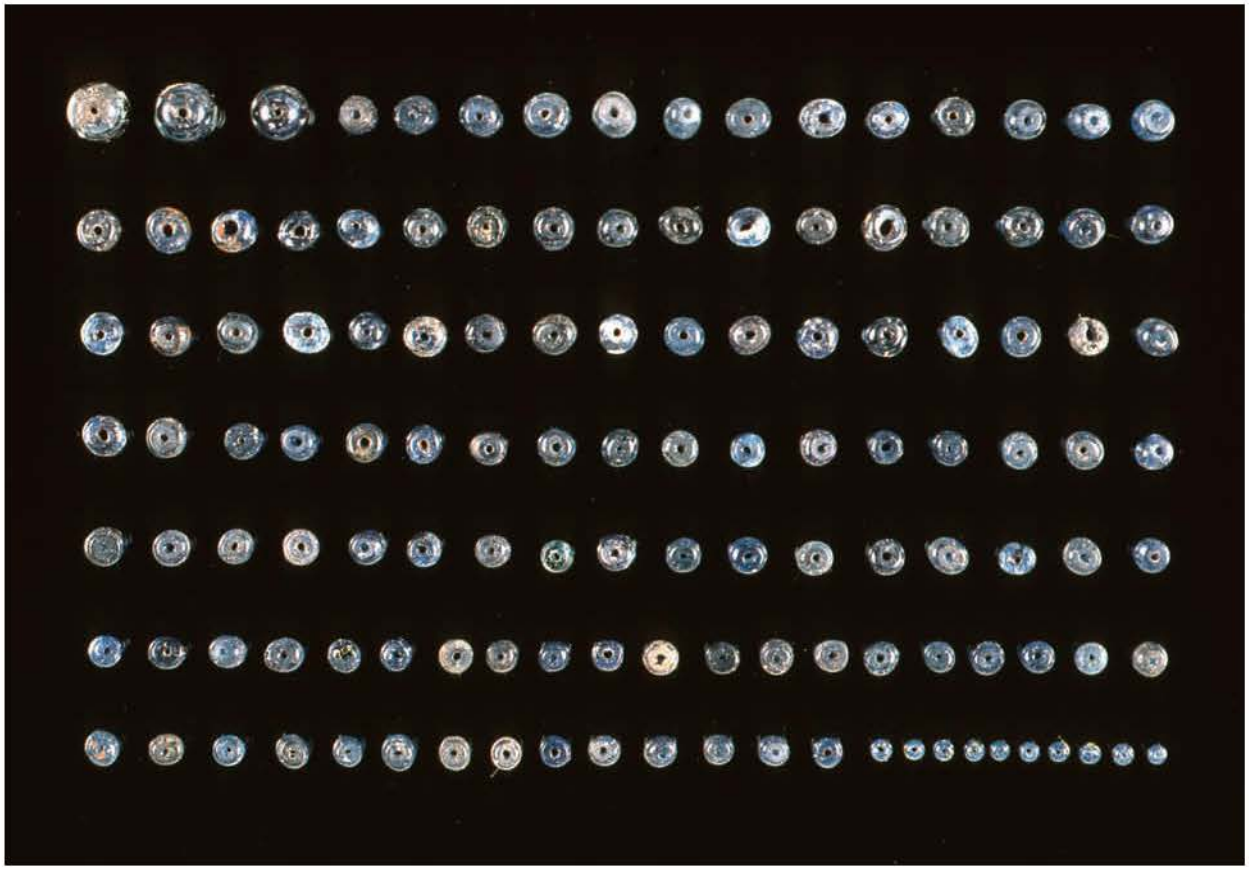
Fig. 1 前・中・後・小二子古墳復元図…… 107
Fig. 2 前二子古墳全体図…… 108
Fig. 3 前二子古墳石室実測図…… 109
Fig. 4 後二子古墳全体図…… 110
Fig. 5 後二子古墳石室実測図…… 111
Fig. 6 後二子古墳遺物集成図…… 112
Fig. 7 前・後二子石室出土の遺物(1)…… 116
Fig. 8 前・後二子石室出土の遺物(2)…… 117
Fig. 9 前・後二子石室出土の遺物(3)…… 118
Fig. 10 前・後二子石室出土の遺物(4)…… 119
Fig. 11 前・後二子石室出土の遺物(5)…… 120
Fig. 12 前・後二子石室出土の遺物(6)…… 121
Fig. 13 前・後二子石室出土の須恵器拓影(1)・ 122
Fig. 14 前・後二子石室出土の須恵器拓影(2)・ 123
Fig. 15 前・後二子石室出土の須恵器拓影(3)・ 124
Fig. 16 前・後二子石室出土品計測凡例(1)… 131
Fig. 17 前・後二子石室出土品計測凡例(2)… 132
Fig. 18 前・後二子石室出土品計測凡例(3)… 133
Fig. 19 前・後二子石室出土品計測凡例(4)… 134
Fig. 20 前・後二子石室出土品計測凡例(5)… 135
Fig. 21 前・後二子石室出土品計測凡例(6)… 136
Fig. 22 前・後二子石室出土品計測凡例(7)… 137
Fig. 23 明治11年石室出土品実測図(1)…… 138
Fig. 24 明治11年石室出土品実測図(2)…… 139
Fig. 25 明治11年石室出土品実測図(3)…… 140
Fig. 26 明治11年石室出土品実測図(4)…… 141
Fig. 27 明治11年石室出土品実測図(5)…… 142
Fig. 28 明治11年石室出土品実測図(6)…… 143
Fig. 29 明治11年石室出土品実測図(7)…… 144
Fig. 30 明治11年石室出土品実測図(8)…… 145
Fig. 31 明治11年石室出土品実測図(9)…… 146
Fig. 32 明治11年石室出土品実測図(10)…… 147
Fig. 33 明治11年石室出土品実測図(11)…… 148
Fig. 34 明治11年石室出土品実測図(12)…… 149
Fig. 35 明治11年石室出土品実測図(13)…… 150
Fig. 36 明治11年石室出土品実測図(14)…… 151
Fig. 37 明治11年石室出土品実測図(15)…… 152
Fig. 38 明治11年石室出土品実測図(16)…… 153
Fig. 39 明治11年石室出土品実測図(17)…… 154
Fig. 40 明治11年石室出土品実測図(18)…… 155
Fig. 41 明治11年石室出土品実測図(19)…… 156
Fig. 42 明治11年石室出土品実測図(20)…… 157
Fig. 43 明治11年石室出土品実測図(21)…… 158
Fig. 44 明治11年石室出土品実測図(22)…… 159
Fig. 45 明治11年石室出土品実測図(23)…… 160
Fig. 46 明治11年石室出土品実測図(24)…… 161
Fig. 47 明治11年石室出土品実測図(25)…… 162
Fig. 48 明治11年石室出土品実測図(26)…… 163
Fig. 49 明治11年石室出土品実測図(27)…… 164
Fig. 50 明治11年石室出土品実測図(28)…… 165
Fig. 51 明治11年石室出土品実測図(29)…… 166
Fig. 52 明治11年石室出土品実測図(30)…… 167
Fig. 53 明治11年石室出土品実測図(31)…… 168
Fig. 54 明治11年石室出土品実測図(32)…… 169
Fig. 55 平成４年度前二子石室出土品(1)…… 182
Fig. 56 平成４年度前二子石室出土品(2)…… 183
Fig. 57 平成４年度前二子石室出土品(3)…… 184
Fig. 58 平成４年度前二子石室出土品(4)…… 185
Fig. 59 平成14年度前二子石室出土品(1)…… 191
Fig. 60 平成14年度前二子石室出土品(2)…… 192

PL. 1 大室公園と大室古墳群



PL. 2 前二子古墳の石室

PL. 3 前二子古墳の石室



PL. 4 前二子古墳石室出土の副葬品 (1)

PL. 5 前二子古墳石室と墳丘出土の副葬品 (2)

182

183

184

185

PL. 6 前二子古墳石室出土の副葬品 (3)

PL. 7 前二子古墳石室出土の副葬品 (4)

PL. 8 後二子古墳の石室

1　前橋市　山本　龍市長のあいさつ

2　大阪府立近つ飛鳥博物館館長　白石　太一郎氏の記念講演

PL. 9 講演会とシンポジウムの様子(1)

1　白石　太一郎氏の講演

2　右島和夫氏の講演

3　高久健二氏の講演

4　柳澤一男氏の講演

5　前原　豊氏の基調講演

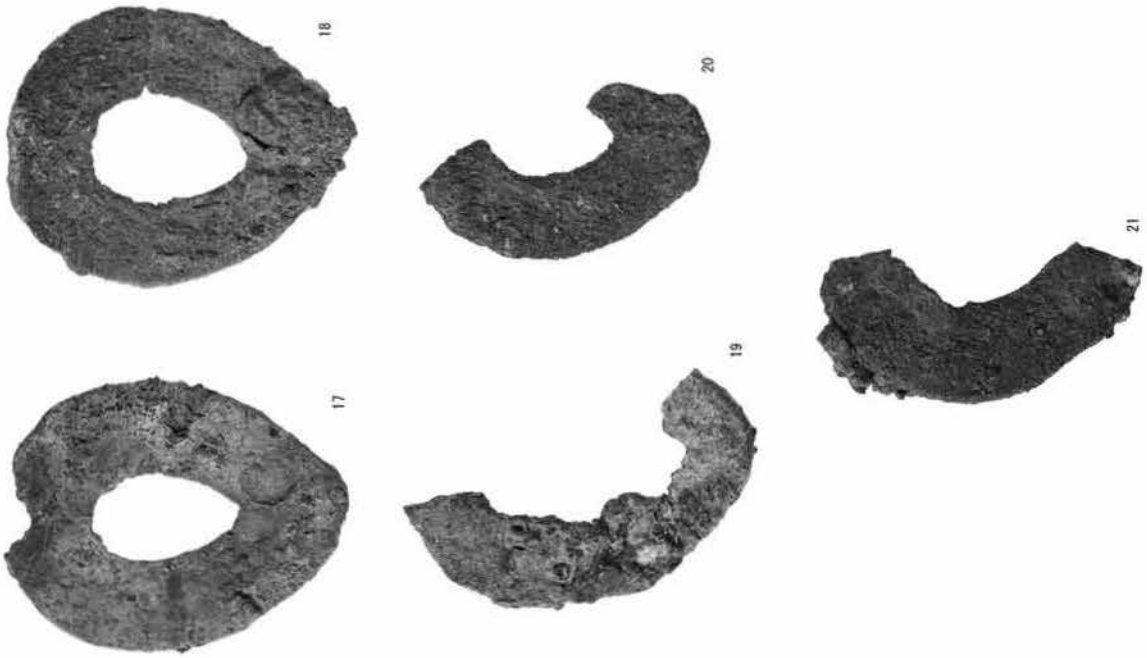
6　パネルディスカッションのようす

7　前二子古墳石室出土の土器

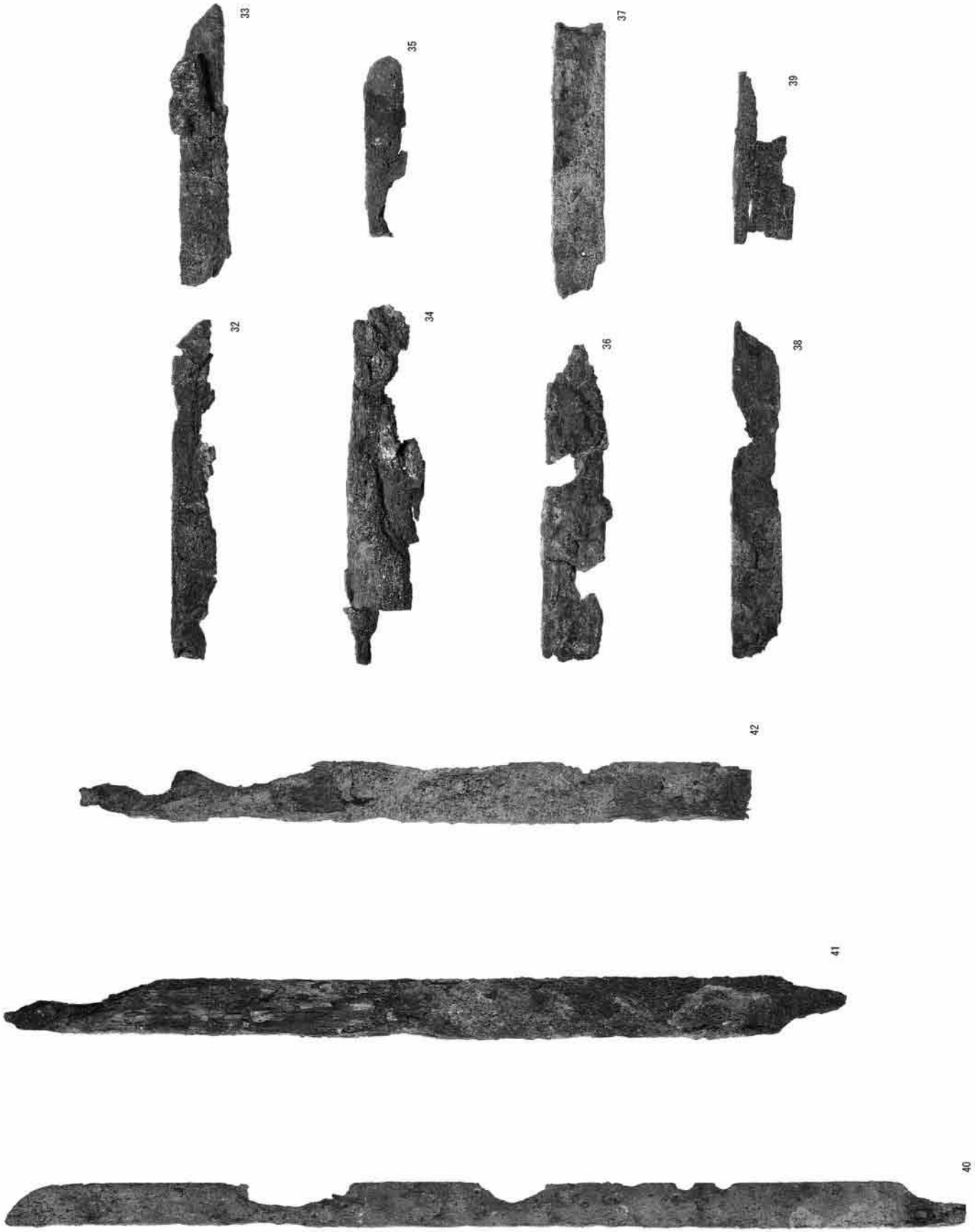
8　市民プロジェクトで制作された馬具

PL. 10 講演会とシンポジウムの様子(2)

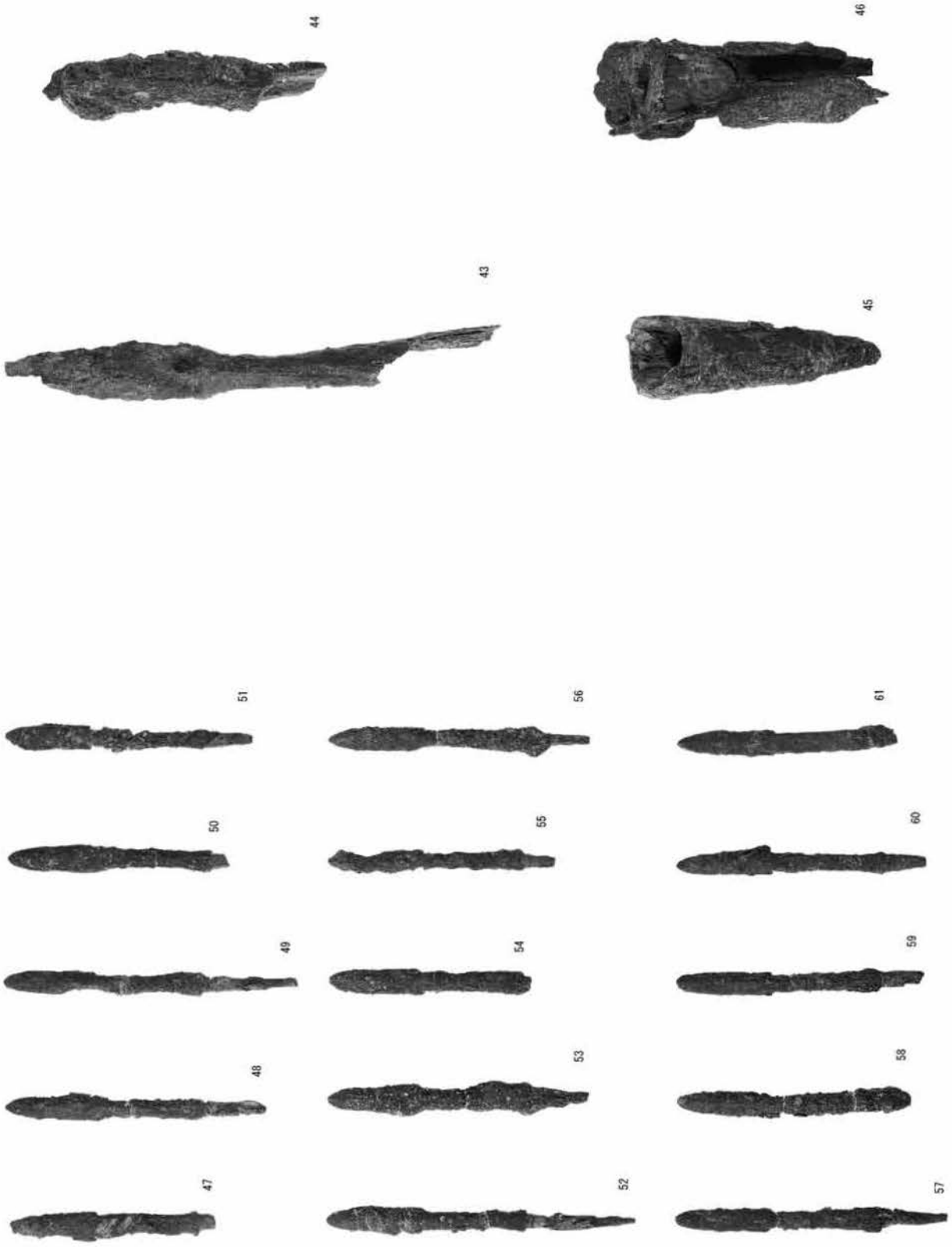
PL. 11　明治 11 年石室出土品　（前二子古墳・後二子古墳）（1）



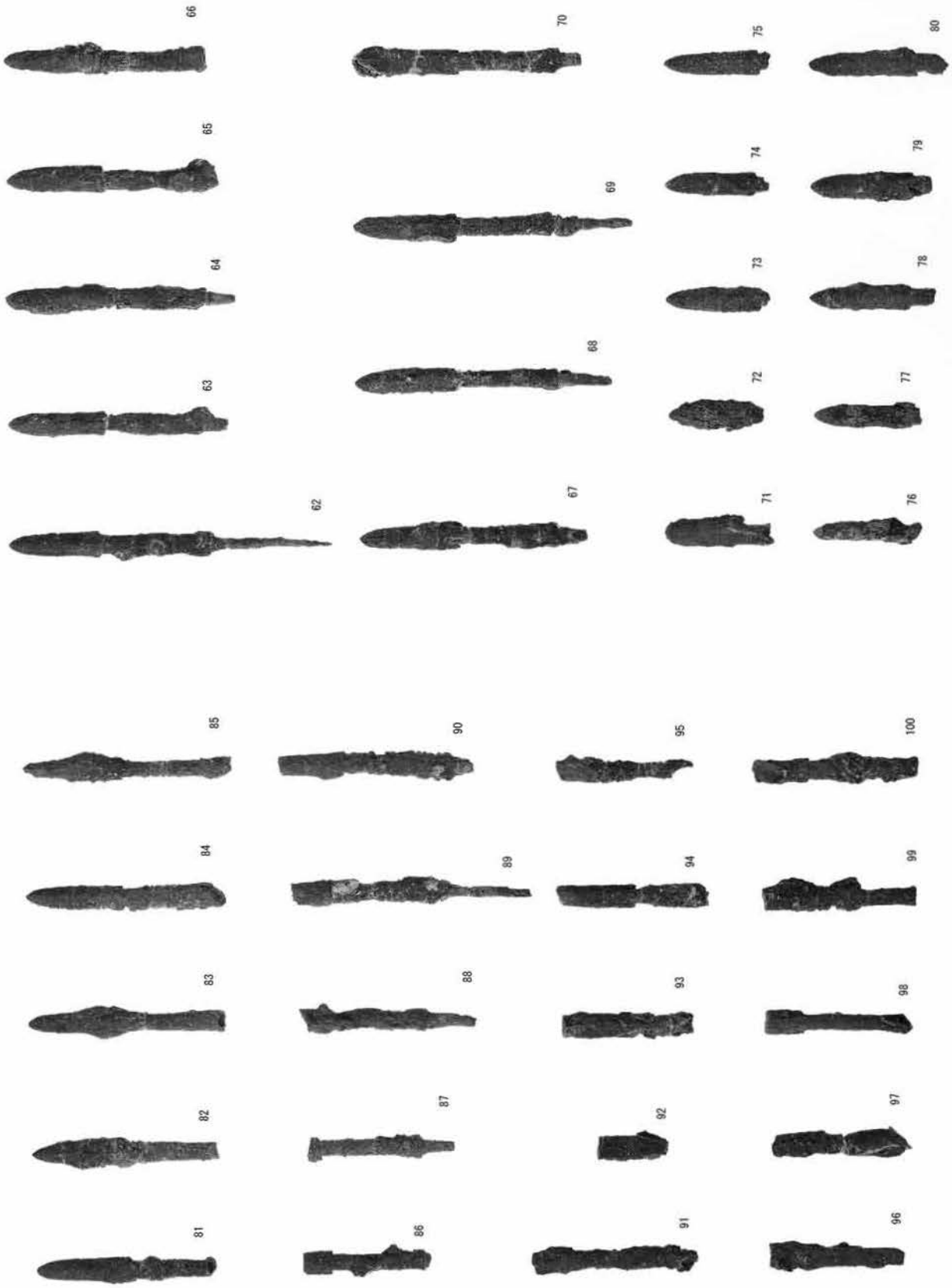
PL. 12　明治 11 年石室出土品　（前二子古墳・後二子古墳）（2）



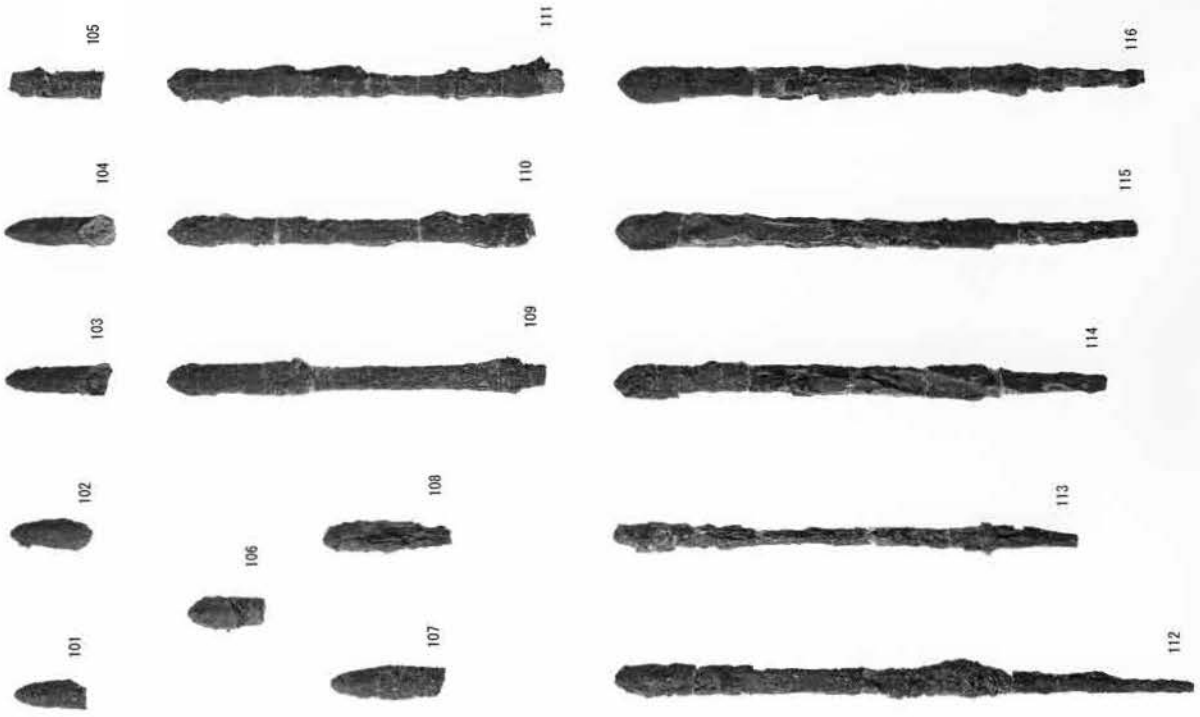
PL. 13　明治 11 年石室出土品　（前二子古墳・後二子古墳）（3）

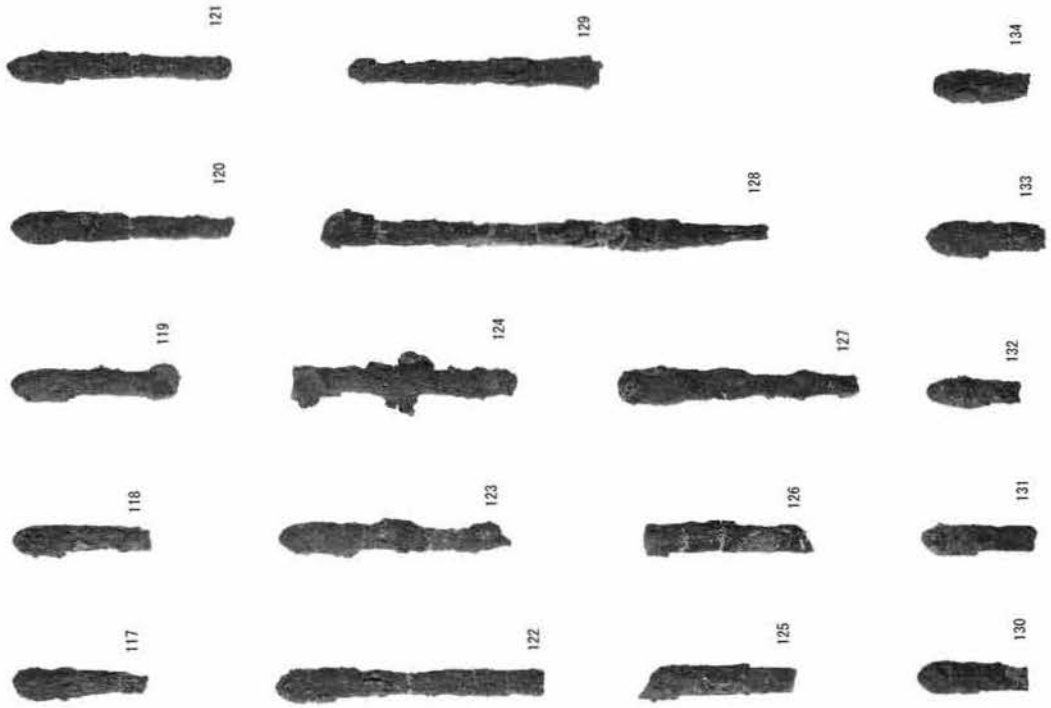


PL. 14　明治 11 年石室出土品　（前二子古墳・後二子古墳）（4）

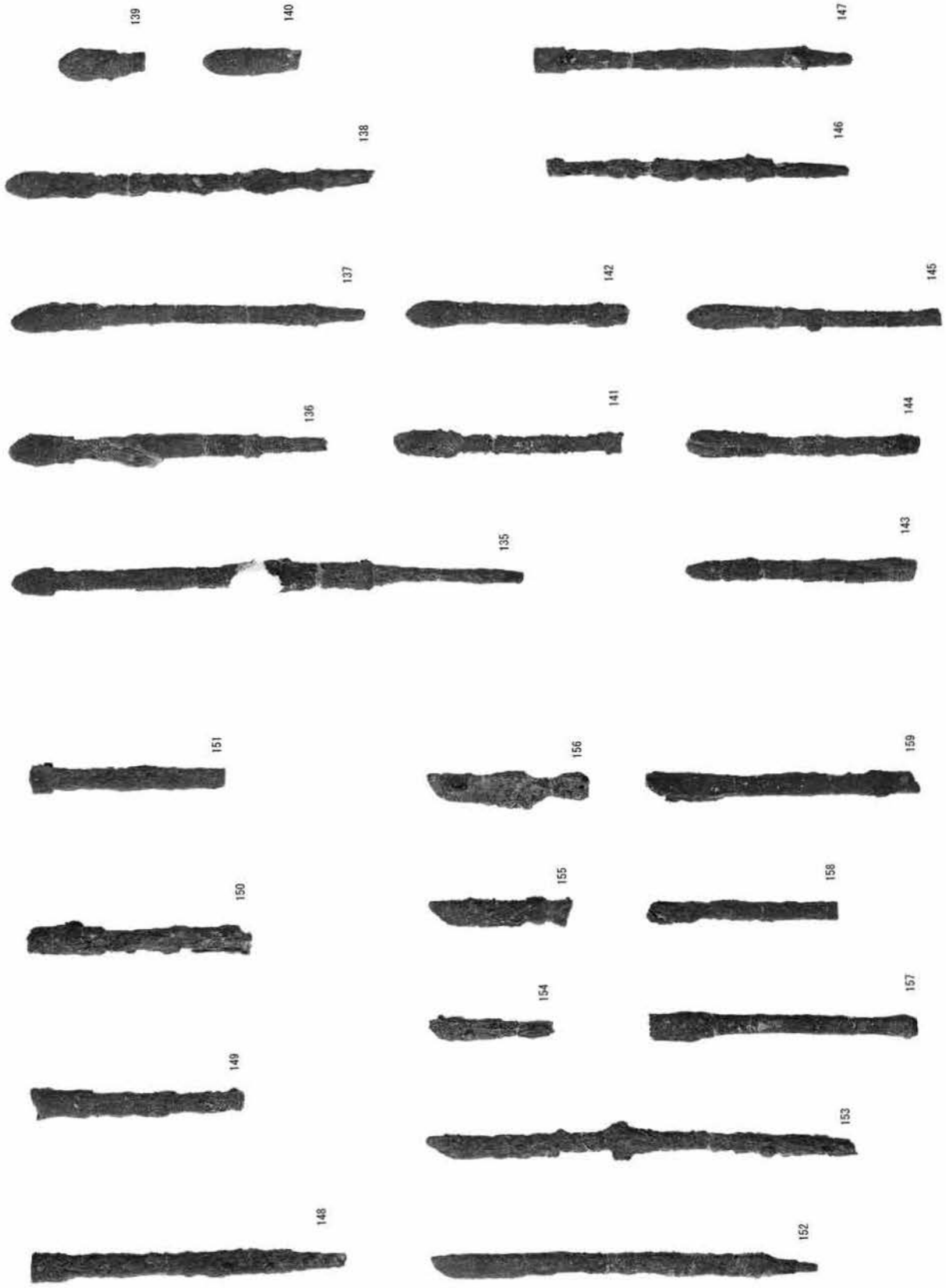


PL. 15　明治 11 年石室出土品　（前二子古墳・後二子古墳）（5）

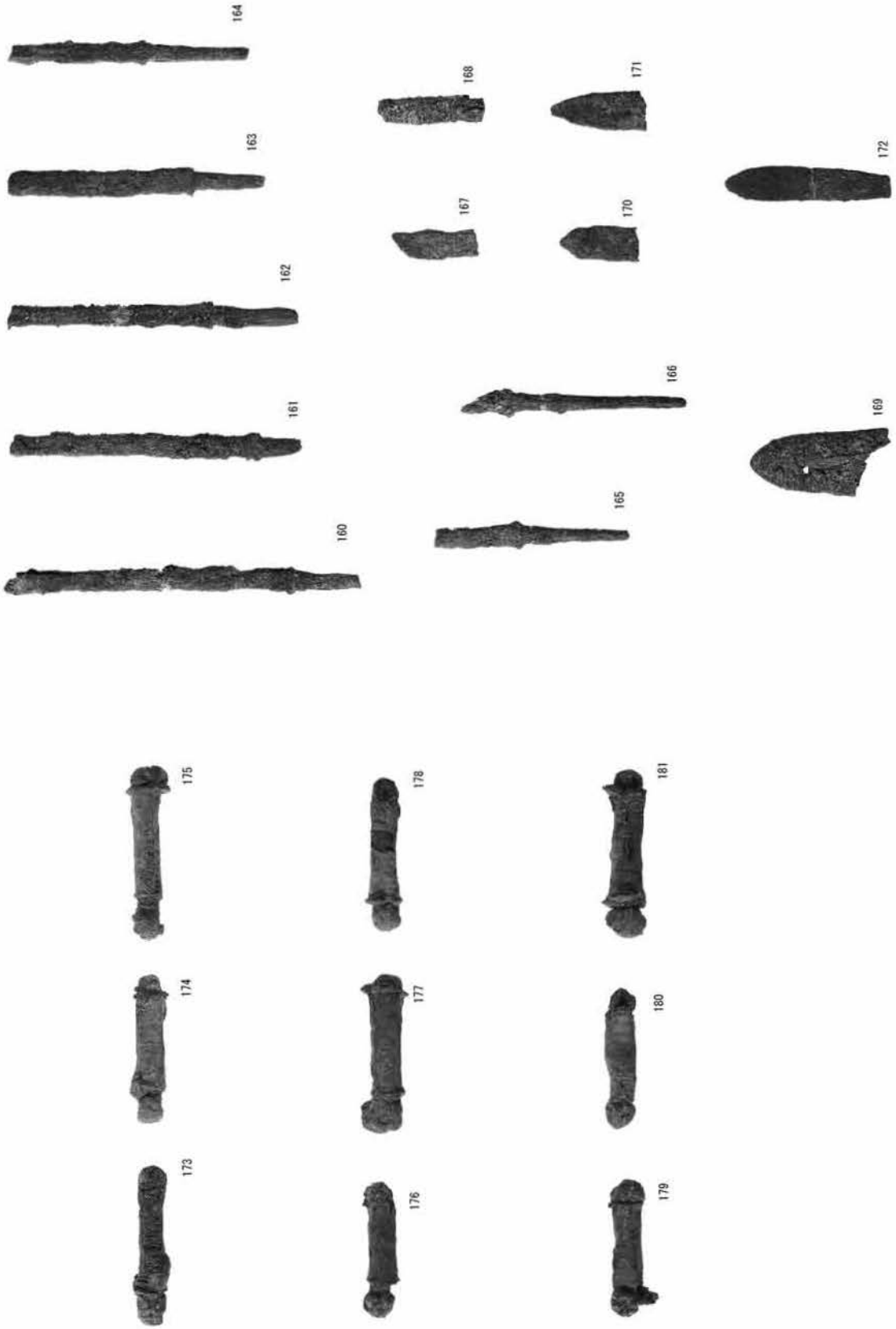




PL. 16　明治 11 年石室出土品　（前二子古墳・後二子古墳）（6）

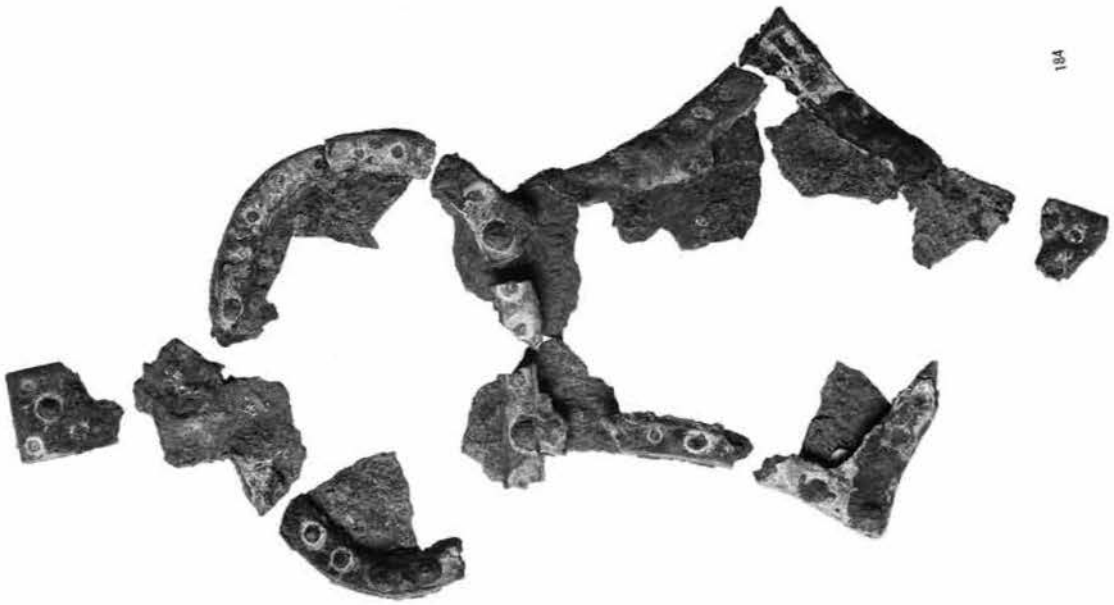


PL. 17　明治 11 年石室出土品　（前二子古墳・後二子古墳）（7）

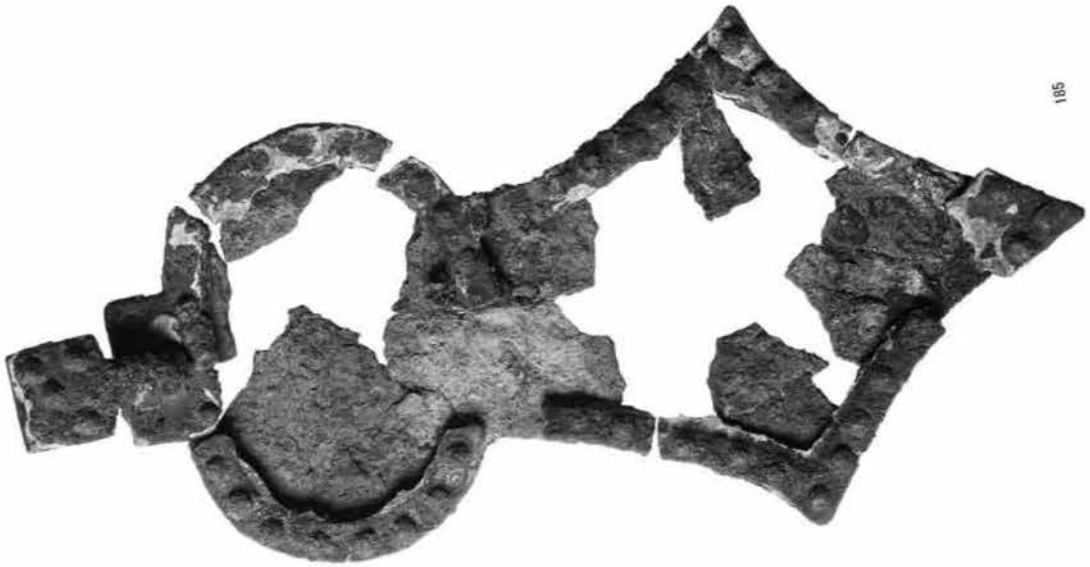


PL. 18　明治 11 年石室出土品　（前二子古墳・後二子古墳）（8）

PL. 19　明治 11 年石室出土品　（前二子古墳・後二子古墳）（9）



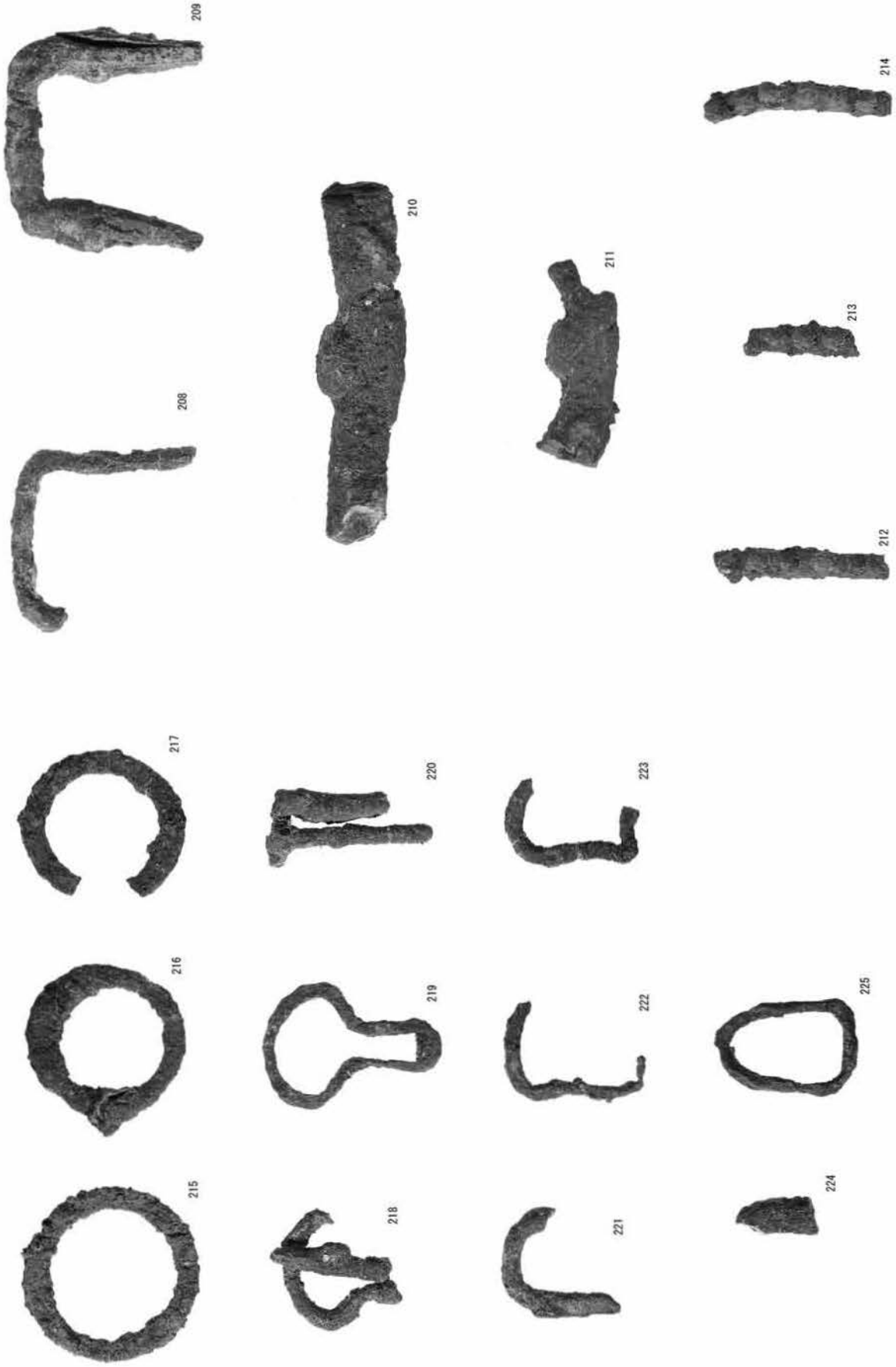
184



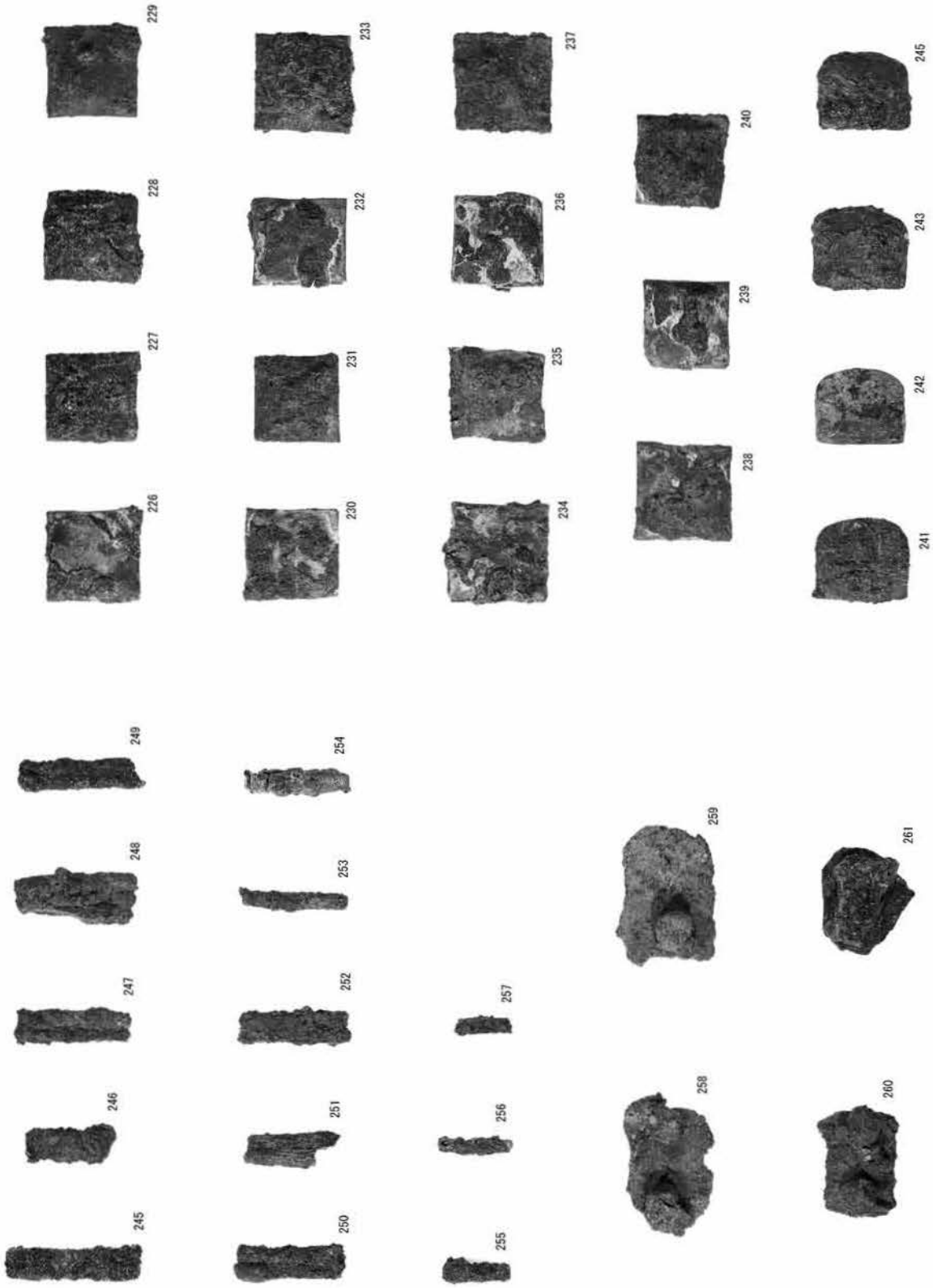
185

PL. 20　明治 11 年石室出土品　（前二子古墳・後二子古墳）　(10)

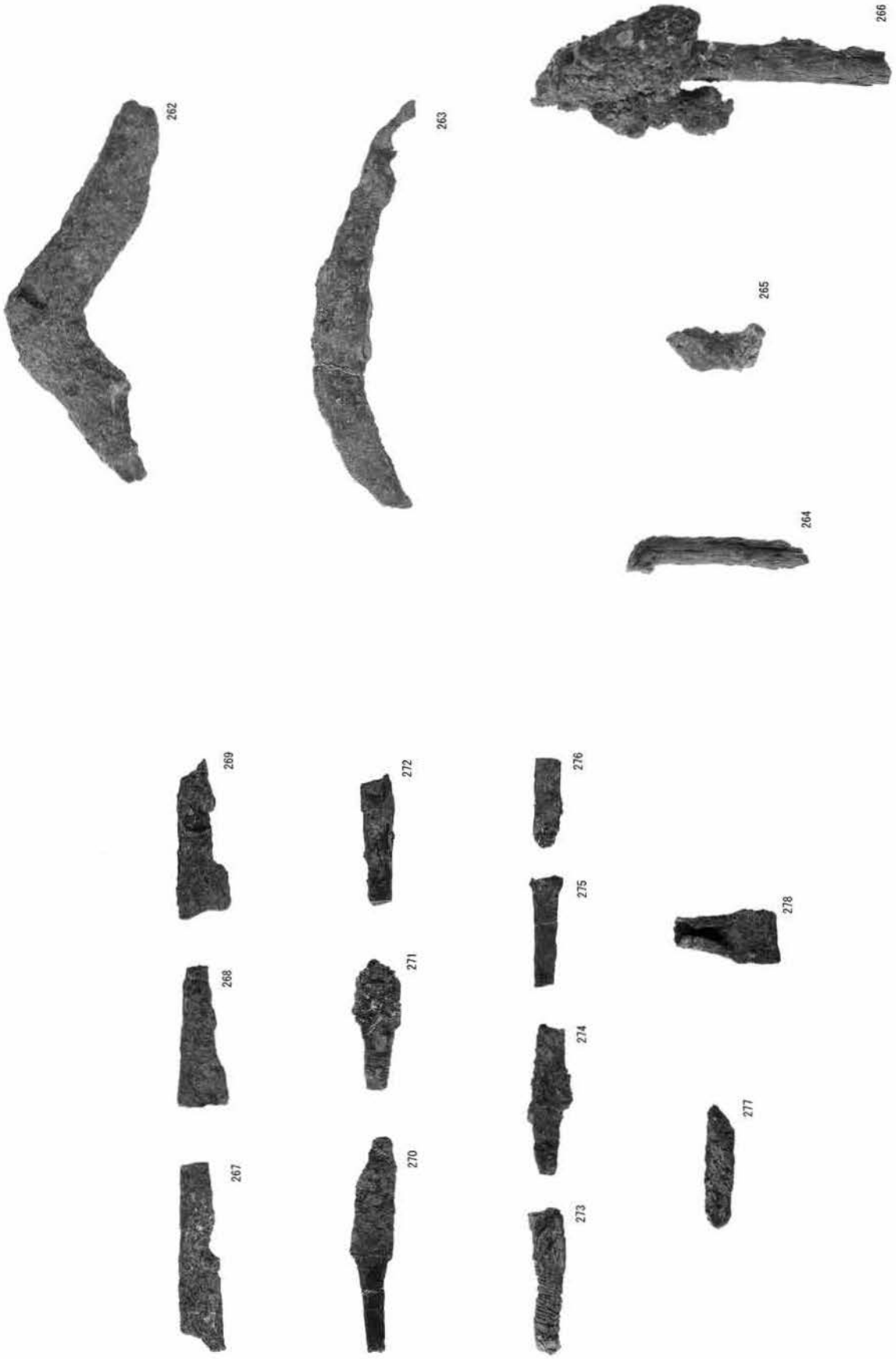
PL. 21　明治 11 年石室出土品　(前二子古墳・後二子古墳)　(11)



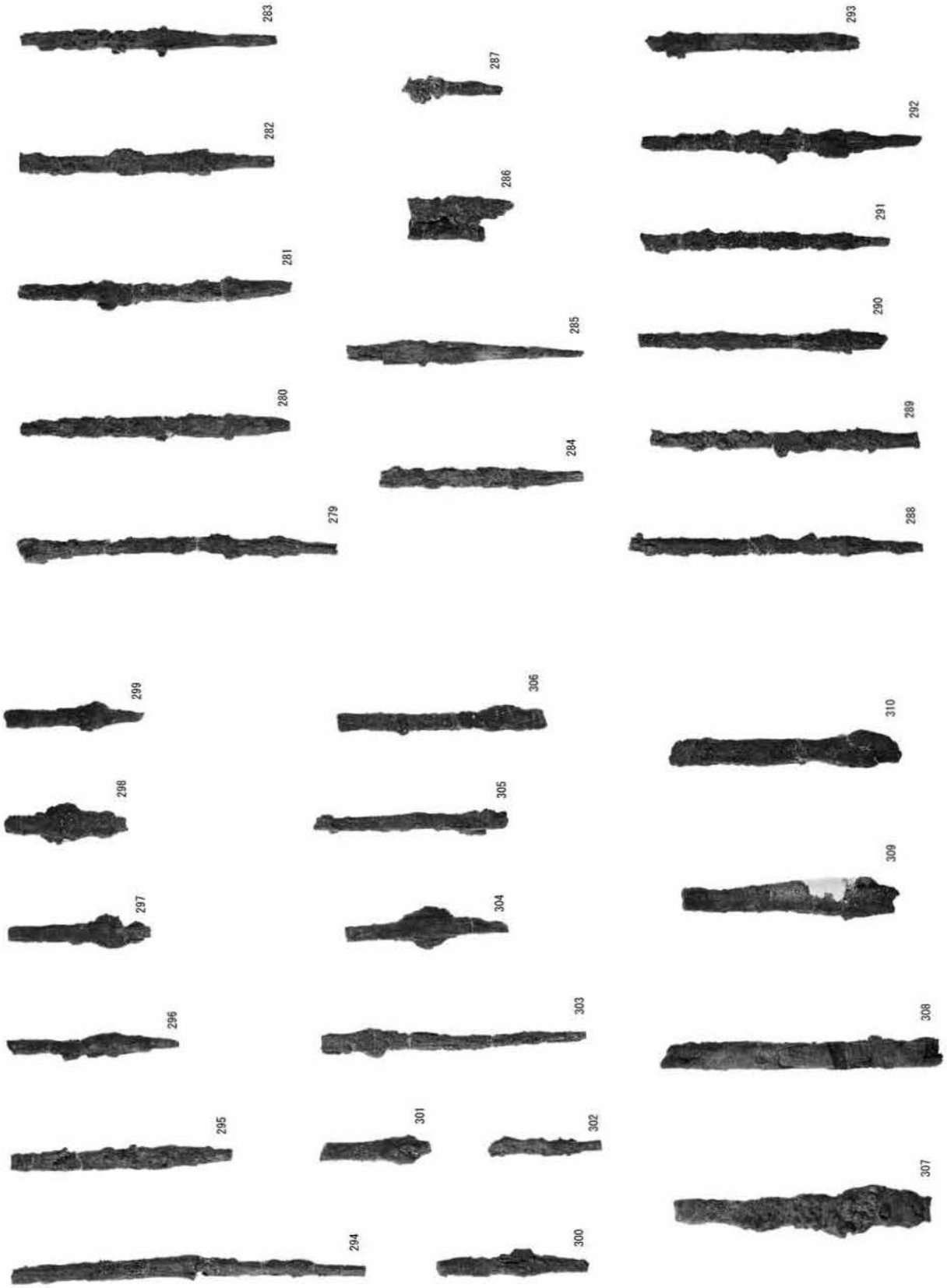
PL. 22　明治 11 年石室出土品　(前二子古墳・後二子古墳)　(12)



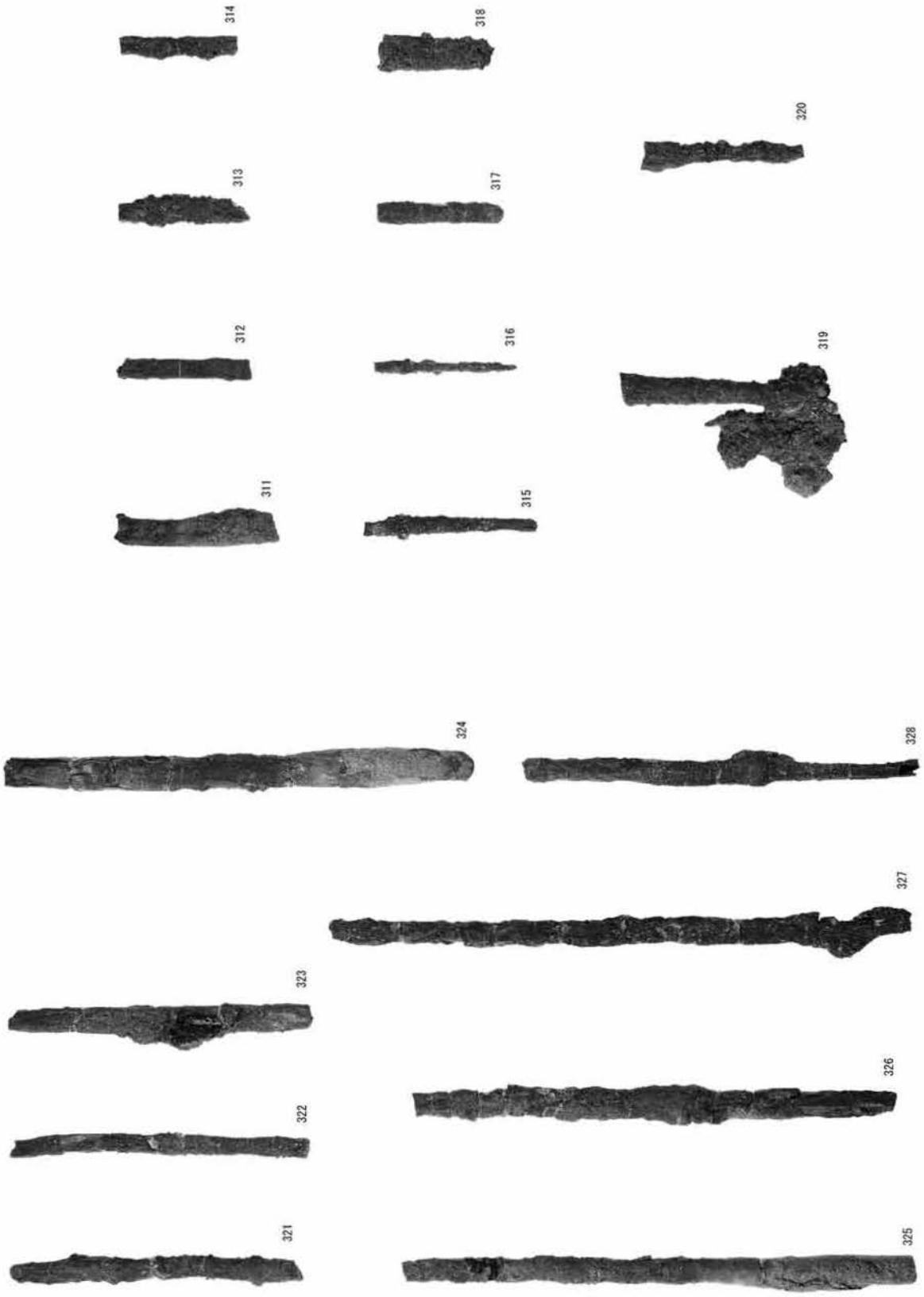
PL. 23　明治 11 年石室出土品　(前二子古墳・後二子古墳)　(13)



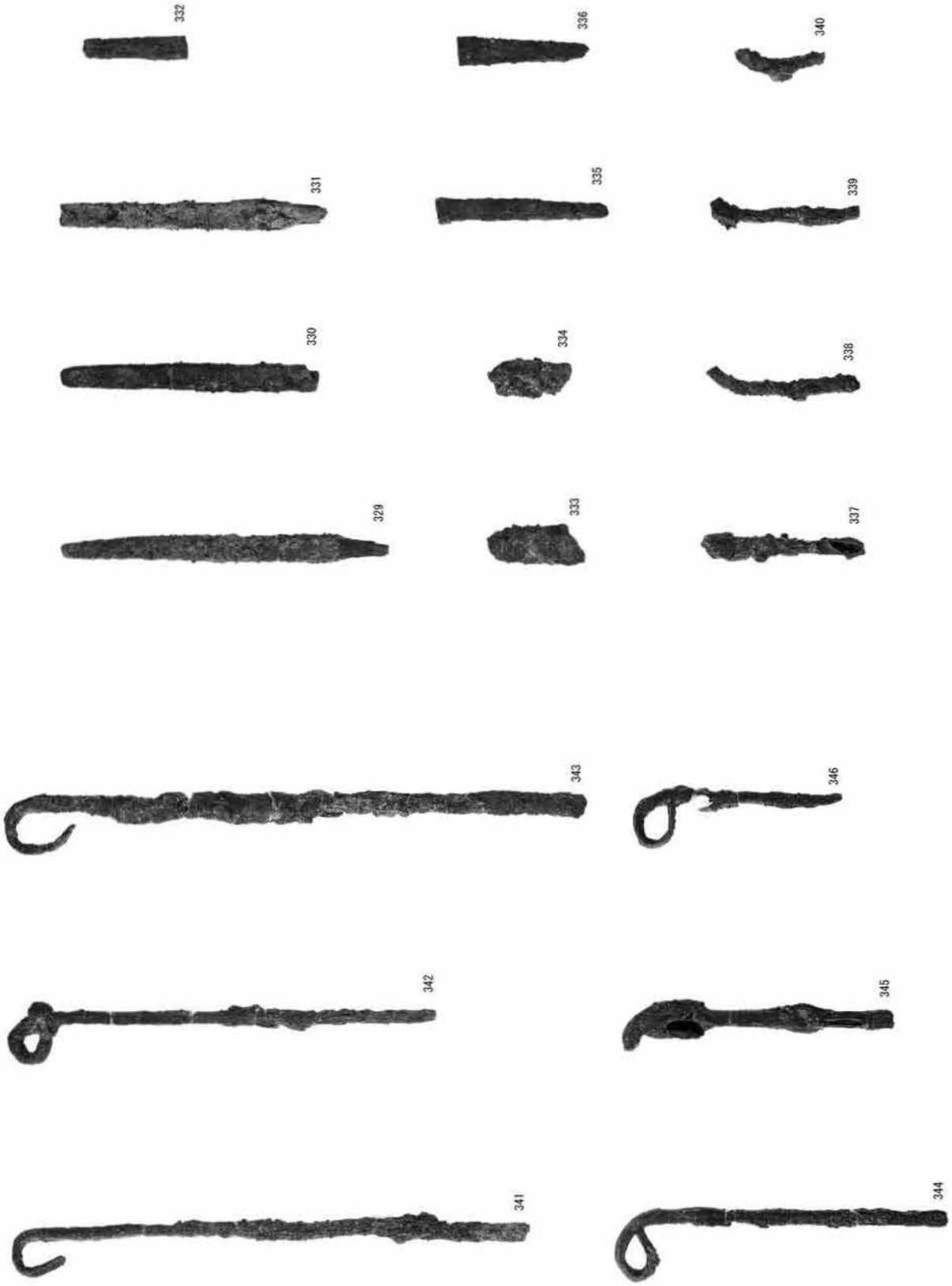
PL. 24　明治 11 年石室出土品　(前二子古墳・後二子古墳)　(14)



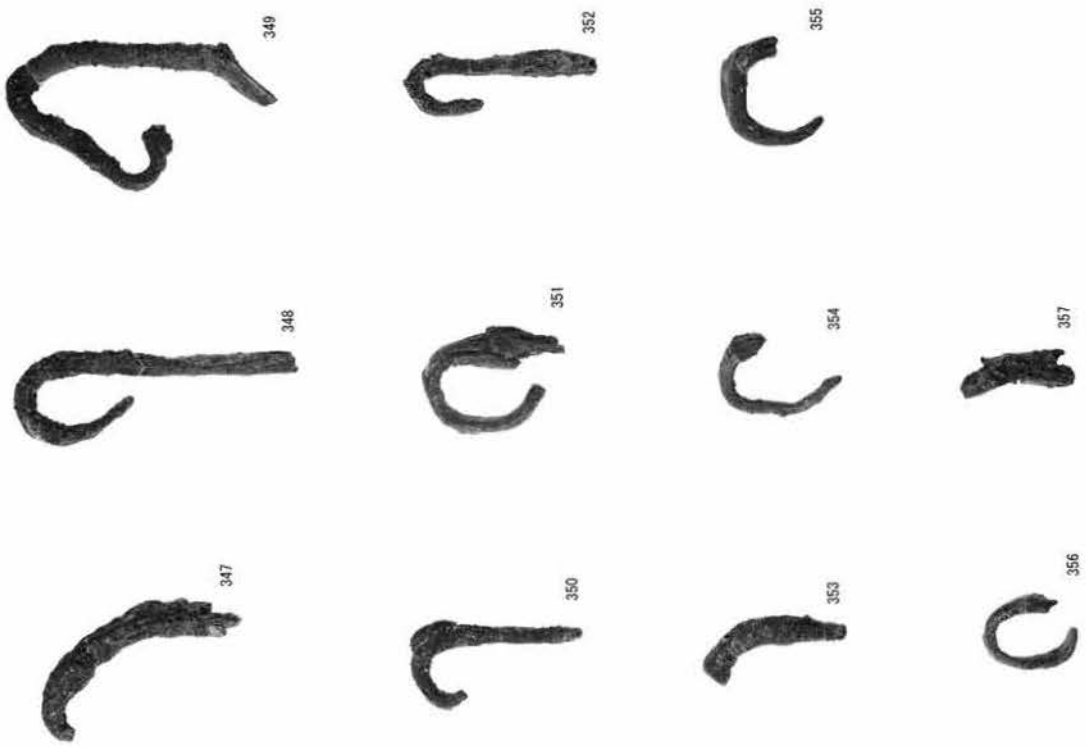
PL. 25　明治 11 年石室出土品　(前二子古墳・後二子古墳)　(15)



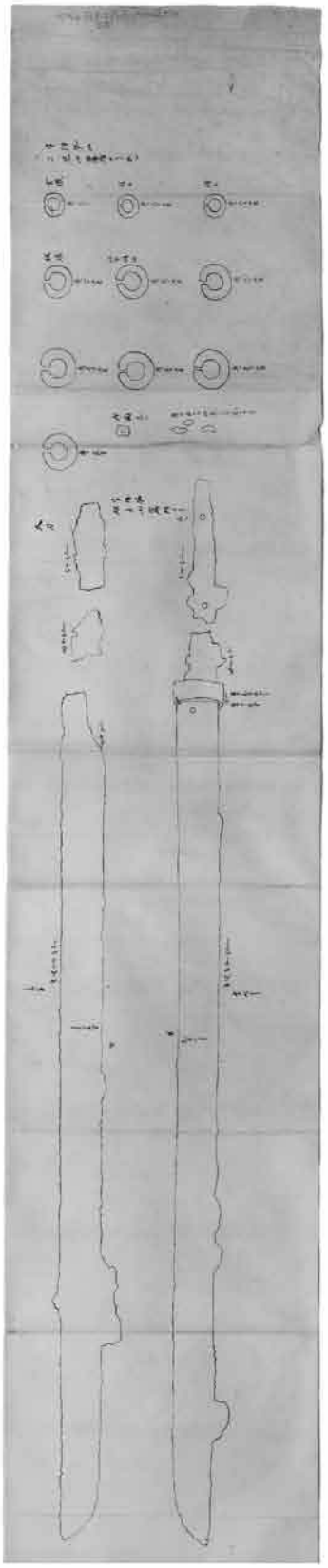
PL. 26　明治 11 年石室出土品　(前二子古墳・後二子古墳)　(16)



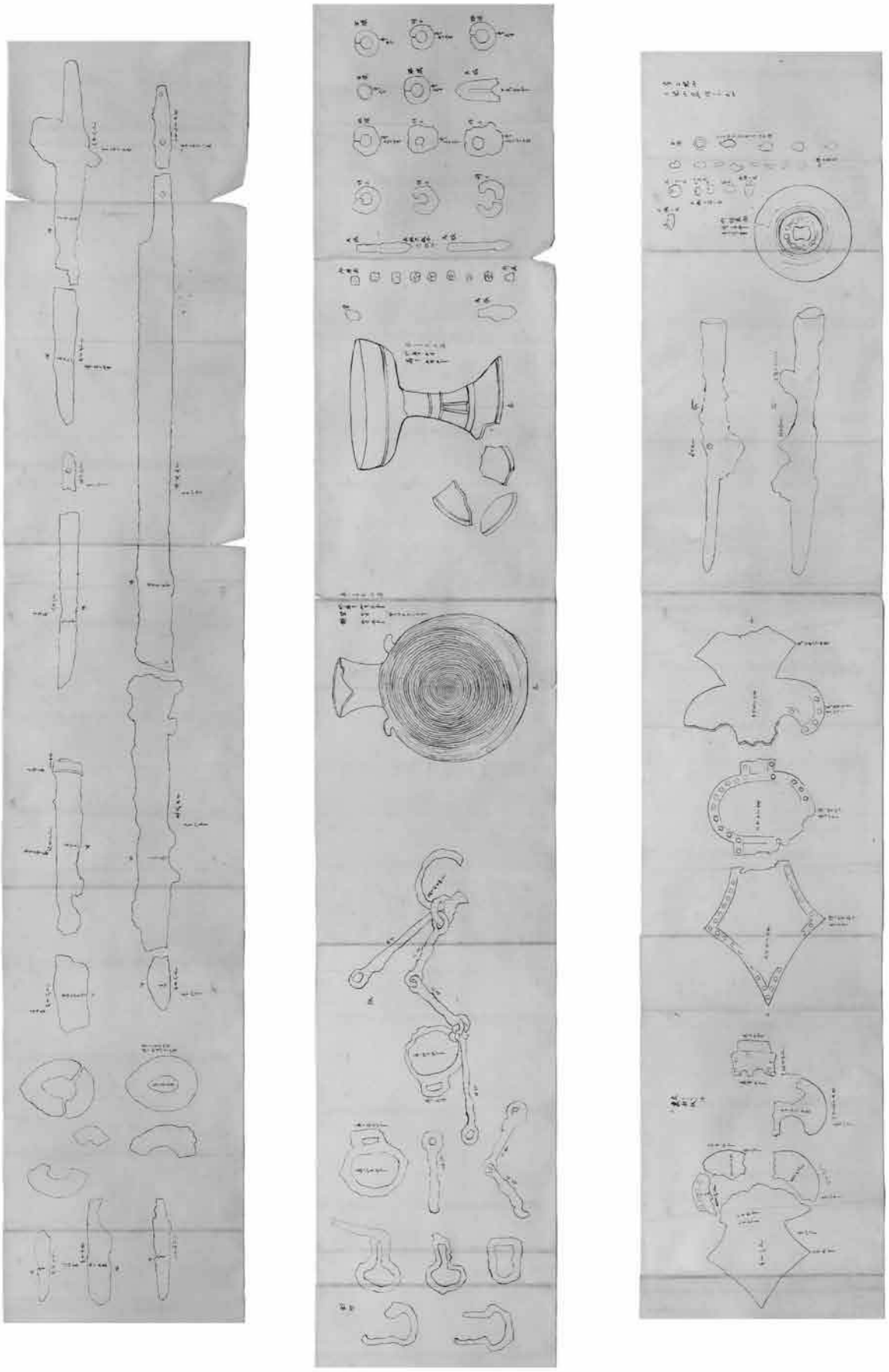
PL. 27　明治 11 年石室出土品　(前二子古墳・後二子古墳)　(17)



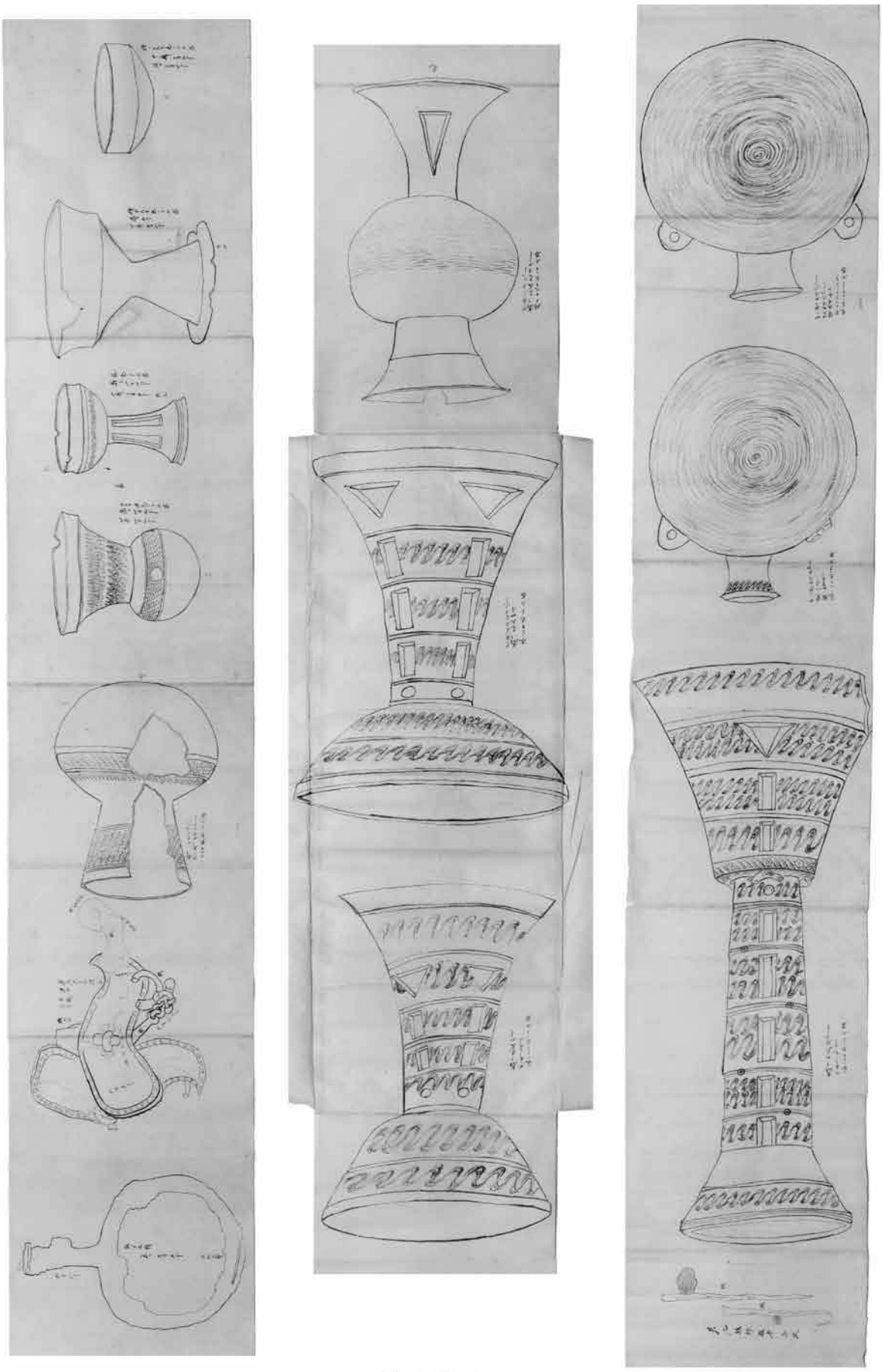
PL. 28　明治 11 年石室出土品　（前二子古墳・後二子古墳）（18）



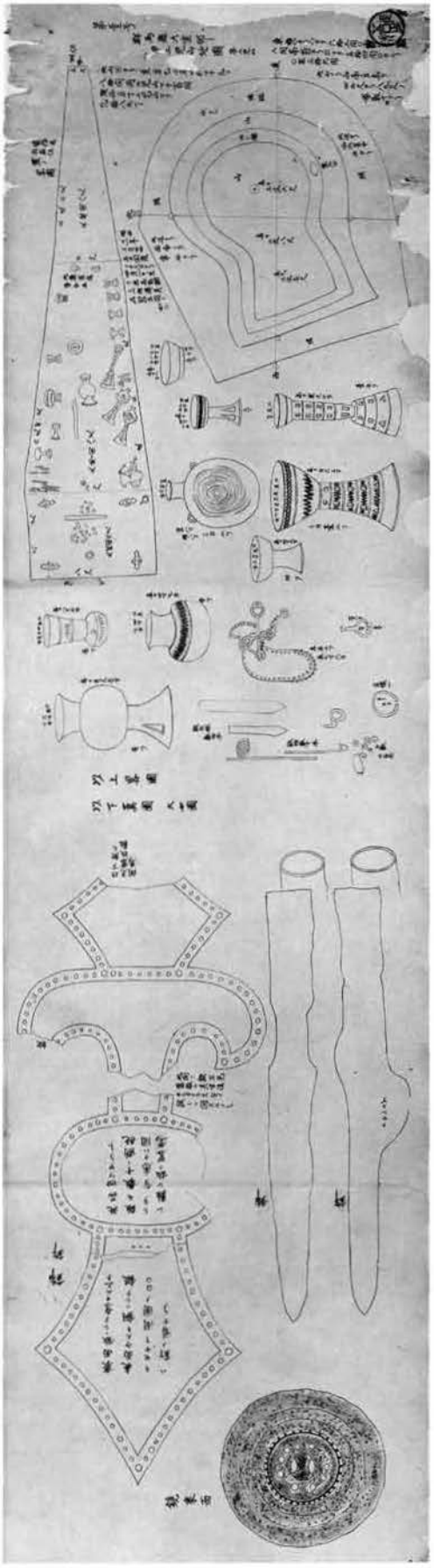
PL. 29 「西大室村古墳祭器現形之図」(1)

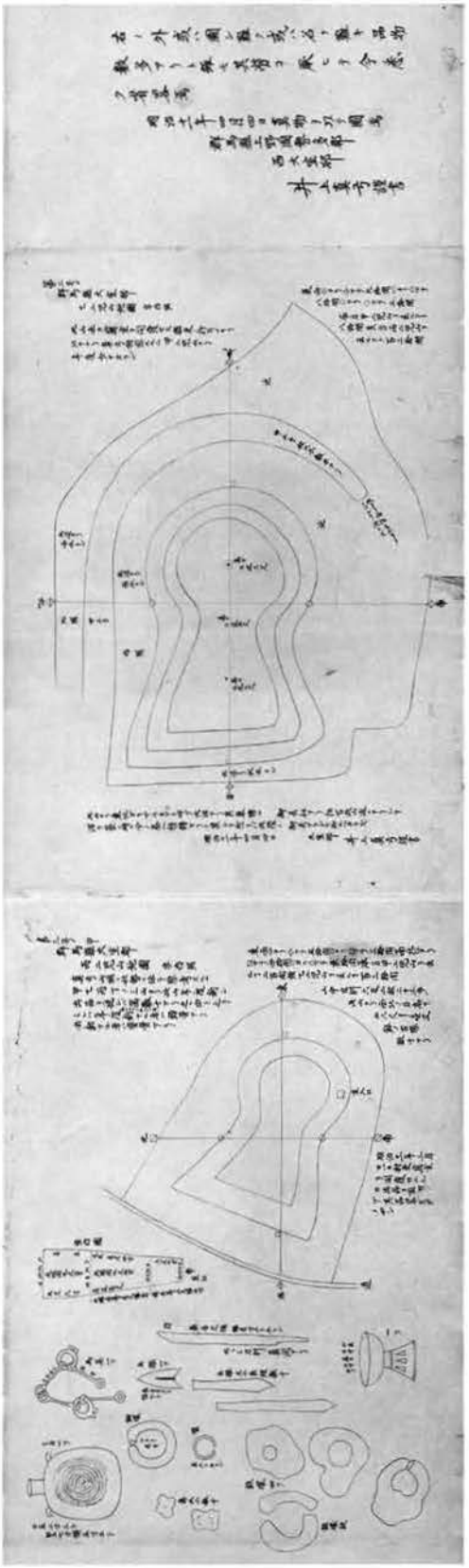


PL. 30 「西大室村古墳祭器現形之図」(2)

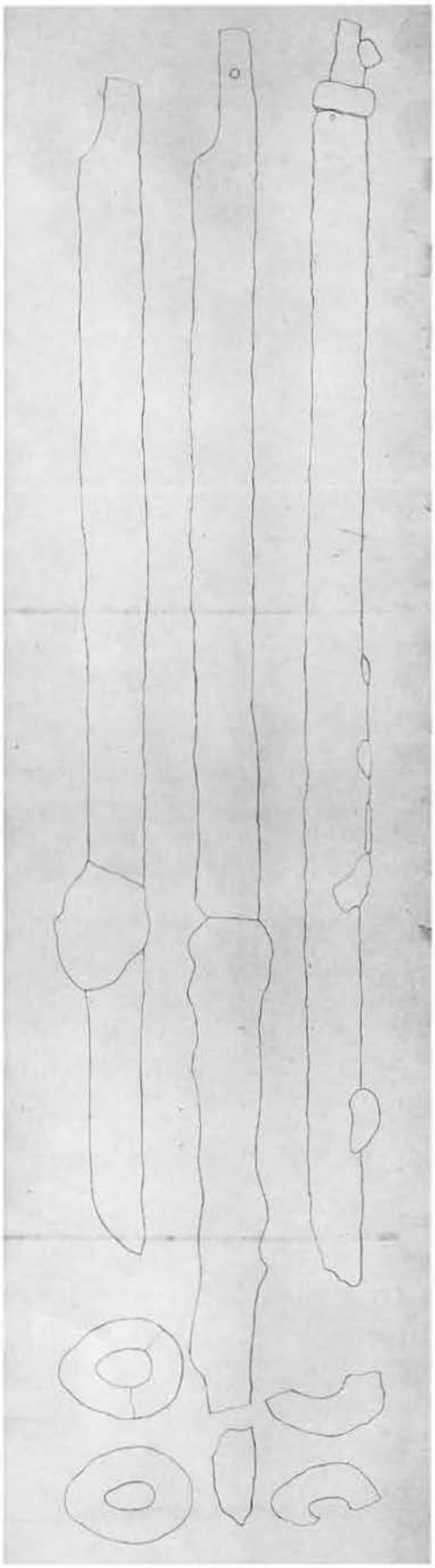


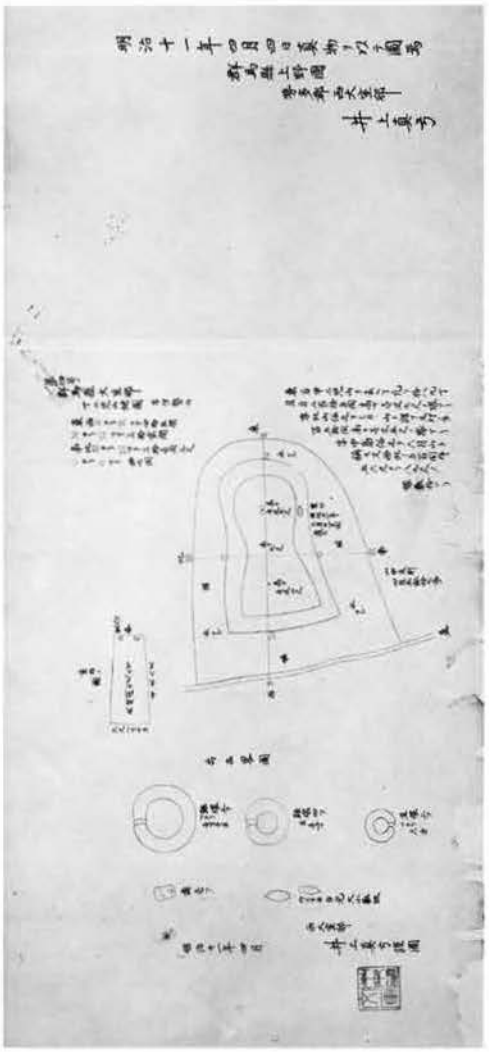
PL. 31 「西大室村古墳祭器現形之図」(3)





PL. 32　増田一裕家蔵本「群馬県陵墓図」(1)

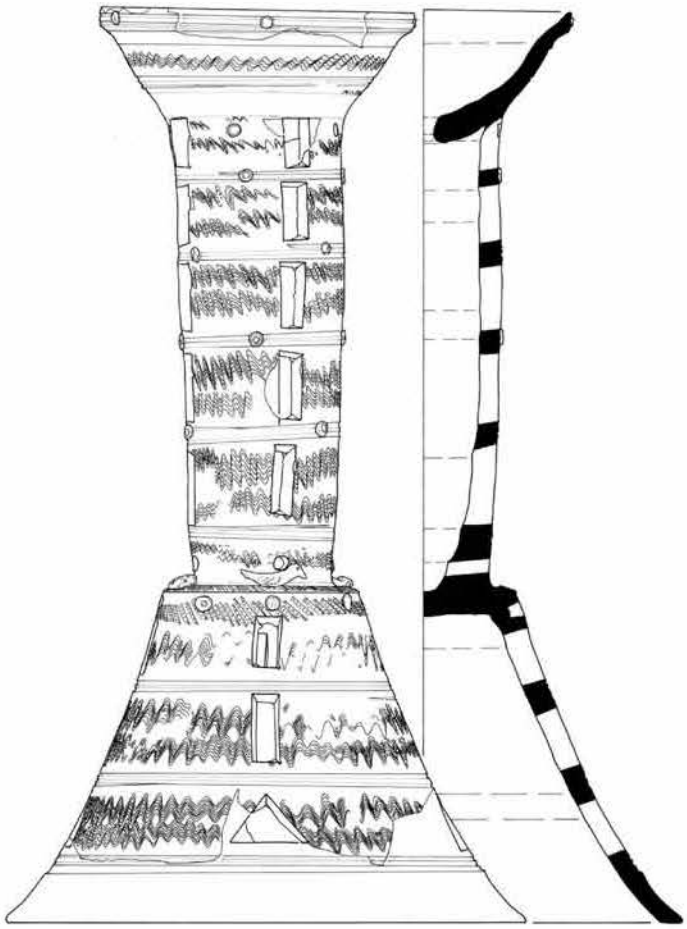




PL. 33　増田一裕家蔵本「群馬県陵墓図」(2)

第１部　記録集

シンポジウム
『東アジアからみた前二子古墳』



須恵器小像付筒形器台（明治11年前二子古墳出土）

古代東国文化シンポジウム　記念講演

前二子古墳の営まれた時代－６世紀初頭の畿内と東国－

白　石　太一郎
（国立歴史民俗博物館名誉教授・大阪府立近つ飛鳥博物館館長）

はじめに みなさん、おはようございます。ただ今ご紹介いただきました白石でございます。

本日のシンポジウムで取り上げられます前橋市の大室古墳群の前二子古墳につきましては、半世紀以上前になりますけれども、確か大学２年生、ちょうど二十歳になったばかりの頃でありますが、関西から群馬の古墳を見学に参りました。その時、確か午前中に総社の古墳を見学して、午後に上毛電鉄の新屋駅から歩いて大室古墳群に来ました。それで、夕刻新屋駅に帰り着いたときは真っ暗だったという記憶がございます。とても懐かしい思い出です。

その後、昭和 60 年代に入りまして、前橋市がこの前二子、中二子、後二子の３古墳を中心とした大室古墳群を中心とする大室公園の整備事業を１０数年間という長期計画で実施されました。私は、その頃千葉県の佐倉にございます国立歴史民俗博物館にいましたが、この大室公園史跡整備委員の一人として、最初からほぼ最後まで１０数年間お手伝いさせていただくことができました。皆さんもよくご承知のように、赤城南麓のすばらしい環境の中にこの古墳群は所在します。これは私だけではなく、他の整備委員会の先生方も全く同じ意見でしたが、目をむいたような古墳の復元・整備はここではやらない方がいいだろうと、むしろ自然環境を活かした形での整備をした方がよいのではないかというのが、整備委員の一致した意見でございました。前橋市さんのご努力もありまして、各地にこういう史跡公園が数多くありますが、とりわけ環境と調和した、格調の高い古墳公園になったことを大変喜んでおります。

今日は、「東アジアから見た前二子古墳」ということで、この大室古墳群の３つの後期の大きな前方後円墳のうち、最初に営まれた前二子古墳が中心的なテーマです。それを、特に東アジアの視点で考えようという、きわめて興味深いテーマです。しかし、この問題を考えるためには、まず何よりも先に、この古墳が日本の古墳の中でいったいどのような位置を占めるのかということ、また、さらにその古墳が営まれた時代が日本の古代史の中でどのような時代であったかを理解しておいていただく必要があると思われます。10 年ほど前に歴博をやめて関西に帰りまして、その後こちらの古墳の勉強をしておりません。そうした最新の情報についてはシンポジウムで先生方がいろいろお話しになると思いますが、私にはそうした新しい情報をお話しすることはできません。非常に大ざっぱな話になりますけれども、前二子古墳の営まれた時代、６世紀初頭頃の畿内と東国ということで、お話をさせていただきたいと思っております。

この前二子古墳、おそらくこれは６世紀の初頭頃の古墳と考えてよいと思いますが、それに次いで中二子古墳が６世紀の中頃、そして後二子古墳が６世紀の終わり頃というように約１世紀間、３代続いて墳丘長が 100m前後の大前方後円墳が営まれるわけです。こうした古墳時代後期の前方後円墳が代々営まれた古墳群は関東各地にたくさんありますが、それらの中でも代表的なものであります。特に、先ほどお話しがございましたけれども、前原さんらのご努力によりまして発掘調査が行われ、３古墳の実態やこの古墳群の形成過程などがはっきりわかっています。その点からも、関東の後期の大型古墳群の中でもとりわけ重要な古墳群であることは言うまでもありません。

ここではまず第一に、この古墳群で最初の古墳である前二子古墳が営まれた時代、６世紀初頭頃というのが、古墳時代の中でいったいどういう時代であったのか、これをまずお話しさせていただきます。それから、次にこの時代の畿内の大王とこれら東国の豪族との関係、これを考える上にきわめて貴重な資料が、すぐお隣の埼玉県の稲荷山古墳から出ています。稲荷山鉄剣ですね。この稲荷山鉄剣とその銘文から、当時の畿内の大王と東国豪族の関係を考えてみます。その上で、６世紀の東国豪族の性格を、上毛野全体の古墳のあり方から考えてみたいと思っております。

私の資料は、49 頁から 52 頁までです。49 頁以下の図面を適宜ご覧いただければと思います。

それではまず、前二子古墳が営まれた時代が古墳時代の中でどういう時代であったかという問題ですが、私は、古墳時代に大きな画期が２つあったと考えております。まずこの古墳時

代の２つの大きな画期についてお話させていただきたいと思います。

１　古墳時代の二つの大きな画期　古墳時代というのは、皆さんよくご承知のように、前方後円墳を中心とする巨大な古墳が日本列島各地で営まれた時代です。最近の研究では、だいたい３世紀の中頃から６世紀の終わりくらいまで約350年間前方後円墳が造られ続けます。古墳自体は、その後もしばらく造られますけれども、前方後円墳は６世紀末ないし７世紀初頭で一切造られなくなります。私は、この前方後円墳が造られた時代を古墳時代と理解するのがいいのではないかと考えています。

前方後円墳は、７世紀の初頭、ちょうど推古朝ぐらいで造られなくなりますけれども、大型の円墳や方墳、あるいは見事な横穴式石室などはしばらく造られ続けます。この時代は、政治史でいう飛鳥時代に相当いたしますので、もう古墳時代と捉えないで、飛鳥時代と捉えたほうがよいのではないかと考えております。

いずれにしても古墳時代というのは、日本列島各地に非常に大規模な前方後円墳が営まれた時代ということになります。この時期は、結論的に申しますと、日本列島各地の有力な政治的首長、豪族といってもいいのですが、日本列島各地の有力な政治的首長たちが、のちに大王あるいはさらに後には天皇と呼ばれることになる畿内の大首長を中心に政治連合を形成していた時代と捉えられています。文献による古代史の先生方はこれをヤマト政権と呼んでおられます。古墳時代というのは、このヤマト政権と呼ばれる政治連合が形成されていた時代と捉えられているわけです。畿内の大首長を中心に政治連合を形成していた日本列島各地の首長たちが、その首長連合の中での身分秩序に応じて大小さまざまに前方後円墳あるいはそれ以外の古墳を造っていたと考えられております。

ですからこの時代は、そうした首長連合・政治連合の体制から、畿内のヤマト王権を中心とする中央集権的な国家が徐々に形成されていく段階です。ただ首長連合体制といっても、350年間同じような体制が続いているわけではないのでありまして、簡単にいえば、次第に中央の畿内勢力の力が強くなる、大王を中心とする中央集権的な体制へと進んでいくわけです。そういう首長連合体制から中央集権的な古代国家が形成されていく、まさに激動の時代であったのです。

いくつもの大きな画期がその中に見い出されるわけでありますが、先に申しましたように、私はその中に２つの大きな画期があると考えています。そのひとつは、前方後円墳が造られはじめて約１世紀たった頃、４世紀の後半に、きわめて大きな画期があったと思っております。

これは、皆さんもよくご承知だと思いますが、４世紀になりますと、中国の北や西の方にいた遊牧騎馬系の民族ですね、匈奴とか鮮卑とか、五つの種族を五胡といいますが、これが中国本土に侵入してまいります。そして、中国の漢人の王朝、当時は晋といいましたが、晋は南に落ち延びて、今の南京、当時は建康（けんこう）といいましたが、建康に都を遷して中国の南半分を支配するにすぎなくなる。北半分は、そうした遊牧騎馬系の五胡と呼ばれる民族の支配する世界となり、五胡が入れ替わり立ち代り王朝を建てたり滅ぼしたりするわけです。これを五胡十六国と呼びます。中国は、いわゆる南北朝時代を迎えることになります。

この北方民族の南下、民族移動の大きな波は、当然中国の東の方の世界にも影響を及ぼすわけであります。五胡のひとつの鮮卑族（せんぴぞく）は、朝鮮半島の北から中国東北部に大きな勢力を持っていた高句麗を攻めるわけです。そして、高句麗はそれに大敗いたしまして、当時の王様、故国原王（ここくげんおう）のお父さんの美川王（びせんおう）の墓が暴かれて、その屍が奪われてしまう。さらに、美川王の奥さん、故国原王から見ればお母さんが鮮卑に人質として取られてしまう。そして、５万の男女を奪われたと書いてあります。要するに、高句麗が鮮卑に襲われ、攻撃されて、多くの国土と人民を失うわけです。

そこで高句麗は、北で失ったものを南で回復しようとする。もちろん高句麗は、それ以前から南に勢力を伸ばそうという政策を持っていましたが、北方民族の鮮卑に膨大な領土を奪われて以降は、南下策を積極的に進めるわけであります。当時朝鮮半島の南の方には、既に新羅や百済、さらに日本列島に近い南の地域には伽耶諸国など、小さい原生国家がたくさん残っていたわけですが、そういう南の百済や新羅、さらに伽耶諸国などは、まさに国家存亡の危機を迎えるわけです。

このとき、新羅はとうてい高句麗に対抗することはできないということで、早く高句麗に降って、なんとか生き延びようとする。

それに対して百済は、あくまでも軍事的に高句麗と対決しようとするわけです。このとき百済が目をつけたのが、朝鮮半島の南にある倭国

ですね。ここは、当時としてはまだ遅れた地域ですが、人口は相当いたことは間違いない。この倭国に目をつけて、倭国に好を求めてくるわけです。倭国と同盟を結んで、倭国を高句麗との戦いに巻き込もうとするんですね。

その辺の状況は、詳しくお話しする時間はございませんが、倭国も当時きわめて重要な鉄資源を朝鮮半島に頼っていたこともあって、朝鮮半島の情勢には大きな関心があるわけです。そういうことで、倭国は、百済の誘いにのって、ここに百済と倭国の同盟が成立するわけです。この辺の経緯は、ずっと後の８世紀に編纂された『日本書紀』の中に、部分的に確かな史料に基づいて書かれている部分がある。中でも神功皇后紀には、百済系の史料に基づいて文章を作っているところがあって、その辺は割り合い信憑性が高いわけです。そこに、倭国と百済の同盟が成立した経緯が書かれています。

こうして、４世紀の半ば過ぎに倭国と百済の同盟が成立するわけですが、それを記念して百済の王家からヤマトの倭国王に対して贈られた鉄剣が残っています。皆さんもご存知と思いますが、現在も奈良県の石上神宮に残っている七支刀という、先が七本に分かれた鉄剣、これに銘文があります。その銘文の解釈については、研究者の意見は部分的に違うところはありますが、大きくは一致しておりまして、これは倭国との同盟の成立を祝って百済王の太子であった後の貴須王から倭王に贈られたものであることが、銘文から知られます。そういうモノ資料も残っておりますので、これは、まず歴史的事実であると考えて差し支えないと思われます。

そういうことで、倭国も４世紀の後半になりますと、東アジア世界の大きな動乱に巻き込まれるわけです。そして、百済の要請を受けて朝鮮半島に出兵して、高句麗と鉾を交える、戦うことになります。

ただ、これも皆さんご承知のように、『魏志』倭人伝には「牛馬なし」と書いてありますが、これはどうも事実であったようで、弥生時代から古墳時代の前半期に倭国には、馬はいなかった。高句麗の騎馬軍団と戦争するには、何としても騎馬戦術を身につけなければならない。そうしないと戦争にならないわけです。

そういうことで、倭国は、急いでまさに泥縄で騎馬戦術を学ぶ、馬の文化を受け入れようとした。これには、当然百済も自国の存亡がかかっておりますから、百済も、さらに百済の影響下にあった伽耶諸国も、積極的に倭国に対して馬の文化を教えてくれるわけです。たくさんの工人を倭国に派遣して、日本列島で馬具を生産する。それから、馬がいないので、馬そのものを生産しなければいけない。各地に大きな牧を作って、馬を生産する。そして、そういう海を渡って倭国にやってきた朝鮮半島の馬具作りの技術者の影響は、当然馬具作りだけではなくて、倭国の金属加工その他さまざまな技術に大きな影響を与えます。

たくさんの人びとが、朝鮮半島からやってくるということは、その影響は単に生産技術だけにとどまらない。その他様々なところに影響が及ぶことになります。まず倭国で本格的に文字が使用されるようになるのは、大体この頃以降なんですね。後でお話しいたします稲荷山鉄剣の銘文も、長文の銘文が鉄剣に象眼されているわけですが、これなども５世紀後半のものです。５世紀以降になって倭人たちも文字を使いこなせるようになるわけです。

それから、当然様々な学問とか思想なども、倭国にとうとうと入ってくることになります。

また、例えば焼き物でも、この会場に須恵器が並んでおりますが、こういう 1000℃以上の高い温度で、構築した窯で焼く焼き物を須恵器といいますが、これの生産技術なども４世紀の終わりごろには朝鮮半島から伝えられることになるわけで、こういう朝鮮半島の優れた技術や文物や文化が倭国にもたらされることになるわけです。

私は、これは非常に重要なことだと思っております。そういうたくさんの百済や、あるいは伽耶諸国から渡来人たちが日本にやってきて、様々な先進的な生産技術などを教えてくれる。それから倭人たちも、基本的には戦争のためでしょうが、海を渡って、向こうで様々なものを見たり、学んだりして帰ってくる。その結果、ようやく倭国も東アジアの文明社会の仲間入りを果たすことになるわけです。

もちろん、倭国はそれ以前の邪馬台国時代にも、あるいはそれ以前にも中国に使いを送ったりしています。中国や朝鮮半島と交渉がなかったわけではありません。しかし、４世紀後半以降のたくさんの渡来人が倭国に渡って、優れた技術を教えてくれるようになる、その段階とは交流の質が違うわけですね。私は、４世紀の後半以降、こうした東アジア情勢の大きな変化の影響を受けて、ようやく倭国も文明社会の仲間入りを果たすことができるようになったと考えるわけです。

この、新しい技術や文化の受容は、当然東国にも及んでくるわけです。特に東日本では信濃、長野県や、ご当地の上毛野、群馬県ですね、こ

こには多くの渡来人がやってきて、牧を設置する。大きな牧を設置して、そこで馬の生産を始めるわけです。『延喜式』によると、この東日本の、特に信濃や上毛野、それから南の方では上総や下総などにもたくさん牧があったことが知られていますが、こういうものは、おそらく５世紀頃、この地域にたくさんの渡来人がやってきて、そうした新しい馬生産の技術を伝えた、その結果だと思われます。そして、その馬生産が非常に大規模に行われるようになるわけでして、これを契機に東国社会それ自体が大きく変化することになります。

以上は、文化史的な影響でありますが、この新しい朝鮮半島諸国との関係は、当然政治にも影響してくるわけです。資料の３頁目をご覧いただきたいのですが、畿内における大型古墳の編年図があります。この図でもお分かりいただけますように、それぞれの時期に、他の古墳から隔絶した規模をもった大きな前方後円墳があります。古い方では、西暦 250 年過ぎだと思いますが、奈良県桜井市の箸墓古墳といった 280mの大前方後円墳が現われるわけです。この時期の日本列島中を見渡しても、こんな大きな古墳はほかにみられません。

先ほど申しましたように、古墳時代というのは、日本列島各地の首長たちがヤマト政権の中での身分秩序に応じて、大小様々に前方後円墳を初めとする古墳を造っている時代です。そういう考え方からすれば、ヤマト政権と呼ばれる首長連合の盟主、後に大王・天皇と呼ばれることになる盟主のお墓は、当然最も大きな前方後円墳ということになるわけです。事実、それぞれの時期で、日本列島各地の他の古墳から隔絶した規模をもつ古墳があります。それは、比較的容易に見つけ出すことができます。

それはほとんど畿内にある、というか全部畿内にあるわけですが、古い方から申しますと、おそらく一番古い段階では、箸墓古墳がヤマト政権の盟主、倭国王のお墓と思われ、その次の段階では、大和古墳群の中の西殿塚古墳、240 mの長さの前方後円墳で、おそらく３世紀の後半、これがおそらく２番目になる。それに続いて、次は外山（とび）茶臼山古墳、桜井茶臼山古墳ともいいますが、これはちょっと小さくて 200mの前方後円墳、最近の橿原考古学研究所の再調査ではこの古墳には少なくとも 81 面以上の鏡が含まれていることが、知られた。これは乱掘などの結果か小さな破片となって残っているんですね。その検出状況からいうと、おそらくもっとあったと思われるので、どう少なく見積もっても外山茶臼山は 100 面以上の鏡を持っていたことは疑いない。そういうことからも少し小さいですが、これは大王墓に間違いないだろうと思います。それが３番目です。

その次は、メスリ山古墳で、これは 240～250 mの大前方後円墳で、これが大王墓であることは疑いない。これが４番目です。５番目が天理市の柳本古墳群の中の行燈山古墳、これは現在宮内庁が崇神天皇陵としておりますが、240m の大前方後円墳で、これがおそらく５代目になる。それから、次が渋谷向山古墳で、これは現在宮内庁が景行天皇としておりますが、310m ありまして、これは前期の古墳としては日本列島で最大のものです。

この、箸墓、西殿塚、外山茶臼山、メスリ山、行燈山、渋谷向山、この初期の６代の倭国王のお墓がいずれも奈良盆地の東部の三輪山の麓付近に営まれております。なぜかその後の４世紀後半には、奈良盆地の東南部には大きな古墳は造られなくなってしまう。そういう大王墓はどこに造られたかというと、奈良盆地の北の端ですね、後に平城京が営まれる地域のすぐ北の佐紀古墳群に移るわけです。結論だけ申しますと、佐紀古墳群の南のほうに宝来山古墳があります。これは現在垂仁天皇陵になっているもので、現状では墳丘の長さが 230 数mです。これは周りに水を満々と湛えた壕を廻らしていますが、この壕の水は、近世に農業用水として利用されましたので、水位が上がっているわけです。本来の水位はもっと下だったはずで、実際の大きさはどう少なく見積もっても 240～250 mはあったというふうに私は思っております。従って、これは大王墓と考えられます。それから、その次は、五社神（ごさし）古墳で、これは現在宮内庁が神功皇后陵に決めておりますが、280m近くあります。おそらく、４世紀の後半には、佐紀古墳群に宝来山、五社神古墳の２代にわたって大王墓が造られたと思われます。

この佐紀古墳群では、その後５世紀になりましても、200mを越える大前方後円墳が造られ続けます。しかし、４世紀の終わりから５世紀になりますと、もっと大きな古墳が河内や和泉に、大阪府南部の古市古墳群や百舌鳥古墳群に営まれるようになります。そして、大王墓もその中に求められることになります。

私は、大阪平野で最初に造られた大王墓は、河内の古市古墳群に仲ツ山古墳だと思います。これは現在、応神天皇のお后の仲ツ姫のお墓に宮内庁が決めておりますが、270 数mの大前方後円墳です。これが、大阪平野に営まれた最初の大王墓だと思います。その次は、なぜか古市

から和泉の百舌鳥古墳群に王墓が移ります。百舌鳥古墳群の中の現在履中天皇陵になっている上石津ミサンザイ古墳、宮内庁の測量図で測りますと365mですが、これもおそらく水位が大幅に上がっていることは間違いない。本来は、どう少なく見積もっても400mはあったと思われる前方後円墳ですね。おそらくこれが仲ツ山の次になります。

それから次はまた古市古墳群に戻って、現在宮内庁が応神天皇陵に決めている誉田御廟山。その次は、また百舌鳥古墳群に移りまして、宮内庁が仁徳天皇陵に決めている大仙陵古墳。墳丘長が486mとされていますが、これも当然壕の水位が上がっておりますから、本来は、500mを超える大前方後円墳であったことは間違いないと思われます。

このように、少なくとも大仙陵古墳の時期くらいまでは、比較的容易に大王墓と思しき古墳を見つけ出す、選び出すことができるわけです。誰が見ても、それがずば抜けて大きいとわかります。ただ、それ以降は古墳は小さくなってまいりますので、こういう単純な方法で大王墓を抽出することはできなくなるわけです。それはともかくとして、3世紀中葉すぎから4世紀後半の段階まで、ずっと奈良盆地に営まれ続けられてきた大王墓が、4世紀の終わりごろくらいから、大阪平野に移ることになるわけです。そしてそれ以降、仲ツ山古墳以降は、大王墓と思しき古墳はいずれも河内・和泉に営まれることになるわけです。

この大王墓が、奈良盆地から大阪平野に移ってくることについては、いろいろな考え方がありまして、あくまでも大和に本拠を置く大王家が、単にお墓だけを大阪平野に移したにすぎないという説もあるわけです。ただ私は、基本的に古墳というのは、その政治勢力の本拠地に造るのが大原則だと思います。その原則に立って考える限り、大阪平野に大王墓が営まれるようになるということは、大阪平野の勢力が王権を掌握した結果と考えざるを得ないわけです。

いずれにしても、大王墓が大和から河内、和泉という大阪平野南部に移るわけです。ですから古墳のあり方からみても、そこに大きな画期があることがおわかりいただけると思います。これが私に言わせますと、先ほど申しました第一の画期にほかならないと思います。4世紀後半になって高句麗の南下に伴って、倭国が朝鮮半島に出兵せざるを得なくなったということです。東アジアの動乱に巻き込まれることになるわけです。そして朝鮮半島に出兵して、高句麗と鉾を交えることになったと思います。

こういう東アジアの激動の情勢に、おそらく邪馬台国以来の宗教的と申しますか、呪術的な性格の強いヤマトの王権では対応できなかった。そこで畿内勢力の中でそれ以前から朝鮮半島との外交や、交易などを担当していた大阪湾岸の和泉や河内南部の勢力が、畿内政権のリーダーシップを握るようになったことは、私はむしろ当然のことであると思います。

ですから、高句麗の南下に伴う東アジア情勢の大変化に伴って、倭国も朝鮮半島に出兵することになる。その第一の画期が、政治的に現われているのが、この大王墓の大阪平野への移動にほかならないのではないかと考えています。

いずれにしても、これが第一の画期です。基本的には、それ以前の時代を古墳時代の前期といっているわけです。この第一の画期より後を中期と、まさに4世紀末から5世紀を中期といっております。この第一の画期の結果として倭国は、東アジアの文明社会の仲間入りを果たすことになったわけで、多くの渡来人がここ上野の地にもやってきて、たくさんの牧を営むことで、馬の生産を開始する。これは、その後の上野の歴史に非常に大きな影響を与えることになる。それはまさに第一の画期の結果によるものなのです。

それから、もうひとつ第二の画期ですが、これも3頁目の図をご覧ください。この畿内における大型古墳の編年図を見ていただくと、5世紀代の終わりごろから古墳の規模が急に小さくなっていくのがお解りいただけると思います。

それで、ちょうど西暦500年の線のすぐ上に古市古墳群の岡ミサンザイ古墳があります。これは、後期の初めのころですね、この頃から後期になります。ただ、この古墳はこの時期としては非常に大きな古墳です。結論的に申しますと、これは後で触れますが、雄略天皇、ワカタケル大王のお墓である可能性が大きいと考えています。ほかに雄略天皇陵の候補が見つからない、年代的にも雄略天皇の没年と一致しています。これがおそらく雄略陵ではないかと思うんですが、この時期、それ以外大きな古墳は見られなくなります。

いずれにしても、この雄略朝以降、畿内でも大きな古墳は、摂津の今城塚古墳、これはおそらく継体天皇陵と考えられています。それから岡ミサンザイの下の方に、正確な年代はわからないのですが、河内大塚古墳がやはり後期の大前方後円墳です。後期としては、最大の前方後円墳です。それから、更に6世紀の終わりになると、大和に五条野丸山古墳、かつて見瀬丸山

古墳と呼んでおりましたけれども、310数mの大前方後円墳が大和の南部に造られます。これらがいずれも大王であることは、まず間違いない。

ですから、畿内でも大王墓だけは大きな古墳ですが、それ以外の有力な首長たちは、あまり大きな古墳を造らなくなった、造れなくなったのですね。このことは、畿内以外の地域と比較すると、よりはっきりわかります。

例えば、中期の段階、西暦400年代前半頃の段階では、吉備地方、岡山県から広島県の東の方、吉備と呼ばれていた備前、備中、備後、美作の地域ですが、この吉備の大首長が、非常に大きな古墳を造りました。5世紀初めの岡山市の造山古墳が360mあります。それに続けて5世紀の前半から中頃には、その少し西の方に墳丘長286mの作山古墳、これは総社市にあります。更に、おそらく5世紀の半ば過ぎに、墳丘長192mの両宮山古墳が岡山市の東に造られます。この段階までは、畿内の大王墓に準ずる大古墳を吉備の大首長が造っていたわけです。

ところが、吉備でそういう大きな古墳が造られるのは、5世紀の中頃から後半と思われる両宮山でおしまいになります。それ以降は、最大のものでもせいぜい100mくらいになってしまいます。

これは、ご当地の上野でも同じで、5世紀の前半には太田市の太田天神山古墳、210mくらいの大前方後円墳が造られます。ですから、この5世紀前半から半ば過ぎにかけては、各地にそういう大前方後円墳が造られるわけです。もちろん、大王墓はその頃400mを超える規模ですから、それよりは小さいけれども、それに準ずる規模の巨大古墳が日本列島各地に造られていたわけです。

ただ造山古墳は、おそらくこの畿内の編年表でいいますと、上石津ミサンザイ古墳に近い時期です。上石津ニサンザイ古墳は、おそらく本来は400mくらいあったと思われますが、造山も360mくらいで、少し小さいだけです。吉備の勢力に、こんな巨大な古墳を造ることを許したというのは、やはり特別な事情があったと思われます。それ以前の、前期の段階では、おそらく畿内以外の地域では、畿内の大王墓の2分の1ないしはそれより少し大きいくらいの古墳しか造れなかった。この5世紀前半の造山古墳の時期は、特別なのですね。

この太田天神山古墳などもそうだと思いますが、要するにこの時期は、ヤマト政権が朝鮮半島へ出兵して、朝鮮半島で戦争しているわけですね。朝鮮半島でそういう戦争を遂行するには、日本列島内の吉備とか上毛野とか、そういう有力な地域の大首長の協力が不可欠なのですね。そういう特別の事情があって、この時期、畿内以外の古墳が5世紀前半を中心に非常に巨大化するのだと思います。

それにしても、5世紀の後半以降には、畿内以外の地域では、もう大きな古墳は全く見られなくなってしまいます。これは、文献による古代の先生方も明確に指摘しておられることですけれども、雄略天皇の時代というのは、いわゆる大王の権威が非常に強くなってきた時期といわれています。3頁の編年表でも岡ミサンザイ古墳の時期から畿内でも大王墓以外に他に大きな古墳はなくなってしまうわけです。

例えば、奈良盆地の西南部の葛城地域ですね、ここには葛城氏という有力な豪族がいたわけです。そこでは馬見古墳群の大型前方後円墳や室宮山古墳とか大王墓に準ずる巨大な古墳が造られていたわけです。ところが、雄略朝くらいを最後に葛城の巨大な前方後円墳も造られなくなってしまいます。これは文献史料でも、雄略天皇によって葛城氏が滅ぼされたことが『日本書紀』にもはっきり書かれています。

これは、単に畿内だけではなくて、日本列島のほかの地域でも同じでありまして、雄略朝頃に急速に、ヤマト王権の力が強大化したということは、古墳のあり方からも疑いありません。ですから私は、これを第二の画期ととらえます。まさに文献でいえば雄略天皇の時代ですが、5世紀の後半を境に、それまでの日本列島各地の大首長たちとヤマト王権との力関係が大きく変化するんですね。

最初に、古墳時代というのは首長連合の時代である、日本列島各地の首長たちが、同盟関係を結んでいた首長連合の時代だと申し上げました。しかし、厳密な意味で首長連合の時代といえるのは、この第二の画期まで、5世紀の後半まで、それ以降はもう首長連合とはいえなくなる、ヤマトの王権の力が非常に強くなり、それに服属する地方豪族という形がはっきりしてきます。

いずれにしても、雄略朝前後を境に、日本列島各地の首長たちとヤマト王権との関係が大きく変化する、これを古墳時代の第二の画期と考えております。先ほど申しましたように、第一の画期以前がだいたい古墳時代の前期、第一の画期から第二の画期までが中期になるわけですね。第二の画期以降、推古朝に前方後円墳の造営が停止されるまでの間が後期ということになります。

以上ですね、古墳時代にそういうふたつの大

きな画期があった。特にこの２番目の画期が、これからいろいろ検討いただく前二子古墳、大室古墳群とも関係することになるわけであります。

２　有銘刀剣からみた大王と地方豪族　この第二の画期、雄略朝頃のヤマト王権と地方豪族、たとえば大室古墳群などを営んだ豪族との関係を考える考古学的な資料として、古墳があるんですが、古墳だけではわからないこともたくさんあります。それを補うものとして、この時期のヤマト王権と地方豪族との関係を考える上に非常に重要な資料があります。それは資料の４頁、５頁にあげておりますけれども、ひとつは埼玉県の稲荷山古墳から出土しました金象嵌の銘文をもつ稲荷山鉄剣ですね。それともうひとつは、九州の熊本県の江田船山古墳から出土した銀象嵌の銘文をもつ江田船山刀です。このふたつの長文の銘文をもつ刀剣資料をもとに、この段階のヤマト王権と地方豪族との関係を考えてみたいと思います。

稲荷山鉄剣は、剣の裏表に長文の銘文が金象嵌されています。この銘文をもつ剣が作られたのは、辛亥の年。結論から申しますとこの辛亥の年というのは、471 年ということで、日本の研究者の意見はほとんど一致していますが、韓国の研究者の中には、もう 60 年下げて考える方もおられます。ただ私だけではなく、日本の多くの研究者は 471 年で間違いないと考えています。

辛亥の年、西暦 471 年、まさに雄略朝ですね。７月中、記す。ヲワケの臣（しん）。臣というのは「おみ」と読むと、これは後のカバネ制の臣と、カバネ制が成立しているようにとられるとまずいので、これは「しん」、自分のことをへりくだるということで、ヲワケの「しん」と読むのがいいと思いますが、オワケの臣、この人がこの剣を作らせたわけです。このヲワケの上祖、名はオホヒコという。その児、名はタカリのスクネ、その児、名はテヨカリワケ、その児、名はタカヒシワケ、その児、名はタサキワケ、その児、名はハテヒ。

裏に移りまして、その児、名はカサヒヨ。その児、名はヲワケの臣ですね。この刀を作らせたヲワケが、８代遡った上祖ヲワケに始まる系譜をここに謳いあげているわけです。ヲワケの一族は、代々、杖刀人（じょうとうじん）のかしらとなり、杖刀人というのは、刀を杖つく人と書いてあるわけですが、これは刀を持って大王の宮を警護する、そういう武人を言ったのだろうといわれています。杖刀人のかしらとして奉事し来たり今に至る。大王に仕えて今日に至っていると。ワカタケル大王の寺ですね、ここに出てくるワカタケル大王というのは、日本書紀、古事記に雄略天皇、「ワカタケルノスメラミコト」と書かれている、まさにそれと一致するわけです。これが雄略天皇であることは、年代からも疑い得ない。寺というのは、役所という意味です。雄略天皇の宮、役所が斯鬼宮（しきのみや）にあるとき。雄略の宮は、古事記、日本書紀では、泊瀬朝倉宮（しきあさくらのみや）ということになっていますが、その泊瀬朝倉というのは、奈良県の磯城地方、磯城上郡にあるわけです。したがって、古事記、日本書紀にいう、泊瀬朝倉宮のことをここでは斯鬼宮と言っているわけです。ワカタケル大王の寺、斯鬼の宮にあるとき、吾というのはヲワケですね、天下を左治し、天皇が天下を治めるのをお助けしたということです。天下を左治し、この百錬の利刀を作らしめ、わが奉事の根源を記すなりと。雄略天皇が、斯鬼宮においでになったときに、自分は雄略が天下を治めるのをお助けし、そのことを記念して、この練りに練ったよい刀を作らせ、自分と自分の一族が、大王に仕えてきた奉事の根源をここに書くんだということで、この文章の意味自体はそう難かしくはないですね。

問題は、ここに出てくるヲワケ、この剣を作らせたヲワケというのは、一体何者かということですね。これにつきましては、銘文が見つかった当初から、ふたつの意見が対立しております。

そのひとつは、まさにこの稲荷山鉄剣を出土した埼玉稲荷山古墳、埼玉県行田市にある埼玉古墳群の中で最初に営まれた大前方後円墳である稲荷山古墳の被葬者、すなわち武蔵の大豪族がヲワケにほかならないというものです。それは、国立歴史民俗博物館の初代館長をしておられた井上光貞先生のお考えです。井上先生は、若い頃非常に有名な論文を書いておられます。これは、天皇に仕えた舎人ですね、天皇の警護をしたり、その身の回りのお世話をしたりする舎人ですね、この舎人の起源を文献史料から論じられたものです。舎人というのは、もともと古墳時代に東国の豪族の子弟を大和に上番させて大王の宮を警護させていた、これが舎人の起源にほかならないというものです。

井上先生にしてみれば、まさにこの若き日の論文を実証する資料が出てきたわけですね。東国の大豪族の古墳から、こういう銘文をもった鉄刀が出てきて、そこには、杖刀人の頭として、ヲワケという人の名前がみられるわけですね。

このヲワケが東国から上番して大王の宮を警護する武人たちの頭として仕えて今日に至っていると書いてあるのですから、井上先生としては、若き日の自分の論文がまさにこの資料によって実証されたというふうにお考えになったのは当然だと思います。

私は、千葉県の佐倉市に国立歴史民俗博物館ができますときに、その準備室室長であった井上先生から歴博創りを手伝わないかと呼んでいただきまして、文部省の中にあった準備室で井上先生と一緒に仕事をしておりました。ちょうどその頃銘文が見つかったんですね。ですから、その時の井上先生のお気持ちは非常によくわかる。たいへんお喜びになり、積極的にシンポジウムなどにも参加され、自説を展開されました。私も、根掘り葉掘りこの古墳の年代とかいろいろ考古学上の問題についてご質問を受けたことを覚えております。先生が、まさに自分のお書きになったことが実証されたと理解されたことは、ある意味では当然ではないかとも思われます。

ところで、この新発見の銘文を解読されたのは、当時京都大学におられた岸俊男先生や奈良文化財研究所におられた田中稔さん、あるいは狩野久さんらです。そのお一人の岸先生が、井上先生の説に疑問を提起しておられます。それはどういうことかというと、ひとつは、ヲワケは吾天下を左治しと書いてある。雄略天皇が、天下を治めるのをお助けしたと書いてあるわけですね。いくら何でも東国の豪族が、杖刀人という大王の宮を警護するリーダーとして上番していたとしても、こういう表現をするだろうかということですね。

それからもうひとつは、このヲワケの上祖はオホヒコとなっています。『日本書紀』にオホヒコ系譜というのが残っておりまして、この時代にはいくつかの有力な豪族が自分たちは祖先を共通とする同族なんだとして、擬制的な同族関係を形成しているんですね。そうした代表的な同族系譜に、このオホヒコ系譜がある。このオホヒコを上祖として、その子孫に有名な阿部氏ですね、軍事的に活躍する阿部氏とか、膳氏とか、多くの豪族が含まれているわけです。

岸先生が注目されたのは、そのうちの阿部氏です。というのは、この稲荷山鉄剣を出土した稲荷山古墳のある北武蔵には、のちに郡司になる有力な豪族の中に、丈部（はせつかべ）という部を地方で管理していた丈部直（はせつかべのあたい）がみられる。その丈部というのは、実は阿部氏が軍事的な役割を果たすために必要な人的資源や、あるいは経済的資源を確保するために設定された部、これが丈部にほかならない。その丈部直、地方に置かれていた丈部をその地域で統括していた丈部直を名乗る豪族が北武蔵に多いということから、このヲワケというのは、例えば阿部氏のような中央で軍事を司っていた有力豪族の族長と考えた方がいいのではないかというのが、岸先生のお考えです。

ですから、このヲワケを地方豪族、すなわち武蔵の豪族と考えられた井上先生に対して、岸先生はそうではなくて、この剣は畿内の大豪族、ヤマト王権の中で軍事を担当していた大豪族が、その大豪族の軍事にかかわる仕事を東国において助けてくれている有力な武蔵の豪族に与えたものと考えた方がいいのではないかと考えられたわけです。

これについては、今でも両方の考え方が対立していますが、私はこの問題を解決するには、これと非常によく似た性格の銘文をもった鉄刀、ほぼ同じ時期の鉄刀がもう一本江田船山古墳で見つかっています。これと一緒に考えるのが有効だろうというふうに考えています。

この鉄刀は、熊本県の北の方、玉名市からから菊池川を少し遡ったところの清原（せいばる）古墳群の江田船山（えたふなやま）古墳という60m余りの前方後円墳から出たもので、こちらは刀です。東京国立博物館の考古展示室に展示されておりますが、その鉄刀の棟の部分の非常に細いところに小さい字の銀象嵌銘がある。銀ですからすぐ黒くなってしまうので、何度も研いでいるうちに、いくつか字が消えてしまい、読めないところ、残っていないところがあります。東博では、この鉄刀を窒素ガスケースに封じ込めて保存をはかるため、最終的な調査・検討をされました。私も、そのお手伝いをいたしましたが、そのときに文献の方からは奈良大学におられる東野治之さんが加わられ、最終的にこの銘文を検討されました。

その東野さんが読まれた釈文をそこに示しております。読み下し文も東野さんのものです。「天の下治らしめし獲□□□鹵大王」、これは先ほどいいましたように、何度も研いでるうちに、飛んでしまって３字がわからなくなってしまったんですね。最初これはわかりませんでしたので、何か最初に獣偏の文字がある。それから四字目に歯というような字がある。それで、最初はこれを反正天皇、「蝮□□□歯大王」と読んでいたんですね。ところが、稲荷山鉄剣銘が知られた結果、稲荷山鉄剣の大王名と同じであることがわかった。ワカタケル大王であることが、初めてわかりました。

「天の下治らしめし獲□□□鹵大王の世、典

曹に奉事せし人、名は无利弖（ムリテ）」。これは東野先生の読み方で、普通はこれを「奉事せし典曹人」と読んでいます。東野先生は、最後のところに「刀を作る者、名は伊太和、書する者は張安也」とあり、それと対にして、「典曹に奉事せし人、名はムリテ」と読んだ方が読み方としてはよいだろうと言っておられます。ただ多くの人は、「奉事せし典曹人」と読みます。「杖刀人」に対して「典曹人」と読んだ方がいいだろうということでしょう。「奉事せし人、名はムリテ、八月中、大いなる鉄釜を用い、四尺の廷刀を并わす。八十たび練り、九十たび振つ。三寸上好の刊刀なり。此の刀を服する者は、長寿にして子孫洋々、□恩を得る也」。三恩でしょうね、非常にいいことがたくさんあるという。そして、「其の統ぶる所を失わず」。その支配する土地と人民を失わない。「刀を作る者、名は伊太和、書する者は張安也」。張安というのは、これは朝鮮半島にはあまり見ない名ですから、恐らく中国系の渡来人が、この雄略の宮にいたのではないでしょうか。

いずれにしても、ここでは、ムリテ（无利弖）という人が刀を作らせているんですね。そして、このムリテは、ヲワケが杖刀人であったのに対して、この人は典曹人だったのですね。曹というのは役所のことですね、典というのは総べる、統括するという意味ですから、役所を統括する人という意味ですね。だから、文人であると理解されていますが、読み方によるとこの雄略天皇の宮を統括していたような、非常に高い身分の官人といいますか、有力豪族であるとも読めるわけですね。そのムリテが、これを作らせたというふうにも読み取れるわけです。

江田船山鉄刀の場合も稲荷山鉄剣の場合と同じように、このムリテについて肥後の豪族であるという説と、やはり畿内の大豪族と考えた方がよいのではないかという説が対立しています。問題は、この鉄刀を出した江田船山古墳ですが、その埋葬施設は横口式の石棺式石室です。横に入口を持った横穴式の埋葬施設で、追葬が可能で、何人かの人が合葬されているようです。たくさんの銅鏡や甲冑、刀剣、それに金銅製の冠や帯金具や沓など見事な金銅製装身具などが出土しています。金銅製装身具には百済系のものが多いようですが、時期もさまざまです。そして、これは学術調査でなくて、明治年間に地元の人たちが掘ってしまったので、出土状況などもよくわからない。ただ幸いなことに、出土品はほとんど全部東京国立博物館に保存されています。

結論的にいうと、この古墳の石室からは耳飾りが三組出ています。そのことから、私は三人の葬者が葬られていたと考えていいのではないか、その目で見ると、遺物も古相のものと新相ものと、さらにもっと新しい最新相のものと、３相くらいに分けることができます。だいたい古相の遺物は５世紀の後半くらい、新相の遺物は６世紀の初めくらい、最新相のものがだいたい６世紀の前半くらいと考えてよいのではないかと、私は思います。

次の問題は、江田船山古墳から鉄刀だけでも14本見つかっておりますが、この銀象嵌銘大刀が、この３人の被葬者のうちどの被葬者の持ち物であるかということになるわけですね。この銘文をもつ刀は、ちょっと特殊な型式の刀なんですね。これは、棟の部分に銀象嵌で文字が書き連ねられておりますが、その柄に差し込む茎の部分と刀身との境の部分、関（まち）といいます、下から約20cmのところに関がありますが、その関のところにくり込みがある。それから、関から刀身の一番元のところに、そこはまわりに銀象嵌を施して花の形を表わしていますが、その中央を抉っているんですね。これは、鎺本孔といってここに孔をうがったものがあるのですが、銀象嵌銘大刀まさにこの鎺本孔があるんです。

こういう特徴のある刀は、大阪府の古市古墳群の峯ヶ塚古墳ですね、５世紀末葉から６世紀初頭くらいの立派な前方後円墳があります。そこから見事な倭風の拵えの大刀が何本も出てきているわけですが、その中に同じように鎺本孔をもち、関に方形の抉込みをもったものがある。これはまさに６世紀初頭くらいの時期のものなんです。ですから、この銀象嵌大刀のそれ自体の刀身の型式からいっても、これはやはり５世紀後半の古相の遺物までは上がらない、また最新相までは下がらない、恐らく新相の６世紀初頭の遺物を伴う２番目の被葬者の持ち物と考えてよいでしょう。だから、江田船山の有銘鉄刀は、この古墳の最初の被葬者、まさにその人のためにこの古墳が造られた墓主の持ち物ではないんですね。

このことは、実は稲荷山鉄剣にもいえることです。稲荷山鉄剣は、稲荷山古墳の墳頂部の礫槨から出土したものです。この古墳の後円部の墳頂では粘土槨と礫槨のふたつの埋葬施設が見つかっています。それは、後円部の墳頂平坦部の端のところから見つかっています。そのうちの礫槨から出たものです。非常に浅いところからです。その稲荷山古墳の後円部の中央部の真ん中の深いところは、まだ掘られていないんですね。報告書を見ますと、数10cmは掘って

あります。それは、横の非常に浅いところから礫槨と粘土槨が出てしまったので、真ん中は深く掘られなかったのだと思います。稲荷山古墳というのは、墳丘長120mくらいの大前方後円墳です。その中心的な埋葬施設は、竪穴系のものであるとすると、墳頂部から恐らく２m以上の深さの大きな墓壙を掘って、その底に中心的な埋葬施設が営まれていると考えられる。私は、稲荷山古墳の中心的な被葬者、最初の被葬者の埋葬施設は、まだ後円部の中央部深くに眠っていると考えております。

この稲荷山古墳の造営年代は、くびれ部出土の多量の須恵器から５世紀後半であることは疑いないと思います。ところが、稲荷山鉄剣と一緒に出てきた馬具のセットの中に３鈴の鈴杏葉、３つ鈴がついた鋳銅製の杏葉、馬具の下げ飾りがあります。それは他の古墳の例では、６世紀の初めくらいにみられる型式でありまして、従って稲荷山古墳の稲荷山鉄剣を出した礫槨というのは、やはり５世紀終り６世紀初頭くらいに、そこに追葬された人の埋葬施設と考えるほかない。

そう考えてよいとすれば、稲荷山鉄剣もまた、江田船山鉄刀と同じように、まさにその人のためにその古墳が造られた墓主の持ち物ではないんですね。そこに20～30年後に追葬された人の持ち物ということになります。

そのことを重視しますと、井上先生の説は稲荷山鉄剣が武蔵の大古墳の墓主の持ちものであることが大前提となっているわけですから、これはやはり、岸先生のお考えに賛成せざるを得ないということになります。稲荷山鉄剣を作らせたオホヒコも、江田船山を作らせたムリテも、それぞれ武蔵の大豪族あるいは肥後の大豪族ではなくて、これはやはり畿内の大豪族であると思います。

その場合面白いのは江田船山古墳ですが、この古墳からは、冠とか沓とか見事な金銅製の装身具が出ています。冠だけでも三組あって、古相の遺物を持った被葬者、新相の遺物を持った被葬者、最新相の遺物を持った被葬者、それぞれのものです。それらは、すべて朝鮮半島系の装身具です。一番古いものは百済系、その後のものも百済や伽耶の影響が考えられるものです。

他の日本の古墳であまり見ない朝鮮半島系の見事な金銅製の装身具を豊富に持っていることから、江田船山古墳の被葬者は、恐らく朝鮮半島との交渉・交易に活躍した有明海沿岸の豪族であると考えられます。この時期には、九州でも玄界灘沿岸の勢力ではなくて、むしろ有明海からその南の八代海沿岸の人たちが、朝鮮半島との交渉・交易の中心的な役割を果たすようになっていたことが考古学的にも考えられます。

『日本書紀』の敏達紀によりますと、八代海沿岸の火葦北の国造名前が出てきまして、この火葦北国、すなわち八代海沿岸の豪族が、百済へしょっちゅう出かけて行っていたことが判る。百済の女の人との間に子供ができています。その子供を日羅というんですが、この日羅は成人して百済の高級官僚になります。それを、後に敏達天皇が日本に呼んで、その知恵を借りて任那（みまな）を復興しようとする。『日本書紀』は、当時倭国は朝鮮半島の東南部に任那という植民地を持っていたように書いてありますが、任那諸国はそれぞれちゃんとした独立国です。いわゆる伽耶諸国ですね。決して倭国の植民地ではないのですが、倭国の影響力が非常に強く及んだ地域であったことは間違いないようです。そういう伽耶諸国や百済との交渉・交易を実際に担当していた有明海あるいは八代海沿岸の豪族は、しょっちゅう百済にも行っていた。彼等と百済の女性との間に生まれた子供が百済の高級官僚になっていたというわけですね。

このことは、まさに有明海・八代海沿岸の豪族たちが、５世紀の後半から６世紀代に朝鮮半島との交渉・交易を実際に担当していたことを物語っています。彼等を中央で統括していたのが大伴氏の族長の大伴金村です。『日本書紀』の記載によると、日羅が日本に呼ばれてやってくるわけですが、日羅は大伴金村のことを「我君大伴金村大連」と呼んでいます。中央で外交を統括している大伴氏と、実際にその下で朝鮮半島との交渉・交易を担当していた有明海や八代海沿岸の地方豪族との間には、一種の君臣関係のような関係が成立していたことが窺えます。まさにそうした豪族の一人がこのムリテにほかならないと思われます。

これについては立命館大学におられた山尾幸久先生も同じ様な考え方でして、江田船山鉄刀に出てくるムリテというのは、大伴氏のような中央で外交を担当している大豪族と考えられました。大伴氏は、江田船山鉄刀のような有銘刀剣を自己の職掌であるところの外交の仕事を実際に担当してくれている有明海沿岸の有力豪族に与えたと考えるのが、私もいいのではないかと思います。

このように私は、江田船山鉄刀のムリテも、稲荷山鉄剣のヲワケも、共に中央の大豪族の族長と考えます。稲荷山鉄剣については、例えば

阿部氏のような中央で軍事を担当している大豪族、それがその軍事に関わる仕事を東国で支えてくれている武蔵の大豪族の子弟に与えたもの。江田船山鉄刀についても、例えば大伴氏のような中央で外交を担当していた有力豪族の族長が、外交の仕事を実際に担当してくれている有明海沿岸の有力豪族に与えています。

この時代、すなわち5世紀後半から6世紀になってくると、大王が直接地方の豪族と関係を結んでそれを掌握するという形ではなくて、大王を取り巻く畿内の有力豪族がそれぞれ地方豪族と関係を結ぶようになってくる。ヤマト王権の中でいろいろな職掌を分担している有力豪族、阿部氏は軍事、大伴氏は外交というように分担しているわけですが、そういう畿内の有力豪族が自己の職掌をはたすためには、それぞれ各地の有力地方豪族の力を借りなければならないわけですね。そういうことで中央で特定の職掌を担当している有力豪族と、地方にあってその豪族の配下として特定の職掌を地方において担当していた有力豪族が強力に結びついていた時代と考えていいのではないか。まさに前二子古墳が造られた6世紀初頭というのは、そういう時代であったと考えることができると思います。

それからもうひとつ申しあげておきたいことは、この稲荷山鉄剣には、「吾、天下を左治し」と書いてあります。大王が天下を治めるのをお助けしたと書いてある。それから、江田船山の大刀には、一番最初から「治天下ワカタケル大王」と書いてあります。この「治天下」という考え方、「天下を治める」という考え方は、これは皆さんご承知のように中国の皇帝の思想であって、中国から言えば東方の小国である倭国の王が、「治天下」などというのはとんでもないことですが、こうはっきり書いてあるんですね。この「治天下大王」の「大王」というのは、恐らくこの頃から使われだしたのだろうと思います。というのは、今日はお話できませんでしたけれども、千葉県市原市の稲荷台1号墳から「王賜」銘鉄剣というのが出ています。これは、5世紀の前半のもの、5世紀中頃の古墳から出てきましたので、それよりちょっと古い時期のものですが、そこには「王賜る」と書いてあるんですね。王が、その後は読めないですが、王が恐らく地方豪族にその剣を与えるために作ったものと思われます。

ですからこの5世紀前半の段階では、恐らく畿内の大王は、王と呼ばれていた。これは東アジアの高句麗、新羅、百済みな王ですね。国王、王と呼ばれますね。ところが、雄略の時代になると倭国王は自ら「大王」と名乗るようになります。「大王」は一般的には、キングオブキングズですね。王の中の王が大王ですね。ところがこの場合は、たくさんいる王の中のその上に立つ大王という意味ではないと思います。日本列島各地にたくさん王がいて、この大室にも王がいて、その上に立つ「大王」という意味ではないと思います。この時期、朝鮮半島はいくつかの国に分かれて戦っているんですね。そして、倭国も最初は百済、その後も基本的には百済と最も親しい関係を持つわけですが、時期によっては百済と戦うこともある。要するに、この時期の倭国は漁夫の利というか、一段高い立場に立てたんですね。何とか倭国を味方に引き入れたいと、それぞれの朝鮮半島諸国は思うわけですから、そういう一段有利な立場にあった倭国王が、一種のミニ天下思想ですね、朝鮮半島から倭国までの範囲で、自分は朝鮮半島諸国の王より一段上にある、そういう一種のミニ天下思想に基づいて、「大王」と名乗るようになったのではないかと私は考えています。

3　古墳からみた6世紀の東国豪族　そろそろ大室古墳群に話を戻さなければならないんですが、今までお話したことを前提として、6世紀の東国の豪族のあり方を考えてみたいと思います。

先ほど申しましたように、雄略朝の5世紀後半以降、時代は古墳時代の後期に入ります。この時期になると日本列島各地で、大王墓を除いて前方後円墳の規模は急速に小型化します。その数も減少していきます。ところがそうした中で、関東地方だけは例外なのです。52頁目に「上毛野における後期大型前方後円墳の分布」の図があります。今から20年ほど前、歴博にいるときに作ったもので、その後は調査・研究も進んでおり本当は訂正しなければならないのですが、大筋は変わっていないと思いますので、これでお話しをさせていただきます。

これは上毛野、すなわち上野の範囲で、5世紀末から7世紀初頭くらいの古墳時代後期の大規模な前方後円墳の分布状況を示したものです。そこには墳丘の長さが60m以上の中クラスのものから、それ以上の大規模な前方後円墳を示してあります。その下に表にしてまとめてありますが、上野では60mから70m台のものが64基、80m～90m台のものが17基、100m～110m台のものが15基、120m以上が1基、これは白石（しろいし）古墳群の七輿山（ななこしやま）古墳ですが、いずれにしても60m以上のものが全部で97基もあります。墳丘長60

m以上の前方後円墳が6世紀前後の上野では97基もあるわけです。

それに対して、畿内の大和を見ましても、60m以上の前方後円墳は全部足しても20基にすぎません。河内でも12基にすぎない。和泉には1基もありません。摂津には2基、山城には5基、合わせて39基しかない。ところが上野だけで97基です。関東地方では、この表でみられますように、下野でも16基、常陸は多くて38基、下総が11基、上総も多くて28基、武蔵も26基、合わせると216基もあります。畿内全体でも60m以上の前方後円墳は、わずか39基しかありませんが、それに対して関東全体では216基ということになります。

他の地域と比べるとよくわかりますが、後期の前方後円墳は西日本各地などと比べても関東は異常に多いわけです。その範囲はまさに今の関東地方、ただし私にもよくわからないんですが、安房は房総半島の先の狭い地域ですから別にしても、相模に1基もないんですね。その理由はちょっとわからないんですが、相模以外の関東地方が前方後円墳造営において特別な地域であったということが、この表からもおわかりいただけるのではないかと思います。

そして群馬の場合は、分布図にみられるようにいくつか古墳群があります。代々その首長が亡くなると、60m以上の大前方後円墳を造り続けた勢力が、いくつも割拠していたことになります。もちろん、大室古墳群のように、代々100m級のものが3代も続いて造られたところもあれば、1基だけのところもあります。1基だけのところは、その前後の古墳が少し小さかったということでしょうね。いずれにしても、この上野では、6世紀に大前方後円墳を造り続けた勢力が、数え方によりますが、20余りもありました。上野国の後の郡の数が14ですから、この時期には、後の郡よりももっと狭い範囲ごとに、その首長が亡くなると、60m、80m、100mを超えるような大前方後円墳を造るような有力豪族が20余りも割拠していたことになります。こういう状況は、関東地方以外ではちょっと見られない、きわめて特異な現象であります。このことは、この時期には前方後円墳の造営が日本列島内で一律に同じ基準で行われていたわけではないということをはっきり示しているわけです。

そのことを考慮しても、関東地方における後期前方後円墳の造営数が異常に多いことは明確であります。その意味が追求されなければならないわけですが、これはなかなか難しい問題です。さきに稲荷山鉄剣、江田船山鉄刀についてお話させていただきましたが、そこで申し上げましたとおり、5世紀後半以降の地方豪族の果たした役割は、畿内の特定の有力豪族と繋がって、その畿内の特定の有力豪族の担うヤマト王権内で職掌を助ける、その完遂に一定の役割を果たすことにあったと思われます。そうした役割をになった地方豪族が、この関東の場合、特に群馬の場合、非常に多かったということになります。

それは一体どういうことかということですが、これは結論的にいいますと、この6世紀前後、東国でも特に後に関東と呼ばれる地域が、やはり畿内王権と特別な関係をもっていたということ、これは認めざるを得ないと思います。

皆さんご承知と思いますが、律令時代になりますと、西国の防備にあたる防人が各地から徴発されて、壱岐、対馬、九州などを守るわけです。これは、九州方面の防備にあたるわけですから、西日本から徴発すればよさそうなものなのに、防人というのは東日本から徴発してるんですね。東山道では信濃から東です。東海道では、遠江より東、静岡県あたりから東の地域から徴発することになっていたわけです。これは一体どういうことなのかということですね。

それからもうひとつ興味深いのは、「固関（こげん）」の問題です。これは都で天皇が亡くなられる、そういう大事変が起きた際に、畿内と東国の間の3つの重要な関、東海道では鈴鹿関（すずかのせき）、東山道では不破関（ふわのせき）、北陸道では愛発関（あらちのせき）、これを三関といいますが、都から使いが遣わされて、その三関を閉めるわけです。関を固める、これを固関といいます。

この畿内と東国の間にある三関ですが、これはよく誤解されていますが、東国の勢力が畿内に攻め込んでこないように、畿内の東の外側にそういう三つの関を置いているわけではないのです。東海道の鈴鹿関を守っているのは、鈴鹿関の外側の伊勢国です。東山道の不破関を守っているのは、関の外側の美濃国です。それから、北陸道の愛発関を守っているのは、畿内から見て外側にある越前国なんですね。それから、不破関などはある程度調査が行われて、構造がわかっていますが、これは畿内の特定の勢力が、東と連絡をとることを防ぐ、そういう関の構造なんですね。

これはどういうことかといいますと、もうおわかりになると思いますが、例えば有名な壬申の乱では、大海人方、後の天武天皇方が、東国に逃れて東国勢力を押さえたというのが勝利に繋がっているわけです。これは、他にもいく

つか例があります。聖徳太子の子供の山背大兄（やましろのおおえ）皇子が蘇我氏に滅ぼされるときに、周りの人は、東国に逃げて東国の勢力を味方にして蘇我氏をやっつけようと進言していますが、山背大兄はそれをせず、自ら死を選ばれたわけです。要するに当時のヤマト王権を構成する個々の畿内勢力の軍事的な拠点というのは、いずれも東国にあったのですね。だから、天皇が亡くなられたり大事変が予想されるときには、まず三関が閉められます。畿内の特定勢力が、東国との連絡を行うことを絶つために、固関というのが行われるわけです。

防人が東国から徴発されたというのも、まさに畿内王権の軍事的基盤が東国にあったということをはっきり物語っているわけですね。これは単に軍事的基盤だけではなくて、例えば大化の改新ですね、最近では大化の改新といわずに乙巳（いっし）の変といっていますが、このときに中大兄らが蘇我家本宗家を倒してしまう。そういうクーデターがあったことは間違いないが、その後続けて行なわれたという改革が、どの程度のものであったかということは、見解がいろいろ分かれております。ただ、この乙巳の変の後、それなりの政治改革が行われたことは疑いえないわけですが、そのときに新政権がまず行ったことは何かというと、まず最初に東国国司というのが派遣されて、東国諸国の戸籍を作成する、それから耕地面積を調査する、それからそれぞれの勢力が持っている武器を収納することを、まずやっています。大化の改新の直後、新政府は、東国国司を東国に遣わして、それぞれの地域の戸籍の作成、耕地面積の調査、武器の収納をやるんですね。このことは、やはりヤマト王権、畿内王権を支える、軍事的にも経済的にも大きな基盤がこの東国にあったということをはっきり物語っているのであろうと思います。

このように6世紀の関東地方における前方後円墳のあり方というのは、こうしたヤマト王権にとっての東国、特に関東地方の重要な役割が、5世紀末ないし6世紀初頭くらいに始まるということを、はっきり物語る非常に貴重な資料と考えていいのではないかと思います。

いずれにいたしましても、前二子古墳が営まれた時期というのは、まさにそうした東国豪族が、畿内豪族と特別な関係を結ぶようになった時期に他ならないのであります。例えば、この前二子古墳に始まる大室古墳群も、それが畿内の何という豪族であったかわかりませんが、恐らく特定の有力豪族と結びついて、その豪族の分担しているヤマト王権の中での職掌を助ける、そこできわめて重要な役割を果たしていたことは間違いないと考えられるわけであります。

以上、前二子古墳が営まれた6世紀という時代の、特に畿内と東国の関係を中心に、お話しさせていただきました。皆さんがさらに視野を東アジアの中での前二子古墳の位置を考えていただくうえに何らかの参考になれば幸いです。ちょうど時間がまいりましたので、終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

質疑応答

（質問）

先生のお話の中で、4世紀後半に高句麗の南下に伴って百済が日本に援軍を求める、その際に、馬の活用というのが必要だということだったのですが、で、長野とか群馬に牧が多いという、それは、やってきたのはどちらから、例えば日本海の方からやってきたのか、畿内の方からそれが伝わってきたのかということが、ちょっと知りたかったんですけれども。

（回答）

ヤマト王権は、畿内の河内にも牧を設けて、まさに泥縄で馬の生産を始めわけですね。やはり牧に適当な場所は、東日本に多かったんでしょうね。東日本に大きな牧を作ったことは間違いないですが、その牧を作り馬匹生産を行うめには、当然朝鮮半島で馬生産をやっていた技術者を派遣したようです。それで渡来人がたくさんやってくる。それが、どのルートからやってきたかということは、残念ながらわかりません。

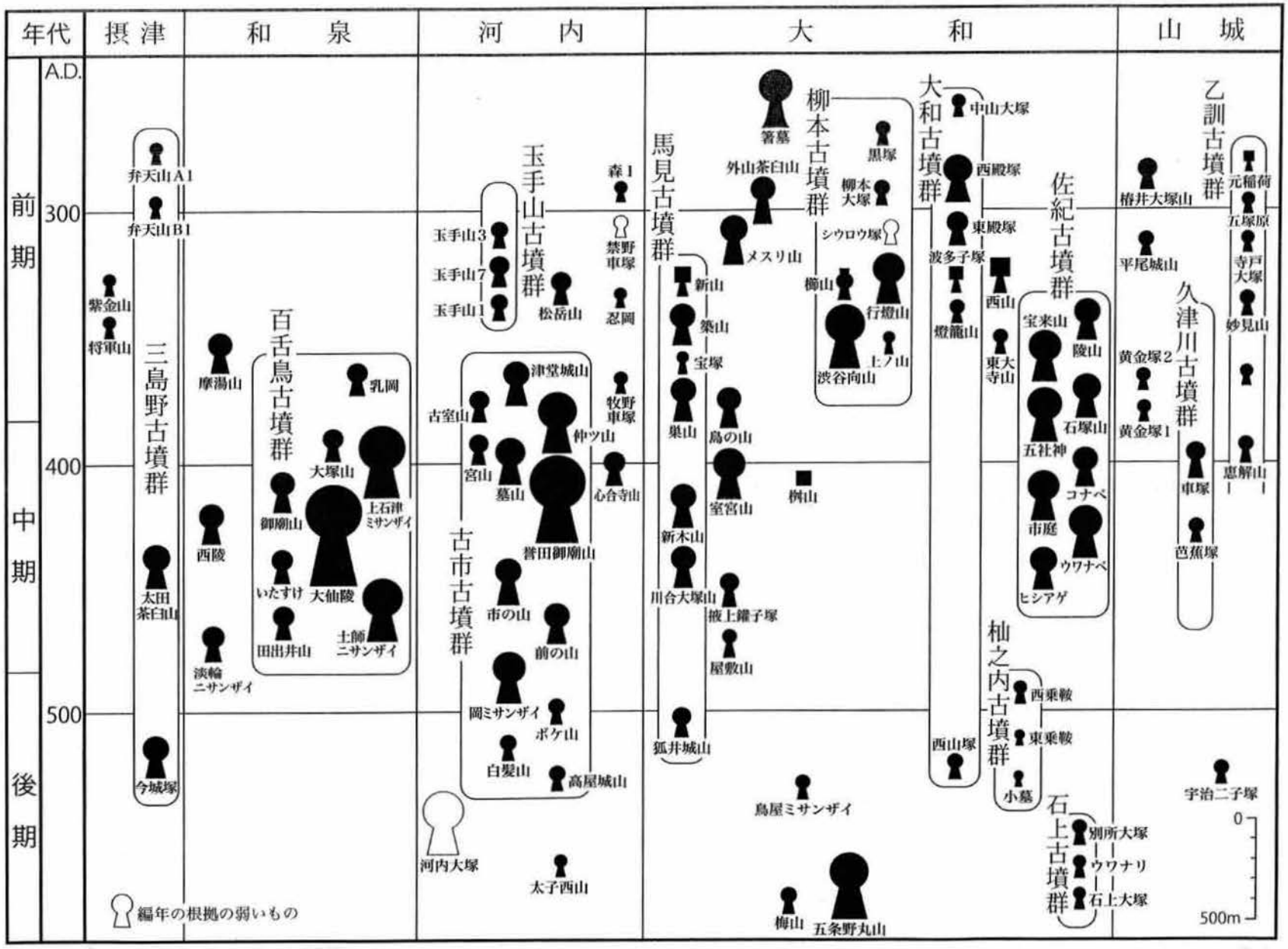
ただ非常に興味深いのは、信濃に古い牧が多いことです。信濃の、例えば長野市の北に大室古墳群がございますが、そこにはちょうどそのころから小古墳が数多く造られるようになります。面白いのは、大室古墳群の初期の埋葬施設が合掌形の石室といっていますが、天井を屋根形に組み合わせた一種の横穴式石室です。

これは、それに近いものが百済にあります。現在知られている百済のものはもっと新しい時期のもので、長野のものの方が古いのですが、私は百済でも古い時期ににもそういうものがあったのだと思います。

そういうことから、百済やその勢力下の人たちがやってきて、長野で牧を営んで、馬の生産を始めたということは、私はまず間違いないと

考えております。残念ながら考古学だけでは、その勢力がどのルートからやってきたかということは、なかなかわからない。ただ実際には朝鮮半島と倭国との交渉・交易は、いわゆる対馬・壱岐ルートですね。朝鮮半島から対馬・壱岐、北部九州を経由して行われたことはまず間違いないと思います。信濃だから、日本海ルートで直接やってきた考える必要はないと思います。

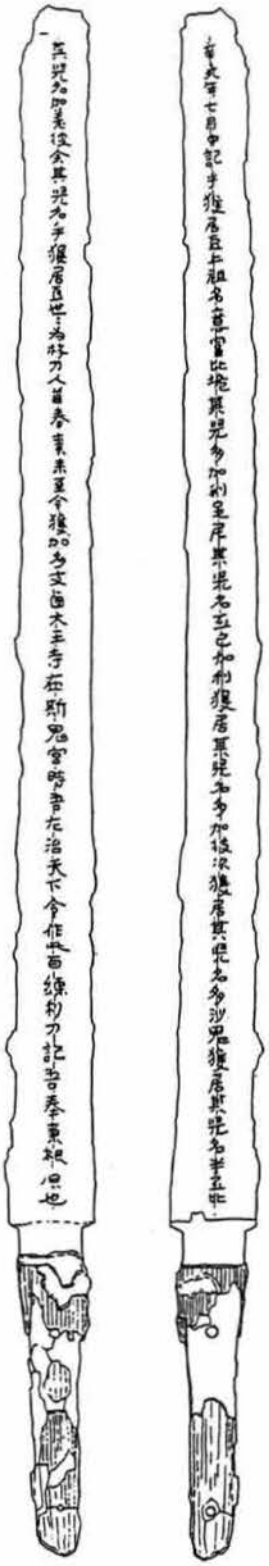
ただ重要なことは、今申しましたように、大室古墳群にある合掌形石室は、これはいろいろ意見はありますけれども、私は、基本的には百済系のものと考えていいと思っております。百済やその影響下にあった伽耶諸国が、積極的に馬具の生産技術もそうですし、それから、馬匹の生産技術を伝えたことは間違いないのではないでしょうか。このことは4世紀後半、高句麗の南下に対応して、百済の要請に応じて倭国が百済と同盟を結んで、朝鮮半島に出兵することになったという、当時の東アジアの国際情勢の大きな流れとも一致しています。



畿内における大型古墳の編年

稲荷山鉄剣とその銘文

稲荷山鉄剣とその銘文



1 釈文

（表）

辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名意富比垝其児多加利足尼其児名弖已
加利獲居其児名多加披次獲居其児名多沙鬼獲居其児名半弖比

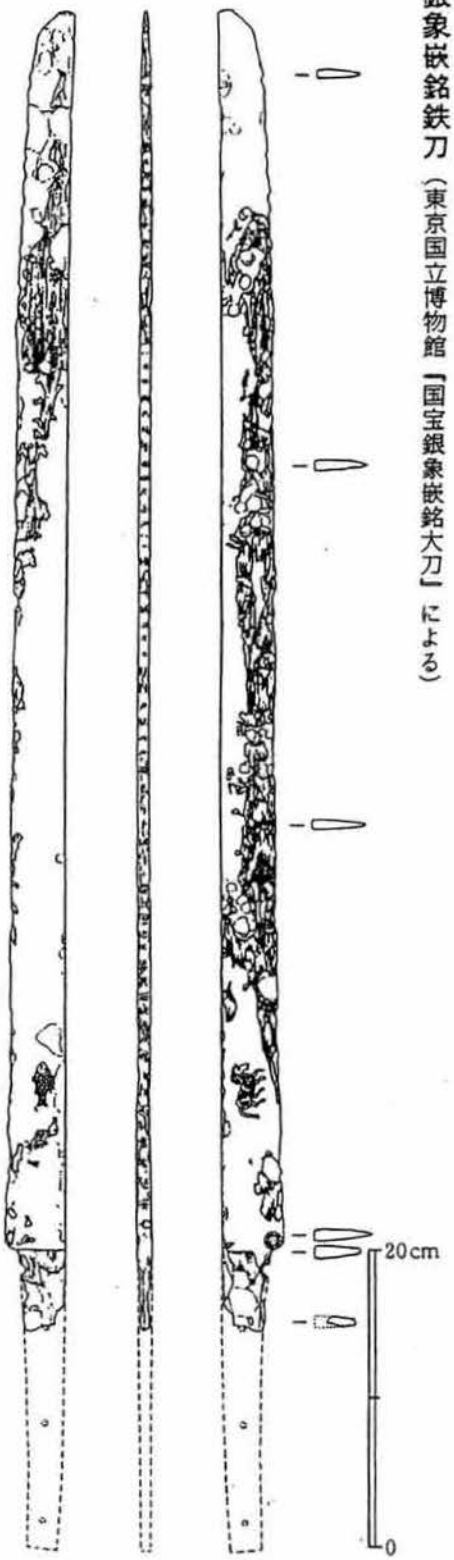
（裏）

其児名加差披余其児名乎獲居臣世々為杖刀人首奉事来至今獲加多支
鹵大王寺在斯鬼宮時吾左治天下令作此百練利刀記吾奉事根原也

2 訓読の一例

辛亥の年七月中、記す。ヲワケの臣。上祖、名はオホヒコ。其の児、（名は）タカリのスクネ。其の児、名はテヨカリワケ。其の児、名はタカヒ（ハ）シワケ。其の児、名はタサキワケ。其の児、名はハテヒ。

其の児、名はカサヒ（ハ）ヨ。其の児、名はヲワケの臣。世々、杖刀人の首と為り、奉事し来り今に至る。ワカタケ（キ）ル（ロ）の大王の寺、シキの宮に在る時、吾、天下を左治し、此の百練の利刀を作らしめ、吾が奉事の根原を記す也。



銀象嵌銘鉄刀（東京国立博物館『国宝銀象嵌銘大刀』による）

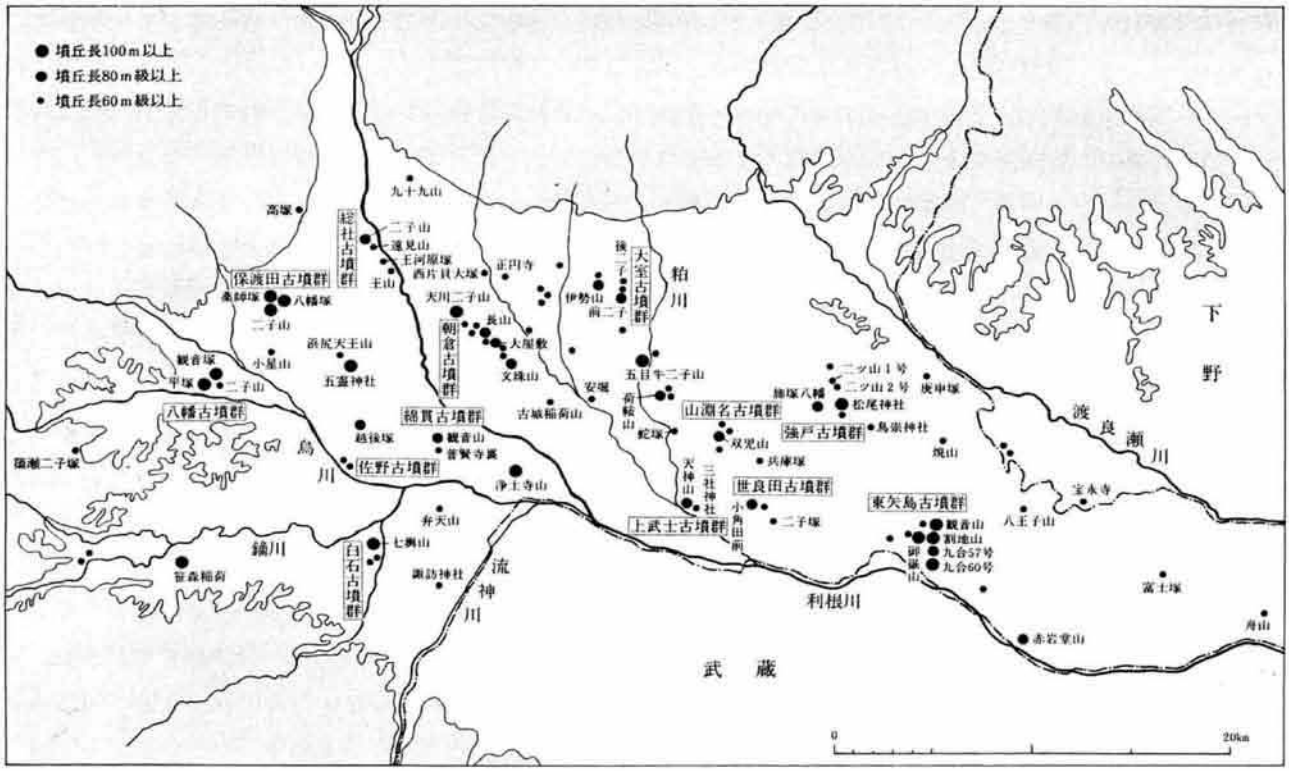
銀象嵌銘鉄刀銘文の釈文（東野治之氏による）

〔釈　文〕

台(治)天下獲□□□鹵大王世、奉事典曹人名无□(利カ)弓、八月中、用大鉄釜、并四尺廷刀、八十練、□(九カ)十振、三寸上好□(刊カ)刀、服此刀者、長寿、子孫洋々、得□恩也、不失其所統、作刀者名伊太□(和カ)、書者張安也

〔読み下し文〕

天の下治らしめしし獲□□□鹵大王の世、典曹に奉事せし人、名は无利弓、八月中、大鉄釜を用い、四尺の廷刀を并わす。八十たび練り、九十たび振つ。三寸上好の刊刀なり。此の刀を服する者は、長寿にして子孫洋々、□恩を得る也。其の統ぶる所を失わず。刀を作る者、名は伊太和、書する者は張安也。



上毛野における後期大型前方後円墳の分布

表1　関東地方の後期大型前方後円墳

（墳丘規模単位：m）

墳丘規模	60～79	80～99	100～119	120以上	計
上　野	64	17	15	1	97
下　野	8	5	2	1	16
常　陸	24	12	2	0	38
下　総	9	1	1	0	11
上　総	16	6	5	1	28
安　房	0	0	0	0	0
武　蔵	17	1	6	2	26
相　模	0	0	0	0	0
合　計	138	42	31	5	216

表2　畿内地方の後期大型前方後円墳

（墳丘規模単位：m）

墳丘規模	60～79	80～99	100～139	140以上	計
大　和	8	2	6	4	20
河　内	4	2	4	2	12
和　泉	0	0	0	0	0
摂　津	1	0	0	1	2
山　城	4	0	1	0	5
合　計	17	4	11	7	39

古代東国文化シンポジウム　基調報告

前二子古墳の二つの調査から　－明治・平成の発掘調査－

前　原　　豊（前橋市教育委員会副参事）

１　はじめに　みなさんこんにちは。前橋市教育委員会文化財保護課の前原です。今日は、後方に、前二子古墳から出土した資料を展示しました。

まず左前に置かれたものが前二子古墳から出土した実物の石見型埴輪（いわみがたはにわ・図20・21）です。石見型埴輪は王の杖を模したもので関西ではたくさん出土してますが、東日本では前二子古墳を含め数例しか出土していません。実物の後ろに復元した本場の奈良県石見遺跡や大阪府羽曳野市軽里北４号墳の石見型埴輪を展示してあります。これは数年前から活動を開始した前二子古墳石室復元市民プロジェクトに参加した市民の皆さんが復元制作したものです。

真ん中に明治 11 年に前二子古墳石室から出土した実物の土器や馬具を展示しました（図 12）。右側には前二子古墳で出土した須恵器小像付筒形器台のルーツを探るため、朝鮮半島南部の加耶地域の小像が付いた筒形器台２個体と東部の新羅地域の小像が付いた蓋と壺を復元しました。さらに福岡市羽根戸古墳や島根市金崎古墳、さぬき市川上古墳の筒形器台も比較できるように制作しました。

前二子古墳石室復元市民プロジェクトは毎年、一般の方々に参加していただき、前二子古墳から出土した品々の復元制作を通して古墳や考古学の興味を深め、モノ作りの楽しさを味わっていただく市民参加型の事業です。

平成 18 年度に前二子古墳出土の土師器や須恵器、平成 19 年度に f 字形鏡板（えふじがたかがみいた）や双葉剣菱形杏葉（そうようけんびしがたぎょうよう）などの馬具、平成 20 年度に珠文鏡（しゅもんきょう）とガラス玉類、平成 22 年度に国内外の筒形器台、平成 23 年度は前橋市山王町にある山王金冠塚古墳から出土した新羅系の青銅製冠の復元、平成 24 年度に石見型埴輪などの埴輪制作を毎年約 25 名の参加者とともに制作や学習を行ってきました。

私の今日の演題は前二子古墳の明治と平成の二つの時代の調査についてです。まず、前二子古墳の石室は明治時代の調査で開口されました。続きまして、白石先生のお話のあったように平成になって大室古墳群の整備を行い一般公開するために、史跡整備委員会が発足し、整備事業に伴う範囲確認調査を行いました。私は６年間にわたる調査を担当する機会が与えられました。調査は、平成３年に後二子、平成４年に前二子、平成５・６年に中二子、平成７・８年に小二子の調査を行ってきました。

２　大室公園と大室古墳群　大室公園は、東西１km、南北が 500ｍで面積は 37ha と非常に広大な公園（図 2）です。公園の西側に３つの大型前方後円墳と小規模の小二子古墳が南北に並んで存在しています。南から前二子、中二子、後二子（うしろふたご）と呼ばれ、前二子が 94ｍ、中二子が 111ｍ、後二子が 85ｍ、小二子 38ｍの大きさで６世紀の中で前二子、中二子、後二子、小二子古墳の順で変遷します。４基とも前方部を西に向けて東西方向に揃えて造られ、４基の中心軸が交差するあたりに、豪族居館である梅木（うめのき）遺跡があります。

梅木遺跡は調査の結果、堀の一辺が約 85ｍある面積 7200 ㎡を測る比較的規模の大きな豪族居館であることがわかりました。堀の底には６世紀初頭に榛名山から噴出した火山灰が積もっていたことから、５世紀後半に造られて６世紀初頭まで使われていたことが判明しました。時期的な検討から前二子古墳に葬られた人物との関係が考えられます。

梅木遺跡は、残念なことにすぐ東側に流れる桂川による氾濫で遺跡の主要な部分は流されてしまったため、細かなことはよくわかっていません。しかし、前二子に向いた西側に突出部が存在し、ここに複数の柱穴がみつかったことから、西に門が付くことがわかりました。

３　明治 11 年前二子と後二子の調査　前二子や後二子の石室探査の裏には明治政府が施策として実施した天皇制の復活を目的とした陵墓の全国調査がありました。この陵墓の全国調査は、明治４年２月に太政官布告として全国に通知され、群馬県は明治７年に、教部省に上毛野君・下毛野君の始祖とされる豊城入彦命（とよきいりひこのみこと）の陵墓として総社町にある総社二子山古墳の申請をしています。明治８年には教部省から豊城入彦命の墓として治定（じじょう）、管理者が置かれることとなりましたが、明治９年に地元のトラブルによって陵墓治定が自然解消のやむなきにいたっています。このことで、群馬県は大きな打撃に受けましたが、総社二子山古墳に代わってすぐに豊城入彦命の墓として注目をしたのが大室古墳群の前二子古墳でありました。

県庁に提出された文書には、地元の人が偶然に石室を見つけたように書かれています。しかし、本当は用意周到な計画のもとに実施した調査でありました。そのことは、根岸家に残された数々の文書から窺い知れます。また、克明な絵図面は美術の素養のある人物でなければとうてい描けないものでした。西大室村の国学者井上正香の子である井上真弓の手によって描かれたものです(図 5)。こういった計画の基で数々の記録を残した調査でしたが、結果的には陵墓の治定は受けませんでした。県の計画は失敗に終わった訳です。

ところで、前二子は豊城入彦命の墓と考えられました。豊城入彦命は崇神天皇（すじんてんのう）の第一皇子であり、『日本書紀』によりますと、崇神天皇は兄の豊城入彦命と弟の活目尊（いくめのみこと）に対して、共にやさしく優れた子であり、どちらを後継者とするか決めがたいため、それぞれの見る夢で判断すると伝えました。豊城入彦命は「御諸山（みもろやま）に登り、東に向かって槍や刀を振り回す夢を見た」と答え、活目尊は「御諸山に登り、四方に縄を張って雀を追い払う夢を見た」と答えました。その結果、弟の活目尊は領土の確保と農耕の振興を考えているとして王位を継がせることとし、豊城入彦命は東に向かい武器を振るったので東国を治めさせるために派遣されたといわれます。このように当時、群馬県の役人は、前二子を豊城入彦命墓とし、中二子を豊城入彦命の孫の彦狭島王（ひこさしまのおう）の墓、後二子を彦狭島王の子の御諸別王（みもろわけのおう）の墓と想定しました。調査によって、前二子と後二子の石室は開けられましたが、中二子の石室は明治の調査で見つかりませんでした。さらに平成の調査でも、電気探査方法や地下レーダー探査法などの科学的な方法も駆使したのですが、発見できませんでした。この石室開口のロマンは未来の研究者に引き継いでいきたいと考えています。

4　アーネスト・サトウの調査　県のもくろみは見事に失敗に終わりましたが、このニュースを聞きつけたイギリス外交官のアーネスト・サトウ(図9)が前二子を訪れました。その結果、前二子の成果を学術的に国内や世界に広めることができました。サトウは、調査の２年後である明治 13 年３月に前二子の調査に訪れます。サトウは、３月７日に前橋に着き、油屋旅館に立ち寄り、県の職員とともに下大屋町にある産泰神社に立ち寄り、帽子を被る埴輪に興味を抱き、トラベリングノートにスケッチ(図 11)を描き残しています。その後大室三古墳を見学し、宿舎に入ります。翌３月８日には、遺物や古墳のスケッチと測定を絵師加藤竹斎(図 10)とともに自らも行いました。サトウは横浜に帰ってから調査報告をまとめ、講演を行い論文として「上野地方の古墳群」『アジア協会紀要』1880 年第 8 巻 3 号(図 8)に発表しました。この論文は東京人類学会の創立者の一人となった若き白井光太郎にも多大な影響を与えています。また、朱いベンガラとガラス玉のサンプルをイギリス本国に送り、科学分析を行っています。今でこそ出土品の科学分析は盛んです。残念ながら、その後日本国内では長い間、科学分析は実施されませんでした。

また、地元では明治 11 年 4 月から明治 12 年 6 月までの 1 年間以上も前二子や後二子石室出土品の一般公開が催されます。群馬県立文書館に寄託された根岸孝一家文書の中に明治 11 年『古墳神器拝礼人名誌』（図 7）があります。これは厚さ 6cm の横長帳で幾冊かを麻で合綴したものです。内容は、前二子古墳の石室から発掘された古器物を見学に各地から訪れた人々の住所、氏名、日付、年齢などの記録で、これにより古墳発掘の関心の広がりを推測することができるものです。記録された 5179 名のうち地元の勢多郡が最も多く、続いて山田、新田、群馬郡となっています（図 6）。県外では埼玉県、次いで栃木県、続いて関東各県となっており遠いところでは石川、愛知、滋賀県の各県から見学に訪れています。

5　平成４年の前二子古墳調査　前二子古墳の史跡整備に伴う範囲確認調査は平成４年に実施いたしました。調査方法は、古墳を全部掘るのではなく、保護しながら古墳を解明する調査でした。方法としては、1/250 の測量図を基にどこを調査すれば効率よく古墳を解明できるか検討しトレンチ調査を用いました。トレンチ調査は幅２ｍで古墳の長軸方向とそれに直交する方向、さらには 45 度に 18 本の溝を入れる方法で調査を行いました（図 3）。古墳の保護や保存を第一の目的としながら必要最小限の調査で古墳の形状・構造・時期を解明できるようにし、綿密な調査で遺構面を検出することに専念し、掘り過ぎがないように細心の注意を払いました。

調査により前二子古墳は周堀の外側にも堀が巡ることがわかりました。２ｍから４ｍと狭い堀であったため外堀とは呼ばずに外周溝と呼びました。古墳の大きさを外周溝で計測した場合は全長 148mとなります。外周溝と内堀の間に堤があります。この堤は 10mと広い幅を持っています。墳丘は２段で造られた前方後円墳であることが分かりました。１段目は地山を削り出した上に盛り土を行なっています。２段目は盛り土によって造られていることがわかりました。墳丘の全長は 94mで前方部の長さが 33mと中二子古墳と比べると短いことがわかります。墳丘の高さは 14mですが、台地の突端に造られているためより高く感じます。

古墳全体を覆う葺石は２段目に限って葺かれていました。中二子古墳は１段目と２段目の両方に葺石が見られ、後二子古墳の場合は葺石をまったく使っていないというように古墳によってそれぞれ異なっています。

円筒埴輪列は外堤と墳丘１段目テラス、２段目の墳頂部に並べられていました。外堤の円筒埴輪列は外周溝からも破片が見つかっているため内外の縁辺に２列あったことが想定できます。墳丘１段目の円筒埴輪列の残りはよく平坦面の縁辺に隙間なく設置されていました。一つの埴輪の大きさは、直径が 45cm で高さ 60 cmの４条突帯の大型品です。

形象埴輪は原位置では出土しませんでしたが、人物や馬、盾、靫、家、盾持人、大刀、矛、蓋（きぬがさ）がみつかっています（図 12）。この中で盾形埴輪は、発掘当時、石見型盾形埴輪と呼ばれてましたが、現在では石見型埴輪と呼ばれています。この埴輪の分布は近畿地方に中心があるもので東日本では珍しいものです。前二子古墳からは数多くの石見型埴輪がみつかり、円筒埴輪列の外側に規則的に配置されていました。このほか前方部の西の外堤からも人物埴輪の破片が見つかったことから人物埴輪を配置していたと思われます。

石室入り口は一般的に１段目のテラスにあります。しかし、前二子古墳の石室は、１段目の斜面に開口している珍しいものです。地形を選定した結果ここに石室を造ったものと思われます。今回の調査で、石室前面部の地山を削り出して造ったテラスがあることがわかりました。このテラスは石室から２ｍ下がった斜面部を削り出して造られたもので、幅１ｍで長さが９ｍあります。このテラス周辺に柱穴が 20 個近く見つかり、このうち４個の柱穴はテラスに伴うようです。テラスや柱穴は儀式に使われた施設と思われます。

石室は東国に導入された初期横穴式石室の特徴である狭くて細長いもので長さが 13mあります。また、石室の基盤は地山をほとんど削らない状態で石室の石を積み上げており、入口部から奥に向かってやや高くなる地形のままに石室を造っています。基盤が軟弱な場合は、土を入れ替えたり叩き締めたりするのですが、そういったことはしていませんでした。すでに明治 11 年に開口されていたため 100 年経過する中で、厚さ１ｍほどの土が積もっていました。この土を排除した結果、見事に加工された凝灰岩製の切石が玄室全面と羨道の一部に発見することができました。石は大きいもので幅 1mで長さ 1.5ｍで、中くらいのものが１ｍ四方、小さいものが幅 0.5mで長さ１ｍでした。玄室の奥には２枚の立てて置かれた仕切り石があり、それを挟んで大きな床石が２枚組み合わされて配置され、それに続く玄室内には中サイズの石を８枚、羨道部には小サイズの石を 10 枚を使い、合計 20 石で構成されていました。このほかに墳丘から２石出土したことから羨道部の敷石がまだ続いていたようです。凝灰岩製の床石の上には、玉石が敷かれていましたが、明治の調査でほとんど取り除かれていました。

入口には羨門と呼ばれる幅0.8mで高さ1.5mの立石があり、玄室の入口には玄門と床面に梱石（しきみいし）、天井に楣石（まぐさいし）が設置されています。また、埋葬が終わった段階で玄室の入口を凝灰岩製の扉石（とびらいし）で塞いだのです。このように石室をみた場合に、初期の横穴式石室であるのにもかかわらず、ずいぶんと凝った造りがみられます。県内の初期横穴式石室と比較した場合でも、これほどまでに凝った造りの石室は存在しません。また、石室の全面に酸化第２鉄であるベンガラを用いて真っ赤に塗られていました。特に床面には鮮明な朱い色彩が残っていました。床石の写真（PL.3）の中央部分が持ち上がっているのは明治の調査の時に、どうも床石をテコで持ち上げて下部を調べたようです。持ち上げたものを、再び元通りにできなかったようです。副葬品が更に床石の下にもないかどうか確かめた結果といえます。

また、石室の壁面を観察した結果、鉤状鉄製品（かぎじょうてつせいひん）が２カ所に差し込んだままで見つかりました。さらに平成 17 年に右島さんと再び観察した結果3カ所の差し込みを確認することができました。

副葬品は明治の調査でほとんど取り上げが終わってましたが、石室の土をふるいにかけたところ、水晶製の丸玉、ガラス製の黄色や緑色小玉、青ガラスの丸玉、銀製の空玉、碧玉製の管玉や金製耳飾などの装身具が 197 点もみつかり、馬具や鉄鏃、土器類が新たに出土しました（PL.5）。

６　まとめ　前二子古墳の石室の特殊性についても日本国内の古墳との比較では解決できない点も多く含んでいます。後に発表する柳澤先生は韓国の松鶴洞１号墳の石室と前二子古墳の石室が共通するという見解を発表しておられますので、柳澤先生の発表に譲りたいと思います。

そこで、前二子古墳の出土品から国内さらには半島との関係を見渡してまとめにしたいと思います。まず、前二子を特徴付ける遺物として石見型埴輪があげられます。関西地域を中心に瀬戸内、北九州にかけて分布する製品（図 22）で、埴輪のほか石製品、木製品もあります。近年、朝鮮半島では木製品が発見されており注目を集めています。

東国の 5 世紀後半から 6 世紀の古墳で石見型埴

輪は群馬県内では、前二子古墳をはじめとして安中市琴平山古墳、富岡市一ノ宮４墳、太田市西長岡東山３号墳の４古墳、栃木県では小山市飯塚44号墳の１古墳の計５古墳から見つかっているにすぎません。その中でも前二子のものは大型優品といえます。他の古墳のものは細身の埴輪で構成されています。また古墳の規模でも前二子が 100ｍ級の前方後円墳ですが、他は50ｍ級の中規模の前方後円墳です。このことは、畿内の石見型埴輪型を出土する古墳も同様で中規模古墳で多く採用され、大型古墳ではほとんどみつかっていません。また、東国の古墳では前二子古墳以外は６世紀中葉以降のものであって、６世紀初頭に石見型埴輪を受け入れるのは前二子古墳だけです。今後、調査が進めば類例は増加すると思いますが、おそらく石見型埴輪の導入にあたって、前二子の被葬者が主導的な役割を果たしたことが考えられます。

次に前二子のを特徴づける遺物として、20点を超える鉤状鉄製品（図25）をあげることができます。現在、国内では６世紀中葉以降の奈良県藤ノ木古墳や高崎市綿貫観音山古墳、観音塚古墳などの大型古墳から見つかっています。また柳澤先生が紹介する韓国松鶴洞１号墳（図26）からも見つかっています。このように国内や韓国の代表的な古墳でしか採用されていない鉤状鉄製品を６世紀初頭から採用した古墳として位置付けができます。

また、かつて重要美術品に指定された小像付筒形器台の原形は朝鮮半島南部の加耶にあります。加耶では200個体近い筒形器台が古墳から出土しています。現在、日本国内では 30 例くらいしかないかと思います。

この中で前二子古墳のように小像がつくのものは日本と韓国をあわせても 10 例にも達しません。小像が付く器台は加耶においても数例しかない状況です（図29）。５～６世紀に土器に小像を付ける事例は、朝鮮半島の東部にある新羅（図27・28）からたくさん出土しています。加耶の筒形器台に付けられた小像も新羅の影響を受けたものであり、福岡市羽根戸古墳や島根市金崎古墳の筒形器台は加耶と新羅が融合した結果と考えられます。福岡市や島根市の古墳の筒形器台は５世紀後半であり前二子の筒形器台よりも年代が先行するものです。朝鮮半島起源の筒形器台や小像が九州、山陰、四国、関東にポツンと存在することは伝播した結果とは考えにくいため、それぞれの地域で加耶や新羅との交流の結果と思われます。

明治 11 年出土品の中に捩り環頭大刀柄頭（ねじりかんとうたちつかがしら・図17）があります。絵図にも残されていることから前二子古墳のものと思われます。捩り環頭大刀は日本国内特有の刀であります。5 世紀末に出現した可能性が高いとされ、大阪府峯ケ塚古墳や奈良県藤ノ木古墳などのように、大王やそれに準ずる古墳からも出土していることから捩り環頭大刀をヤマト政権との政治的つながりを示す威信財として評価されています。

6 世紀前半には畿内、滋賀、福井、岐阜、三重県に多く分布（図18）します。また、大規模古墳よりも中規模古墳からも多く出土する傾向があります。このように捩り環頭大刀は文献にみられる継体大王との関連地と一致した分布する特異な大刀といえます。

また前二子古墳から出土した馬具の一つである双葉剣菱形杏葉（図13・14）も継体大王との関連地と一致した分布をみせるものです。現在、国内から 20 例くらいしか出土しておりませんが、その分布も福井に特に多くみられ、次いで大阪、奈良、島根、群馬に分布をみせています。また、双葉剣菱形杏葉も韓国松鶴洞１号墳から出土しています。

このほかに金製耳飾（図15）も半島との関係が大いに気になる製品です。おそらく耳環には垂れ飾りがあったことが推定でき、慶州皇吾里古墳（図16）のようなものでなかったかと推定されます。

以上のように石室の特徴もさることながら多くの出土品に前二子古墳の特殊性を読み取ることができます。朝鮮半島との関連する文化的要素を多く含んでおり、しかも時代の最先端の情報をいち早く取得でき、深くヤマト政権との関わりを持っていた首長であったことがわかります。

予定していただいぶ時間も超過していますので、これで終わりにしたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

【参考文献】

横浜開口資料館 1988『アーネストサトウ』有燐堂
前橋市教育委員会 1993『前二子古墳』
外池昇 1997『幕末明治期の陵墓』吉川弘文館
国立金海博物館 1999『加耶の器台』通川文化社
小山市教育委員会 1999・2001『飯塚古墳群Ⅲ』遺構・遺物編
国立慶州博物館 2001『新羅黄金』
上中町教育委員会 2005『大谷古墳』
東亜大学校博物館 2005『固城松鶴洞古墳群』
和田一之輔 2006「石見型埴輪の分布」考古学研究第60巻第3号
新山保和 2008「前二子古墳の石見型埴輪」『群馬県内の器財埴輪Ⅱ』群馬県古墳時代研究会
前原　豊 2009『東国大豪族の威勢・大室古墳群』新泉社
大阪府立近つ飛鳥博物館 2010『継体大王の時代ー百舌鳥・古市古墳群の終焉と新時代の幕開けー』
伊藤雅文 2013「馬具」『若狭と越の古墳時代』有山閣
栃木県教育員会 2013『摩利支天塚・琵琶塚古墳と飯塚古墳群ー古代下野国はここからはじまったー』

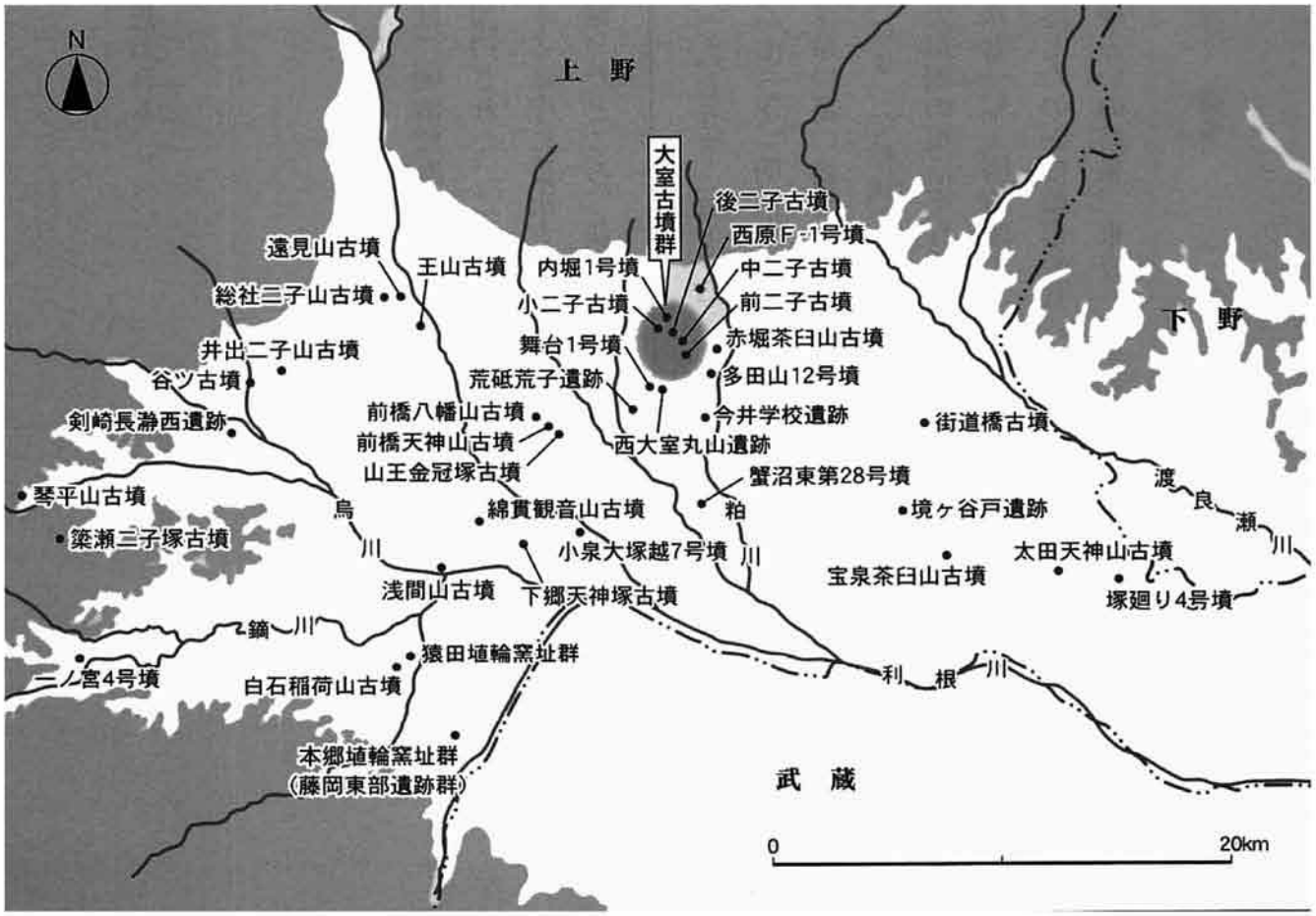


図1 大室古墳群と周辺の遺跡

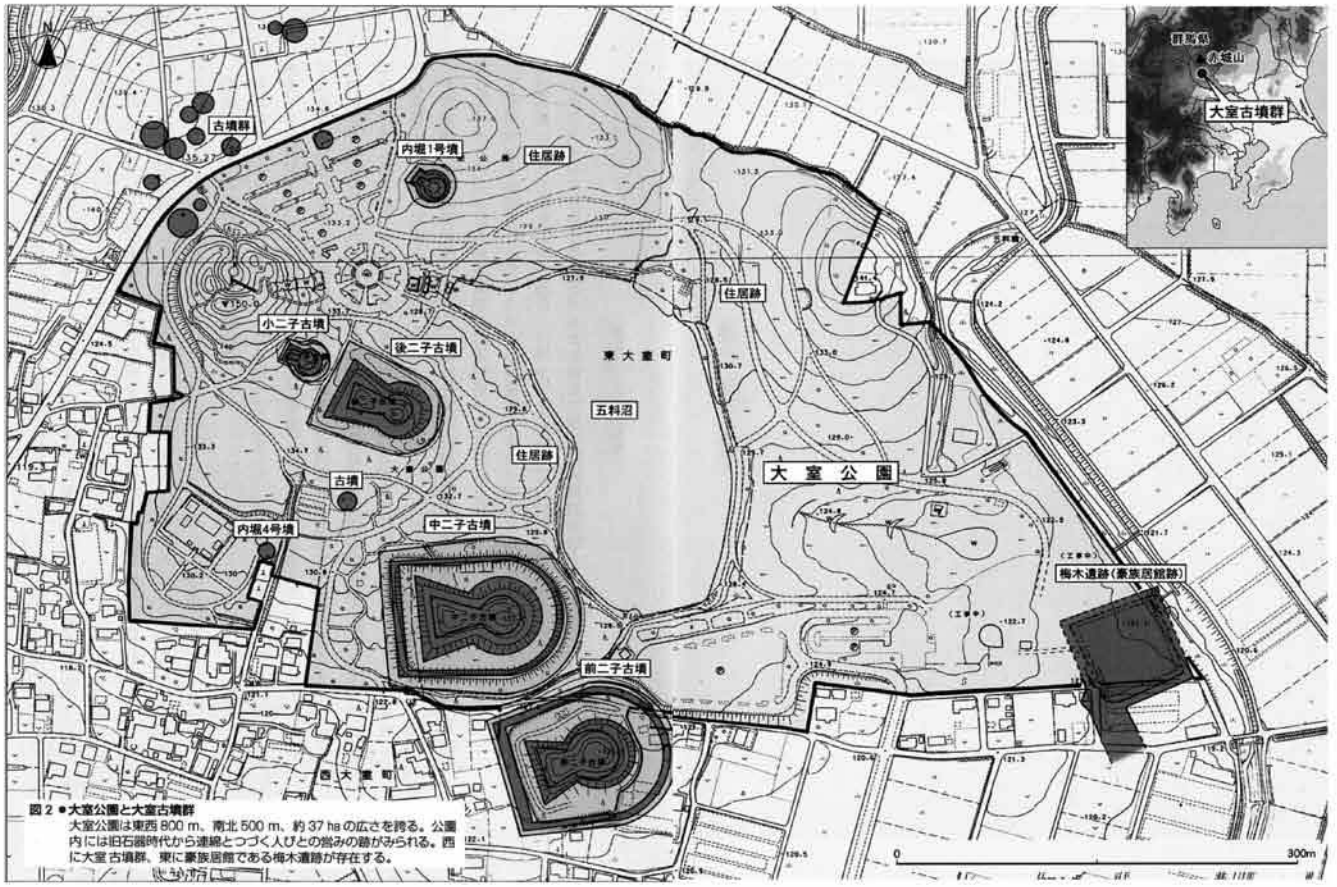


図2 ●大室公園と大室古墳群
大室公園は東西 800 m、南北 500 m、約 37 ha の広さを誇る。公園内には旧石器時代から連綿とつづく人びとの営みの跡がみられる。西に大室古墳群、東に豪族居館である梅木遺跡が存在する。

図2 大室古墳群と大室公園

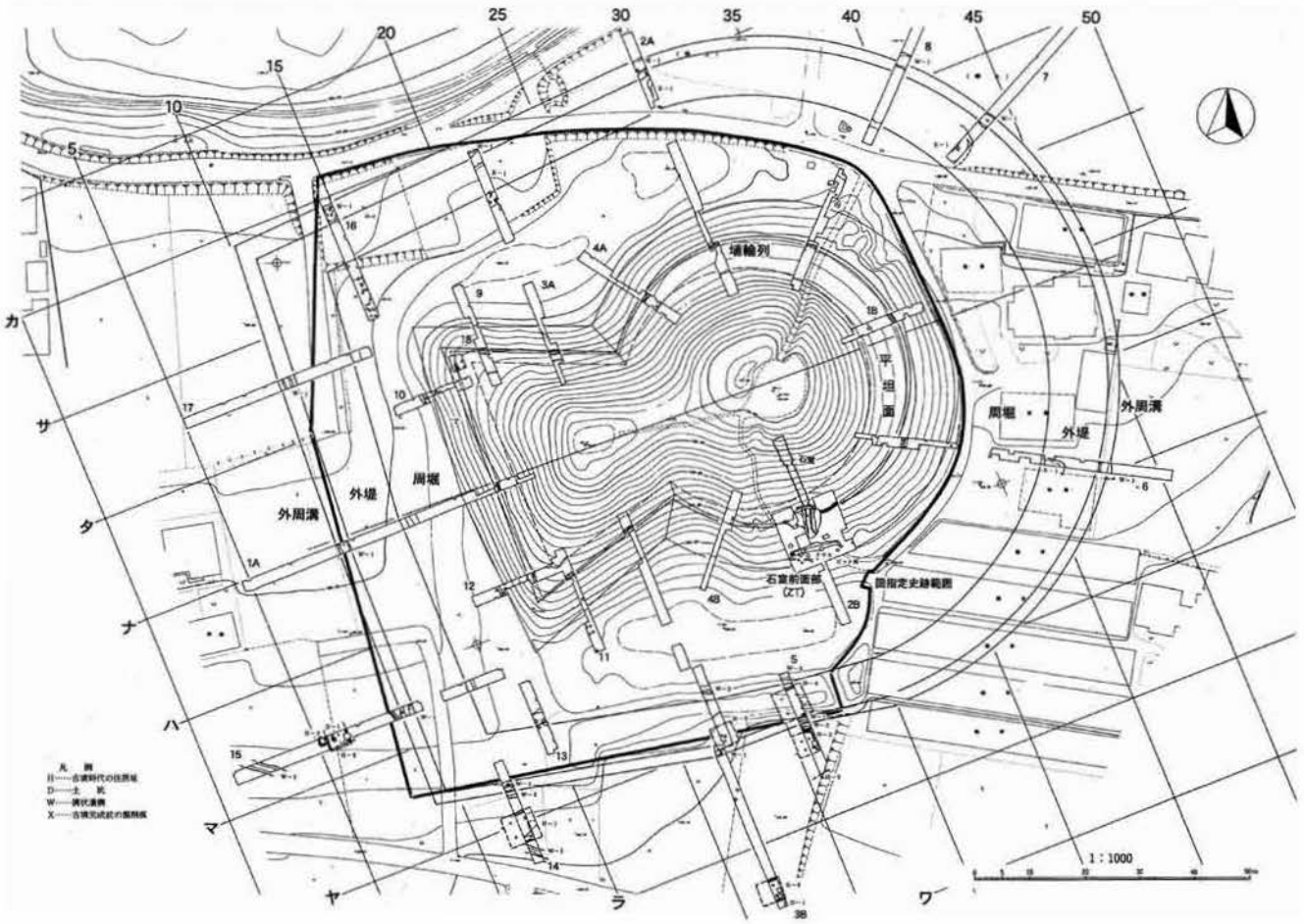


図3 前二子古墳の調査区

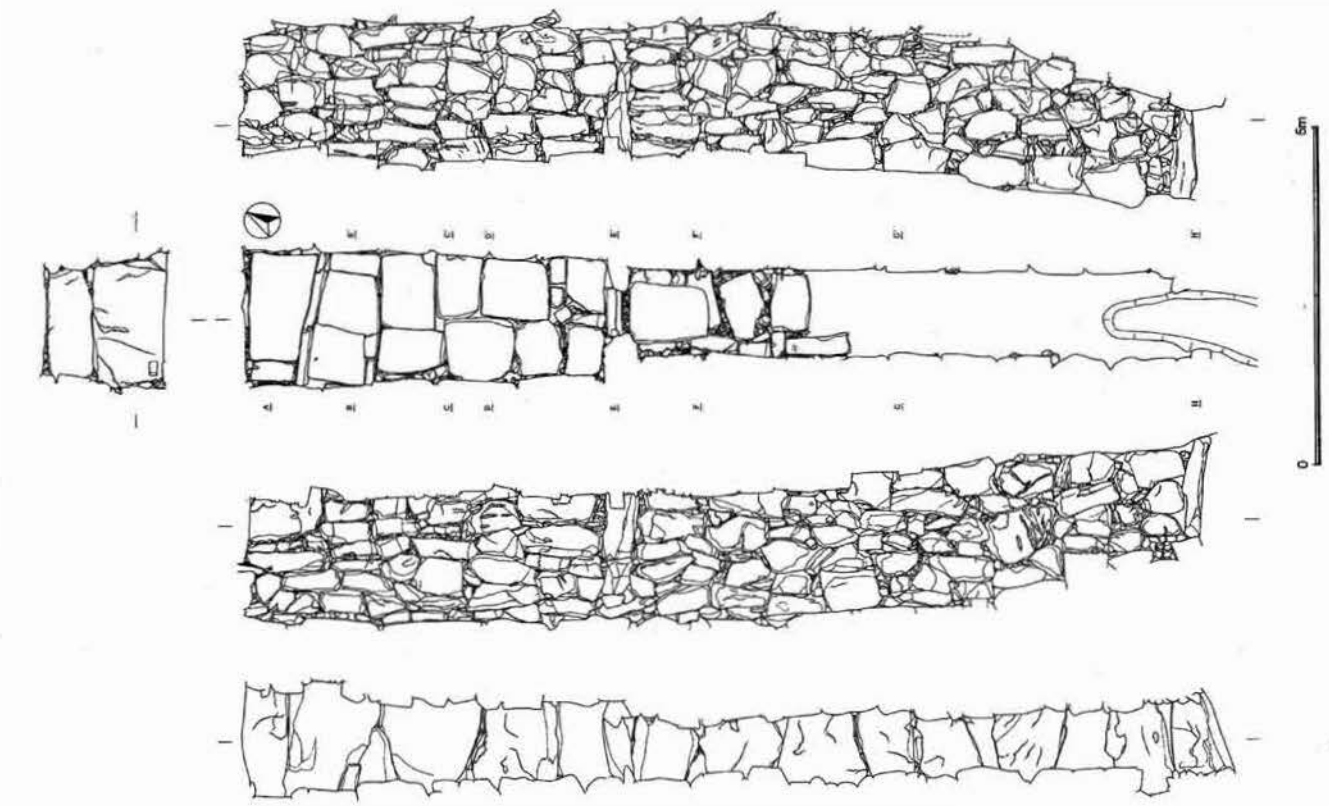


図4 前二子古墳の石室

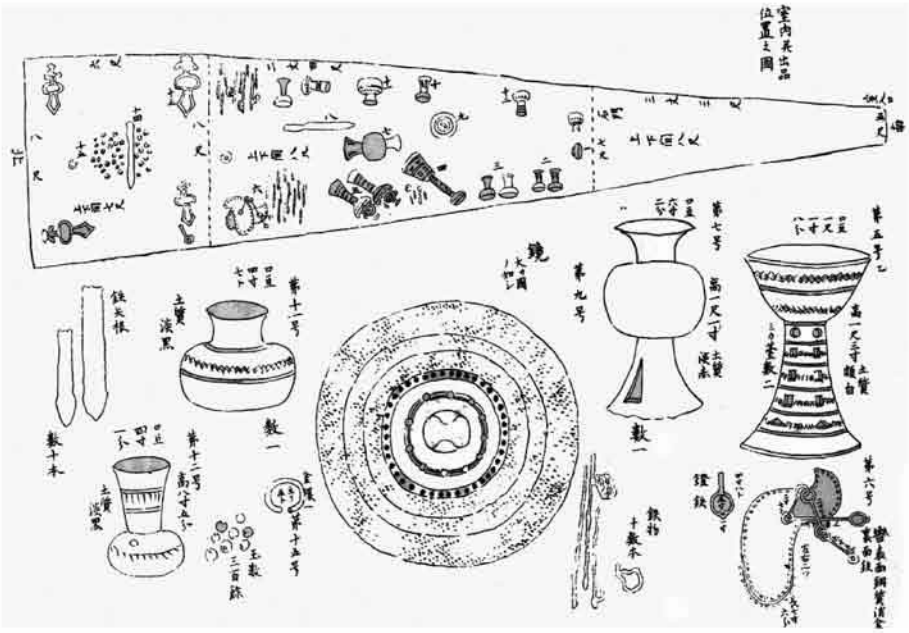


図5『古制徴証』に描かれた前二子古墳石室と出土遺物

（明治11年４月～12年６月）

県内		県外	
前橋	160	埼玉県	319
高崎	16	栃木県	162
群馬郡	262	茨城県	5
勢多郡	1,836	千葉県	2
片岡郡	0	神奈川県	7
那波郡	282	東京都	17
碓氷郡	32	山梨県	2
甘楽郡	40	長野県	14
多胡郡	14	新潟県	13
緑埜郡	1	福島県	2
佐位郡	1,081	石川県	3
利根郡	41	愛知県	1
吾妻郡	13	滋賀県	1
山田郡	355	小計	548
新田郡	272	合計	5,179名
邑楽郡	47		
不明	179		
小計	4,631名		

図6 前二子古墳古器物見学者一覧

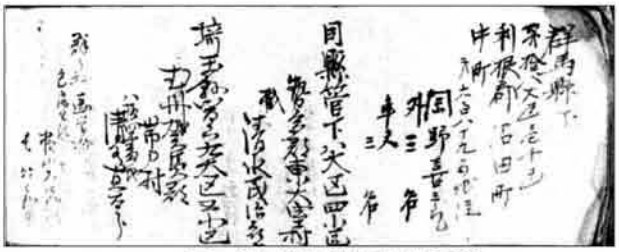
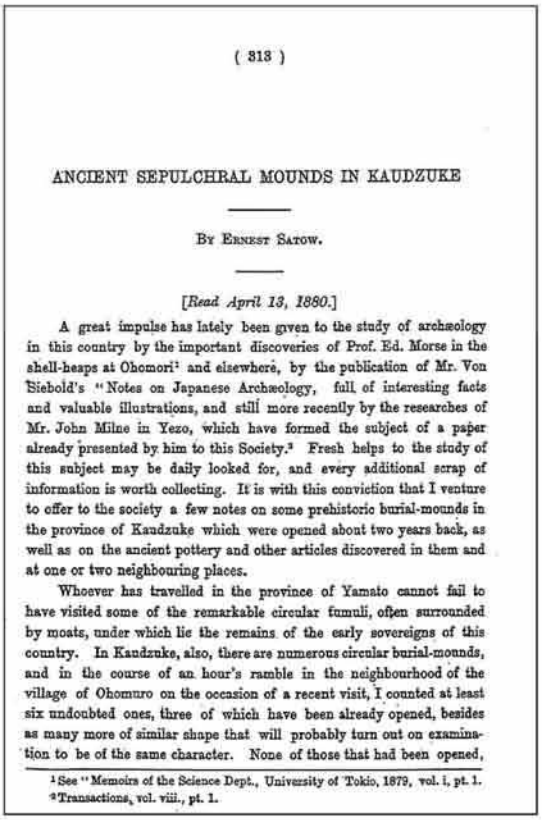


図7『古墳神器拝礼人名誌』

図9 大室を訪れた英国外交官
アーネスト・サトウ（1843-1929）



(313)

ANCIENT SEPULCHRAL MOUNDS IN KAUDZUKE

By Ernest Satow.

[*Read April 13, 1880.*]

A great impulse has lately been given to the study of archæology in this country by the important discoveries of Prof. Ed. Morse in the shell-heaps at Ohomori[1] and elsewhere, by the publication of Mr. Von Siebold's "Notes on Japanese Archæology, full of interesting facts and valuable illustrations, and still more recently by the researches of Mr. John Milne in Yezo, which have formed the subject of a paper already presented by him to this Society.[2] Fresh helps to the study of this subject may be daily looked for, and every additional scrap of information is worth collecting. It is with this conviction that I venture to offer to the society a few notes on some prehistoric burial-mounds in the province of Kaudzuke which were opened about two years back, as well as on the ancient pottery and other articles discovered in them and at one or two neighbouring places.

Whoever has travelled in the province of Yamato cannot fail to have visited some of the remarkable circular fumuli, often surrounded by moats, under which lie the remains of the early sovereigns of this country. In Kaudzuke, also, there are numerous circular burial-mounds, and in the course of an hour's ramble in the neighbourhood of the village of Ohomuro on the occasion of a recent visit, I counted at least six undoubted ones, three of which have been already opened, besides as many more of similar shape that will probably turn out on examination to be of the same character. None of those that had been opened,

[1] See "Memoirs of the Science Dept., University of Tokio, 1879, vol. i, pt. 1.
[2] Transactions, vol. viii., pt. 1.

図8 アーネストサトウ著「上野地方の古墳群」
『日本アジア協会紀要』第8巻第3号1880

図10 サトウに同行した絵師・加藤竹斎によって描かれた小像付筒形器台

サトウ「トラベリングノート」スケッチ図

図11 サトウによってスケッチされた前橋市下大屋町産泰神社の人物埴輪

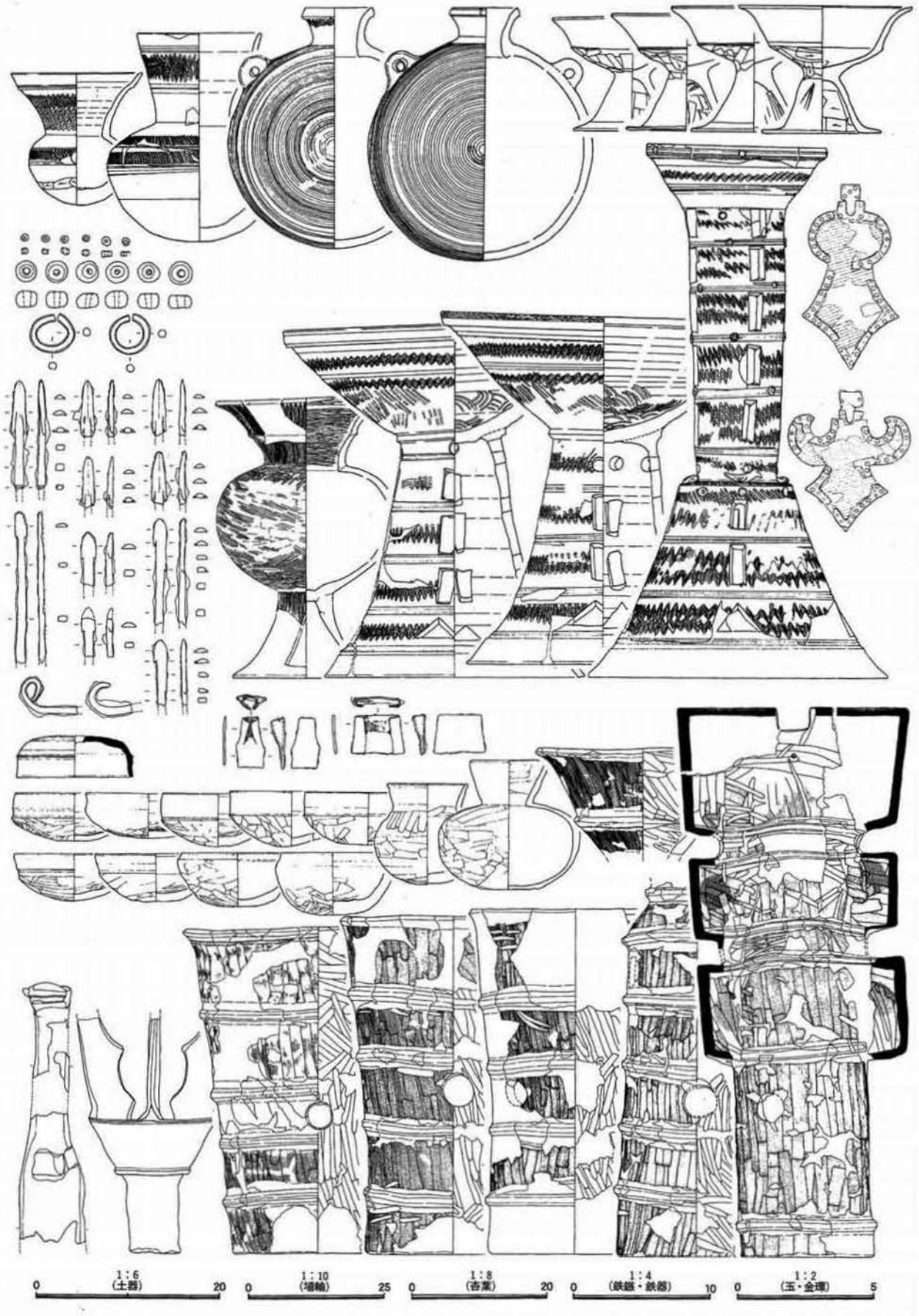


図12 前二子古墳の出土遺物

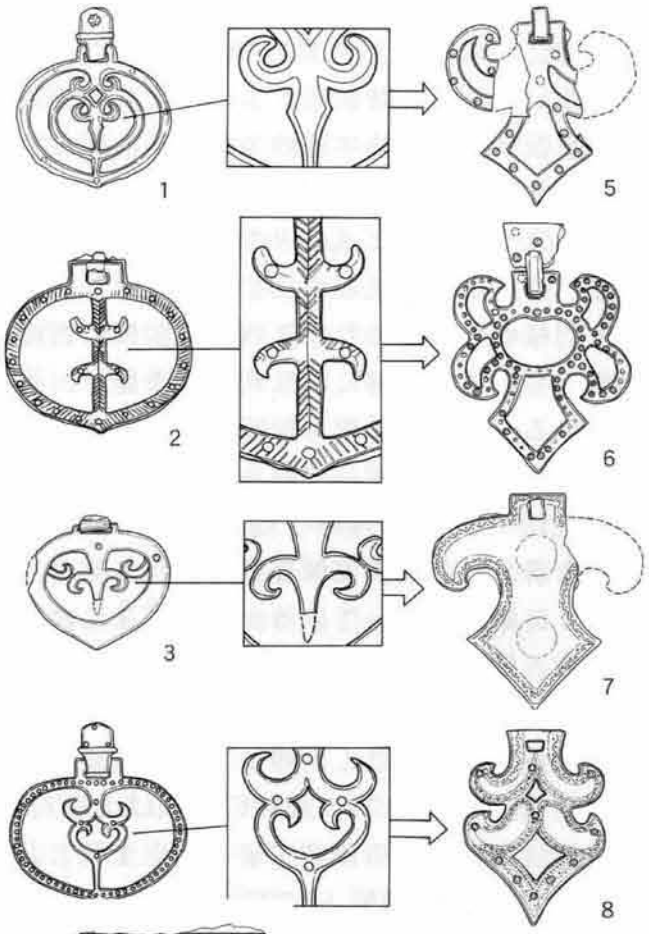


図13 心葉形杏葉と双葉剣菱形杏葉(橋本英将2005より)

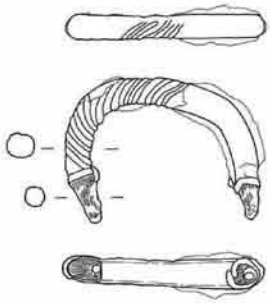


図17 振り環頭大刀柄頭

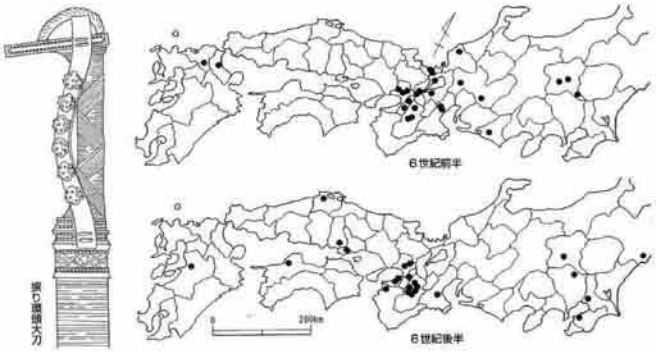


図18 振り環頭大刀の分布(よみがえる継体王朝2005より)

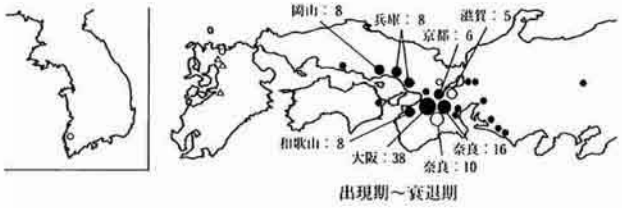


図22 石見型製品の分布(和田2006より)

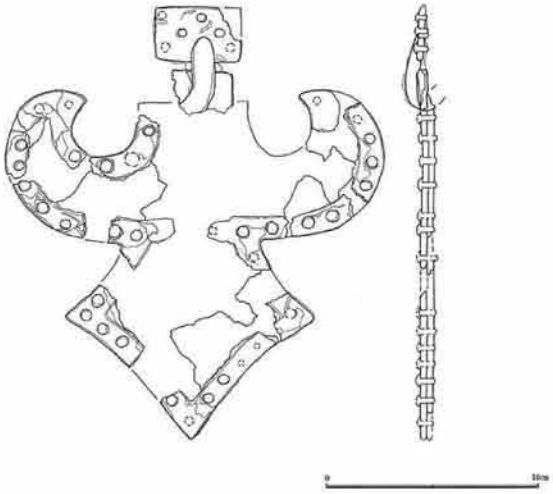


図14 前二子古墳出土双葉剣菱形杏葉

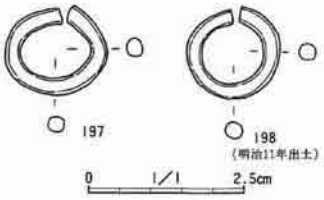


図15 前二子古墳出土の金製耳飾

図16 慶州皇吾里の金製耳飾(新羅黄金2001より)

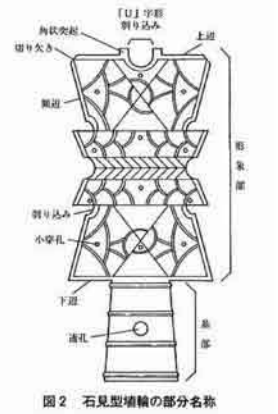


図19 石見型埴輪の部分名称(和田2006より)

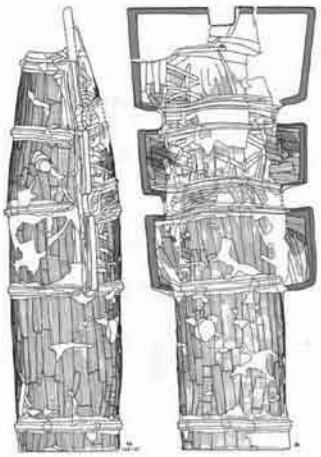


図20 前二子古墳の石見型埴輪

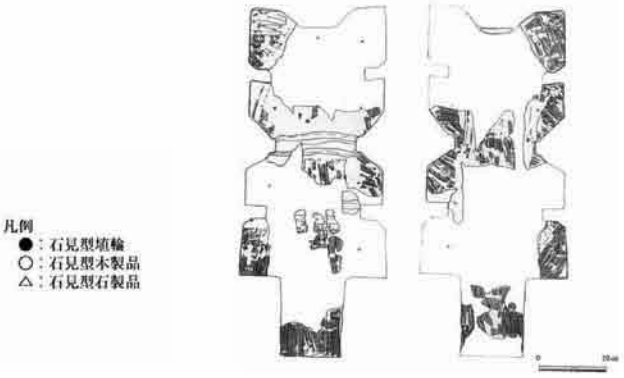


図21 前二子古墳の石見型埴輪(新山保和2008より)

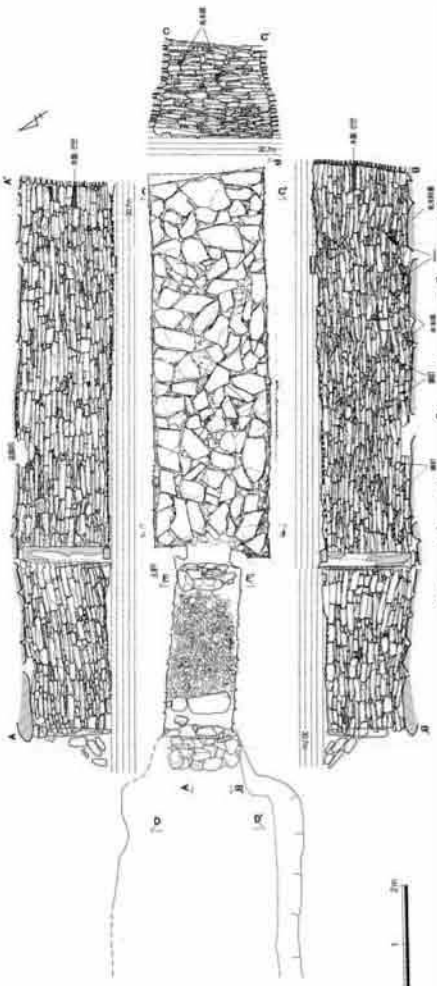


図23　松鶴洞1号墳1B-1石室

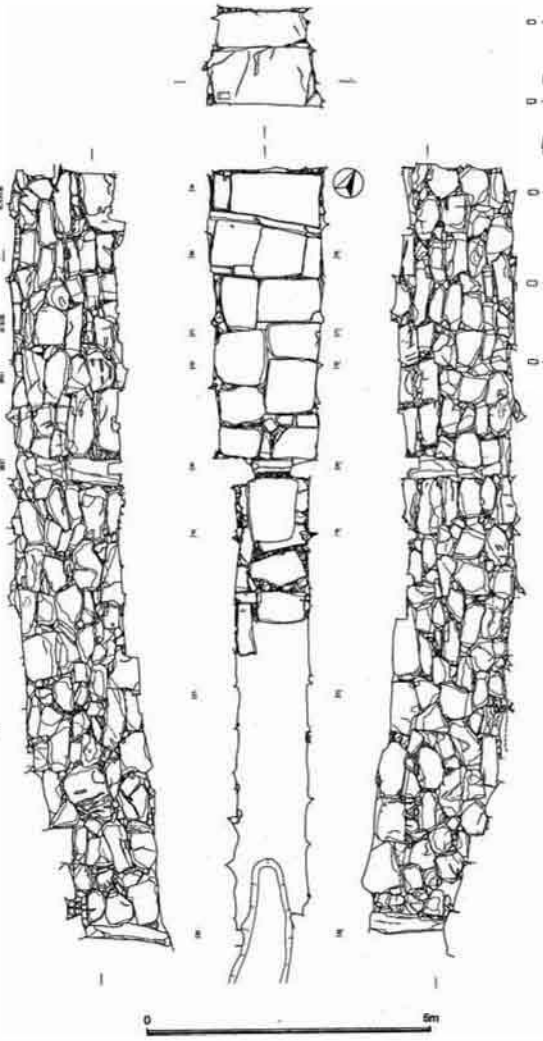


図24　前二子古墳の石室

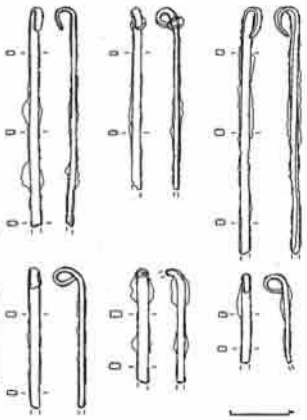


図25　前二子古墳の
鉤状鉄製品

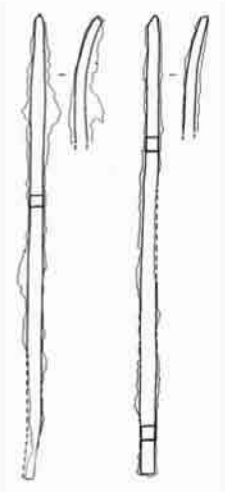


図26　松鶴洞1号墳1B-1
石室の鉤状鉄製品

図27　韓国慶尚北道慶州市月
城路ka-11-1号墳の装飾付高
杯蓋（黄金の国・新羅2004より）

図28　韓国慶尚北道慶州市鶏
林道16地区30号墳の装飾壺
（黄金の国・新羅2004より）

図29　韓国釜山市福泉洞32号墳の装
飾付筒形器台（伽耶文化展1992より）

図30　前二子古墳の装飾筒形器台

古代東国文化シンポジウム　基調講演①

前二子古墳の頃の東国
－上野地域を中心とした初期横穴式石室の様相とその特徴－

右　島　和　夫
（公益財団法人・群馬県埋蔵文化財調査事業団理事）

こんにちは、右島と申します。よろしくお願いします。

私の方からは、前二子古墳が造られた時期の上毛野地域（現在の群馬県の主要部分に近い）について、東国（関東地方）の中の一地域という観点も踏まえて検討してみたいと思います。

1　前二子古墳の概要　前二子古墳は、上毛野地域さらには東国の中でも最も早い段階に横穴式石室が採用された古墳の一つである点に最大の特徴があります。その場合、前二子古墳と同様の前方後円墳に採用されている事例も上毛野地域には多く指摘できます。また、これらの次位の階層にも及んでいることも確認できます。そこで、おれら初現期の横穴式石室の採用のされ方、構造的特徴、さらには時代背景について具体的にお話しをさせてもらいたいと思います。これ以降は、呈示します実際の写真を見ながらお話を進めさせていただきたいと思います。

図１は、前二子古墳の墳丘を南東側から望んでいるところです。東西を主軸とし、東側を後円部とするその中心に横穴式石室があります。ちょっと注意していただきたいのは、墳丘が２段構造になっており、石室へは、その１段目を断ち割るように横にずうっと入っていくという構造になっています。石室入口の左右は各一枚の板状の石材を縦位に据えているのが特徴的です（図２）。

羨道を奥へ進むと埋葬部である玄室の入口の部分になります。調査時には手前側に倒れていた板石を起こして、玄室を閉じる本来の姿に復元的に戻しました。その閉塞石は、羨道最奥部の側壁面から石室内側に突出する門柱状の玄門に寄せ掛けるようになっています（図３）。

この閉塞石を外すと、玄室の埋葬空間が見えてきます。その奥寄りの床面には加工した板状の石材を起こした状態で据えて前後に区切っています。その奥側に遺骸は安置されていました。壁面上半部には、適当な間隔をあけて棒状の先端を折り曲げた鉤状鉄製品（図４・５）が差し込まれていました。おそらく古代中国では垂帳と呼ばれている幕状のものが吊り下げられていた可能性があります。これに近いものが韓国公州市の百済武寧王陵でも確認されています（図６）。

現在、玄室床面には、先ほど紹介された市民プロジェクトで復元制作された多くの須恵器も置かれています。この須恵器が、前二子古墳の築造時期を考える上では大きな手がかりになります（図７）。

それらの実物が、今回こちらに展示されています。これらの土器ですが、日本列島では、５世紀初め頃に朝鮮半島から近畿地方に伝えられ、組織的な生産が始められます。今の大阪府の堺市の周辺一帯に陶邑古窯跡群と呼ばれている大窯跡群があり、そこで生産された須恵器の技術的影響が全国に及んでいきます。そのため、この窯跡群出土の須恵器の時期的な移り変わりの特徴は、上毛野地域出土の須恵器の場合にも、大いに参考になります。

これに照らし合わせると、前二子古墳の須恵器は、おおよそ６世紀初頭に流行した、そういう須恵器になります。これがひとつ前二子古墳を考えていく上で、年代的な目安になるかと思います。それで、午前中の白石先生の御講演にもありましたが、東国とヤマト王権の本拠地である畿内との繋がりが、非常に強くなってくると言う意味では、５世紀後半の時期（雄略朝）がポイントになってくると言ってもよいかと思います。それから見ると、前二子古墳の時期は、その少し後ということになります。直接、前二子古墳の時期に入っていく前に少しその前の段階を見て、その上で肝腎の前二子古墳の時期へと入っていきたいと思います。

2　渋川市金井東裏遺跡　これは、見慣れた写真かと思いますが、渋川市金井東裏遺跡で、６世紀初頭の榛名山噴出物層の直下から見つかった甲冑着装成人男性の発見時の様子です（図８）。今も調査進行中で、同じ火山噴出物層下に広がる歴史空間が明らかになりつつあります。甲冑男性に接近すると、最初の火山噴火から程なくして襲った火砕流に埋もれているのがわかります（図９）。金井東裏遺跡の時期は、ちょうど前二子古墳が造られる直前の時期になります。その時期に上毛野地域を大きくゆるがすような大噴火があったということを踏まえておく必要があります。

金井東裏の男性が着けていた甲は、小札甲（こざ

ねよろい）という新しいスタイルの甲です。この甲は、非常に数が限られており、この時期ですと前方後円墳に埋葬されるような首長、あるいはそれに準ずる人に限られます。その意味で、この人物像も、少し狭められてくると言えます。

その場合、この小札甲は、恐らく畿内のヤマト王権から上毛野の豪族にもたらされたもの理解できます。上毛野地域における小札甲の出土例を見てみると、保渡田古墳群の二子山、八幡塚古墳が持ってますし、それ以外の同じ時期の前方後円墳の大半にも伴っています。日本全国で見ると、上毛野が全国の中でも一番数多く出ていることがわかります。先ほどの白石先生の話の東国に対してヤマト王権が軍事的基盤、あるいは更には経済的基盤として非常に重きをなしていく動きの中の、まさしく、そういう歴史上の人物が現われたと言えます。

これは、遺跡の中の小道を歩いている人の足跡です(図 10)。人の足跡もありますが、もうひとつ注目されるのは、直径 10～12cm のたくさんのまるい凹みの存在で、馬の蹄跡です(図 11)。ここで重要なのは、馬がいたということです。また、金井東裏遺跡の周辺で馬が生産されていた可能性がでてきました。

これら以外にも、いろいろと注目されるものが見つかっています。そのいくつかを紹介すると、まず、屋外と思われる場所から 1000 個近い土器がまとまって出てきました。ここでカミマツリが行われ、そこで使われた、あるいは他の場所でのカミマツリに使われた土器が、カミ様用の土器は１回限りの使用ですから、そういう土器が、ガサっと出てきたわけです。多量の石製品、ガラス玉、鉄製品や鏡も出ています。そういう点から、単なるムラのマツリというよりも、もっと大きな枠組みのものであったことがわかります。これを主導したのも甲男性だったと思われます。それから、つい最近報道されましたが、テニスボール大の赤い土玉が大量に出てきました。前原さんが話されたように、前二子古墳の壁面はベンガラで真っ赤に塗られていますが、これは、前二子古墳だけに限られたことでなく、同時期の上毛野地域の横穴式石室の大半に認められます。それは、弁柄という顔料を使って塗るわけです。金井東裏遺跡の赤玉は、その顔料の流通する形態ではないかと予測しています。これらの生産も、馬生産同様に甲男性が所管していた可能性があります。

３　５世紀後半の上毛野地域　榛名山噴火前の上毛野地域の中心勢力は、高崎市(旧群馬町)の保渡田古墳群で、その豪族の生活・政治の舞台が三ツ寺Ⅰ遺跡という豪族居館になります。前二子古墳が登場する直前の上毛野地域で最大の勢力であったと言うことになります。図 12 の手前が最初に造られた井出二子山古墳で、その奥に２番目に造られた八幡塚古墳、その左の林のところが３番目の薬師塚古墳になります。

その薬師塚古墳を造り始めている途中で、榛名山が大噴火します。それで、噴火が収まってしばらくすると築造を再開わけですが、二子山、八幡塚のすごい充実した内容と比べると相当にトーンダウンしているのがわかります。
その薬師塚が造られているときには、もう上毛野の他の地域では、横穴式石室の前方後円墳が登場してきます。そこのところは、非常に微妙な問題を含んでいます。薬師塚古墳は、横穴式石室ではなくて、舟形石棺ですから、前の段階の埋葬施設です。舟形石棺から横穴式石室に大きく変わっていく、その流れの中で見ていくと、この違いは興味深いところです。

４　上毛野地域の渡来人　もう少し噴火以前の様相を見ていきます。それは渡来系の人たちがかなり目立って上毛野地域に入ってきていることです。高崎市の剣崎長瀞西遺跡で見つかった古墳群は、中規模ないし小型の古墳が密集しているもので、そのうちの大半は円墳で、墓域の主要部分を占めています。その一番端のところに小型の方墳･積石墓が寄り添うように見つかっています。その中のひとつ 10 号墳から、純金製の精巧なつくりの耳飾が出土しています。これは明らかに朝鮮半島南部の地域(加耶の地域)のものと思われます。細部を見ていくと、非常に精巧で、高い技術力によっていることがわかります。

古墳の近くからは、馬を埋葬した土壙が見つかっています。その馬は、馬を制御するための鉄製の馬具(鏡板付轡)を口にくわえたままの状態で埋葬されていました。その馬具の特徴を見ると、明らかに朝鮮半島南部の地域のものに非常によく似ています。これを見にきた韓国の考古学者たちからも、朝鮮半島製で間違いないというお墨付きをもらっています。

それから、古墳群の東側に広がる集落跡からは、半島系の土器が出土します。素焼きの土器で土師器に似ていますが、つくり方が違う土器で、朝鮮半島南部によく見られるものです。同じものが、榛名山の東南麓から東麓にかけての地域にも認められます。これは、朝鮮半島からの人の移動を如実に物語るものと言えます。
これらの事実を併せていくと、榛名山の大噴火が起こる前の保渡田古墳群の頃、渡来系の人たちが一気に入ってきて、ひとつには馬の生産に従事･指導し、リードしたと考えられます。

５　五世紀後半の東国と古東山道ルート　保渡田古墳群が登場してくるとき、北武蔵(埼玉県地域)では、行田市のところに、銘文の刻まれた鉄剣で有名な埼玉稲荷山古墳が埼玉古墳群の先駆をな

すものとして登場します。一方、下毛野地域(栃木県地域)では、現在の小山市北西部に突然5世紀末葉の摩利支天塚古墳という大前方後円墳が登場し、さらに大前方後円墳の琵琶塚古墳へと続きます。

保渡田古墳群、埼玉古墳群、あるいは下毛野の大前方後円墳の出てくる時期が、非常に近いのは偶然の一致とは考えられず、非常に強い関係性のもとに成立したと考えられます。

このことは、畿内と東国を結ぶ新たなルートとして、内陸の遠距離直接ルートが成立したことと大いに関係していると考えられます。それには、馬が登場したことが、非常に大きな意味をもっています。これによって、古代の幹線道路である律令制の東山道駅路に近いところを通るルートが開かれたものと思われます。というのは、先ほどの東国の三つの大古墳群が、ちょうど東山道ルートに非常に近いところにあるからです(図13)。それから、5世紀後半以降の上毛野地域では西寄りの地域が非常に重視されてくる流れがありいます。畿内からの内陸のルートを来ると、東国(関東地方)へ入る玄関口の地域、上毛野の西部になると言うことが反映していることは十分想定できるところです。このことは、次にお話しする横穴式石室を持つ前方後円墳が、上毛野の中で中・西毛地域に限られていることも大いに関係していると考えられます。

なお、伊那谷の飯田市周辺地域が、もうひとつ馬生産が5世紀後半から非常に活発に展開する地域になります。この飯田市の地域も、東山道のルート上の場所に当たりますので、このことも馬の登場によって東山道のルートが開かれたという想定を補うものと言えます。

6　上毛野における初現期横穴式石室　次にいきたいと思います。上毛野の中で横穴式石室が一番最初に入ってくるのはどこかといいますと、前二子古墳より少し早いと思いますが、安中市の簗瀬二子塚古墳がこれに該当します。5世紀末葉までさか上る可能性も十分あります。信州側から峠を越えてきて、ちょうど関東平野が広がる手前のところこの古墳はあります。鬱蒼としていた竹林を取り除いたため、現在、墳丘は図14に見られるように前方後円墳の姿が非常にわかりやすくなっています。墳丘の右手、後円部に横穴式石室の入口があります。現在はカギが掛けられた鉄扉で閉鎖されていますので、図15を見て、中の状態をイメージしてもらいたいとと思います。二子塚の場合、二段構造の墳丘の第一段の上に石室が開口しているという点で、前二子古墳と造り方の発想が大分違うのを注意してください。

この中へ入っていくと、下へ階段状に降りていって、奥の玄室にたどり着きます。実を言うと二子塚の玄室の位置は、前二子古墳で第一段を断ち割って入っていった高さと同じ位置になります。ですから、下へ降りていったところで第一段の一番下のところになります。玄室の壁面は川原石で構成されており、すべてベンガラにより真っ赤に塗彩されています。非常に強固なつくりになっていて、天井石材にひびが入っているのを除けば、築造当初からほとんど狂いのない高い技術力がよくわかります。

石室からの出土品で注目されるのは、金層ガラスとか金箔ガラスと呼ばれている、透明ガラスの中に金箔をサンドイッチして作った、非常に高い技術力を要する製品です(図16)。日本列島では非常に類例が少なく、当地でつくられたものではないとされています。朝鮮半島にもありますが、朝鮮半島で作られたものでもない可能性があります。更に西アジアの先で作られたという説もありますし、ちょっとまだ確定していません。少なくとも日本列島で作られるものではない。そういう明らかに外から入ってきたものを二子塚古墳は持っていたことになります。

図17は馬具の破片でわかりづらいですが、そのうち右側にある人の舌のような形をした金銅張製の杏葉と呼ばれる飾り馬具で、花弁形杏葉と呼ばれています。これは、畿内の前方後円墳などの有力古墳から出てくるもので、関東地方では二子塚に限られていますので、畿内との関係の中で見ていく必要があります。

簗瀬二子塚古墳が造られた同じ時期、その周辺では、次位にランクづけられる人たちの古墳も横穴式石室を採用します。図18は、後閑3号墳という古墳ですが、石室の構造は、二子塚とちょっと違いますが、基本的な造り方はよく似ています。共通した構築技術の中で支配者層の墓が横穴式石室になっていくというふうに考えてよいと思います。図19は、旧の松井田町に所在する下増田上田中1号墳で、これも二子塚の周辺地域に位置する。石室は後閑3号墳と瓜二つのT字形を呈するもので、これも基本的なところでは、二子塚の石の扱い方、積み方と非常によく似ています。これらは兄弟というか二子塚が親で、後閑3号・上田中1号が二つの子みたいな関係かと思われます。

次に、初現期の横穴式石室がどういう広がりを示すかを考えてみたいと思います。図20は、富岡市一ノ宮にある前方後円墳ですが、県の合同庁舎を造るときに調査され、調査後に撤去して庁舎を造るわけでしたが、設計を中庭式に変更して、古墳を残したものです。ちょっとこれは拍手というところだと思っております。図21は、羨道から石室の中を覗いた状態です。簗瀬二子塚と同様に中ぶりあるいは小ぶりの川原石を使っているのがわかります。

図 22 は、前橋のグリーンドームの南側の南北の道を前橋市街地側から抜けたすぐ右側にある王山古墳です。これも、後円部に横穴式石室があります。墳丘の表面には、座布団状の川原石を非常に丹念に積んで、見事な葺石を実現しています。図 23 が横穴式石室を奥壁側から望んだものになります。天井石が欠落していますが、非常に細長い奥行きのある石室構造になります。このことは、王山に限らず、初現期の前方後円墳の横穴式石室全体にあてはまる特徴です。ところで、王山古墳の石室の位置が特異です。それは、二段構造の墳丘の第二段の中位のところに石室があるからです。これでは、外からスムーズに石室に入れないことになります。

同じ時期に、中・西毛地域でほぼ一斉に前方後円墳に採用されながら、三者三様である点は興味深いところです。

最後に、その広がりの一番北寄りですが、吾妻川をさかのぼった東吾妻町に四戸古墳群というのがありまして、そこに初現期の石室があります。図 24 は四戸 1 号墳の石室を入口側から見たものです。川原石を使用したもので、赤色顔料が塗彩されており、規模としては通有の円墳です。ただし、副葬品は充実したものであるので、地域の中で非常に高い地位を占めていたということがわかります。

このように前二子古墳と前後する時期の上毛野の初現期横穴式石室を見てきました。最後に、上毛野地域で採用された横穴式石室の特徴をいくつかお話ししたいと思います。まず、6 世紀初めを前後した時期の前方後円墳を実現した最有力者が横穴式石室を採用していることがあげられます。それから、前方後円墳で導入された地域では、その次のランクの人たちも、横穴式石室を採用しています。逆に言うと、支配者層に採用された地域でも、それより下位の人たちは、まだ横穴式石室になりません。だから、横穴式石室が入ってくると、上野の地域全体がこれに替わってくるということにはなりません。

次に、上毛野全体を見渡してみると、その全体ではなく、西半分の地域、前橋周辺から、高崎の方にかけてを中心とした地域に広がったのがわかります。このことは、単に群馬の地域へ横穴式石室の文化が入ってきたというよりも、意図的に入ってきている可能性、意図的に受容している可能性を注意する必要があります。これはどういうことか言うと、5 世紀後半以降、上毛野西部を中心に地域展開がはかられるようになったことが関係していると思います。その場合、榛名山大噴火以前を主導していた榛名山麓の地域が欠落している点は注意されます。

ところで、上毛野で横穴式石室が採用された時期は、畿内の大王墳をはじめとする最有力古墳に採用されるようになった時期と一致します。石室そのものは、両者の間に直接的な脈絡はないものの、採用の大きなきっかけを共通にしていることは間違いないところです。この時期の横穴式石室の採用は、特に選ばれた地域でのものであったことを考える必要がある。

所定の時間をだいぶ過ぎてしまいましたので、ここまでで私の話は終らせていただきます。

図１　前二子古墳の墳丘

図４　前二子古墳石室出土の鉤状鉄製品
前橋市教育委員会提供

図２　前二子古墳の石室入り口部

図５　前二子古墳石室壁面の差し込み状況
前橋市教育委員会提供

図３　前二子古墳石室（羨道部から玄室入り口を望む）

図７　前二子古墳の石室（玄室部に復元された土器が並ぶ）
前橋市教育委員会提供

図版１

図６　韓国武寧王陵の鉤状鉄製品
国立公州博物館『新報告書 武寧王陵Ⅰ』2009より

図10　金井東裏遺跡から見つかった足跡
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団提供

図８　調査初期の金井東裏遺跡
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団提供

図11　金井東裏遺跡　馬の蹄跡
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団提供

図９　発見された甲冑着装古墳人
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団提供

図12　保渡田古墳群全景（手前が井出二子山古墳）
高崎市教育委員会提供

図版２

図13　東山道と東山道駅路

図14　築瀬二子塚古墳墳丘

図15　築瀬二子塚古墳の横穴式石室
安中市教育委員会提供

図16　築瀬二子塚古墳から出土した金箔ガラス
安中市教育委員会提供

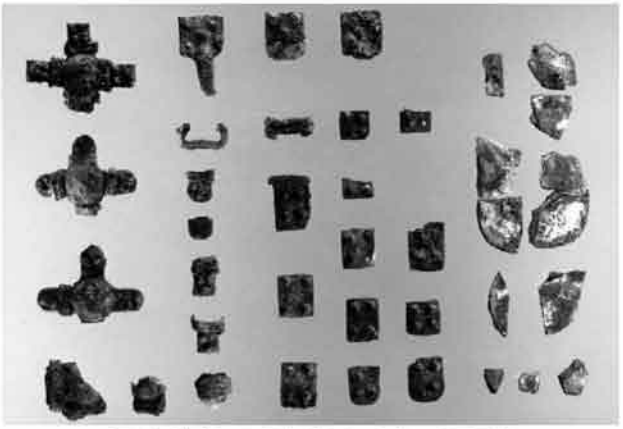


図17　築瀬二子塚古墳から出土した馬具類
安中市教育委員会提供

図18　後閑３号墳全景
安中市教育委員会提供

図版３

図19　上増田下田中１号墳
安中市教育委員会提供

図22　王山古墳の墳丘と石室

図20　一ノ宮４号墳全景

図23　王山古墳の横穴式石室（奥から望む）

図21　一ノ宮４号墳の横穴式石室

図24　四戸古墳群１号墳の横穴式石室

図版４

古代東国文化シンポジウム　基調講演②

前二子古墳横穴式石室のルーツを探る　－九州と韓国の横穴式石室－

柳　澤　一　男（宮崎大学名誉教授）

はじめに　みなさん、こんにちは。宮崎からやってまいりました柳澤と申します。

今回のシンポジウムは前橋市に所在する前二子古墳が主題、タイトルは「東アジアから見た前二子古墳」です。前二子古墳がなぜ「東アジア」なのか、と首を傾けられる方も少なくないのではないかと思います。

ご承知のように、前二子古墳は同じ前橋市の王山古墳や、安中市にある梁瀬二子塚古墳とともに、上毛野地方では最古期の横穴式石室を採用した古墳として知られています。横穴系墓室は、古代中国の前漢代後半に出現し、朝鮮半島を経由して日本列島に導入された開通原理の外来系埋葬施設です。その点で東アジアの諸地域と共通する墓制を共有することは確かですが、それだけで前二子古墳と東アジアの関係を語るには不十分でしょう。

以前から指摘されていたことですが、前二子古墳の横穴式石室とは何者で、そのルーツはどこにあるのか、まったく見当が付かないほど日本列島では例をみないほど特異な形態と構造なのです。詳しいことは後でお話ししますが、近年の朝鮮半島南部で発掘調査された古墳のなかに前二子古墳と酷似する横穴式石室がみとめられています。このことは、前二子古墳の石室構築が、日本列島内勢力ではなく、朝鮮半島の特定地域勢力との連携のもとに行われた可能性がでてきたところです。限られた時間ですが、前二子古墳の横穴式石室のルーツと、その当時の日本列島と朝鮮半島諸地域との関係について、考えているところをお話ししたいと思います。

上毛野地域における出現期横穴式石室と前二子古墳　前二子古墳の調査経緯やこれまでの調査成果をもとにした古墳の具体的な内容については前原豊さんから、上毛野地域の出現期横穴式石室の様相については右島和夫さんから、それぞれ詳しいお話しがありました。お二人のお話と重なるところがあるかもしれませんが、改めて前二子古墳の横穴式石室の特徴をまとめておきたいと思います。

図１は、右島さんが 1980 年代にまとめられた論文のなかで取り上げられた上毛野地域の出現期大型横穴式石室の図面です。それぞれ特徴的な形態と構造をしめしていますが、梁瀬二子塚を除く３基の横穴式石室は、遺体を収める玄室と呼ぶ空間は細長く、その前面に取り付く通路（羨道）も異様なほど狭くて長いものです。そのうち、前二子と王山の２つの横穴式石室には玄室と羨道の境に細長い棒状の仕切り石（梱石）が配置されています。正円寺も玄室の境よりも少し前面側に川原石を並べた梱石がみとめられます。この二つの石室は、玄室の奥の壁（奥壁）は大型の石を二段に積みあげる構成法が共通しています。また石室の上部が残っている前二子と正円寺の二つの石室上部を見ますと、玄室から羨道はほとんど水平に大型石材（天井石）が架構されていますが、羨道の入口部寄りが少しずつ低くなるようにつくられていることがわかります。

このように、梁瀬二子塚を除く３基の横穴式石室には形態や構造に共通する部分が多くみとめらます。古墳の築造年代からみると、前二子古墳の横穴式石室の築造を起点にして、部分的な改変を加えながら、短期間のあいだに連続してつくられた可能性が高い、と考えています。ところが、前二子古墳の横穴式石室には、王山と正円寺という仲間の石室にはみとめられない特異な構造もあります。

一つは、玄室と羨道の境に板状の石材を立てて配置し、玄室・羨道の側壁よりも内側に突出させる部分です。このような板石を立柱石と呼びますが、立柱石の間の床面には梱石を置き、さらに立柱石と天井石との間に、細長い石材を梁状に左右の壁に架け渡して、玄室と羨道を区画する玄門を設えています。このような構造は九州北部地方では一般的にみとめられるものです。これに加えて、玄室と羨道の床面に丁寧に加工した大型の石材（床石）を並べて配置し、奥壁に沿って遺体を安置する部分（屍床）をつくりだしています。床面に大型石材を配置する手法は他に例がないため評価のしようもありませんが、屍床配置は九州中北部でしばしばみられる手法です。

このように、前二子古墳の横穴式石室は九州北部との関連がつよくみとめられるのですが、九州北部には例のない形態と構造があります。それは、玄室の前面に接続する幅が狭くて長い羨道です。前二子古墳がつくられた６世紀初頭（おそらく 510 年前後と推測しています）頃の九州北部に一

般的な横穴式石室（北部九州型）には、玄室前面に狭長な羨道が接続することはないのです。

小さくて申し訳ないのですが、図２をご覧ください。この図は、九州北部に横穴式石室が出現した４世紀後葉から、６世紀末頃までの九州と畿内、それに上毛野地方の大型横穴式石室の変遷を概括的に図示したものです。最上段が北部九州型横穴式石室の築造推移をしめしていますが、６世紀（500 年代）初め頃の横穴式石室には羨道がなく、「ハ」字形に開く前庭が付くことがお分かりいただけると思います。

以前から、上毛野の出現期横穴式石室と北部九州石室との類似性には気づいていたのですが、いま申しあげたようなところで理解が頓挫していました。これを一転させたのが、朝鮮半島南部に分布する倭系古墳の調査の進展なのです。

朝鮮半島南部の倭系古墳と横穴式石室　前方後円墳や倭系横穴式石室を構築した古墳を倭系古墳と呼んでいます。朝鮮半島南部の全羅南・北道と慶尚南道に分布しています。図３に倭系古墳の分布図をしめしておきました。その下には、現在判明している前方後円墳のリスト（表１）を付けましたので、ご参照ください。

前方後円墳は朝鮮半島南西部の全羅南道に 13 基、北道に１基が確認されています。分布の中心域は栄山江とその支流、海南半島ですが、蘆嶺山脈を越えた北部にも広がります。なお、潭陽に所在する２基は前方後円墳ではなく長楕円形の古墳になるかもしれません。

墳長の規模が 77ｍの長鼓峰古墳がもっとも大きく、60ｍ代が２基、50ｍ代が２基、残る６基は 30～40ｍ代と比較的小型のものです。墳丘規模、周堀・段築の有無や、埴輪・木製立物の有無などは、表１にまとめておきました。

これらの前方後円墳は、1991 年から間断的に発掘調査がすすめられ、現在９基が発掘され、墳丘や周堀の形態や構造がかなり明らかになり始めています。墳丘構造が判明しているものは、すべて２段築成で上段斜面に葺石が施されています。段テラスに円筒埴輪列がめぐる明化洞古墳や、石見型などの木製立物を伴うチャラボン古墳や月桂洞２号墳などもあり、日本列島の前方後円墳と変わるところは無いと言ってもよいと思います。これらの前方後円墳について、かつては列島の前方後円墳の祖形となるという説がとなえられたこともありましたが、調査の進展と資料の蓄積がすすんだ現在では、５世紀末頃から６世紀前葉までの限られた期間に集中的に築造されたことが判明してきました。

前方後円墳のうち、埋葬施設が判明した９基のうち、最古と想定されるチャラボン古墳と、長楕円形の墳丘となる可能性が高い月田古墳を除く７基が九州系の横穴式石室です。九州系の横穴式石室につきましては、円墳や方墳を含めて後ほどまとめてお話ししたいと思います。

つぎに、九州系横穴式石室を採用した円墳や方墳についてお話ししたいと思います。まず、それらがどのあたりにあるのか、図３をご覧ください。このなかの●を付けた古墳が九州系横穴式石室を採用した円墳で、10 基ほどが知られています。このほかに１基だけですが、方墳の伏岩里３号墳があります（■のマークを付けました）。全羅南道に円墳４基と方墳１基、慶尚南道に円墳６基となります。

全羅南道の円墳３基と方墳の伏岩里３号墳は栄山江流域、もう一つの円墳・造山古墳は海南半島南部にあります。円墳はいずれも 20ｍ未満ですが、方墳の伏岩里３号墳は一辺が 45×55ｍ、高さ８ｍに達する大型墳で、栄山江流域では潘南古墳群の直径 40ｍ級の大型円墳とともに、有力首長墳として注目されます。

慶尚南道の九州系横穴式石室を採用した円墳は、南海岸の沿岸域と島嶼部に４基、内陸部の洛東江と支流の南江流域に２基が知られています。

このなかで注目されるのは、固城にある松鶴洞１号墳です。この古墳は、先の大戦前に日本の研究者がその一部を発掘していますが、1980 年代半ばに韓国の姜仁求先生が前方後円墳ではないかと問題提起され、日韓の研究者のあいだで活発な議論が交わされた古墳です。2000 年とその翌年に東亜大学校博物館が発掘調査を行ったところ、３基の古墳が複雑に重なるように構築された結果、あたかも前方後円墳のような墳形となったことが判明したのです。最初に 30ｍあまりの１Ａ号墳がつくられた後に、直系 28ｍあまりの１Ｂ号墳が墳丘端の一部を重ねて築造され、その後に１Ａ号墳と１Ｂ号墳のあいだに重なるように１Ｃ号墳がつくられていたのです。

前原さんや右島さんのお話に出てきた、前二子古墳の横穴式石室に関連する朝鮮半島南部の古墳とは、２番目につくられた１Ｂ号墳のことですし、結論を先に述べると、その１号石室こそが直接のルーツであろうと推測されることにあります。

朝鮮半島南部の倭（九州）系横穴式石室とその系譜　引き続きまして、今お話しした朝鮮半島南部にみとめられる倭系古墳の横穴式石室について、もう少し詳しく見てまいりたいと思います。

図４は、これらの地域で確認されている横穴式石室の図面と古墳分布図を組み合わせたものです。古墳分布図は小さいので、図３をご参照ください。この図は 2006 年につくったもので、その後に発見された３基の九州系横穴式石室と記入漏れ１基の、合わせて４基分の横穴式石室の図面

が入っていません。その後に発見された石室は、前方後円墳の龍頭里古墳と馬山里１号墳、円墳の香村洞2-1号墳で、記入漏れは角化洞２号墳です。

図４の横穴式石室の図面は同じ縮尺に揃えていますので、石室規模の大小を視覚的に把握できると思います。しかしながら、ご覧いただくとお分りのように、平面形・立面形ともじつに多様です。これらの横穴式石室が築造された年代は５世紀末頃から６世紀前葉までの 20～30 年間のごく短期間であることを考えますと、日本列島各地との広い交渉を考えたくなります。しかし、この時期に大型横穴式石室の構築がある進展していたのは、九州中北部と畿内や紀伊の一部にすぎません。従いまして、横穴式石室の形状や構造を丹念にたどることによって、その源流が日本列島のどのあたりにあるのか、おおよその見通しをうることができるのではないかと考えています。

横穴式石室の形状や構造が多様だと申しましたが、その特徴からいくつかのグループに分けることが可能です。

第１は、北部九州型そのものみてよいグループです。慶尚南道の長木古墳、全羅南道の造山古墳の二つの石室は、細長い羽子板形の玄室平面形と立柱石・梱石・楣石構成の玄門を備え、玄門前面は「ハ」字形に開く前庭が接続します。玄室の奥壁と左右の側壁の最下段には、大型の石材を横方向に立て並べる手法ー九州ではこれを「腰石」と呼んでいますーが顕著にみとめられます。こうした特徴は、北部九州型横穴式石室の番塚式から関行丸式段階と等しい形状と構造です。５世紀後葉から末葉の築造と想定していますが、造山古墳からはＴＫ47 型式期の倭製の須恵器が、長木古墳からは倭製の短甲（鉄製の鎧）などが出土しており、こうした年代観と矛盾していません。

前方後円墳の龍頭里古墳と新徳古墳、龍頭里古墳の石室は、玄室平面形はいまお話しした長木や造山古墳石室よりも幅広い長方形となり、玄室立面形は高さを増して穹窿状（ドーム）に近い構造となります。玄門と前面の前庭の構造は変化がありませんが、以上の特徴は北部九州型鶴見山式段階のものと酷似しています。鶴見山古墳からは６世紀初頭から前葉の須恵器が出土しており、朝鮮半島の前方後円墳も同様の時期の副葬品が出土しています。石室の大半が破壊された明化洞古墳や、本年の夏に発掘調査された馬山里１号墳の石室もこの段階か次の王塚式段階の北部九州型とみてよいと思います。

なお、龍頭里古墳の玄室奥壁には石棚が設置されおり、北部九州型最古の石棚設置石室の王塚古墳に先行する事例として貴重です。後でお話しする伏岩里３号墳のように、紀伊の岩橋型石室工人と北部九州型石室工人によるコラボレーションが想定される例もありますので、そうした工人間の交流も視野に入れた検討が必要かもしれません。

栄山江流域で近接する円墳の双岩洞古墳や角化洞２号墳も、この段階か、つぎの王塚式段階に相当する可能性がたかいと思います。

第２は、中部九州の肥後型的な横穴式石室です。全羅南道の鈴泉里古墳１例にすぎませんが、方形に近い玄室平面形に二重の立柱石と梱石・楣石を備えた玄門を配置し、その前面には天井石を架構しない石積み墓道が接続する特異な構造です。玄室の上部構造に多少の違いがありますが、熊本県山鹿市に所在する臼塚古墳と酷似しています。

第３は、北部九州型・肥後型といった九州系横穴式石室そのものではないのですが、玄室平面形や立柱石・梱石配置を伴う玄門構造を備えた、九州的な横穴式石室とでも言うべきグループです。栄山江流域の月桂洞１・２号墳の横穴式石室がそれに該当します。

第４は、前二子古墳石室のルーツと言うべきグループです。玄室平面形が狭長で箱形に近い立面形、立柱石と梱石による玄門を伴い、その前面に狭長な羨道を付設するのが特徴です。天井石は玄門と羨道とのあいだに、低い段をもつものとないものがあります。私はこの石室形式を長鼓峰類型と呼んでいます。

全羅南道の前方後円墳である長鼓峰古墳、慶尚南道の大型円墳である松鶴洞１Ｂ号墳１号石室とやはり直径が 30m近い大型円墳の船津里古墳の３例が知られています。最初にお話ししたように、このグループの横穴式石室はきわめて特異な形態と構造です。どのようにして、こうした石室が案出されたのかよく分からなかったのですが、つぎのように、葉の九州中北部の二系統の石室工人のコラボレーションを想定すると理解できそうです。

図５をご覧ください。狭長で箱形に近い形状の玄室構造は北部九州型の番塚式を母胎にしたもの、狭長な羨道は肥後中部の熊本平野部に登場する狭長羨道を母胎として、両者を組み合わせることで成立したと考えるものです。それは、このグループ最古の可能性がたかい長鼓峰古墳の石室に明示されています。この石室の玄門部分は、割石積み狭い袖部があり、その外側ーつまり羨道の内側に立柱石の広い面を配置するもので、この手法は、熊本県千金甲１号墳と等しい構造なのです。

松鶴洞１Ｂ号墳１号石室は、玄室平面形が長鼓峰よりも狭長で、立柱石と梱石による玄門を備えるほか、玄室側壁に布帛の吊り金具である鉤状鉄製品が多数を差し込まれています。また、奥壁の下部と左右の側壁に木棚を差し込んだとみられる凹みと木質痕跡が観察されています。石棚を木棚に置き換えた可能性がありますが、配置の高さが低く、どのような目的で設置されたかよく分か

りません。

羨道の長さに違いがありますが、横穴式石室の全体構成が酷似する松鶴洞１Ｂ号墳１号石室こそが、前二子古墳横穴式石室の直接のルーツとみて間違いないと思います。

第５に、１例のみなのでグループとは言えないのですが、紀伊の岩橋型横穴式石室の規格を北部九州型の構築手法で築造した例があります。先に、九州系横穴式石室採用古墳のなかで唯一の方墳、かつ栄山江流域でも最大規模の古墳と申し上げた伏岩里３号墳の 96 年石室（1996 年に発見された石室の意味だと思いますが、年は省きます）です。伏岩里３号は方墳と言っても在地型の古墳で、４～５世紀代に営まれた甕棺古墳上に巨大な墳丘を築造し、96 石室のほか６世紀末葉にいたる 10 基あまりの百済系横穴式石室を墳丘各所に構築した特異な構造です。96 石室には４体の遺体が埋葬されていますが、いずれも栄山江流域特有の大型甕棺に収められています。

ところで、この横穴式石室の規格を紀伊の大谷山 22 号墳と同規模と見抜いたのは中司照世さんです。先にもお話ししたように、96 年石室が築造されたと想定される６世紀初頭頃には、北部九州型に羨道は付きませんが、玄室壁面最下段の大型腰石使用、内側に突出しませんが立柱石・梱石・楣石を備えた玄門構成は北部九州型の構築技術を駆使した構造と言うほかありません。また、私は中司さんの指摘のもとに石室規模を検討したところ、大谷山 22 号の石室企画は１尺が 24 ㎝の尺度で、96 年石室は 25 ㎝の尺度で行われたと推測されました。したがいまして、この二つの石室は瓜二つですが 96 年石室がわずかに大きめと言うことになります。

第６のグループは、慶尚南道内陸部に近接して南江と洛東江沿いにつくられた２基の円墳（景山里１号墳と雲谷里１号墳）と、近年発掘された南海岸沿岸の香村洞 2-1 号墳（円墳）です。第４までのグループは６世紀前葉の築造ですが、このグループはそれ以降の６世紀中葉を前後する頃の一群です。景山里１号の石室基本形は北部九州型ですが、奥壁に沿って石屋形を設置しています。雲谷里１号墳は玄室平面形が胴張りで、奥壁と左右の側壁に沿って「コ」字形に石障を設けています。また奥壁のやや上部に、壁面の外方に突出させた「突起石」を配置しており、福岡県南部の筑後川流域に類例を求めることができるものです。香村洞 2-1 号の石室も、「コ」字形の屍床配置と立柱石による玄門構造があり、九州中北部的なものとみてよいと思います。

以上を整理しますと、朝鮮半島南部に築造された倭（九州）系横穴式石室は、北部九州型や肥後型などの九州系がストレートに構築された移植型のほか、北部九州型と肥後型の合体形式や、九州系横穴式石室の基本形をベースに在地で発案された多様な創出形式が生み出されたため、多様な様相を呈することになったのではないかと思います。

朝鮮半島南部の倭系古墳の築造背景と上毛野地域諸勢力　最後に、前二子古墳の横穴式石室にどうして朝鮮半島南部と同形式の横穴式石室が採用されたのかを考えてみたいと思います。

これには、５世紀から６世紀にいたる高句麗・百済・新羅の三国ならびに加耶諸勢力間の複雑な抗争関係と、海峡を挟んだ倭との複雑な国際関係が絡んでいます。とくに、漢城百済が滅亡した 475 年以降の百済の動向と、５世紀前葉から勢力を拡大し積極的に対外交渉を展開した大加耶勢力、それと西方への勢力拡張を目論む新羅の関係は、時に和合し、時に敵対した。百済と蟾津江を挟んで相対する大加耶勢力は、倭王権との関係を維持しながら互いに牽制し合う関係にあったようです。とくに、熊津（現、公州市）に遷都した百済は勢力を回復するために、南の全羅南道一帯と蟾津江流域一帯を領有化しようと倭王権に働きかけたと思われます。

全羅南道や慶尚南道南岸域に出現した前方後円墳や倭系横穴式石室墳は、この地域に、九州勢力をはじめとする各地の有力勢力が派遣されたことを物語っているのでしょう。

上毛野地域の出現期横穴式石室を採用した梁瀬二子塚古墳の副葬品には、大加耶系の装身具や馬具、百済系の装身具のほか、倭製の捩り環頭大刀がありますが、同様に前二子古墳にも捩り環頭大刀が含まれていたことが判明しています。ちなみに、上毛野地域からは捩り環頭大刀は８基の古墳が出土しています。高松雅文さんは、継体王権を象徴する威信財として広帯二山式冠と捩り環頭大刀が重視されたと指摘されています。梁瀬二子塚古墳石室のルーツ探しは今後の課題ですが、上毛野地域の有力勢力は継体大王の要請を受けて加耶・百済に渡海したことは間違いないと思います。

繰り返しになりますが、前二子古墳石室の直接のルーツが松鶴洞１Ｂ号墳に求められることは確実です。いっぽう、松鶴洞１号墳は小加耶王墓の可能性も指摘されています。もし、松鶴洞１Ｂ号墳の被葬者が小加耶王であるならば、前二子古墳の被葬者は、小加耶の王族と親密な関係、例えば姻戚の関係形成などを背景に、同一形式の横穴式石室を構築した可能性も比定できないでしょう。いずれにしても、前二子古墳の石室築造には、松鶴洞１Ｂ号墳石室構築を差配した工人集団の上毛野への派遣なくして実現はありえなかったと思います。

とりまとめのない話になってしまいましたが、

これで終わらせていただきます。
ご静聴ありがとうございました。

【参考文献】

内山敏行 2011「毛野地域における六世紀の渡来系遺物」『古墳時代の毛野の実像』（季刊考古学・別冊 17）
国立光州博物館 2001『海南方山里長鼓峰古墳試掘調査報告書』
金奎運・金俊植 2009「泗川船津里石室墳」『嶺南考古学』48 号
申昌秀 2001「固城 内山里古墳群発掘調査と成果」『古自国（小加耶）のタイムカプセル 松鶴洞古墳群』、東亜大学校
黄暁芬 2000『古代中国葬制の伝統と変革』、勉誠社
高松雅文 2007「継体大王期の政治的連帯に関する考古学的研究」『ヒストリア』第 205 号
東亜大学校博物館 2005『固城松鶴洞古墳群』
朴天秀 2007『加耶と倭』、講談社
前橋市教育委員会 1993『前二子古墳』（大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報Ⅱ）
右島和夫 1983「群馬県における初期横穴式石室」『古文化談叢』第 12 集
右島和夫 2004「上野の初期横穴式石室の研究」『東国古墳時代の研究』、学生社
柳沢一男 2001「全南地方の横穴式石室の系譜と前方後円墳」『朝鮮学報』179
柳沢一男 2002「日本における横穴式石室受容の一側面―長鼓峯類型石室をめぐって―」『清渓史学』16･17 合輯
柳沢一男 2006「５～６世紀の韓半島西南部と九州―九州系埋葬を中心に―」『加耶、洛東江から榮山江へ』（第 12 回 加耶史国際学術会議）、金海市
山尾幸久 1998「磐井の乱の時代背景」『増補改訂版 古代最大の内戦 磐井の乱』、大和書房

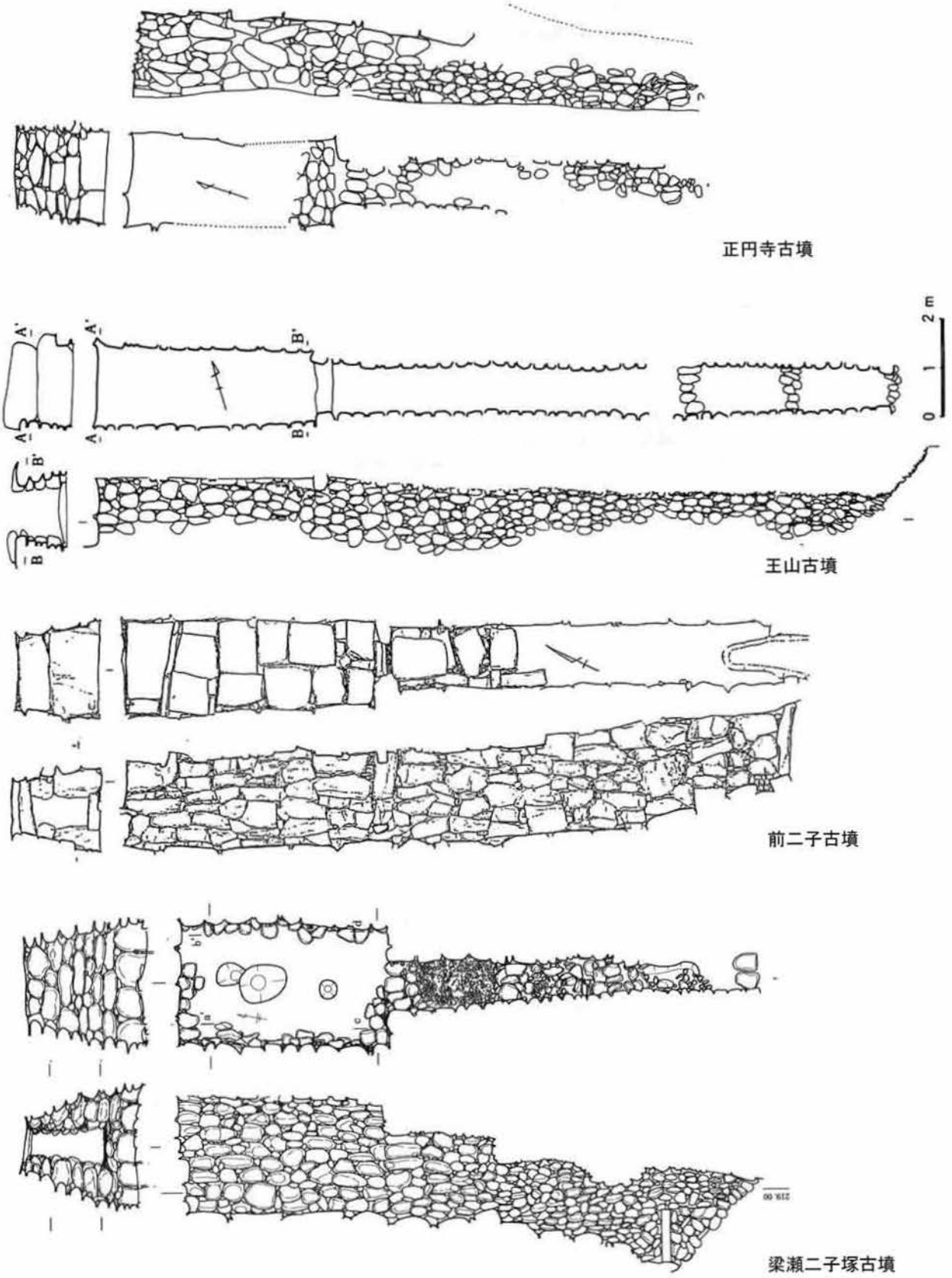


図1　上毛野の出現期横穴式石室

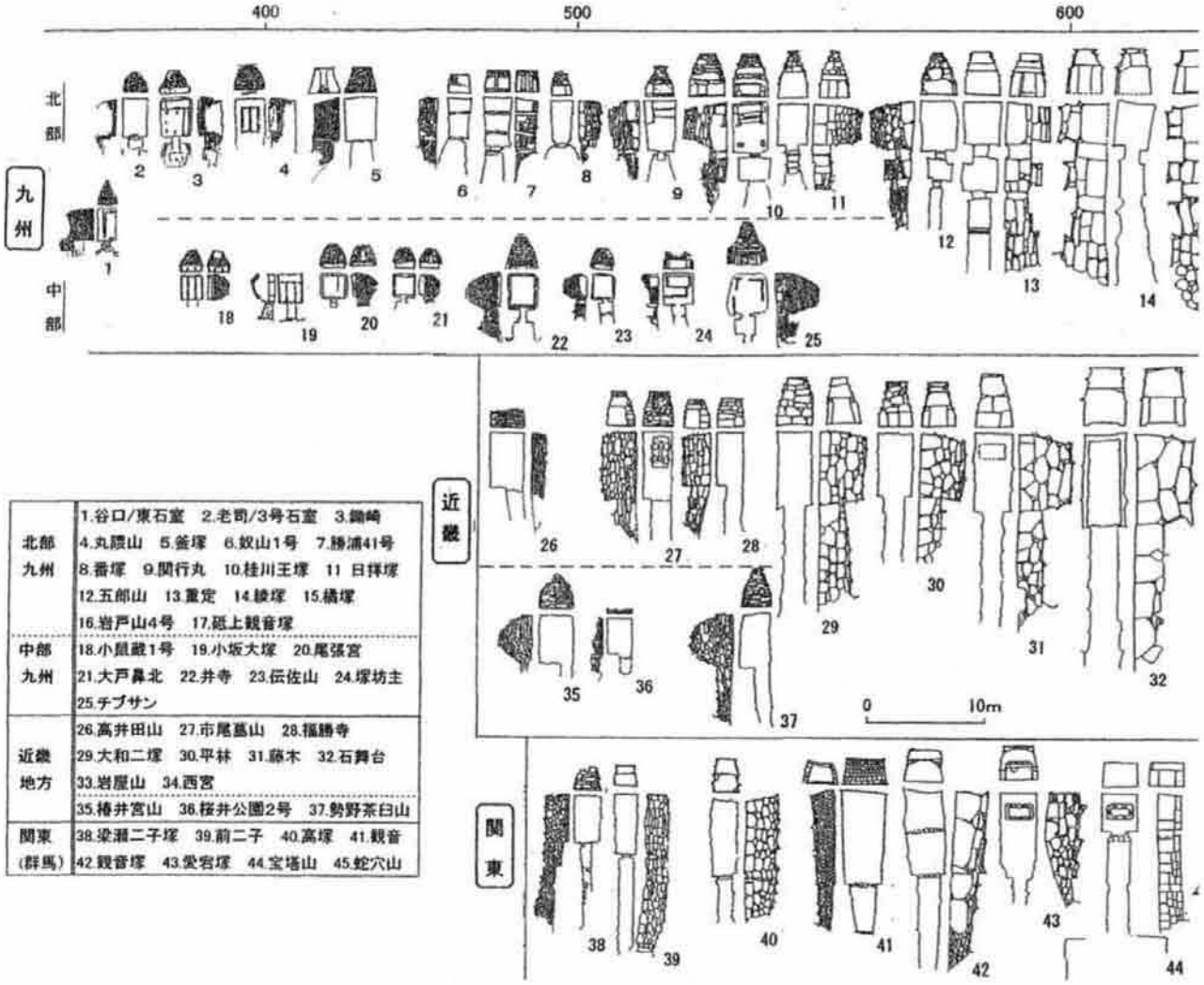


図2　日本列島における横穴式石室の築造過程（柳澤2006）

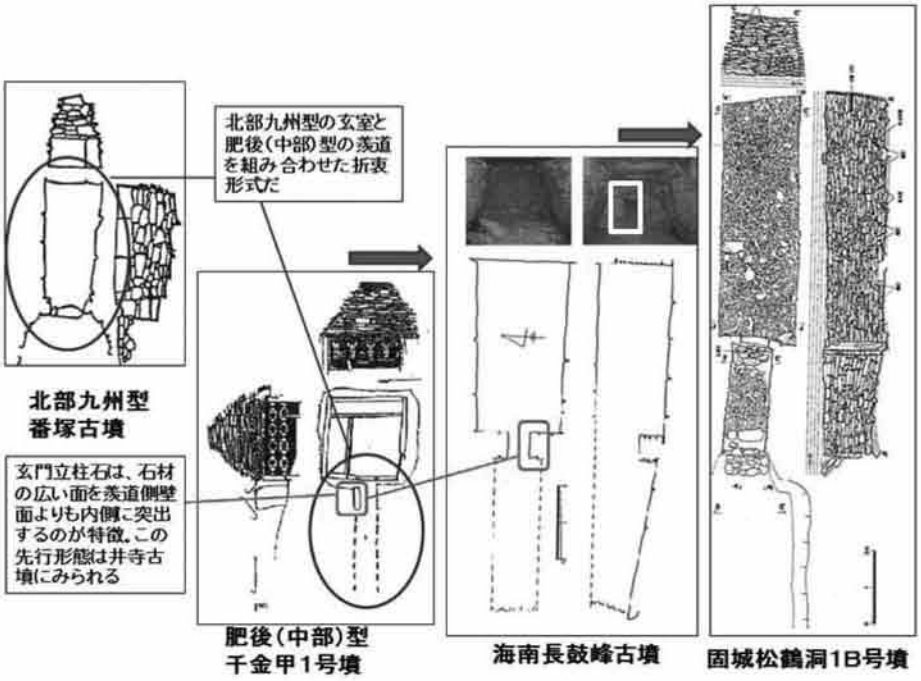


図5　長鼓峰類型横穴式石室の出自

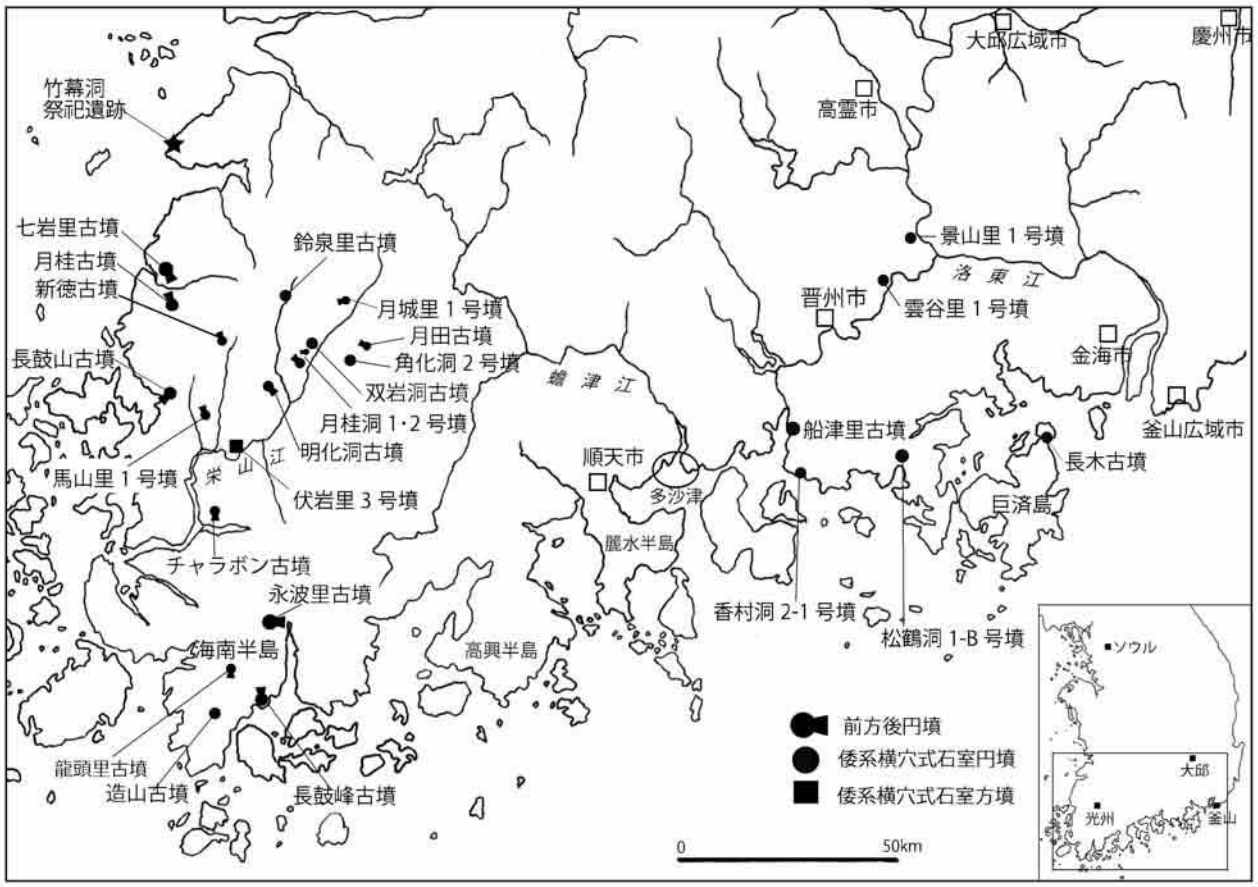
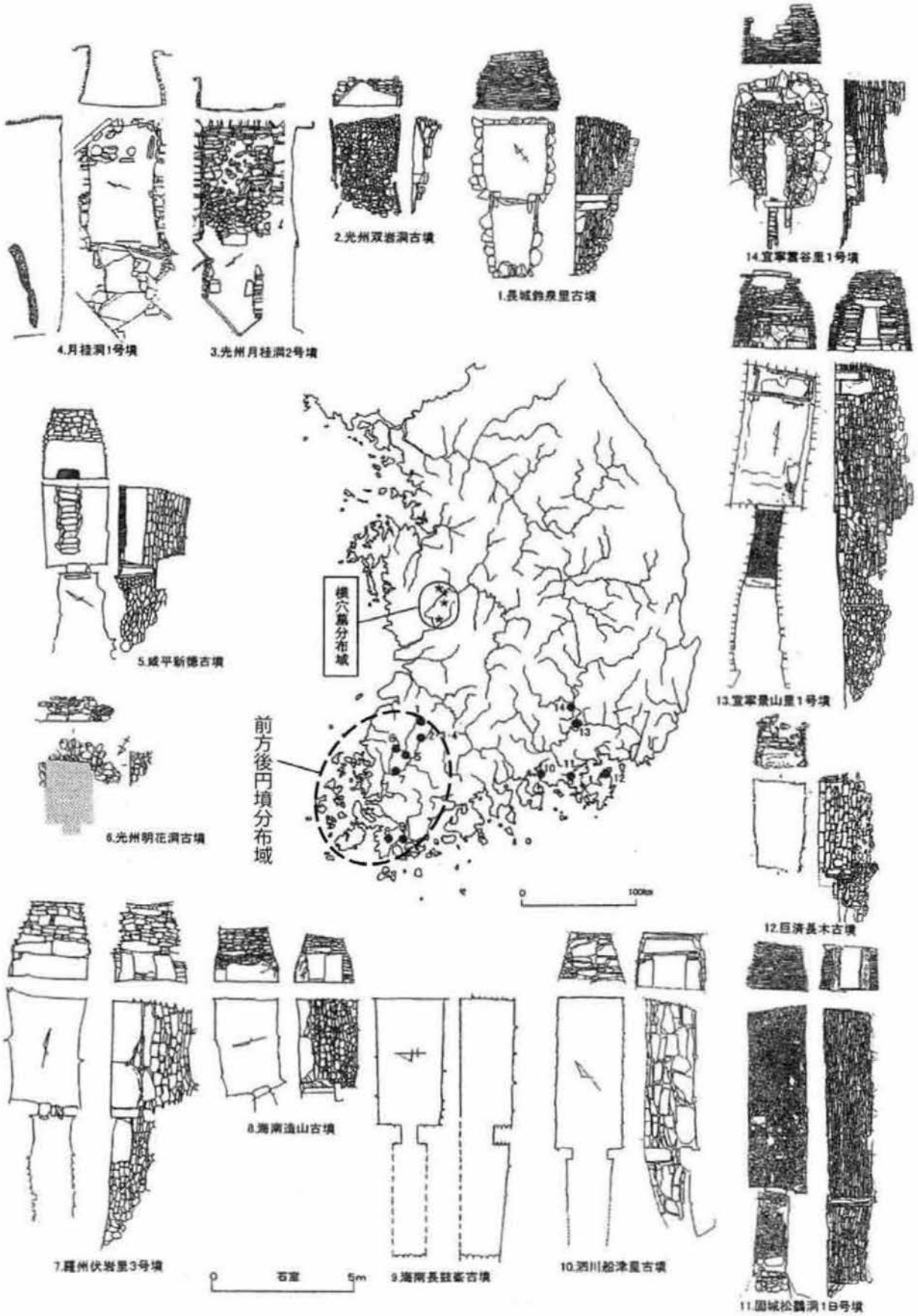


図３　朝鮮半島南部で確認された倭系古墳

	古墳名	所在地	調査	墳長	後径	後高	前幅	周堀	段築	葺石	埴輪	木製品	備考
1	七岩里古墳	全羅北道高敞郡		55	38	5.7	31	○					
2	月桂古墳	全羅南道霊光郡		39	21	3.5	15						
3	新徳古墳	〃　咸平郡	○	51	30	5		○	○	○			
4	長鼓山古墳	〃　咸平郡		66	36	5					○		
5	馬山里１号墳	〃　咸平郡	○	46	25	5	25	○	○	○			
6	月城山1号墳	〃　潭陽郡		24	14	2.5	12						長楕円形墳か
7	月田古墳	〃　潭陽郡	○	38	18	3		○	○	○			長楕円形墳か
8	月桂洞１号墳	〃　光州広域市	○	45	26	6.1		○	?		○	○	
9	月桂洞２号墳	〃　光州広域市	○	35	20	3.5		○	?		○		
10	明化洞古墳	〃　光州広域市	○	33	18	3.3		○	○	○	○		
11	チャラボン古墳	〃　霊岩郡	○	37	24	4.6	24	○	○	○	○	○	TK47
12	龍頭里古墳	〃　海南郡	○	40	23	5		○	○		○		MT15
13	長鼓峯古墳	〃　海南郡	○	77	44	10							
14	永波里古墳	〃　康津郡		67	38	7							

表１　朝鮮半島南部の前方後円墳

古墳名は次の文献による。大韓文化遺産研究センター編 2011『韓半島の前方後円墳』学研文化社、ソウル



1.長城鈴泉里古墳　2.光州双岩洞古墳　3.光州月桂洞2号墳　4.月桂洞1号墳　5.咸平新德古墳　6.光州明花洞古墳　7.羅州伏岩里3号墳　8.海南造山古墳　9.海南長鼓峯古墳　10.泗川船津里古墳　11.固城松鶴洞1B号墳　12.巨済長木古墳　13.宜寧景山里1号墳　14.宜寧雲谷里1号墳

図4　朝鮮半島南部における九州系横穴式石室の分布状況

古代東国文化シンポジウム　基調講演③

5・6世紀における朝鮮半島南部の様相と交流関係

高　久　健　二（専修大学文学部教授）

1　はじめに　専修大学の高久と申します。よろしくお願いします。

私は、これまでの先生方のご発表の背景となるような、朝鮮半島の古墳文化と交流関係を中心にお話させていただきたいと思います。具体的には、前二子古墳などが造られた5世紀後半から6世紀前半における朝鮮半島、とくに日本に隣接する半島南部地域の古墳文化を概観し、その多様性についてお話していきたいと思います。つぎに、朝鮮半島から日本列島へというモノの流れとは逆に、列島から半島へと渡っていった、いわゆる倭系遺物に焦点をあてて、当時の相互交流の実態について見ていきたいと考えております。

2　5～6世紀の半島情勢　最初に年表（表1）と地図をもとに当時の東アジア情勢を簡単にお話しいたします。

まず、5世紀初頭における半島情勢（図1）をみると、中国大陸の東北部から半島北部に位置しているのが高句麗です。そして、その東南部に新羅、西南部に百済が位置し、その間に挟まれているのが加耶諸国であり、小国が分立していた地域です（図3）。この加耶諸国が列島と非常に密接な関係をもっていた地域です。

5世紀代の大きな画期は、やはり高句麗の南進政策です。有名な広開土王の碑文に記されている、400年の高句麗の南進、すなわち半島南部に勢力を拡大していくという動きが、その後の朝鮮半島情勢に大きな影響を与えていくわけです。新羅は高句麗との同盟関係を維持するとともに、洛東江東岸域や下流地域まで勢力圏を拡大していきます。また、洛東江河口付近の西側には金官国があります。この地域は三国時代以前の原三国（三韓）時代から、日本列島との対外交流の重要な窓口として機能していました。この金官国は3世紀後葉から4世紀にかけて加耶諸国の盟主国として栄えていましたが、高句麗の南進を受けて、5世紀前葉以降、急速に勢力が衰えていきました。最終的には532年に新羅に投降してしまいます。これによって、倭は半島との交流の重要な窓口を失い、大きな影響を受けるわけです。5世紀の加耶地域では金官国にかわって内陸の大加耶国が台頭し、479年に加羅国王荷知が中国南朝の済に朝貢し、加耶諸国では唯一、「輔国将軍加羅国王」として冊封されています。一方、5世紀代の百済は高句麗と戦闘状態にあり、475年に高句麗は百済の王都である漢城を陥落させ、百済は南の熊津へと都を遷さざるを得なくなりました。しかし、熊津に遷都した百済は復興し、25代武寧王は521年に中国の南朝梁に遣使し、「使持節都督百済諸軍事寧東大将軍百済王」の称号を受けています。中国南朝との密接な関係は当時の王陵から出土する中国系文物にも現れています。

6世紀中葉になると半島情勢が再び大きく変動します（図2）。まず、加耶諸国のうち最後まで残っていた大加耶国が、562年に新羅によって滅ぼされてしまいます。そして、新羅は、552年に元百済の都であった漢城を勢力下におき、急速に領土を拡張していきます。また、中国大陸では589年に隋が統一を果たし、ここから新たな東アジアの構図がつくられていきます。この前段階までがここで取り上げる時期となります。

3　半島南部における古墳文化の特色　つぎに、半島南部地域における古墳文化を地域ごとに概観し、その特色についてみていきます。

（1）洛東江東岸地域－新羅－　半島東南部地域は新羅地域であり、現在の慶尚北道慶州市を中心に栄えていました。新羅千年の都と呼ばれる慶州盆地には、現在も多くの遺跡が残されており、大きな墳丘を持つ古墳が分布しています。

とくに、新羅の古墳文化を象徴する墓制が積石木槨墓であり、初期の大型積石木槨墳として知られているのが、5世紀中葉頃に造られた皇南大塚（ファンナムテチョン）（図4）であり、新羅の王陵と推定されています。皇南大塚はまず南墳が構築され、その後に南墳に接して北墳が造られており、双円墳を呈しています。

皇南大塚南墳の埋葬施設は積石木槨墓、木槨墓の周囲及びその上部に石を積み上げるのが特徴です（図4-1）。墳丘については、下部の1次墳丘とその上部の2次墳丘に分けて構築されています。木槨周囲の積石部は非常に高く、単に石を積み上げただけでは崩れてしまうので、櫓状の建造物を造って、積石を行うという複雑な構造をもっています（図4-2）。埋葬施設は主槨と副槨に分かれており。主槨には被葬者が埋葬され、副槨は床面中央部に木柱4本を立てて、木槨を構築しており、多数の副葬品が納められていました。

新羅の王陵は豪華な文物を数多く副葬するこ

とで知られています。このように大型古墳に多量の副葬品を納めるような手厚い埋葬を行う墓制を厚葬墓と呼んでいますが、新羅の古墳文化の特徴の一つとしてあげられます。王陵の副葬品のうち、王権を象徴する文物として出字形立飾冠（図4-6）があげられます。皇南大塚南墳のものは金銅製ですが、王陵からは金製のものが多く出土します。ちなみに、この出字形立飾冠は、6世紀後半に築造された群馬県前橋市の山王金冠塚古墳でも出土しており、新羅と上毛野との交流関係も想定されます。このほかにも金製冠帽（図4-9）、金製銙帯（図4-7）、金銅製飾履なども王権を象徴する装身具と考えられます。装身具以外にも三累環頭大刀（図4-5）や金銅製馬具類（図4-10）なども多く副葬されています。また、新羅の王陵にはシルクロードを通じて西域との交流を示すガラス製容器（図4-11）も一定数副葬されている。これ以外にも鉄製武器類や土器類も多数副葬されており、このようなあり方が新羅の厚葬墓としての王陵の特徴といえます。

（2）洛東江西岸地域－加耶諸国－　つぎに、新羅の西側、すなわち洛東江の西岸地域における加耶諸国の古墳文化をみていきたいと思います。加耶諸国ではそれぞれ違った古墳文化が展開しています。

①大加耶国　まず、最初に取り上げたいのは、洛東江を遡った現在の慶尚北道高霊郡に位置する大加耶国です。金官国の勢力が衰えた後、それに変わるように台頭してくるのが大加耶国であり、加耶諸国の後半段階の中心となる国です。

大加耶国の中心古墳群は池山洞（チサンドン）古墳群と考えられています。池山洞44号墳は5世紀末に造られた大加耶の王陵と考えられています（図5）。先ほどの新羅の積石木槨墳とはまったく違っておりまして、円墳で竪穴式石槨を埋葬施設として使用しています（図5-1）。墳丘中央部に大型の主石槨があり、それと並行に南石槨が、これと直交して西石槨が配置されています。さらに、これらの周囲に32基の小型石槨がめぐっています。この古墳の調査者は、これらの石槨は同時埋葬であり、32基の小型石槨は殉葬槨であろうと主張しています。中心の埋葬施設である主石槨は細長い長方形を呈していて、その中に木棺、あるいは木槨を設置していたものとみられます。

大加耶国の垂飾付耳飾（図5-6-⑦）は空玉を垂飾の中間飾として使用するのが特徴です。これと同じ形式の垂飾付耳飾が群馬県高崎市の剣崎長瀞西遺跡10号墳（積石塚）から出土しています。

②古自国（小加耶国）　加耶諸国の中には、大加耶国とは違った古墳文化が展開する地域もあります。そのひとつが現在の慶尚南道固城郡付近にあった古自国（小加耶国）です。古自国は南部海岸地域に面しており、内陸の大加耶国とは立地が異なっています。

古自国の中心地に位置するのが松鶴洞（ソンハクドン）1号墳です。松鶴洞1号墳は双円墳であり、南墳（1A号墳）に竪穴式石槨墓、北墳（1B号墳）に横穴式石室墓、南墳と北墳の間にも横穴式石室墓が構築されています（図6-1）。まず、5世紀後葉頃に南墳が築造され、その後、6世紀前葉頃に北墳が築造されました。南墳は墳丘上部から墓壙を掘り込んで竪穴式石槨を構築しており、他の加耶諸国と築造方法が異なっています。中央の大型石槨の周囲に中・小型の石槨10基が配置されています。中央の1A-1号竪穴式石槨（図6-2）は細長方形を呈し、装身具類、武器類、武具類、馬具類、農工具類、土器類が出土し、5世紀後半に築造されたものと推定されます。6世紀前葉の北墳には平面長方形の玄室に両袖羨道を有する横穴式石室（図6-3）が設置されており、こちらは南墳と異なり、石室とともに墳丘を構築しています。

松鶴洞1号墳に副葬されていた土器をみると、まず在地のいわゆる固城タイプとよばれる土器が主体を占めます（図6-17・19・20・21・25）。これ以外にも内陸の大加耶系土器（図6-24・27）や新羅系土器（図6-23）も出土しており、南海岸地域と内陸地域との交流関係を示しています。また、後述しますが、日本列島の須恵器も一定数出土しており（図6-18・22）、玄界灘を挟んだ倭との交流も盛んに行われていたと考えられます。

（3）錦江および栄山江流域－百済と馬韓－

①　百済　百済においても新羅や加耶諸国にはみられない墓制が造営されています。百済第二の都である熊津は、現在の忠清南道公州市付近に当たり、多くの遺跡が分布しています。このうち熊津期の王陵群と考えられているのが宋山里（ソンサンニ）古墳群です。

宋山里古墳群のなかで最も有名なのが、百済第25代武寧王陵（ムニョンワンヌン）です。この古墳の埋葬施設は、煉瓦を積み上げて造った塼室墓というもので、天井部はトンネル状を呈しています（図7-1）。塼室墓は横穴式構造になっており、一段高い棺台に王と王妃の木棺が埋葬されていました。羨道部分に鎮墓獣とともに置かれていた2枚の墓誌（買地券）（図7-12）の内容から、523年に亡くなった武寧王を525年に埋葬し、つづいて526年に亡くなった王妃を529年に合葬した墳墓であることが明らかとなりました。

未盗掘であったため副葬品も残されており、金製・銀製装身具類、金銅張飾履、銅鏡、単龍文環頭大刀、銀製・銅製容器、青磁類などが出土した。このうち金製冠飾（図7-8）は新羅や加耶諸国の

ものとは異なっています。また金銅張飾履も新羅のものと異なる百済式です。塼室墓の構造、買地券や鎮墓獣（図 7-18）の副葬、青磁類（図 7-19・20・21）などは中国南朝との密接な関係を示しており、武寧王と中国南朝との密接な関係を示しています。武寧王陵で出土している獣文鏡は、群馬県高崎市の綿貫観音山古墳出土のものと同型鏡であり、百済と上毛野との関係も指摘できます。

②栄山江流域　栄山江流域は百済の南側に当たり、馬韓とよばれていた地域です。この地域は他地域と異なる古墳文化が展開する地域であります。ここの古墳文化を象徴するものが甕棺墓です。この地域は光州市新昌洞（シンチャンドン）遺跡のように紀元前後くらいから甕棺墓が造営される地域として知られています。5 世紀になると新村里（シンチャンニ）9 号墳のように方台形の墳丘の中に甕棺墓を埋葬する古墳がみられます（図 8）。砲弾形の大型専用甕棺を埋葬するという点は、他地域ではみられない、この地域独特の埋葬方法です。

甕棺というと、どうも下の階層の墳墓ではないかと思われがちですが、そんなことはありません。新村里 9 号墳の乙甕棺の中には、金銅製冠帽（図 8-5）・飾履（図 8-6）、環頭大刀（図 8-7）などの大量の副葬品が納められていました。このうち金銅製冠飾は百済とも新羅とも加耶諸国とも異なるこの地域独特の形態のものです。

このような地域に 5 世紀末から 6 世紀前葉という、極めて限られた時期に前方後円墳が、突如出現し、突如消えていくということになるわけです。これら栄山江流域の前方後円墳のうち、咸平郡新徳（シンドク）古墳（図 9）は 5 世紀末～6 世紀初頭に造営され、埋葬施設には北部九州との関係が指摘されている横穴式石室を採用していました。光州市月桂洞（ウォルゲドン）1・2 号墳（図 11）は 6 世紀前半に造営され、横穴式石室を埋葬施設として使用していました。周溝から埴輪（図 11-5・6）も出ていますが、これらの埴輪は在地の土器作りの方法で作られておりますので、在地産の埴輪ということになります。光州市明花洞（ミョンファドン）古墳（図 10）も 6 世紀前半に造営された前方後円墳であり、非常に見通しのきくよい場所に造られています。ここからも、月桂洞古墳群と同様に在地産の埴輪が出土しています（図 10-3）。

このように、朝鮮半島南部の墓制には、地域ごとに多様性があるということをご理解いただけたと思います。

4　半島南部の倭系遺物からみた交流関係　次に、半島南部で出土した倭系遺物、つまり列島から半島へと渡っていった文物があります。5 世紀代は半島から列島へともたらされた文化要素が多いのですが、これとは逆に列島から半島へと渡った文物もあり、双方向の相互交流の実態を明らかにできる重要な資料といえます。

(1) 須恵器　須恵器は半島の窯業技術が列島に伝わり、生産されるようになった灰色の硬質土器です。さきほど取り上げた松鶴洞 1 号墳では、5 世紀後葉～6 世紀前葉の須恵器が多数出土しており、倭との密接な交流関係を示しています（図 6-18・22）。また、栄山江流域の全羅南道羅州市伏岩里（ポクアムニ）古墳群でも 5 世紀後葉～6 世紀前葉の須恵器が出土しており、これはちょうど前方後円墳が造られた時期と一致します。

一方、南部海岸地域だけでなく、忠清北道清州市新鳳洞（シンボンドン）古墳群や慶尚南道陜川郡鳳溪里（ポンゲリ）古墳群など内陸地域でも須恵器が出土しており（図 12）、広い範囲に須恵器の分布域が広がっていることがわかります。ただし、その出土量をみると、やはり固城地域のような南部海岸地域で集中的に出土していることから、これらの地域が倭との交流の窓口であったと考えられます。内陸地域で出土している須恵器も、倭との直接交流ではなくて、南部海岸地域との交流を通じてもたらされた可能性もあると思います。

(2) 南海産大型巻貝　半島の周囲には生息しない南海産の大型巻貝も、原材料として列島から半島へ渡っています。

慶州に造られた新羅の王陵からは、多数のイモガイ製雲珠が出土しています（図 13-1・2）。ある程度規格がそろい、雲珠製作に適したイモガイが新羅にもたらされたものと考えられます。新羅で生産されたイモガイ製雲珠は松鶴洞 1 号墳など周辺地域へと再分配されています（図 6-12）。

大加耶国の王墓と考えられる池山洞 44 号墳の主槨からは、ヤコウガイで作られた柄杓状の貝製品が出土しています（図 5-5-④）。慶尚北道慶山市の林堂洞（イムタンドン）古墳群では造永 E I 号墳からギンタカハマ製の魚形装飾品が出土しています（図 14）。また、栄山江流域の全羅南道海南郡造山（チョサン）古墳からはゴホウラ製貝釧が出土しています（図 13-3）。

(3) その他　新羅の王陵から出土する勾玉には、少なからず翡翠（硬玉）製の勾玉が含まれていると考えられます。これらの産地についてはいまだ不明ですが、新羅圏の首長墳である慶尚南道梁山市夫婦塚（プブチョン）出土の翡翠製勾玉を分析した結果、日本列島産の可能性が指摘されていますので、新羅の王陵から出土している勾玉の中にも、列島から原石がもたらされたものが含まれている可能性があります。

百済地域においても、倭系遺物が出土しています。さきほど取り上げた武寧王陵では棺台の上に王と王妃の木棺が安置されていました（図 7-2）。

この木棺の形態は百済式のものでありますが、その棺材を樹種鑑定した結果、半島には自生しないコウヤマキ（高野槙）という木材を使用していることがわかりました。列島の古墳時代前期においては、畿内の大型前方後円墳の場合、竪穴式石槨に長大な割竹形木棺を安置するものがみられますが、その棺材に使われているのがコウヤマキです。倭王権からから百済へ送られた可能性があります。また、全羅北道扶安郡竹幕洞（チョンマクトン）遺跡は西海岸を望む場所に立地する祭祀遺跡ですが、ここから出土した祭祀道具のなかに滑石製模造品とよばれる列島の古墳時代中期以降にみられる祭祀遺物が含まれています（図 13-6～32）。これらの遺物は倭人たちがここで祭祀を行っていたことを示すものです。おそらく、航海の安全などを祈願する海の祭祀を行っていた可能性が高く、福岡県の沖ノ島祭祀遺跡との類似性が指摘されています。

この他に、全羅南道羅州市大安里（テアンニ）9 号墳（図 13-5）や慶尚南道咸安郡道項里（トハンニ）（現）4 号墳（末伊山（マリサン）34 号墳）（図 15）で出土している直弧文が付けられた鹿角製刀装具についても、直弧文という文様が半島ではほとんど用いられていないので、倭系遺物と考えられます。

5 世紀中葉から 6 世紀前半の半島で出土した倭系遺物の分布図（図 16）をみると、いくつか分布の集中地域が確認できます。ひとつが洛東江流域、つまり加耶地域です。次が栄山江流域、つまり馬韓地域です。そして最後が錦江流域、つまり百済地域です。5 世紀前葉以前の倭系遺物は、洛東江流域でもその下流域の南部海岸地域に集中していましたが、5 世紀中葉以後は内陸まで倭系遺物が広がっていくという変化がみられます。これは、倭との交流範囲が拡大したことを示しているとも解釈できます。ただし、5 世紀中葉以後においても倭系遺物が集中して出土する遺跡は、固城地域の小加耶国など南部海岸地域です。固城地域は南部海岸地域を東西に結ぶ航路上に位置しています。また、松鶴洞 1 号墳では内陸の大加耶系土器や玄界灘を渡った倭系の須恵器も出土していますので、まさにここは東西南北の交流の十字路にあたる場所といえます。この時期においても、倭と密接な交流を行っていたのは、やはり南部海岸地域の勢力であったといえます。洛東江下流域の金官国が衰退した後、倭の対半島交流の窓口はより西側の西部慶南地域や栄山江流域に移っていったものと考えられます。

5　おわりに　5 世紀中葉以後、新羅、加耶諸国、馬韓で高塚墳が造営されるようになり、それぞれ異なる古墳文化が展開していきました。このうち、加耶諸国では 5 世紀になると、金官国に代わって、大加耶国の勢力が台頭してきます。また、南部地域では古自国や安羅国の勢力が台頭し、大加耶勢力や倭と関係をもちつつ、新羅・百済の勢力と対峙していました。一方、栄山江流域の馬韓は、百済や加耶諸国と関係をもちつつも、独自の古墳文化が展開していきます。このようななかで倭との関係を示す前方後円墳が 5 世紀末～6 世紀前葉という限定された時期に造営されました。このように 5 世紀以後、倭との交流の窓口は洛東江下流域の金官国から西部慶南地域の古自国や栄山江流域の馬韓へと移り、新たな交流体制が整備されていきました。

6 世紀中葉以後、562 年に加耶諸国が滅亡し、589 年に隋が中国大陸を統一するなど、東アジアの国際情勢は再び大きく変化し、7 世紀後半の半島統一へと向かう新たなステージへと突入していきます。加耶地域との関係を重視してきた倭の対半島政策も必然的に変更が迫られることになっていきます。

【参考文献】

○日本文

有光教一 1980「羅州潘南面新村里第九号墳発掘調査記録―主として小川敬吉氏手記の紹介―」『朝鮮学報』第 94 集

今西龍 1920「慶尚北道善山郡、達城郡、高霊郡、星州郡、金泉郡、慶尚南道咸安郡、昌寧郡調査報告」『大正六年度古蹟調査報告』朝鮮総督府

高久健二 2004「韓国の倭系遺物－加耶地域出土の倭系遺物を中心に－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 110 集

武田幸男 1997「朝鮮の古代から新羅・渤海へ」『隋唐帝国と古代朝鮮』世界の歴史 6、中央公論社

田中俊明 2009『古代の日本と加耶』日本史リブレット 70、山川出版社

○韓国文

尹根一ほか 2001『羅州新村里 9 号墳』国立文化財研究所

尹容鎭ほか 1979『大伽倻古墳発掘調査報告書』高霊郡

金元龍ほか 1974『武寧王陵発掘調査報告書』文化公報部文化財管理局

金正基ほか 1994『皇南大塚南墳発掘調査報告書』文化財管理局文化財研究所

成洛俊 1992「咸平礼徳里新徳古墳緊急収拾調査略報」『第 35 回全国歴史学大会発表要旨』歴史学会

沈奉謹ほか 2005『固城松鶴洞古墳群－第 1 号墳発掘調査報告書－』東亜大学校博物館

鄭永和ほか 2000『慶山林堂地域古墳群Ⅴ－造永ＥⅠ号墳－』嶺南大学校博物館学術調査報告第 35 冊、嶺南大学校博物館・韓国土地公社

朴仲煥 1996『光州明花洞古墳』国立光州博物館学術叢書第 29 冊、国立光州博物館・光州広域市

朴天秀ほか 2009『高霊池山洞 44 号墳－大伽耶王陵－』慶北大学校博物館・慶北大学校考古人類学科・高霊郡大伽耶博物館

林永珍 1994「光州月桂洞の長鼓墳二基」『韓国考古学報』31

表1. 中国大陸・朝鮮半島年表（5～6世紀）

中国大陸	朝鮮半島			
	高句麗	百済（含栄山江流域）	新羅	加耶諸国
	【集安で大型方壇階梯積石塚の王墓が造営】 400年：高句麗が新羅の倭を撃退（高句麗南進）。 404年：高句麗が倭と海戦。	**【漢城で大型方壇階梯積石塚の王墓が造営。】** **【漢江～錦江流域で横穴式石室墓が造営。】**	**【高塚墳の造営開始。】**	**【大成洞古墳群（金官国）で王墓の造営が終了。】** **【池山洞古墳群（大加耶国）で王墓の造営開始。】**
420年：宋建国。	424年：高句麗が宋の冊封体制に入る。 427年：高句麗集安から平壌に遷都。 435年：高句麗が北魏の冊封体制に入る。 **【平壌地域で壁画古墳（横穴式石室墓）が造営。】**	**【栄山江流域で高塚墳の大型甕棺墓が造営。】**	**【大型積石木槨墳（皇南大塚）の造営開始。】**	**【校洞古墳群（比自火国）で横口式石室墓が造営】** **【道項里古墳群（安羅国）、松鶴洞古墳群（古自国）、玉田古墳群（多羅国）で高塚墳が造営】**
479年：斉建国。		472年：百済が北魏に遣使。 475年：高句麗により百済漢城が陥落し、熊津に遷都。 **【栄山江流域で前方後円墳が造営】**		479年：加羅国王荷知が済に朝貢し、「輔国将軍加羅国王」として冊封。
502年：梁建国。		6世紀前葉：百済が半島西南部に進出。 **【宋山里古墳群で塼室墓（武寧王陵）が造営。】**	520年：新羅法興王が律令を制定。 522年：新羅法興王が大加耶と婚姻関係を結ぶ。	
534年：東魏成立。 535年：西魏成立。 550年：北斉建国。	545年：内紛で安原王が死し、陽原王が即位。	538年：百済泗沘に遷都。 **【陵山里古墳群が造営。】** 551年：百済が高句麗から漢城を奪還。	6世紀前葉：新羅が加耶南部に進出。 552年：新羅が漢城を奪取。	532年：金官国が新羅に投降。 541・544年：任那復興会議
557年：北周建国。		554年：新羅との管山城の戦いで、聖王が戦死。	**【積石木槨墳の造営が終了し、横穴式石室墓が普及。】** 564年：新羅が北斉の冊封体制に入る。	562年：新羅により大加耶国滅亡。
581年：隋建国。 589年：隋が統一。	586年：長安城（平壌）に遷都。 598年：高句麗が遼西に進出。		594年：新羅が隋の冊封体制に入る。	※【】内は考古学的な特徴

図1. 5世紀初頭における朝鮮半島〔武田1997〕

図2. 6世紀中葉における朝鮮半島〔武田1997〕

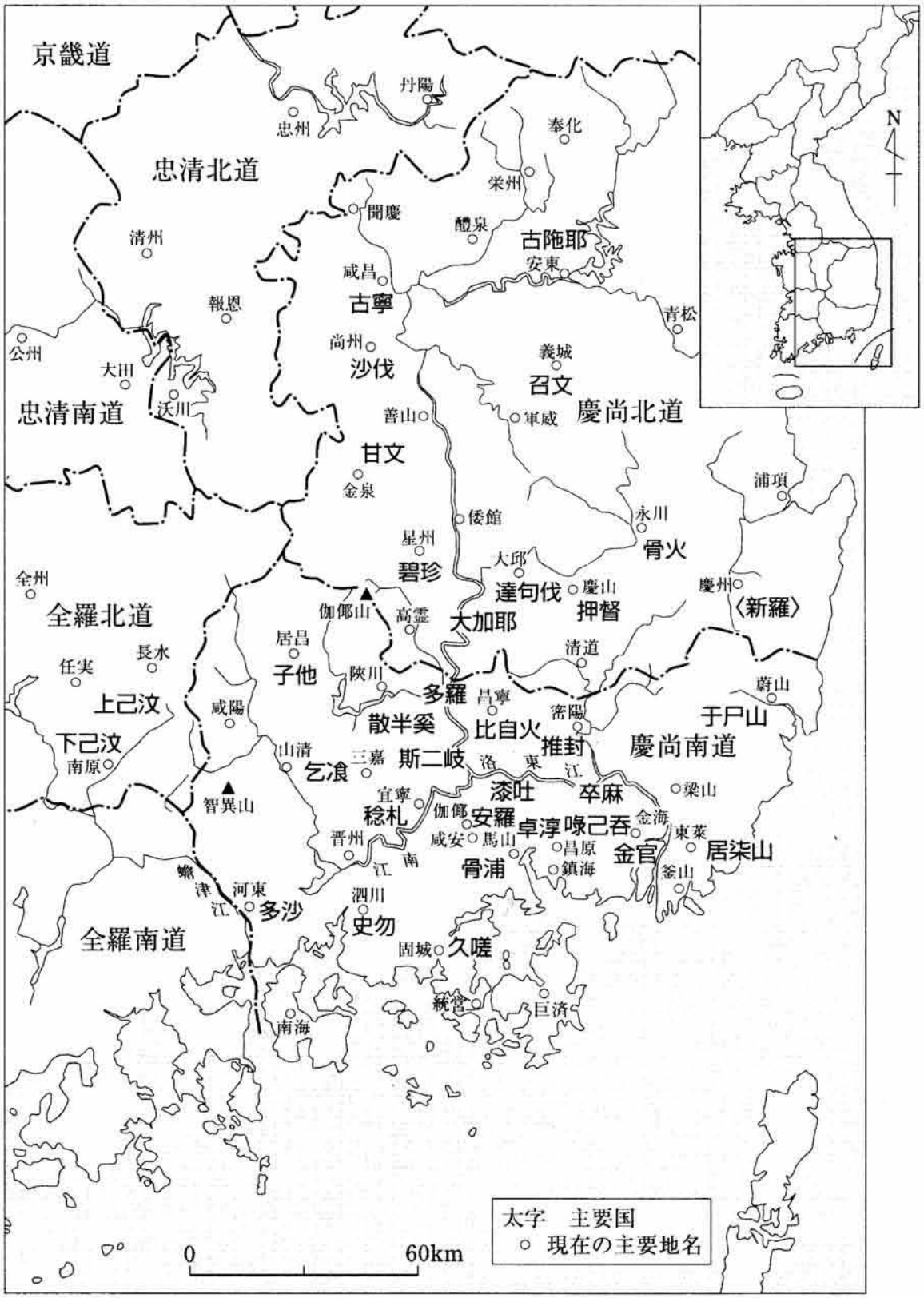
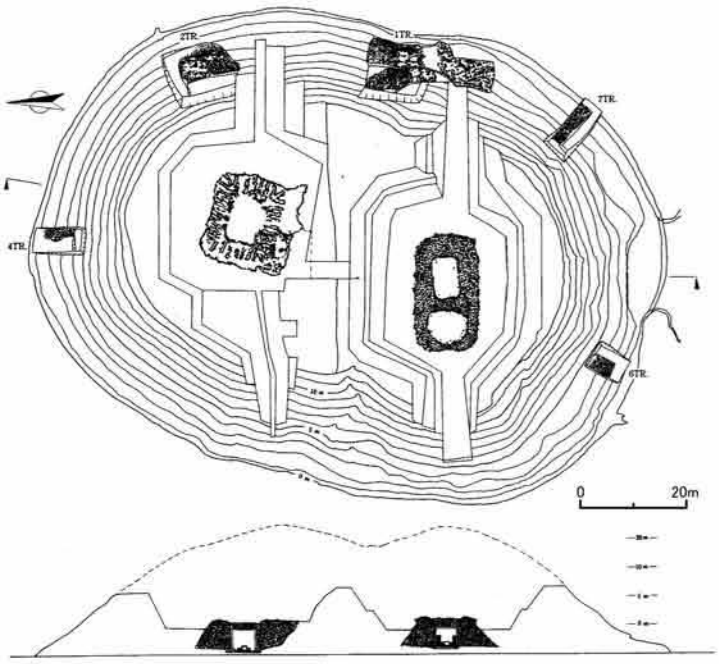
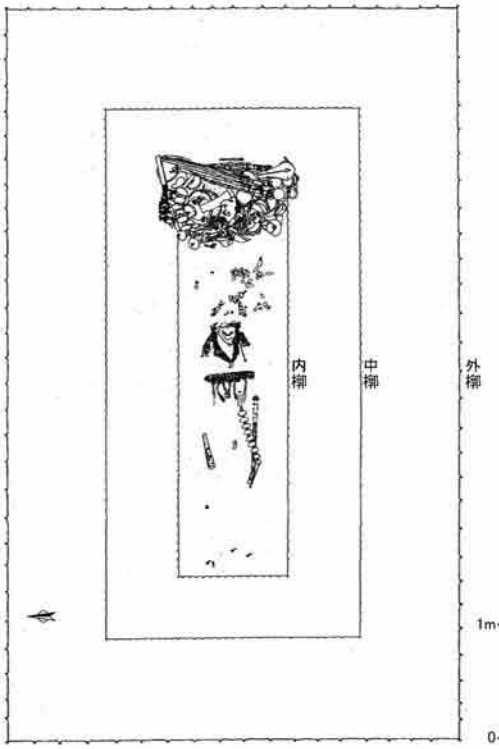


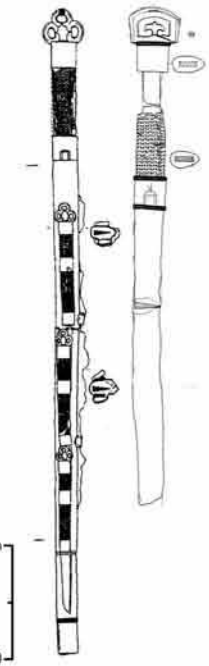
図3. 加耶諸国位置図〔田中2009〕



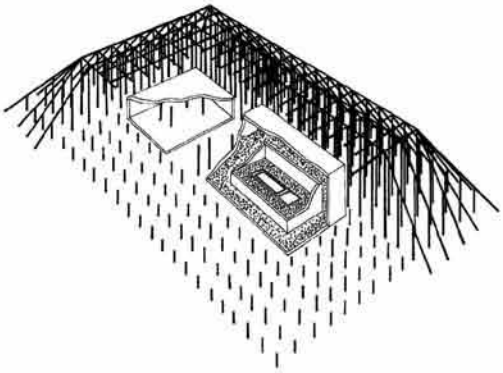
1.墳丘(双円墳)



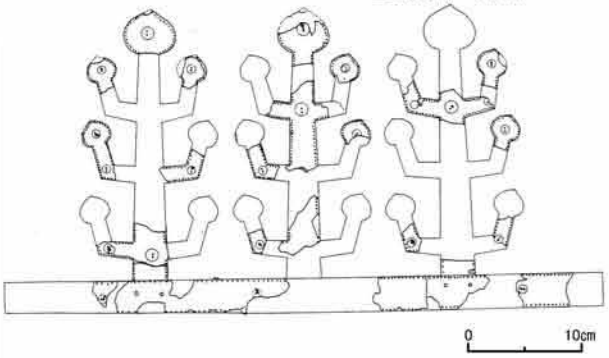
4.主棺内棺・木棺部



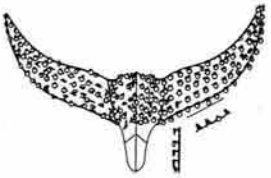
5.環頭大刀

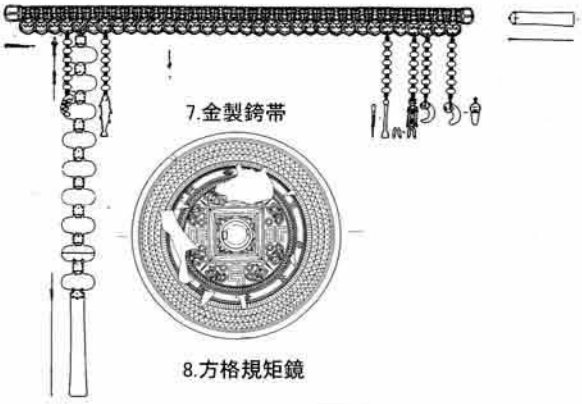


2.積石部櫓状建造物



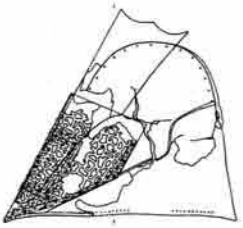
6.金銅製出字形立飾冠



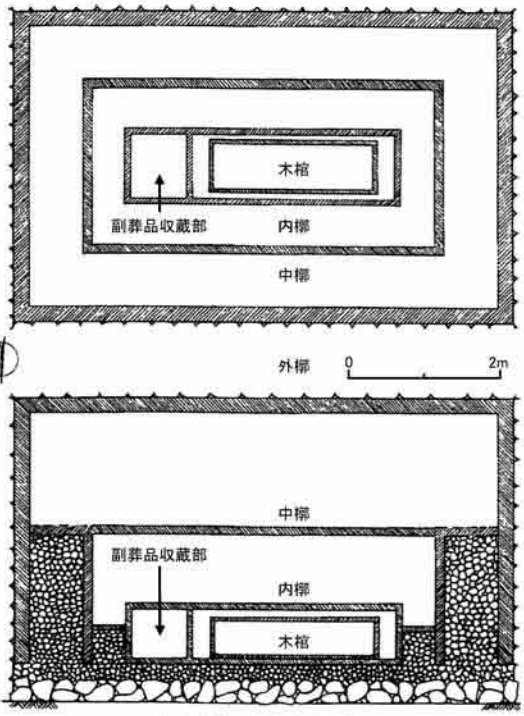


7.金製銙帯

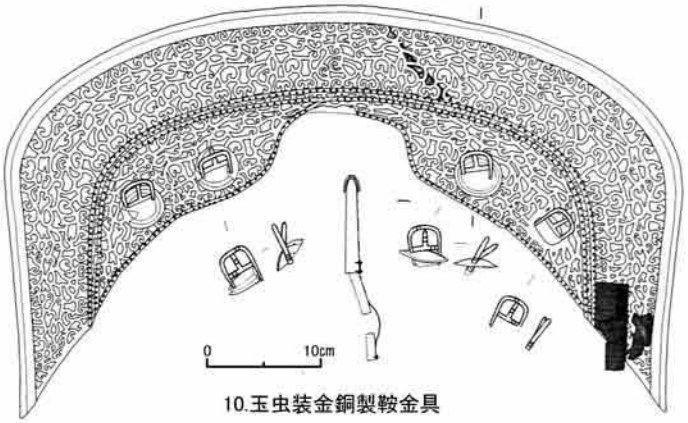
8.方格規矩鏡



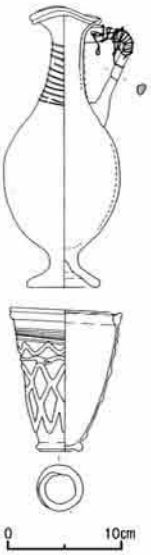
9.金製冠帽



3.南墳主棺(積石木槨墳)



10.玉虫装金銅製鞍金具



11.ガラス容器

図4. 韓国・慶尚北道慶州市　皇南大塚南墳:5世紀中葉(新羅)〔金正基ほか1994〕

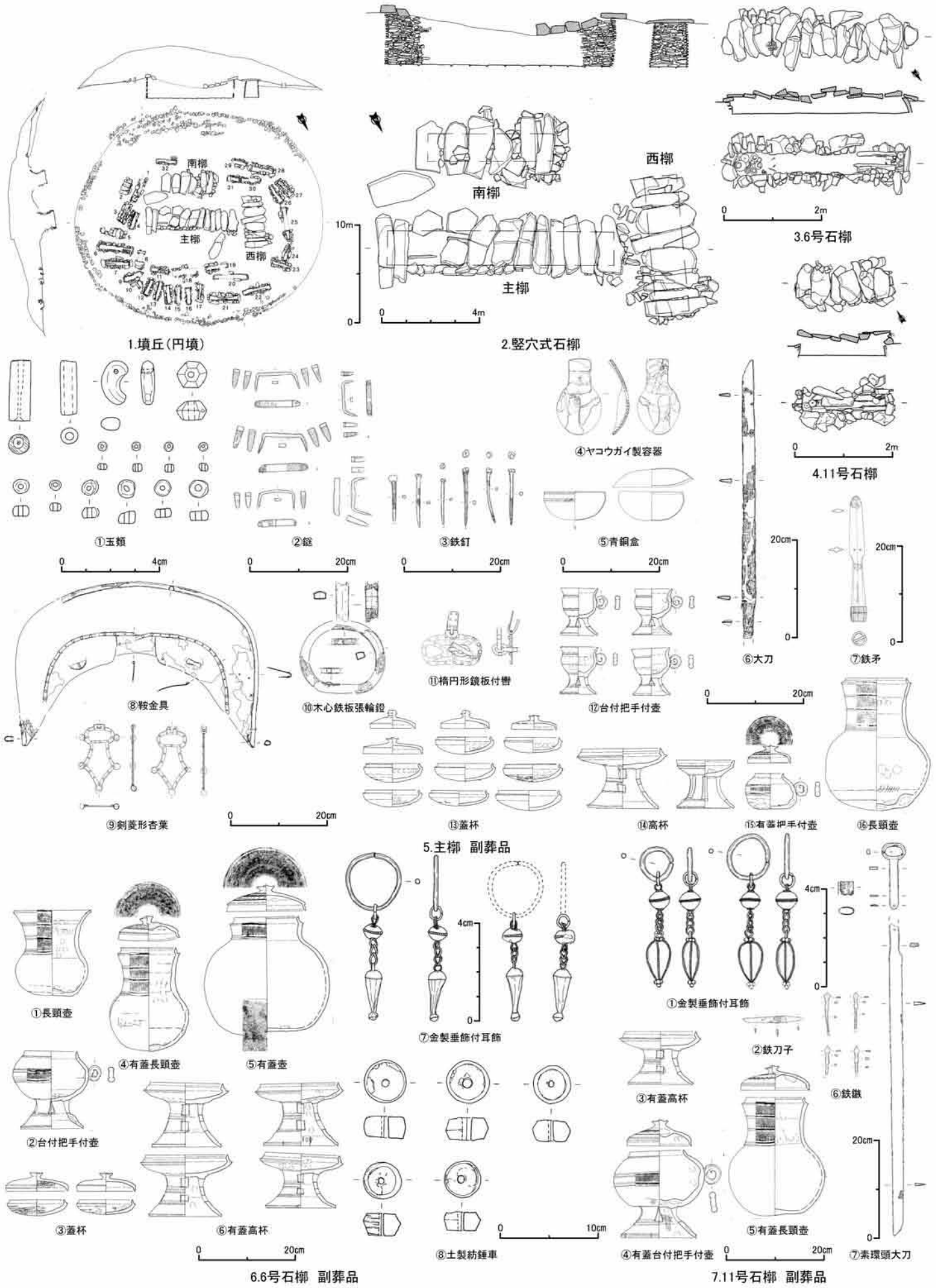


図5. 韓国・慶尚北道高霊郡 池山洞44号墳:5世紀末(加耶:大加耶国)〔尹容鎭ほか1979、朴天秀ほか2009〕

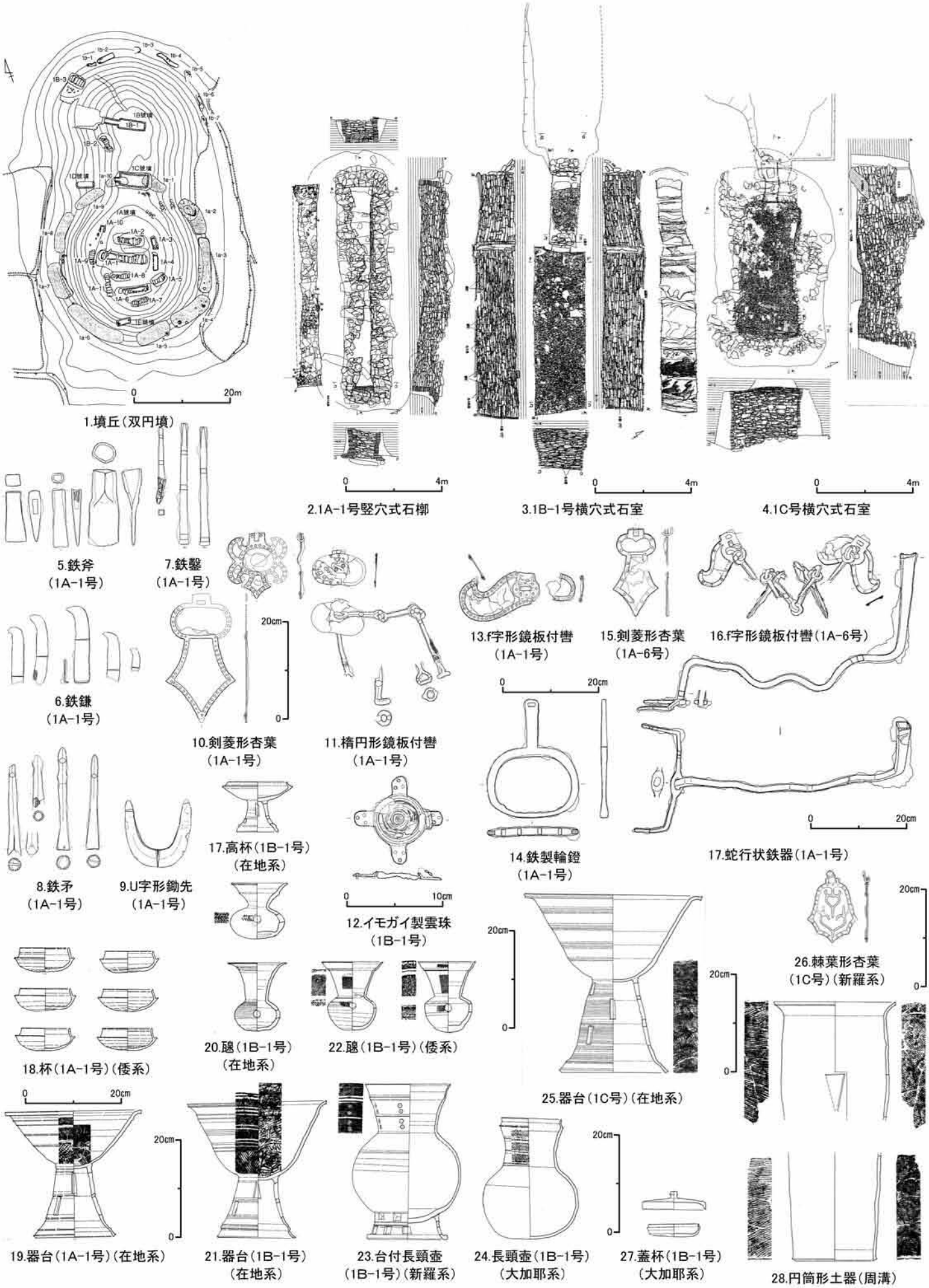


図6. 韓国・慶尚南道固城郡　松鶴洞1号墳:5世紀後半～6世紀前半(加耶:古自国)〔沈奉謹ほか2005〕

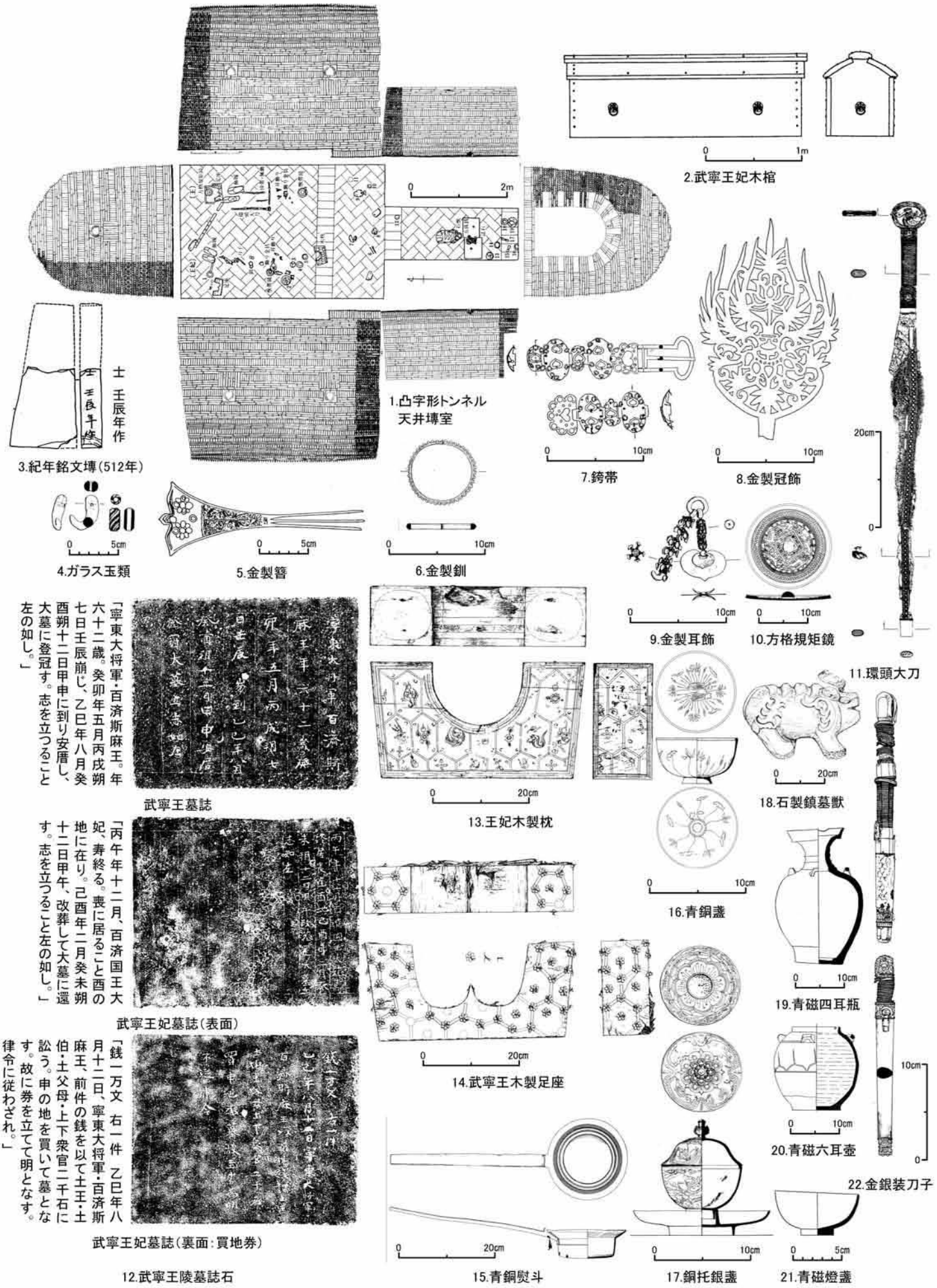


図7. 韓国・忠清南道公州市 武寧王陵(塼室墓):6世紀前半(百済)〔金元龍ほか1974〕

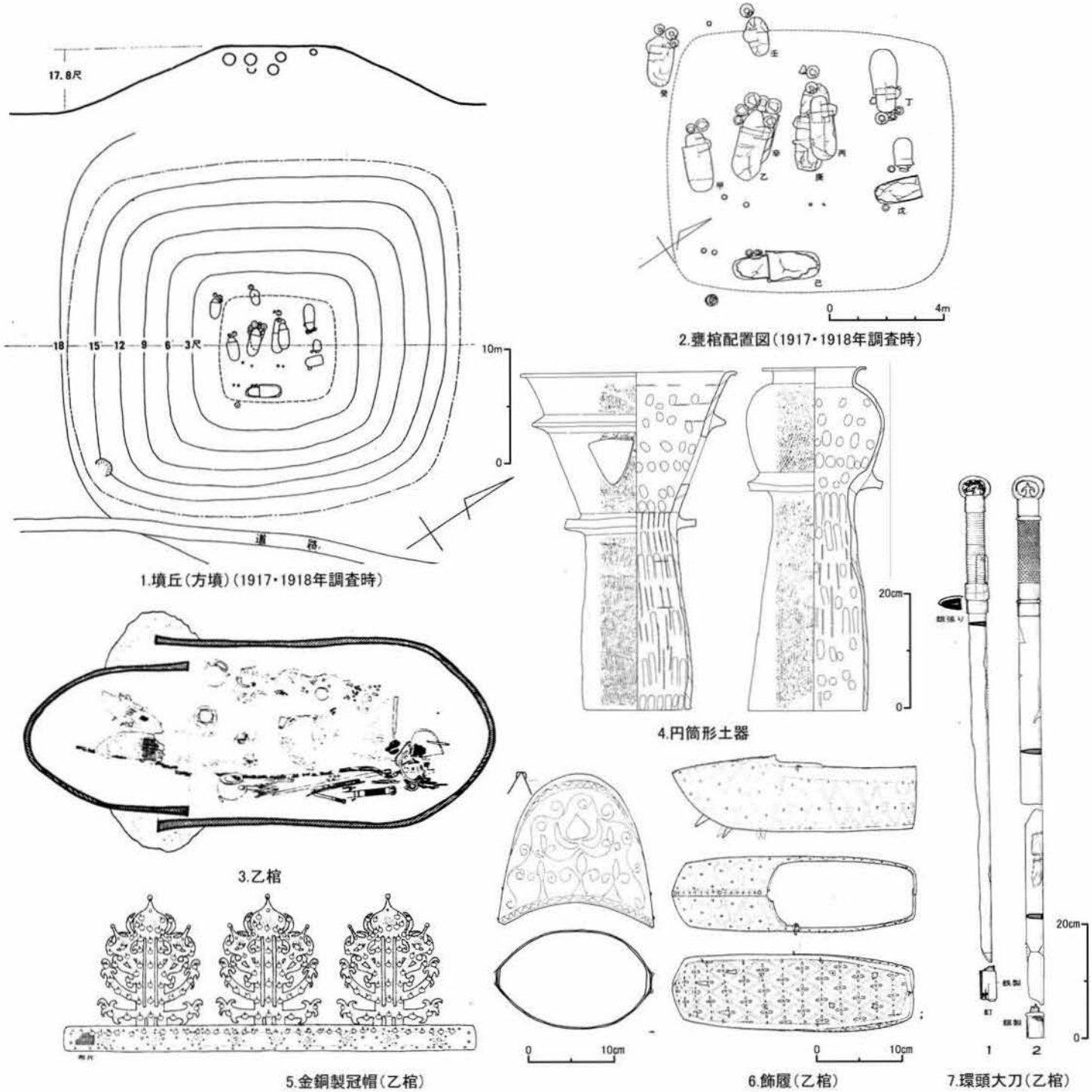


図8. 韓国・全羅南道羅州市　新村里9号墳:5世紀(馬韓)〔有光1980、尹根一ほか2001〕

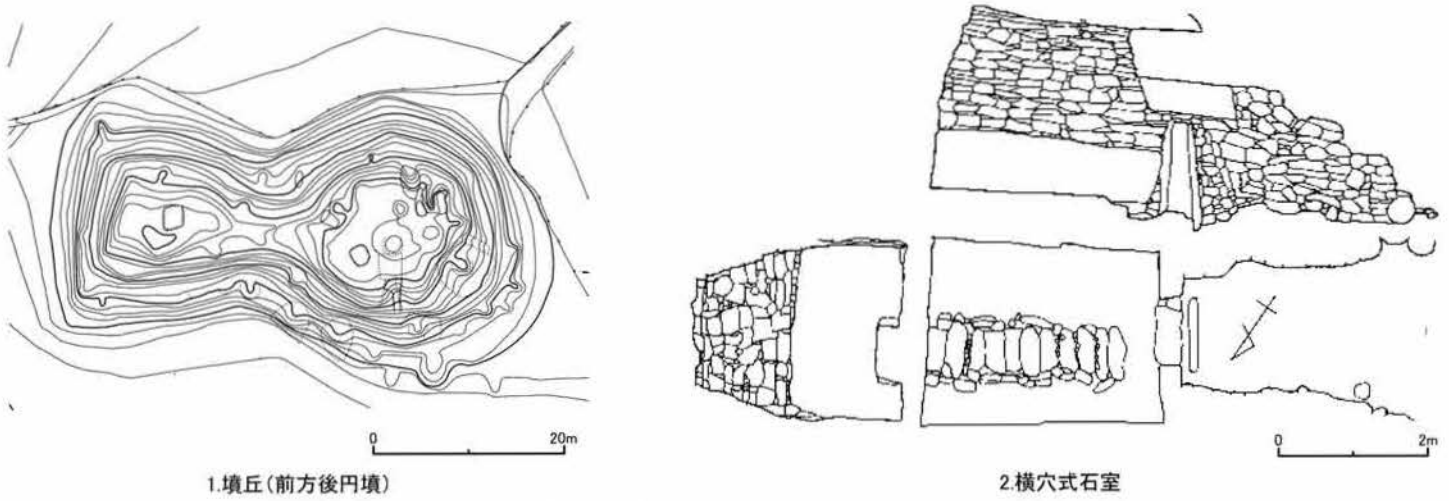
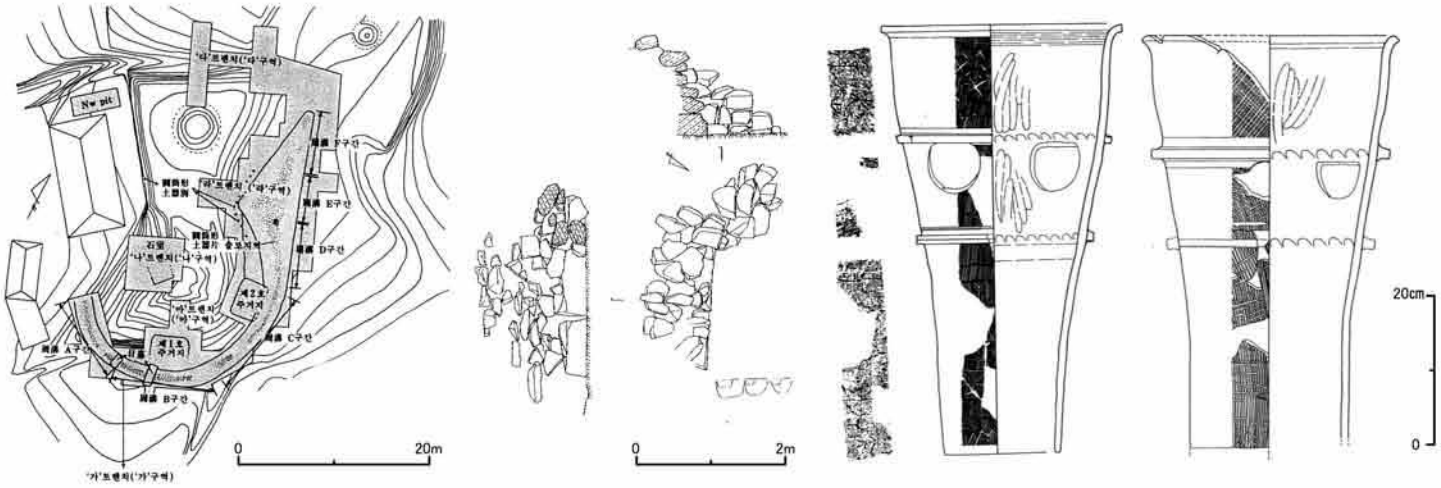
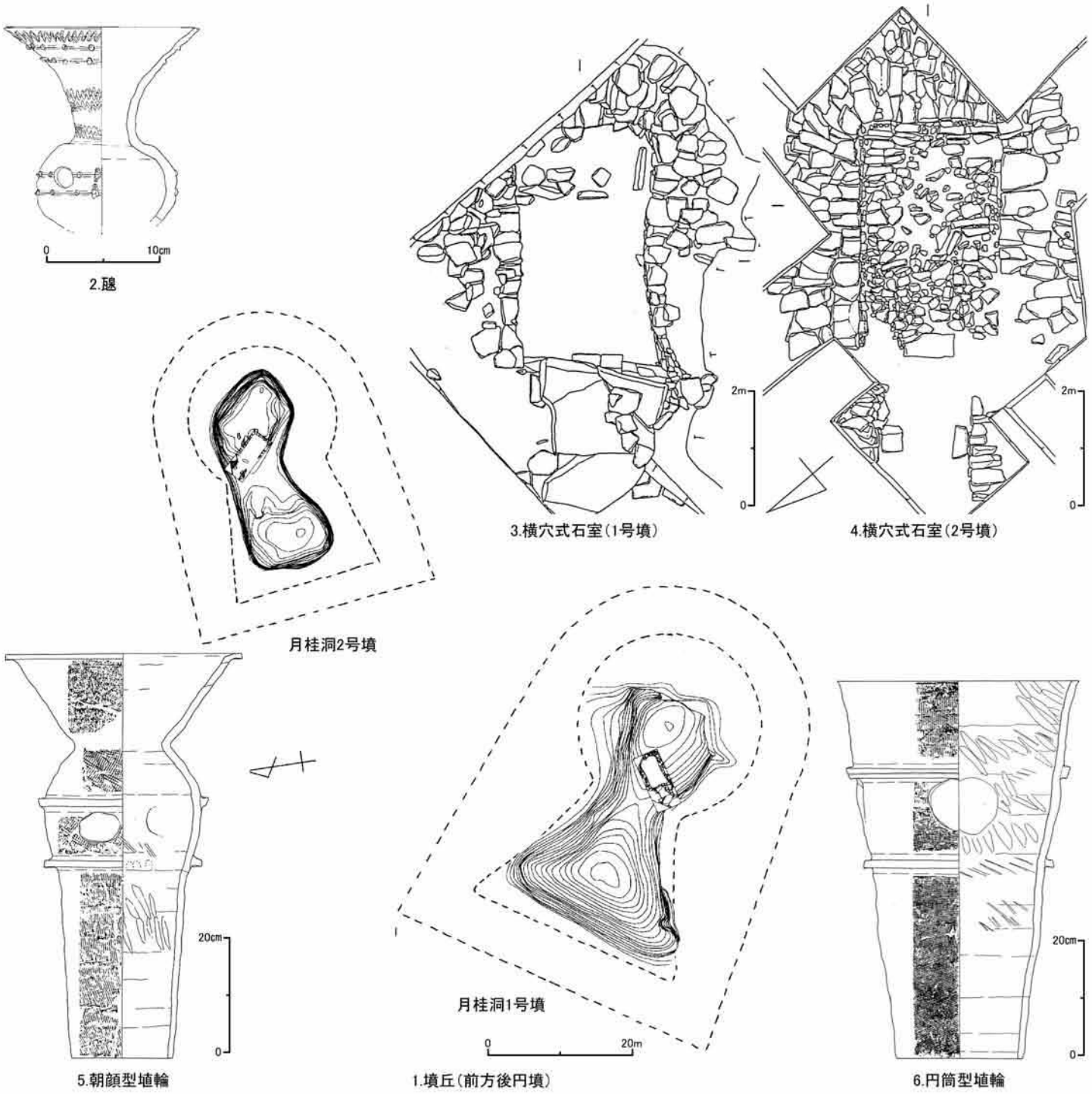


図9. 韓国・全羅南道咸平郡　新徳古墳:5世紀末～6世紀初頭〔成洛俊1992〕



1.墳丘(前方後円墳)　2.横穴式石室？　3.円筒型埴輪

図10. 韓国・光州市　明花洞古墳:6世紀前半〔朴仲煥1996〕



2.甕　3.横穴式石室(1号墳)　4.横穴式石室(2号墳)

5.朝顔型埴輪　1.墳丘(前方後円墳)　6.円筒型埴輪

図11. 韓国・光州市月桂洞1・2号墳:6世紀前半〔林永珍1994〕

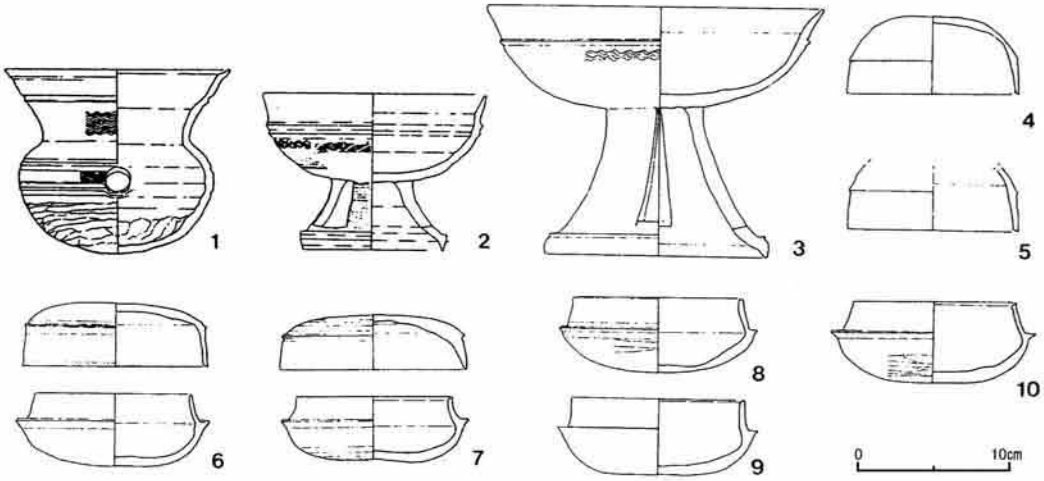


図12. 韓国出土の須恵器

1:伝・宜寧出土品、2:鳳渓里20号墳、3～5:竹幕洞遺跡、6～9:新鳳洞90B-1号墳、10:新鳳洞90A-32号墳

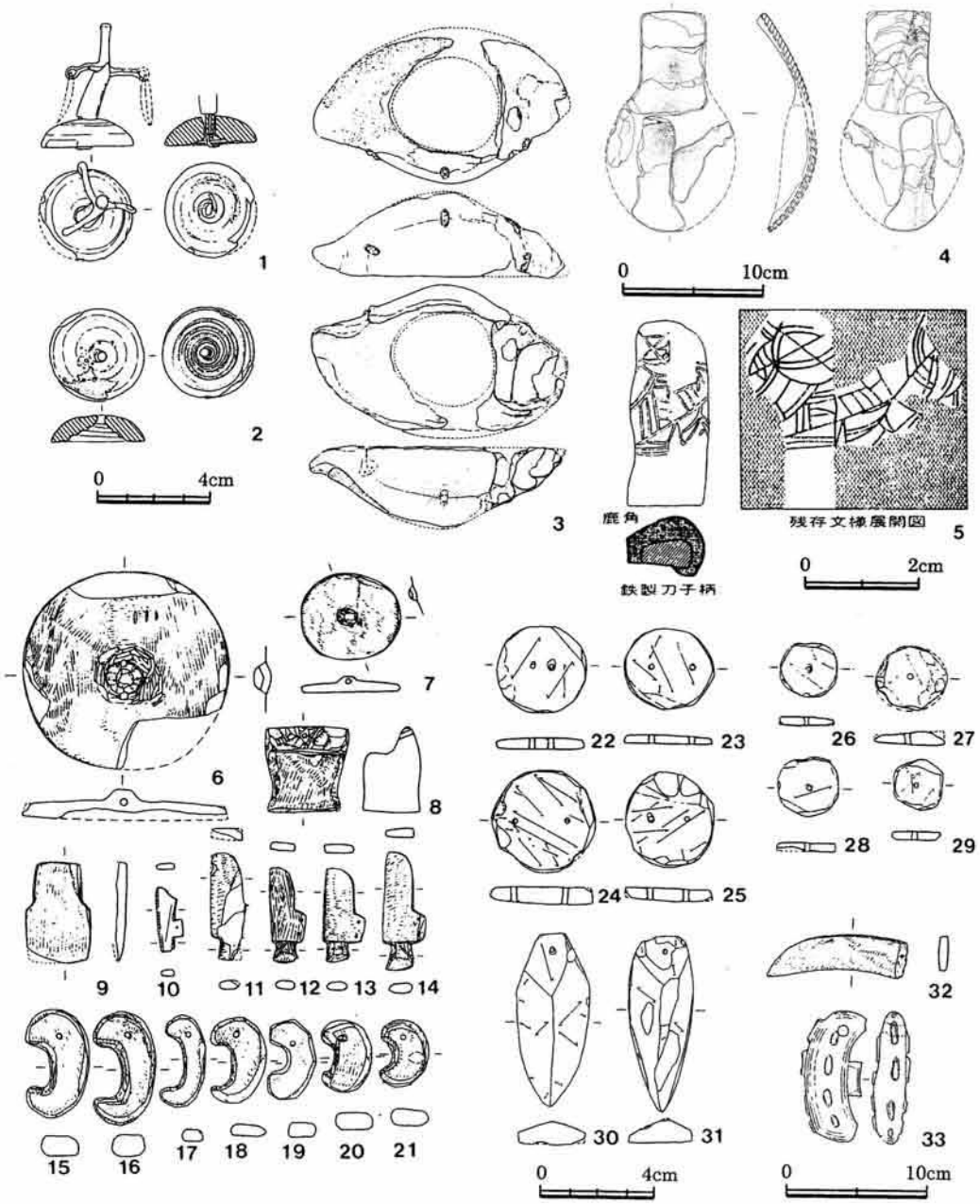
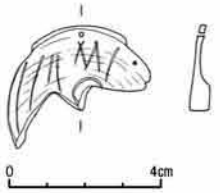


図13. 5世紀後半～6世紀前半の韓国出土倭系遺物

1・2:イモガイ製馬具、3:ゴホウラ製貝釧、4:ヤコウガイ製容器、5:直弧文鹿角装鉄刀子、6～32:石製模造品(6・7:鏡、8:短甲、9:斧、10～14:刀子、15～21:勾玉、22～29:有孔円盤、30・31:剣、32:鎌)、33:滑石製子持勾玉(1:皇南大塚南墳、2:金冠塚、3:造山古墳、4:池山洞44号墳、5:大安里9号墳庚棺、6～32:竹幕洞遺跡、33:軍守里出土品)



ギンタカハマ魚形装飾品

図14. 韓国・慶尚北道慶山市林堂洞造永EⅠ号墳
:5世紀後半(押督国)
〔鄭永和ほか2000〕

鹿角製直弧文刀装具

図15. 韓国・慶尚南道咸安郡道項里(現)4号墳
(末伊山34号墳)
:5世紀後半(安羅国)
〔今西1920〕

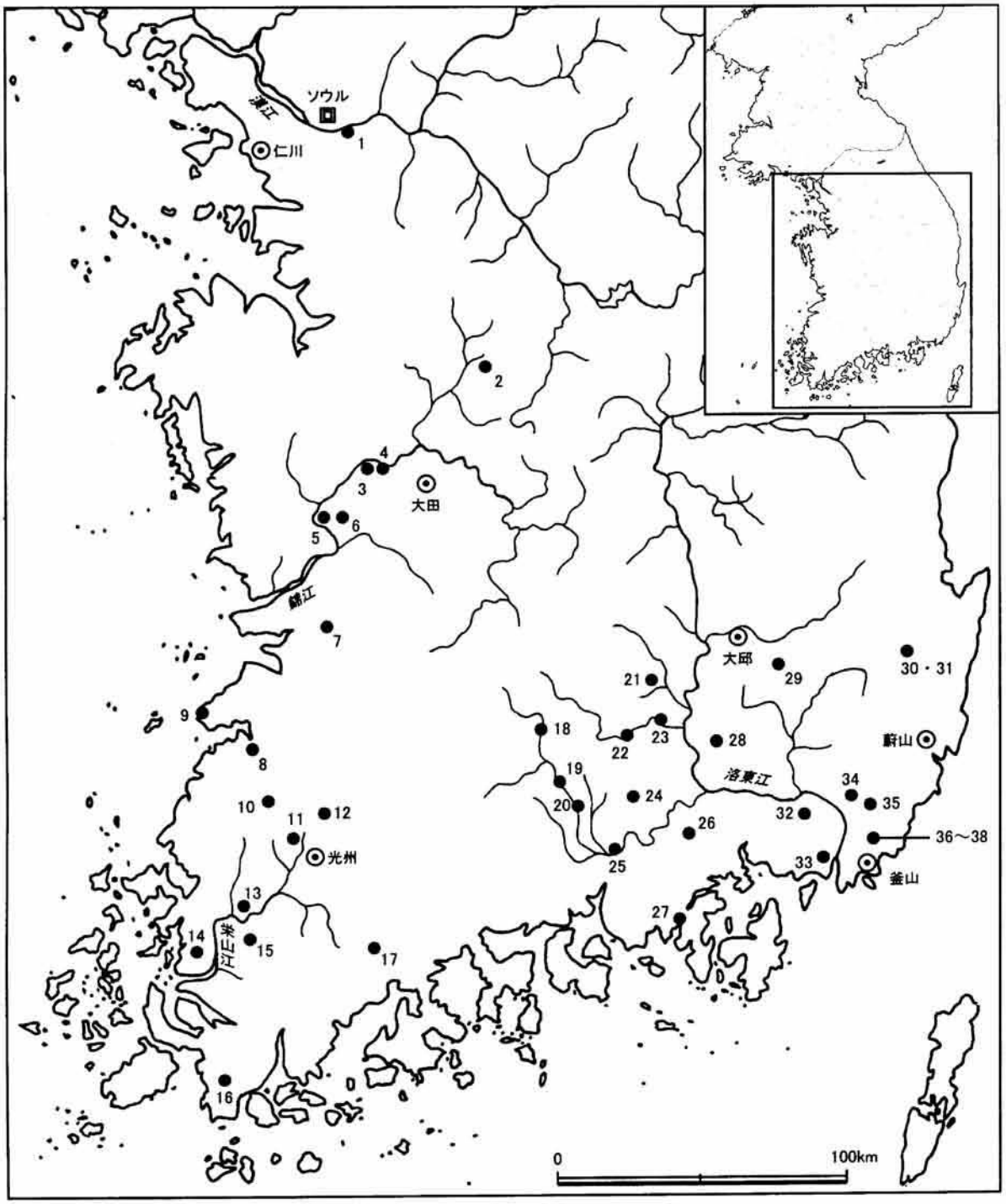


図16. 韓国出土倭系遺物の分布(5世紀中葉～6世紀前半)〔高久2004〕

1.風納土城、2.新鳳洞古墳群、3.武寧王陵、4.艇止山、5.軍守里、6.陵山里古墳群、7.益山大王墓、8.上嶝里、9.竹幕洞遺跡、10.晩舞里古墳、11.双岩洞古墳、12.斉月里古墳、13.伏岩里古墳群、14.麥浦里、15.大安里古墳群、16.造山古墳、17.大谷里遺跡、18.上栢里古墳群、19.生草古墳群、20.丹城面、21.池山洞古墳群、22.鳳渓里古墳群、23.玉田古墳群、24.泉谷里古墳群、25.晋州中安洞、26.末伊山古墳群、27.松鶴洞古墳群、28.校洞古墳群、29.林堂洞古墳群、30.皇南洞古墳群、31.路西洞・路東洞古墳群、32.豆谷古墳群、33.生谷洞加達古墳群、34.梁山夫婦塚、35.杜邱洞林石古墳群、36.福泉洞古墳群、37.五倫台古墳、38.蓮山洞古墳群(栄山江流域の前方後円墳は除外)

古代東国文化シンポジウム　パネルディスカッション

東アジアから見た前二子古墳

司会／右島和夫・パネラー／柳澤一男、高久健二、前原　豊

右島　どうも、長い時間御清聴いただきましてありがとうございます。前二子古墳を巡ってのいろいろな切り口から見ていくと、前二子古墳と、前二子古墳の時代というのが非常に多様な、豊かな内容、それから広がりを持っているということがお分かりいただけたと思います。

それで、これを踏まえて、また、いろいろ言い足りない点もあったと思いますし、これから自由にいくつかのテーマに沿って発言をいただいて、このシンポジウムを締めたいと思っております。

最初に、柳澤さん、高久さんの発表の中で朝鮮半島の遺跡、あるいは地域というのがたくさん出てきたのですが、そこで少しお気づきになったかと思いますけれど、最近は日本の研究者も韓国の研究者もそうなのですが、その地域とか古墳の名前も地名に即して命名されている場合が多いので、それは現地で呼ばれている地名の読み方で読んで行くというのが本来の姿であろうということで、従来は例えばソウルについては京城（けいじょう）といっていた時代もあったわけですし、そういうのを今なるべく韓国語の、現地での正しい呼び方、それから今度は日本の古墳の名前も、その文字の、漢字を介しての韓国語の読み方があるわけですけれども、韓国の研究者の人も日本の地名、遺跡・古墳の読み方で呼んでいるということがありますので、そういうことに皆さんも慣れていただくとよろしいかなと思いますし、それが正しい交流の本来の在り方かな、とも思いますので、理解していただくとよろしいかと思います。

それで、これから日本列島の中での近畿、北部九州、そしてさらに東アジアというもう一つ広い世界の中で見ていく、その中にかなり実際に密接な交流あるいは関係性というのが見えてきた、というのがあったかと思います。そういう中で、東アジアという名称を付けたのも、そういう枠組みの中で見ていかないと正しく理解できないと思っていますし、群馬の地域の古墳もその世界の中で見ていくと、より豊かな内容につながっていくというように思います。

まず初めに、古墳時代の上毛野の地域が一つの舞台になっていたわけですけれども、その地域性とか、歴史性という部分で率直なところでざっくばらんな地域イメージとか、日頃考えていることを少しお聞かせいただければと思います。柳澤さんから発言をお願いします。

柳澤　私は群馬出身ですから少し複雑な思いがあります。大学卒業後、九州北部の福岡に行き、その後南九州の宮崎に移って、地域の古墳を見てみますと、「ところ変われば・・・」ではありませんが実に多様だということ実感しております。

群馬に関して言えば、なんでこんなに古墳が多いのだろうと。白石先生がお話しされたように、後期の前方後円墳の数の多さは日本列島のなかで飛び抜けていることは紛れもない事実です。特に大規模なものがこれだけ集まるのは、それなりの背景があったことは間違いありません。

ところで大室古墳群の前二子古墳に焦点を絞りますと、これまで横穴式石室が造られることがなかったこの地域に、なぜこのような特異な横穴式石室がつくられたのでしょうか。ひとくちに横穴式石室といっても、たいへん複雑な構造の石造物です。40 数年前に、群馬大学で教鞭を執られていた尾崎喜左雄先生をお訪ねしたときに、「柳澤君ね、横穴式石室とはいうのは、出来上がりのイメージと必要な石材の確保・運搬、そして実際の構築を考えると、素人が適当につくったなんてありえないから、石室の平面・立面企画をしっかり考えるように」と、基本的な考え方を教えていただいたことをおもいだしました。

広い世界ですから、同時多発的に、よく似た形状・構造の横穴式石室がつくられることも否定はできません。しかし、先ほど申しあげたように、形状や構造の類似点からみて、前二子古墳の横穴式石室の直接のルーツは朝鮮半島南部の長鼓峰類型のなかでも松鶴洞 1B 号墳 1 号石室に求められる可能性がきわめて高いと思います。と申しましても、長鼓峰類型の設計図のようなものが空を飛んでくるわけではありません。石室構築には、必ず工人集団が関与します。従いまして、前二子古

墳の石室構築には、松鶴洞１Ｂ号墳１号石室の構築に関与した工人集団がこの地に渡来したとみてよいでしょう。そのためには、大室古墳群を築造した首長勢力と松鶴洞号墳のある固城の地域、言い換えれば当時の小加耶の首長勢力（王族の可能性も視野に入れる必要があります）と親密な交渉があったと予想されるわけです。

つまり前二子古墳の被葬者、あるいはその基盤である大室勢力は、朝鮮半島南部の諸勢力と交渉したということです。といっても、大室勢力の独自の外交交渉ではなく、倭王権の対外交渉に関与したと言うことだと思います。朝鮮半島から相当離れた東国の首長達も、倭王権の対外戦略のなかで重要な役割をはたした、その結果がもたらした交流の一側面と言ってもよいのではないでしょうか。

右島　かなり具体的な人の動きとか、半島との直接的なつながりというところを、上毛野の地域の古墳時代の中で見ていかなくてはならないし、それを６世紀の初めの段階なら初めの段階というところの歴史的なタイミングという部分も注意していくと、なぜ前二子古墳が半島に非常に関係の深い古墳ということがそこに見い出せるというお話だと思います。

高久先生は、埼玉大学で長く教鞭をとられてから専修大学に移られました。その後、群馬で実際の調査を高崎市で何年も大学でやられているのにかかわって、群馬を内側からも見る機会があるわけです。しかし、もともとは九州大学卒業し、それから韓国の大学に留学されました。このように、ずっといろんな地域をつぶさに見ているという観点で、最近特に群馬の地域を親しく見る機会が出てきたのかなという風なところがありますので、その辺からいろいろ話をしていただきたいと思います。

高久　やはり群馬を見ますと、先ほどから先生方がお話されているように、渡来系の文物が集中的に存在しています。特に５世紀代以降、榛名山の東南麓一帯に集中しています。これは関東の中でも極めて特異な意味を持っている地域であるということです。群馬はご承知のように海に面しておりませんけれども、これだけ渡来系の文物が集中的に出土し、しかもその系譜からは、加耶地域との関係をはじめとして、広範囲にわたる交流の在り方というものが見えてきます。特に５世紀後半と６世紀末～７世紀初頭の二時期に渡来系文物が集中的に群馬の地域から出土しています。この時期は、先ほど申し上げましたとおり、アジアの動乱期にあたります。このようなアジアの動きに、上毛野の勢力が何らかの形で関与していたと考えられます。

右島　では、前原さんはずっと大室古墳群、それから前二子古墳に青春を捧げたみたいに関わっているわけですけれども、今回のテーマであります前二子古墳を構成する要素を見てきて、そこから、いろいろなことを外側から時には見たり、それから中側から見たりされていく中で、上毛野の地域の主たる舞台というのがあるのかな、というふうに思いますので、その辺から見ていくと、群馬とか、上毛野というのは、どうでしょうか。

前原　一つは、東国の中では群馬は古墳文化が卓越した地域であることは間違いないと思うんですね。例えば太田天神山古墳という 210mの大型前方後円墳が５世紀に造られる。それから、さらに例えば浅間山古墳ですとかの大型古墳がたくさん造られている。それで６世紀になりますと先ほどの白石先生のお話にありましたけれども、雄略期に第２の画期が来ました。ここで一つ、右島さんの発表の中で金井東裏遺跡が重要な要素を占めてくるのではないかというのがありました。６世紀の初頭に榛名山が大爆発をします。やはりその中で大きく歴史が動く、雄略期の第２の画期がありながら、さらに自然災害が起こってくるというのが、群馬県の古墳のありかたが変わってくる要因ではないかということが言えるかと思います。この前二子古墳が形成された裏には、６世紀初頭の榛名山の大噴火が相当に関わってきているのではないか。かつて保渡田で３古墳があれだけ繁栄を遂げたのが、やはり２ｍ、３ｍという火山灰が積もったというような災害があったわけですから、例えば耕作地の放棄だとか、そういった壊滅的な被害を被ったことから周辺地域に前方後円墳が拡大してくる現象があります。さらに、６世紀に横穴式石室が入ってくる。ですから、古墳構築において石室を作る技術が相当高くなければできないというようなことが指摘できるかと思います。６世紀の画期の中で、自然災害があって、上毛野の地域がより大きく変動を遂げていくのではないかと思っています。

右島　ありがとうございます。私の方からも日頃思っていることを一言発言させてください。当時の群馬の人たちは、外の動きに対してすごく敏感にそれを見ているといえます。この時代をリードしていたのは近畿地方、特には畿内といわれている今の奈良県・大阪府を中心とした地域がヤマト王権の直接的な基盤を担っており、しかも古墳時代の文化を、あるいは古墳時代の歴史をリードしていると、そこをいつも非常に注意深く見ていく、あるいは、おそらく直接的な動きを西へ行って戻ってくるということが頻繁に行われてたいたと思います。それが畿内の古墳文化の大きな変化の流れに敏感に反応しているというところがありまして、そういうところがつながっているのではないかと思います。それを含めて、ヤマト王権にとって、朝鮮半島や中国の動きというものに常に注意して行動していくという中にありますので、そういう部分で、群馬の地にまで反映してくるというのはあったのだろうなと、そういう風に見てくると「濃さ」が見えてくるのではないかと思います。そういったことで、群馬の人たちも外の動きに非常に敏感な反応をしていたと思います。

次に話題を移させてもらいますけれど、調査をやって10年以上も経っていますが、前二子古墳が持っている問題というのはなかなか語りつくせないところを持っているわけですけれど、特にこういう点に注意しているとか、ここからこういう展開が予測できるのではないかとか、前二子古墳をもう少しぐるっと見てみたらこういうところが面白いよ、というところを含めて、またもう少しお話しいただけれればと思います。今度は前原さんからお願いします。

前原　平成４年に調査して、その後報告書をまとめまして、その時にこの石室はいったいどういう石室なのだろうと。とにかく、床に石が敷いてある、扉石がある、框石がある、それから玄門がある、羨門がある。さらに玄室の壁には鉤状鉄製品（フック）が残され、切り組を持つ石障風の仕切り石が玄室の一番奥にある。ということがありまして、どういう石室なのだろう、例えば九州系なのか、肥後の石室なのかどうなのか、ということでだいぶ報告書で迷ってまして、報告書ではたった１行しか、九州の要素とか、肥後の要素とか、そいったところで解決できるだろうぐらいで、ちょっと私も逃げていたものですから、やっとここにきて、18年も経って前二子の石室の着地先が見えてきたなということが言えるかと思います。

ただ、前二子古墳を見た場合には、石室だけではなくて、やはりいろいろな要素の中で、半島との交流要素があるかと思います。今日はバタバタと発表したのですが、石室、それからフック、耳飾り、小像付の筒形器台というものは、そういう複合コンプレックス的なところで半島とのある種の交流が出てくるのではないか。ですから、その辺を一つ一つ解釈しなければいけないのですけれども、それを含めてもっと全体的に解釈する方法を見つけないと、前二子古墳の出自だとかが解決できないのかなと思います。ただ、今日柳澤先生や高久先生の話を聞いて、だいぶ14年前の頭のモヤモヤがとれたのはよかったと思います。

右島　では、高久さん、どうでしょう。

高久　そうですね、今の前原さんのお話にあったように、前二子古墳のいろいろな要素が興味深いわけですが、その中で何か一つということであれば、私が注目したいのは、やはり小像付筒形器台です。これは今までも注目されてきた土器ですが、亀、鳥、それから蛙を狙う蛇の小像が付けられています。

このような小像付土器は朝鮮半島の新羅に多くみられるものです。今となってはこれらの小像の正確な意味はわからなくなってしまいましたが、当時の新羅の人たちは、これが何を意味するものであるのかを当然理解していたはずです。その背景には、これらの小像をめぐる何らかストーリーや思想があったものと思われます。前二子古墳から新羅と同じ小像付土器が出土しているということは、前二子古墳を造営した集団が土器に付けられた小像に関して、新羅人たちと何らかの共通理解をもっていた可能性があるのではないかと思います。つまり、単に土器の形態が似ているというハード面だけではなく、その背景にある思想などのソフト面も共有していたのかもしれません。このような内容は、なかなか考古学的に実証することが難しいですが、これらを示唆してくれるのが小像付筒形器台ではないかと考えております。

右島　柳澤さん、お願いします。

柳澤　平成４年度の調査の時だったでしょうか、その当時群馬県史編さん室におられた石川正之助さんからお電話をいただきました。たしか、前二

子古墳の石室床面にとてつもない大きな敷石が使われているけれども、そういう事例が九州や朝鮮半島にないだろうか、ということでした。

その段階では例がなかったとおもいますので、お役には立てませんでした。その後の調査で、光州の月桂洞（ウォルゲドン）１号墳の玄室がやや大きめの床石を使用しているらしいのですが、詳細はよく分かりません。なお、造山（チョサン）や龍頭里（ヨンドリ）古墳などでは、玄室を巨大な一枚の板石で床面とする例がありますが、これともちょっと違いますね。

それから、前二子古墳の石室の奥壁は大きな石の２段構成、２段積みです。これは王山古墳もこれに近い構造です。それから、この手の大型石材の２段構成というのは、その後この上毛野で続きます。高塚古墳が典型例ですし、正円寺古墳でも腰石を使用しています。このような腰石使用は、北部九州型あるいは長鼓峰（チャンコボン）古墳などに共通しています。

いずれにしても全く見当の付かないのが築瀬二子塚古墳の石室系譜ですが、これからも追々考えていきたいと思っています。

右島　今のお話にもありましたように、実は群馬の 西よりの地域の首長層､豪族層がほぼ一斉に横穴式石室を採用することになります。時期的には非常に近い時期に、その中には特徴を共有している部分もあるのですが、それとは逆に、柳澤さんの話にありましたように、１つ１つを丹念に見ていくと、簡単に言うと全然顔つきが違う、特には前二子古墳、それから王山古墳が丹念に調査されていますし、築瀬二子塚古墳も含めた３つが丁寧に調査されていて、石室の様子がよく分かったのですが、それがずいぶん３者３様で、違いの部分も見えてくるわけです。共通している部分ももちろんあるわけですけれども、群馬の地域の中で、頭出しのところで生み出されたという風にはなかなか言えないところがありますから、それはほとんどないと思いますので、何かもとになる、祖形になるものがそれぞれにあったのだろうな、それは共通ではないかもしれないという感じがします。そういう点で、この前二子古墳を含めて最初の段階に群馬の地域、上毛野の地域に登場してくる横穴式石室のルーツを､今日は柳澤さんの方で、前二子古墳について、１つの仮説を出してもらいましたが、そういう作業が必要になってくると思います。

私も、資料の 28 頁のところに、壁面に鉤状のものが差してあるというものがあって、先ほどは時間がなくて全然触れられなかったのですけれども、思わせぶりに写真だけ出しておくのはおかしいとある人から言われまして、ほんのちょっとだけそれに触れますけれど、この一番下は高久さんの話でも出てきましたが、武寧王陵という百済の王陵の塼という、言ってってみれば煉瓦のようなもので作った石室、まあ「石室」といわせていただきますが、「塼室」というのが正しいでしょうけれど、その壁面に鉤状の鉄が差し込んであるのが、結構数多く見つかりました。

それで、ちょっと失礼なのですが、韓国ではこのことについて深く掘り下げた研究がされていなかったので、注意はあまり上ってこなかったのですけれど、つい何年か前に『武寧王陵の再検討』という報告書が出ました。この見事な、きれいな写真が提示されまして、すごいいい状態でこの鉤状鉄製品が差し込まれた状態でずっと残っているというのが出てきたんです。これで、これは前二子古墳より少し後になりますけれど、おそらくここにもう１つ高久さんの話の中で中国の南朝との非常に深い関係の中でこの古墳が造られているということがわかるということですので、その辺にまたもう１つ、このフックをかけて、埋葬している空間に関わっているものなのか、１つは、群馬ですと観音山古墳で布状の部分がフックに付いて出てきているという状態もありますし、先ほどの柳澤さんの話の中で、松鶴洞（ソンハットン）という小伽耶（ソガヤ）の古墳では布片ですか、布痕跡が石室の中に認められるというので、何かこう布幕状のもで覆われていたり、もっとこうテントみたいな状況で、ということも考える必要があると思うのですが、そういうのが中国の中で結構いろいろな類例があって、そのもとをただしていくと、王のいる場所を示す、そういうのに、幕で囲った空間といいますか、そういう部分が王の居場所、亡くなってからだけではなくて、生きているときも、布で覆われた仮設のテントみたいなものを移動してそこに王はいると、どこかに出かけたときにも必ずそういうものを持って行ってやるというのがあるんだと、中国の研究者の方に聞いたことがあるんですけれども。

そういう王との関係で、支配者との関係で、そういう総合化といいますか、そういう世界が、空間を、王の世界を作るみたいな、そういうものが入ってきたのが来るのかなあと。そういう意味で

言いますと、今のところ朝鮮半島、日本列島の中で、前二子古墳が一番古くなってしまいますので、おそらく、そうは思えませんので、さらに注意をしていくと、これからの資料の中でもそうですけれど、朝鮮半島に、前二子古墳に近い時期のものが出てくる可能性を待っているというところです。

さて、時間もだいぶ経ってきましたので、そろそろ最後の方になっていくのですけれど、最後に、前二子古墳が造られたころ、あるいは造られた前後も含めての時代について、どんな風に考えておられるかというのをお話しいただいて、終わりにしていきたいと思います。柳澤さんからお願いできればと思います。

柳澤　あまり具体的なお話はできないのですが、前二子古墳がつくられた6世紀の早い段階は継体大王の時代です。継体大王は複雑な即位事情を持っていますが、百済の武寧王との信頼関係のもとに、積極的な百済支援を行っています。なかでも、百済の国力回復のための領域拡大の支援と併せて、先進文物や技術・情報を入手するために列島各地の勢力が朝鮮半島南部に派遣された可能性が大きいと思われます。朝鮮半島南部に分布する倭系古墳の内容や渡来系文物の出土例を参考にすると、九州中北部勢力が主導的ですが、吉備・紀伊・若狭や上毛野などはじめとする各地の勢力が現地に赴いたのではないでしょうか。

いっぽう、6世紀前葉頃の百済・加耶・新羅の関係はきわめて複雑です。なかでも百済と大伽耶（テガヤ）は、蟾津江（ソムジンガン）を挟んで対立しており、514 年に百済が蟾津江下流域と多沙津を領有化すると、大加耶は新羅と結んで百済や倭と敵対関係に入りますが、529 年には新羅との同盟関係を解消しています。

前二子古墳の被葬者と小加耶との関係は、百済と大加耶が敵対関係に入る前に形成されたことは報告のなかでお話ししたとおりです。このような微妙な政治関係の中で、かなり難しい立場に置かれるようなこともあったのではないでしょうか。

百済が栄山江（ヨンサンガン）流域を領有化し、さらに洛東江下流域の加耶（金官伽耶）を領有化した新羅とも対決していく、そういったきっかけになった、微妙なバランスの上に成り立った時代が6世紀前葉から中葉にかけてはないかと思います。

右島　ありがとうございます。ここのところで、継体天皇というのが出てきましたけれども、それがまさしく、この前二子古墳の前後する時代の近畿の大王になっていくわけですけれども。それで、柳澤さんがおっしゃられたように非常に動きのある中で、それで複雑な背景をもってる中で継体というのが継いでいく、一方で九州ですと、磐井の乱という大事件が起こるような出来事があったのがその時期ですし、そういう中で、ヤマト王権と地域の豪族層、首長層との関係を考えていく必要があると思いますし、そういう中で見ていくとまた、活発な動きの中に上毛野の首長層も関わっていた可能性というのが非常に興味深いというところです。高久さん、どうでしょうか。

高久　6世紀前半の朝鮮半島は非常に複雑な時期であり、加耶諸国がいろいろな動きを見せ始めます。金官国は5世紀前半ぐらいから勢力が衰えて、532 年には新羅に投降してしまいます。つまり、倭がそれまでもっとも重視してきた洛東江下流域が新羅の勢力下に入ってしまうわけです。当時の倭は、『宋書』倭国伝に記された倭五王の上表文の内容からもわかるように、朝鮮半島の関係を極めて重要視しており、積極的に関与しようとする意図が見えるわけです。洛東江下流域が新羅に領域化されてしまった後に半島との関係をどうするのかという問題が生じたわけです。その後、重要になってくる地域が古自国や安羅国です。もちろん内陸の大加耶国が中心ではありますが、古自国や安羅国などの南部地域の加耶諸国が新羅に統合されてしまうと、大加耶勢力は完全に孤立してしまうわけです。倭も古自国がなくなると、南海岸地域との接点を失うことになります。6世紀前半というのは、急速に台頭してくる新羅勢力に対して、いかに加耶地域を存続させるのかを巡って各国が様々な動きを見せる時期です。列島の古墳の副葬品や半島の倭系遺物などにも、これらの東アジア情勢が直接・間接的に反映されているのではないかと考えています。

右島　学校の夏休みに入ったあとちょっと時間があって、高久さんと韓国へ行ってこようと、短期間にさっと行き帰りしたのですけれども、その時に今、高久さんが言われた伽耶の地域の何カ所かを見てきたのですけれど、もともと伽耶という地域と日本列島との関係が非常に深い中で推移してきている。ある意味太い半島とのパイプによって、

それは伽耶という地域がすごく激動の中で、新羅と百済に挟まれたような地域ですから、その中で、確固とした国家としての基盤を持っていたわけではないので、すごく動くわけですね、そういう中で、それでまた日本列島、倭国にとってはそこが大きなパイプになっていますから、そこに、いろいろな形でつながりを持とうというのが。それが盛んに遺跡の調査を地域で今でもやっておりまして、博物館とか、遺跡や古墳の整備も非常に進んでおりまして、そういうところを訪れていく中で、非常に日本列島との関係がよくわかるというところがあります。

そういうのも含めまして、機会がありましたら、最近は韓国の博物館も日本語の説明が非常に一般的になりつつあります。それからもっといいなあと思うのは、入場無料である博物館が非常に多いのと、写真を自由に撮影できるのですね。どこの博物館も、どんな新羅の王冠も、どうぞどうぞという感じで、ストロボさえ使わなければ自由に撮影できるのでありますから、北海道へ行くよりもソウルへ行く方が安く行けますので、ぜひ機会があったら足を運んでいただけるという気がします。前原さん、最後にどうですか。

前原　6世紀というのが日本国内でも一つの画期になってきて、また半島の事情の中でも三国と伽耶でだんだん変化していくという中で、前二子古墳というのを位置付けなくてはならないということを重々感じました。

その中で石見型製品が、月桂洞1号墳から確か木製品として見つかっているんですね、石見型製品は埴輪や石製品、木製品がありますが、埴輪がほとんど主体なんですね。関西地方に圧倒的に多く、奈良、大阪、兵庫それから京都府内からすでに200本近い数が見つかっています。それから奈良盆地あたりで木製品がたくさん見つかっているおり、古墳の周堀に立てられた状態で出土しています。木製品は奈良県桜井市あたりでたくさん見つかっているのですけれども、それが瀬戸内から北九州へ行きますと、いわゆる石人石馬の中に石見型が現れるのですね。ですから、現在の状況ではどちらかというとやはり石製品が主体的ですが今後埴輪や木製品も出る可能性は高いと思います。その石見型木製品が月桂洞1号墳で出土したという事実は、少なからず石見型埴輪を持つ50mという中規模の前方後円墳グループの豪族も朝鮮半島経営に参画していたのではないかという事が考えられます。

石見型埴輪型を出土する古墳の中で前二子古墳は、全国1、2位を争う大規模な前方後円墳であります。その辺のところが、先ほど白石先生がおっしゃられた、かなり朝鮮半島の軍事経営に加担している可能性が高く、頻繁に半島との交流を重ねいろいろな文物や技術、人材を入手できたのではないかと考えられます。

そのほかの例えば、61頁の図13の6番ですね、これは日本国内のものですけれども、これも松鶴洞の1号墳からこういった杏葉が見つかっていますから、前二子古墳から出土しているものは、ズバリじゃないですけれども、いろいろな要素の中から見ていくと、やはり半島との要素が見え隠れしているのではないかと。それをまあ最終的に集大成した倭が石室を担っていくのではないかと、そんな感じで今とらえているのですけれども。

右島　今の「石見型」と言っているのは、石見遺跡という、最近調査をやり直したら、古墳であるということがわかってきたのですけれども、前は、水田のところから下を掘ったら出てきたので、古墳というのになかなか気づかない中で扱われていたんですけれど、それが古墳に立てられていた埴輪であったということがわかったのですけれども、それとヤマト盆地を中心としたところですけれど、5世紀後半から6世紀前半にかけての古墳から、木製品というのは、言ってみれば「木の埴輪」みたいなものですけれど、それでこれと同じ形のものが、結構非常に多く出てきますので、近畿では事例が多いのですけれども、もう東へやってくると非常に少ないので、これを持って行くことの意味というのも非常に注意しなければいけない点なのだなということが、今も指摘してもらいましたけれども、わかるところです。

いろいろここまで話をしてもらってきましたけれど、そろそろ時間になってきました。それで、これは前二子古墳という一つの古墳を通して、考古学の、前二子古墳を構成する資料、要素をひも解いていくと、いろいろな広がり、それからまた前二子古墳の性格を深く考えていくという、そこから上毛野の地域だったり、東国、さらにはこの時代の中枢地域であった畿内との関係、それでその畿内は、日本列島全体が東アジアの歴史のうねりの中に大きく組み込まれてというか、参画してというか、その枠の中に入っていくという中から、そこのところにも、非常に活発な交流、今は何か

ぎくしゃくしたところがありますが、昔は中がよかったんじゃないかと思うぐらいですけれど、そういう動きがあって、実際にこの群馬の人たちも、西へ、日本列島の中の西の地域へ行き、さらには朝鮮半島にも足を延ばしている人がいたんだろうなということが、今日のいろいろなお話の中で見えてきたのかなというふうに思います。

そんなことでまだまだ上毛野の地域、群馬県の地域にはたくさんの興味深い古墳がありますので、こういう試みの中でより熱く、深く、私たちの住んでいる地域というものの歴史というのが掘り下げていくことが可能かなというふうに思います。まあそういういことでですね、ちょっと時間的には最後、短く終わってしまいますけれど、その辺いろいろとこれからまた、我々もより具体的な歴史が明らかになるように頑張っていきたいと思いますし、皆さんもぜひ関心をもって、これに関わっていただければと思います。この辺で討論の方は終わりにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

【質疑応答】

質問①　放送大学の学生ですけれども、右島先生には、考古学の面接授業で現地を見させていただきまして、まさに東国文化のすごいところを見させていただいたわけですけれども、そんなところに住まわせてもらっているのだなということで、ますます考古学が好きになってしまいまして、今日また話を聞かせてもらいに来ました。

その中で 34 頁に柳澤先生の横穴式石室墳の編年の表があるんですけれども、これを非常に興味深く見させてもらって、今日の前二子古墳とはちょっと外れるかもしれませんけれども、九州からのルーツで来ていると、それでこの 400 年をもうちょっと左に行くと 300 年代、卑弥呼の時代になっていくわけですけれども、邪馬台国のルーツがこんなところからも分かれてくるかなと、それともう１つこの表にですね、横穴式石室墳それから中国、韓国のが重なるとまたもっと違う展開ができるような気がするんですけれども、その辺がもしわかったら教えていただけたらと思います。

回答①（柳澤）図２の「日本列島における横穴式石室の築造過程」に関するご質問ですね。一番上の段、400 という数字が書いてありますがこれは西暦 400 年、４世紀と５世紀の境目ということになります。卑弥呼云々というお話がありましたが、卑弥呼は西暦 250 年の少し前に亡くなっていますから、この図の一番左よりもさらに 100 年以上遡り、直接は卑弥呼とは関係ないと思います。それと、ご指摘のように、この図面に対応する中国や朝鮮半島の横穴式石室墳のシートがあるとわかりやすいですね。

また、報告のなかでも申しあげましたが、横穴式石室は一つの墓室に複数の遺体を安置するため外部との出入りが可能な開閉装置や通路を設けた構造で、中国の横穴系木槨墓室に起源をもつもので、紀元前よりも少し前に出現した新しい墓制です。

それから朝鮮半島ですけれども、現在の朝鮮の平壌（ピョンヤン）周辺は、前漢から魏にかけて中国王朝の領域となり楽浪郡が設置されていました。この地域の墓制については高久先生のご専門ですが、横穴系墓室としては２～３世紀にかけて複数の遺体を埋葬した木槨墓やレンガを積みあげた塼室墓が出現します。

それでは、朝鮮半島に固有の人々が一体いつから横穴式石室を採用したかというと、その楽浪郡を手中に収めた高句麗では遅くとも４世紀の前半から半ばくらいには横穴式石室を築造したと考えられています。高句麗の南に接する百済は、遅くとも４世紀後葉くらいには横穴式石室を採用した可能性が高いと思います。それから伽耶地方では、羨道をもたない横口式石室が５世紀の半ばくらいには出現したようです。そして新羅中心部の慶州（キョンジュ）の周辺で考えれば、６世紀の前葉頃に積石木槨墓から横穴式石室にシフトしたらしい。

日本では、４世紀後葉頃の九州北部に横穴式石室が出現します。白石先生のお話の中にもありましたが、百済と倭が４世紀後葉に同盟関係を結びます。その段階で、百済支援のために九州北部の勢力がかなり動員されたようです。派遣された首長勢力は百済の有力者と接触し親密な関係を持つこともあり得たわけです。そういった人々が帰るときに、百済で採用されていた横穴式石室の一部を取り入れる、石室構築工人たちを連れてくるようなこともあったのではないかと思います。

九州を除きますと、５世紀後葉からに６世紀前葉にかけて百済系の横穴式石室が本格的に造り始められますが、それは倭王権が横穴式石室を公的埋葬施設として取り入れたことによるものと思います。よろしいでしょうか。

質問②　九州の石室ですけれども、王族クラスの人たちがおられてこれだけのものを作られたということであると、権力の中心がある程度九州地方にあったというふうに考えてよろしいのでしょうか？

回答②（柳澤）　いえいえ、九州の人たちが百済に赴いて軍事活動を行ったというのは、あくまでも倭王権主導だと思います。繰り返しますが、畿内王権と連携して、九州中北部の首長層が百済に派遣された行動と考えています。

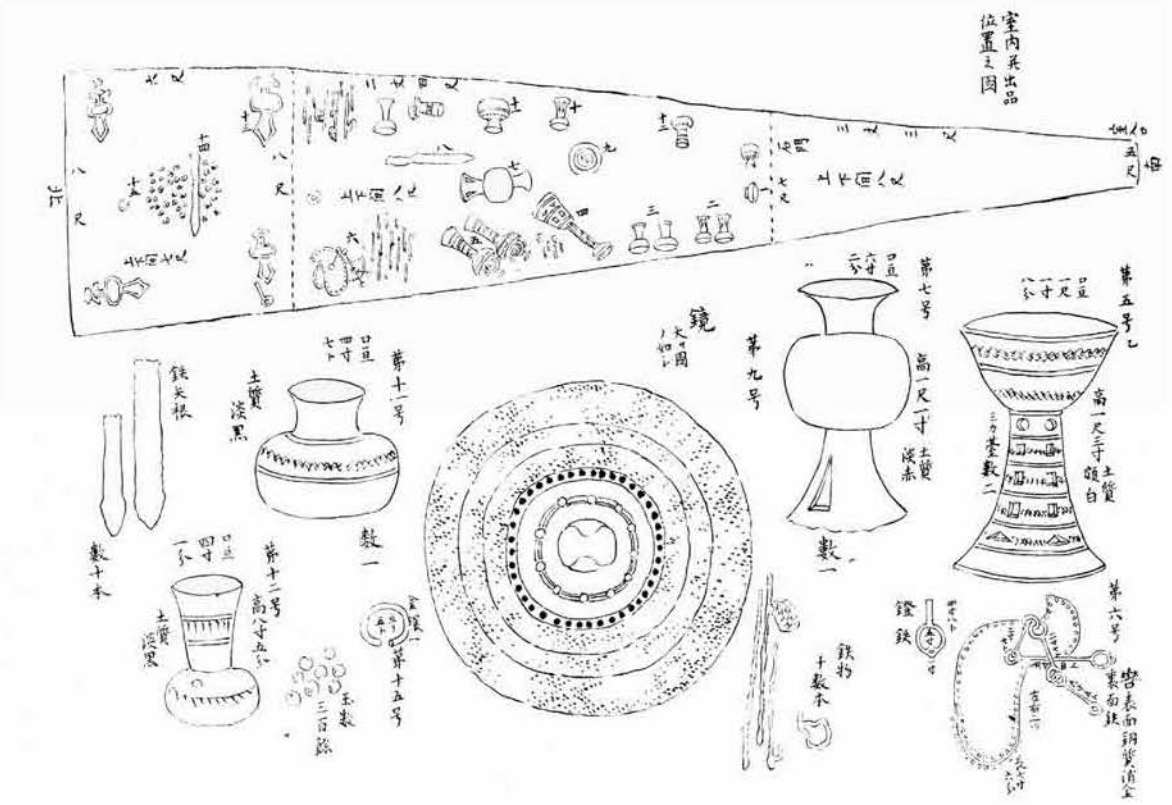
質問③　今日のお話、実は喉から手が出るほど聞きたい話ということで、千葉県から参りました。千葉県民は40年やっていますけれども、それ以前は今回たびたび話にでました畿内の出身でして、千葉に移り住んで、特にリタイアした後関東を丹念に見て回っている間に、この群馬県の古墳を見て驚きまして、大変な文化だということ、特に副葬品で出ております品々を見ますと、写真で紹介されている箸墓古墳とも対比できるほどレベルが高いと。

ここで、素人のちょっと突飛なことをお伺いしたいのですが、私の予想では、これはこの東国の豪族にとても有力な方がある時代輩出して、群馬を中心に支配を確立しようとしたのではないかと、それをヤマト王権が常に問題視して、やがて征伐に及ぶと、それが日本武尊の神話なのではないかと。それから、さらに飛躍してしまって荒唐無稽なのですが、もしそうだとしたら、日本武尊に滅ぼされた東国の民族の靖国神社が埼玉県の高麗神社ではないのかなと、とても今想像をたくましくしているのですけれども、その辺のご意見を伺えればありがたいです。

回答③（右島）　ちょっと予想していなかった質問なのですけれど、少なくとも今言われた中で、上毛野の地域と、それから畿内との関係というのは、非常に太いパイプでつながっているというのが特徴なのですけれど、それは古墳時代の始まり方のところで、その特徴は早く現れる、東日本の中でもかなり突出して大型の前方後方墳であったり、前方後円墳であったりというのが古墳時代の前期の段階から、高崎・前橋の地域と太田市周辺の地域にかなりの勢いで出てきますので、それによって、群馬県の地域の中の平野部というのが大開発されるという、非常に強固な基盤に支えられて、古墳時代の首長層というのがその上に立っているというところがありますので、その時にもう既に、初期ヤマト政権とか初期ヤマト王権とかと言われる畿内の政治勢力と非常に結びつきの強い、それは三角縁神獣鏡という古墳時代の前期に非常に重要視されている鏡なんですけれど、それが関東地方の中で上毛野の地域が突出して多い数を持っている地域だったわけですけれど、そういうことでその後の展開も、おっしゃられてように非常に濃い歴史を、考古資料を見ていく中で、古墳時代の中で見て取ることができるというようなところがありますので、そういう意味で、畿内の政権と対立抗争にあったか非常に近い関係にあったかということはちょっと意見が分かれますけれど、少なくとも非常に太いパイプの中でずっと推移していっているという、その中に勿論前二子古墳の時代の動きも見て取ることができるかなというふうに思います。

第２部　資料集

『前二子古墳石室と後二子古墳石室出土品』



前二子古墳石室遺物出土状態（古制徴証）

Ⅰ　前二子古墳と後二子古墳の概要

前　原　　豊（前橋市教育委員会副参事）

１　大室古墳群の概要　明治３年の太政官布告である天皇陵の調査を受け手群馬県は総社二子山古墳を豊城入彦命の墓として明治８年に国の認定を受けた。しかし、明治９年に認定が取り消されたため、群馬県令楫取素彦は前二子古墳を豊城入彦命の墓として認定を受けるため、大室古墳群の調査に着手したが、結果的には天皇陵として認定されなかった。しかし、この調査は計画的で綿密に実施されたため、多くの古文書が現在も残されている。この中の一つである残された記録類のうち副装品の配列状態や１点１点を克明に描写した絵図などは精緻に描かれ、現在でも立派に通用する。

【前・後二子古墳関連年表】

○明治 11 年３月
　後二子古墳発掘調査
○明治 11 年３月 10 日～3 月 20 日
　前二子古墳発掘調査
○明治 11 年４月～明治 12 年６月
　出土品の公開
○明治 13 年３月７・８日
　英国外交官アーネストサトウによる前二子古墳の調査が実施される。石室のベンガラやガラス玉の科学分析が実施される。
○昭和 27 年７月７日～９日
　群大による前二子古墳石室調査
○昭和 27 年７月９日
　群大による後二子古墳石室調査
○昭和 32 年８月 25～27 日
　群大による前二子古墳墳丘測量調査
○昭和 32 年８月 28～31 日
　群大による後二子古墳墳丘測量調査
○平成３年７月 22 日～11 月 30 日
　前橋市教育委員会による史跡整備に伴う後二子古墳範囲確認調査。石室の精査。
○平成４年５月 25 日～12 月 24 日
　前橋市教育委員会による史跡整備に伴う前二子古墳確認調査。石室の精査。
○平成 12 年８月７日
　前橋市教育委員会による史跡整備に伴う前二子古墳の明治石室探査孔調査
○平成 14 年９月 11 日～25 日
　前橋市教育委員会による史跡整備に伴う前二子古墳床石下面調査
○平成 15 年 10 月
　前橋市教育委員会による史跡整備に伴う前二子古墳石室羨道部解体調査

２　前二子古墳の概要

古墳概要…周囲を外周溝、外堤、周堀を持つ２段築成の前方後円墳であることが確認できた。馬蹄形の周囲施設に囲まれた墳丘は、主軸を東西（N－70°－E）に持ち、外堤、平坦面、墳頂部に埴輪列を有する。その数は 1,340 本と推定される。

外周溝での古墳規模…全長 148m、幅 127m であり、面積 15,900 ㎡を占める。

墳丘規模…全長 93.7m、前方部幅 64.8m、後円部径 68m、高さ 13.6m である。

墳丘構造…下段墳丘が地山削り出しと盛土によって造られ、上段墳丘は盛土と葺石によって構成される。

石室…明治 11 年に開口され、残された絵図には馬具や土器類など豊富な副葬品が描かれている。石室は、下段墳丘斜面部に開口する特色を有する。石室の構築面には当時の地表面である Hr－FA 層をわずかに削平して構築している。全長 13.89m の長くて狭い両袖型横穴式石室は石材に粗粒安山岩と凝灰岩を用い、羨門、玄門、扉石、敷石等で構成され特殊な構造を有する。

立地…本墳は、小二子古墳や後二子古墳が存在する西側の「流れ山」を頂点に緩やかに南東に延びる丘陵上に立地する。４世紀初頭に浅間山から降下した As－C 軽石層を鍵層として古墳築造前の地形を復元した。その結果、本墳は周囲に眺望の開けた舌状台地の先端に位置することが判明した。さらに、周堀の底面に１ｍを超える粗粒安山岩が存在することから、墳丘下には「流れ山」により形成された礫層が存在している。また、古墳の築造面の直下には６世紀初頭に榛名山ニツ岳から噴出した Hr－FA 層の堆積が認められ、石室構築にあたっては旧来の地形を利用していることが判明した。

外縁部…墳丘下の ZT 区や南側の 3B、５、14、15 トレンチから本墳に近接した５世紀終末から６世紀初頭の住居跡が８軒検出された。このように生活適地といえる場所に、墓域が選定され集落は廃絶を余儀なくされる。背景には強力な社会的要請があったことと考えられる。

外周溝…外縁部に設定した 1A、2A、3B、５～８、14～17 トレンチから幅１～3.0m、深さ 0.3～1.5 m の外堤の外側を区画する溝が検出されたため、外周溝と呼んだ。なお、外周溝で計測した古墳の規模は、全長 148m、前方部幅 100m、後円部径 127m を測る。溝には外堤から流れこんだ埴輪片が多数出土しており、外堤外縁の円筒埴輪列の存在が明らかとなった。

外堤…外周溝の内側に外堤が設けられる。馬蹄形の形状をなし、８～10m幅で一周し、盛土は認められなかった。上面は耕作等により削平を受けているため、盛土や埴輪列の検出はできなかった。しかし、外周溝と周堀から埴輪が多数出土していることから、外堤の内外に埴輪列が存在したことが考えられる。外堤下にある５トレンチの住居跡では、人為的に埋め戻され古墳が築造された事実を確認できた。

古墳完成前の掘削跡…墳丘の北から東にかけて2A、3A、６、７トレンチの外堤下に掘削跡を検出した。古墳築造　時に黒色土の採取を目的に掘削した事が考えられ、掘削後はローム土を用いて埋戻されている。埋土の中には遺物を含んでいなかった。

周堀…馬蹄形状をなし全周する。周堀の幅は前方部で12m、後円部15m、くびれ部25mを測る。Hr－FA層が存在する旧地表面から深さ3m以上まで掘削をしている。また、周堀の底面近くに1108年に降下したAs－B軽石層が堆積していた。築造から600年経過しているにもかかわらず、土砂の流れ込みが少なかったためか、堀さらい等の人為的行為の結果が考えられる。

墳丘…２段に築成された墳丘である。前方部幅64.8m、後円部径68. 8mとやや後円部が大きい特色を有する。前方部先端は中央がやや尖っており、いわゆる剣菱形である。現況での墳頂高は、前方部が134.3m、後円部が135.8mで1.5mほど後円部が高い。墳丘構築は、Hr－FA層を基壇面としてそれより上部に盛土、下部を削り出して墳丘が形成され、明瞭な基壇面を持たないで墳丘から周堀に移行する。墳丘の高さを周堀最底面から墳丘最高点で計測すると13.6mとなる。上段と下段の境をなす平坦面は、前方部の幅が３～４mと狭くそれに比べ後円部では５～６mと広くなる。

埴輪列…円筒埴輪は４条突帯でかつ大型品であり、口径45cm、高さ60cm前後の同一規格品である。また平坦面の縁辺部に密接して設置される。2Aトレンチでは、埴輪列の外側に石見型埴輪が設置されていた。円筒埴輪は、幅60cm、深さ20～30cm程度の溝状に掘った布堀に基底部を埋め込んで設置されていた。さらに、円筒埴輪は墳頂部と外堤にも設置されていたことが推定される。

葺石…葺石は上段部分に限って施工されている。トレンチ毎に河原石を用いるものと粗粒安山石の角礫を用いるものに区別される。このことは意図的に配置したものか施工者の違いを表すのか検討を要する。

石室前面部…石室前面は明治11年に開削されており、古墳築造時の土層が残っていなかったため、現状の通路が墓道となるか検討を要する。石室前の下段斜面には、石室入口を下った斜面部から幅１m、長さ９mのテラスが検出された。テラスの周囲には10数個の柱穴も検出され、このうち４個の主要なピットは大きく深く掘られていた。このテラスは、位置や形状から祭儀に用いられた施設と考えられる。また、石室前面の墳丘下から拳大の粗粒安山岩の角礫が地山面に敷き均した状態で検出された。石敷は、石室基壇と似た構造が考えられる。

石室…明治11年に開口した石室は下段墳丘斜面部に位置する両袖型横穴式石室である。全長13.9m、幅２m、高さ2.1mを測る。石材には、天井、壁材には粗粒安山岩を用い、床面、扉石に凝灰岩を使用する。前者は近隣の流れ山から採掘し、後者は東８km の笠懸町西鹿田にある天神山から運び込んだ石材と思われる。石室構造は、羨門、玄門、扉石、楣石、梱石、敷石と複雑な構造を有していた。石室の設置にあたっては地形を利用し、大規模な造成は行っておらず、わずかに地山を削り、固めた程度である。入口から１mほど上っているが、羨道の奥や玄室は水平に設置されている。床面には全国的にも例のない敷石が玄室全面と羨道の一部に用いられていた。凝灰岩を丁寧に加工した切石を用いた敷石であり、石室構築にあわせて敷いたものである。敷石はほぼ水平に設置されていたが、明治11年の開口時に一部持ち上げられ、完全に戻されていなかった。玄室にはＬ字状切組を用いた仕切り石が存在する。奥壁より1.8mの部分の敷石配置を観察すると、仕切り石の両側に相似形の配置を観察できる。

石室構造については、玄門、扉石、楣石、梱石、敷石など西北九州や朝鮮半島南部でみられる要素を色濃く反映しており、何らかの結びつきが考えられる。

また、石室内面は全面にわたって、ベンガラによる赤色塗彩が認められた。

明治11年に石室が開口され、その時に絵図に描かれたものは以下の通りである。珠文鏡１、鉄鉾、鉄鏃多数、鉄製轡（ｆ字形鏡板）１、鉄製輪鐙１、鉄製鉸具、留金具、鎖等若干、金銅製剣菱形杏葉４、金銅製双葉剣菱形杏葉４、ガラス小玉300、金製耳環１、須恵器小像付筒形器台１、同高杯形器台２、同提瓶２、同直口壺１、同高杯３、同甕１、土師器台付壺１、同高杯4、同杯１である。

今回の調査で石室の覆土について水洗いをした結果、197個の装身具（ガラス製青色丸玉、水晶製丸玉、ガラス製黄色小玉、ガラス製緑色小玉、金製耳環、銀製空玉、管玉、臼玉）をはじめ金属製品（武器、馬具、農工具）、土器（須恵器、土師器）等の多量な遺物を収集することができた。これらの副葬品は比較的原位置に近い状態で分布していた。

石室の構造、特色には多くの問題を内包しているが、形態や赤色塗彩、副葬品等は６世紀前半の

特徴を有するものといえよう。
出土遺物…普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、器財形埴輪（大刀、盾、靫、蓋、盾持人）、人物埴輪、馬形埴輪、土師器、須恵器、紡錘車が墳丘から出土した。土器をはじめとする遺物は５世紀末から６世紀前半の特徴を有するものである。

以上の遺物や遺構をはじめとして、墳丘下面の地山から純層として検出された Hr－FA 層の時期から本古墳は６世紀前半でもより初頭に近い時期に築造されたことが考えられる。

(3) 後二子古墳の概要

調査の結果、墳丘の周囲に周堀、「わたり」、墓道を持つ二段築成の前方後円墳であることが確認できた。馬蹄形の堀に囲まれた墳丘は、主軸を東西（N－110°－E）に持ち、基壇面、墳頂部に埴輪列を有する。その数は 400 本と推定される。古墳の大きさは外堀で計測した場合、全長 106m、幅 80mであり、面積 7，000 ㎡。墳丘で計測した場合は、全長 85m、前方部幅 59.5m、後円部径 48m、高さ 11.1mである。墳丘構造は、基壇面を地山削り出しとわずかな盛土によって造り、上段は盛土によって構成される。

本墳を前二子古墳や中二子古墳と比べた場合、明らかに違いが認められる。それは後２者の場合、基壇が墳丘下に隠れてしまう点である。これに比べ、本墳や後述する小二子古墳では幅広い基壇を有効的に活用し１段目としている点である。前者は盛り土を行っているのに、後者は幅広い基壇も持ち、小さな２段目の墳丘を形成することである。これらのことは墳丘構築にあたり明らかな差異であり、一つの画期としてとらえることができよう。

今回の調査によって国史跡指定範囲の中にほぼおさまることが判明した。
立地…本古墳の占地地形は、赤城山体崩壊によって形成された「流れ山」の東斜面上である。また、すぐ南に小丘陵が存在し、その北に下がる斜面を利用して形成される。構築面の下部には６世紀初頭に榛名山ニツ岳から噴出した Hr－FA 層が堆積している。
墳丘…本古墳は、基壇面で計測すると全長 85m、後円部径 48m、前方部幅 59.5mの墳丘規模で、前方部が大きく広がり、前方部南西がやや突出する前方後円墳である。墳丘は２段築成といえるが、下段は地山面を利用した幅広の基壇面を有するため、前二子古墳や中二子古墳と形状が大きく異なる。ちなみに基壇面をのぞいた上段墳丘全長 53m、前方部幅 25m、後円部径 24mと極めて小規模な墳丘となる。

基壇面の幅は 10～11mと幅広い特徴を有する。基壇面での盛土の厚さは、全く盛らない部分もあるが平均すれば 1m前後である。上段は、盛土で築造され、葺石は使用されない。幅広の基壇面については、栃木県下の後期古墳や前方後円墳に多数みられるものであり、県内でも太田市二ツ山古墳１号古墳や前橋市金冠塚古墳などがあげられる。
石室…石室は明治 11 年に前二子古墳とともに開口された。石室は基壇面の地山を掘り込んで造成された両袖型横穴式石室でN－20°－Eに開口し、全長９m、幅 2.7m、高さ 2.2mを測る。石材の粗粒安山岩は、西に存在する「流れ山」が搬入されたものと想定される。石室は羨道、玄室で構成され羨道部の框石に段が設けられ、１段下がり玄室に至る。また、周堀から入口まで墓道が設置される。また、天井に接して疑似楣石が架設される。両袖の構成も床面から１mの高さまでなされ、その上は袖無しとなる。また、截石切組手法とは異なるが両脇に石を積んでおき、その間に石を充填する「落とし込み」といった工夫が認められた。地山面の掘削は羨道部で深さ１m、奥壁で 0.8mである。赤城山南麓に特徴的に分布する「山寄せ工法」を用いたもので、墳丘の盛土を少なくするものと考えられる。
副葬品…明治 11 年の石室開口時に出土したものとして、直刀２、鍔５、大刀３、大刀破片、小刀２、鉄鏃、轡２、耳環 11、須恵器高杯１、須恵器提瓶１、歯３があげられる。今回の調査でも石室内の覆土をフルイにかけた結果、３本の歯が検出できた。宮崎重雄により、老齢にいたっていない女性と鑑定された。また、明治 11 年の開口際に出土した耳環が 11 点を数えることから複数の被葬者を想定できる根拠となった。
墓道…石室の入口に接続する状態で溝状に地面を掘り込んだ墓道が検出された。石室構築方法に呼応した施設といえる。主軸を N－17°－W にとり全長 11.4mで幅 1.8～2.7m、基壇面からの深さは 0.8～0.9mである。先端の周堀部分には土橋状施設と呼ぶべき「わたり」が検出され、その先には集石がみられ、一連のものとして有機的な関連が窺える。また、墓道の先端部にみられた柱穴跡も祭儀に使用されたものと想定できる。
石室前面部の祭祀跡…墓道の両側から焼土跡３カ所と土師器杯形土器 18、同鉢形土器１、同甕形土器１、小刀１、鉄滓２の一括遺物が検出された。あたかも、『古事記』に記された黄泉戸喫（よもつへぐ）を想起させるものであり、葬送儀礼に使用されたものといえる。この他に、須恵器高杯２、同瓶１が検出された。
出土遺物…普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、人物、馬、盾、靫、鞆、翳（さしば）、大刀、小像付き円筒埴輪のほか土師器甕、鉢、杯、須恵器甕、高杯、瓶、小刀、鉄滓が出土した。時期的には６世紀中葉から７世紀前半にあたる。このほかに明治 11 年調査の際に奉納された古銭 573 枚が出土した。なお、形象埴輪のうち馬形埴輪の剣菱形杏葉につ

いては大阪市四天王寺宝物館所蔵の伝群馬県出土「人が乗る馬」の剣菱形杏葉と類似するものである。このことは、四天王寺蔵の埴輪が後二子古墳から出土したことも考えられるが、同一工人の手によって製作された複数の埴輪のうち、一つが後二子古墳に設置されたことも考えられる。

小像付き円筒埴輪…親子猿１、猿１、犬１の２種類、３個体が出土した。出土位置は前方部北隅の16トレンチと隣接する3Aトレンチの２カ所、基壇面上の円筒埴輪列からである。猿は普通円筒の側面に貼付されており、犬も剥落した痕跡から同様な貼付方法をとったものである。普通円筒に貼付する事例としては、近接する上縄引４号墳の口唇部に犬が貼付された例につぐものである。ただし、円筒の側面についた事例としては全国的にもなく、埴輪の猿も茨城県大日山古墳に次ぐ事例である。3Aトレンチからも親子猿の足と極似した破片が出土したため猿と判断し、２個体での貼付が認められる。

埴輪配列…トレンチ調査のため不詳部分を残すが、16トレンチの接合結果から基壇面の円筒埴輪１は１列で普通円筒、朝顔形円筒で幅の広い基壇面のほぼ中央に埴輪は設置される。墓道部東西で設置間隔の違いが認められた。墓道の東から北への廻るグループは４条突帯を基本に用い、設置間隔も0.5mと狭いが、それに比べ、西から南廻りのグループは、４条突帯を用いながらも２条突帯の小形円筒埴輪も多用するというもので、設置間隔も東から北に廻るグループと比べると倍に近い１mとなる。この２つのグループの平均的間隔で設置本数を推定すればおよそ308本前後となる。崩落した円筒埴輪の存在から墳頂部にも円筒埴輪列の存在が推定できる。埴輪列の総延長を80mと仮定すれば100本前後の埴輪樹立が想定される。また、形象埴輪は出土点数が極めて少ないが、前方部北側の平坦面部に馬、人物が樹立されていたと推定される。墳頂部には家をはじめ盾、大刀、靫、翳、鞆などの器財埴輪が設置されたものと考えられる。

上記の特徴や問題点、遺物の年代観から後二子古墳の築造年代を考えると６世紀第２～３四半期に位置付けられる。また、６世紀後半や７世紀前半の遺物の存在を考慮すれば、その後の追葬により７世紀前半まで使用されていたと考えられる。古墳の築造にあたって、石室は南にあるものの北からの視点を強く意識している。それは、円筒埴輪のサイズや設置間隔に如実に表れている。南から北にさがる斜面に立地するため、墳丘は南から見るのではなく北からの眺望を意識して築造されたことと思われる。

【参考文献】

群馬県庁文書『西大室村古墳祭器現形之図』群馬県立歴史博物館所蔵
田嶋　亘 1991「明治 11 年古墳神器拝礼人名誌について」文書館だより第16号
橿原考古学研究所附属博物館 1990『はにわの動物園第１巻』
前橋市教育委員会 1992『後二子古墳・小二子古墳』
前橋市教育委員会 1993『前二子古墳』
前原　豊 2013「大室古墳群」『群馬の歴史文化遺産調査報告書』群馬歴史文化遺産発掘・活用・発信実行委員会

Fig. 1 前・中・後・小二子古墳復元図

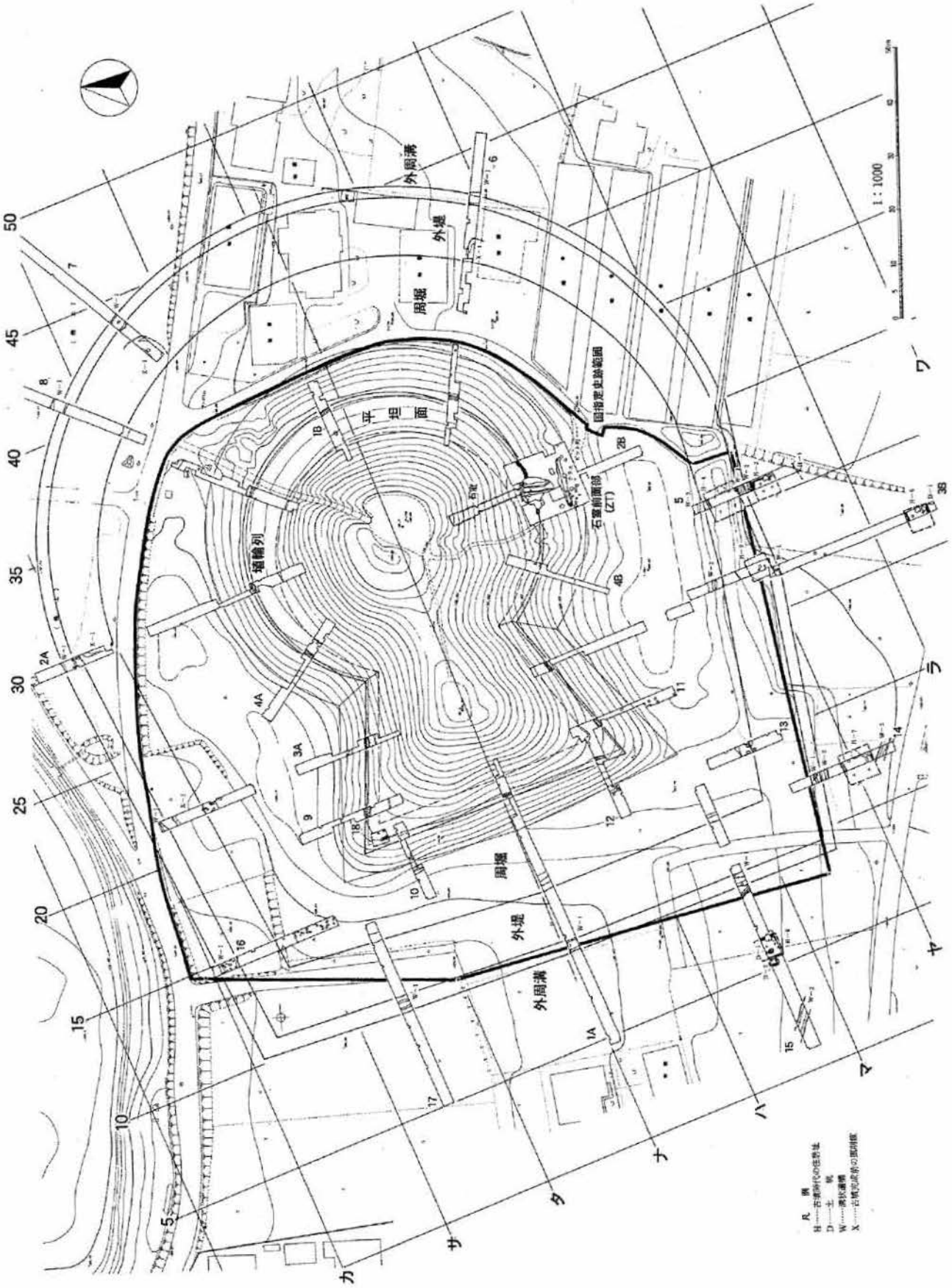


Fig. 2　前二子古墳全体図

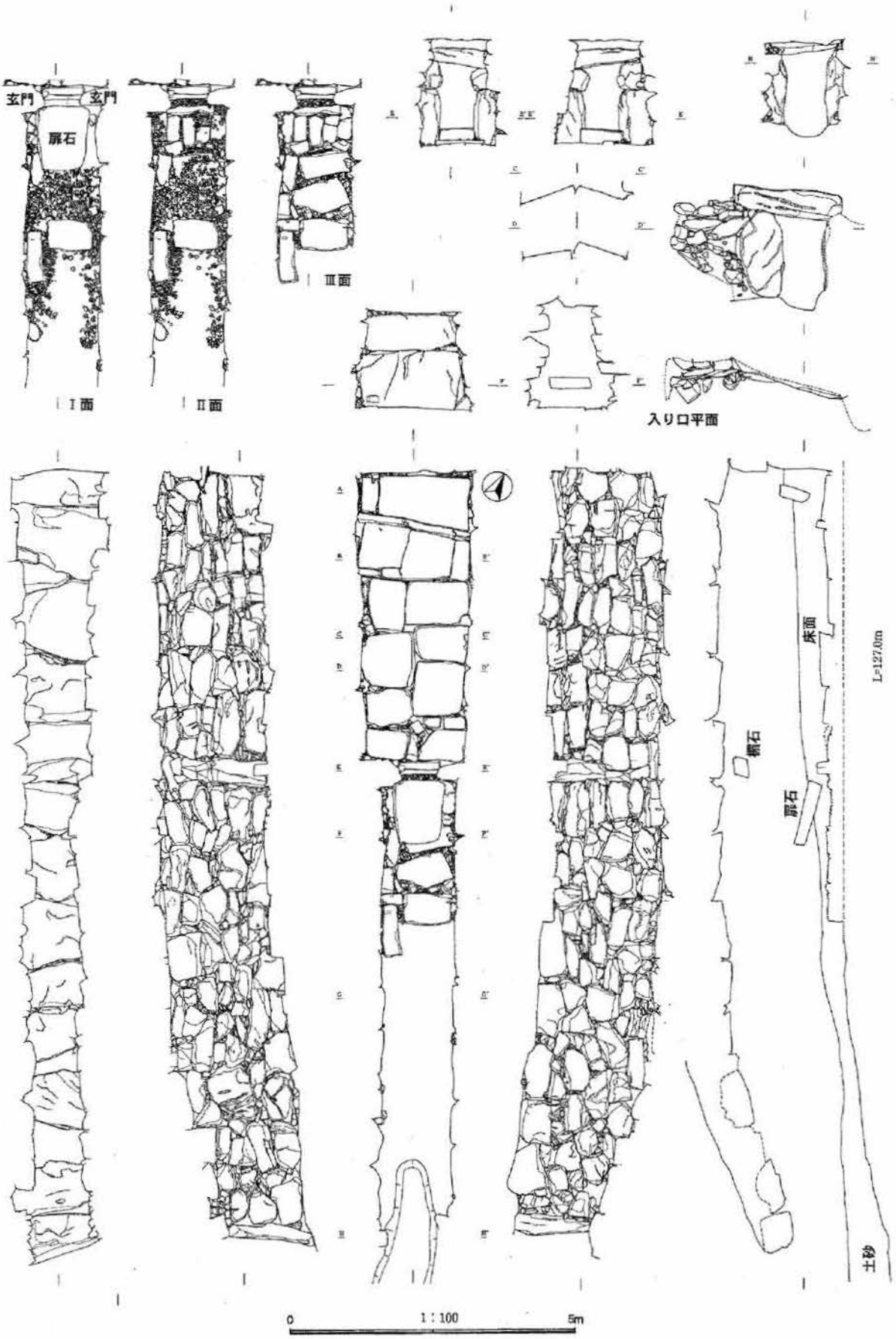


Fig. 3　前二子古墳石室実測図

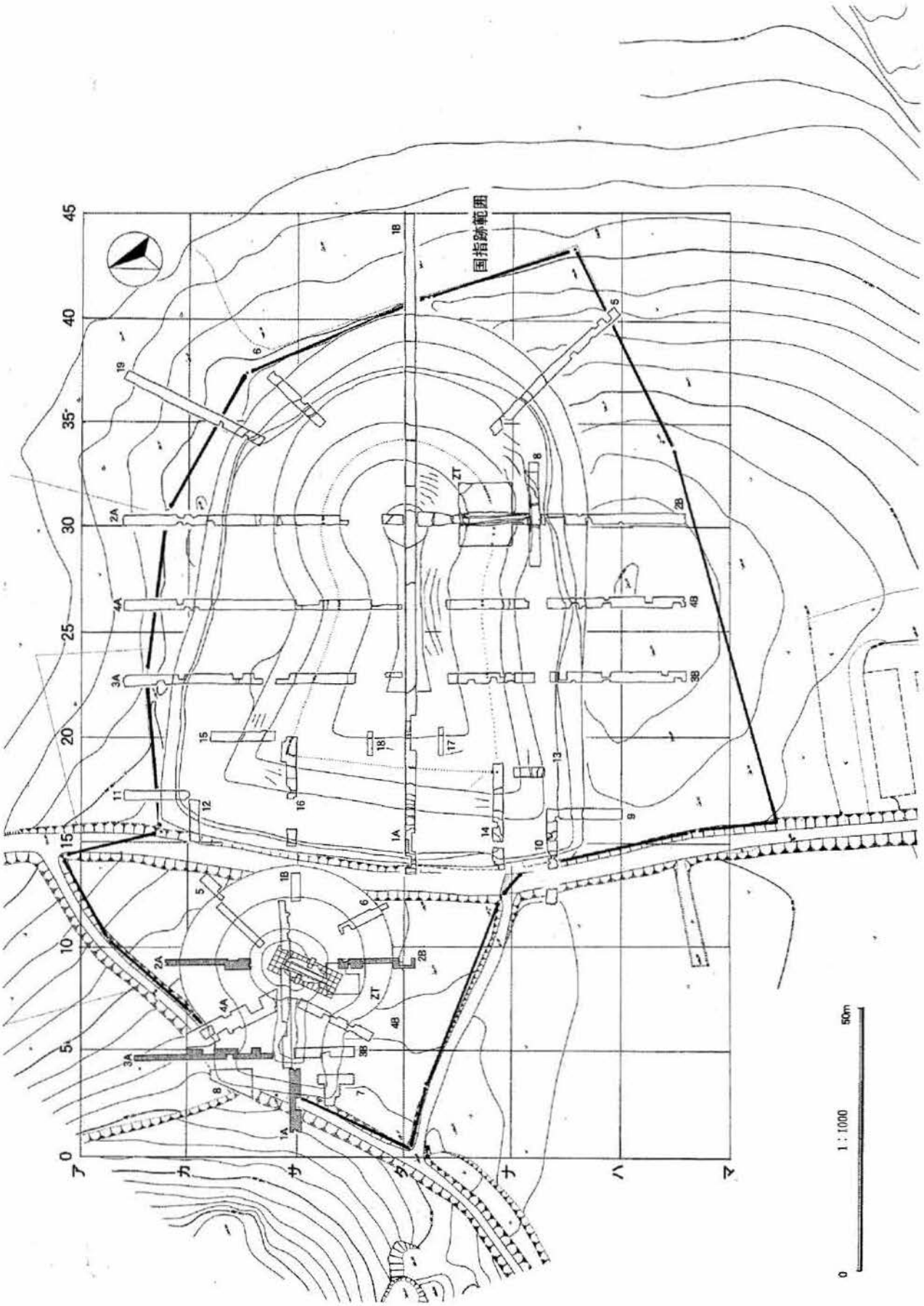
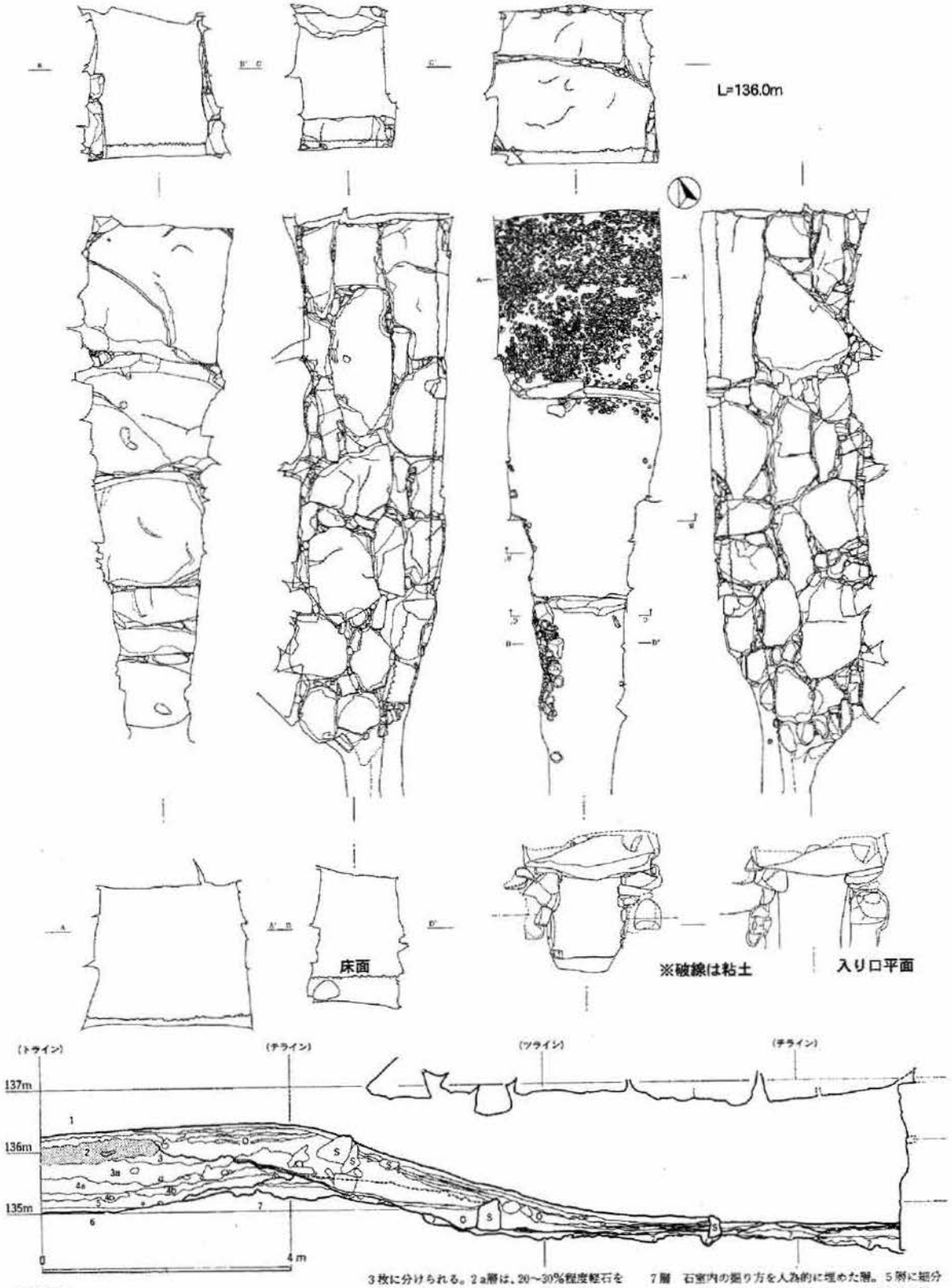


Fig. 4　後二子古墳全体図



層序説明

0層　近代～現代層。明治11年以降に堆積した土層。1層　平安～現代の層。1a層と1b層に分けられる。1a層は植物が腐植した層。1b層は森林褐色土。

2層　平安時代以降の層。As－B層、As－Kk層を主体に3枚に分けられる。2a層は、20～30%程度軽石を含み、2b層は50%前後、2c層は純層に近い。

3層　古墳～平安時代の層。古墳墳丘の盛土や地山が崩落し堆積した土層。3a層と3b層分けられる。

4層　古墳時代の層。黒色土層が主体。

5層　墓道に流入した土層。褐色微砂層を主体。

6層　墓道の掘り方を人為的に埋めた層。

7層　石室内の掘り方を人為的に埋めた層。5層に細分でき、7a層はローム土を主体、7a層細粘土層、7c層は小礫を多量に含む層、7d層は黒色土層が主体。

0　1：100　5m

Fig. 5　後二子古墳石室実測図

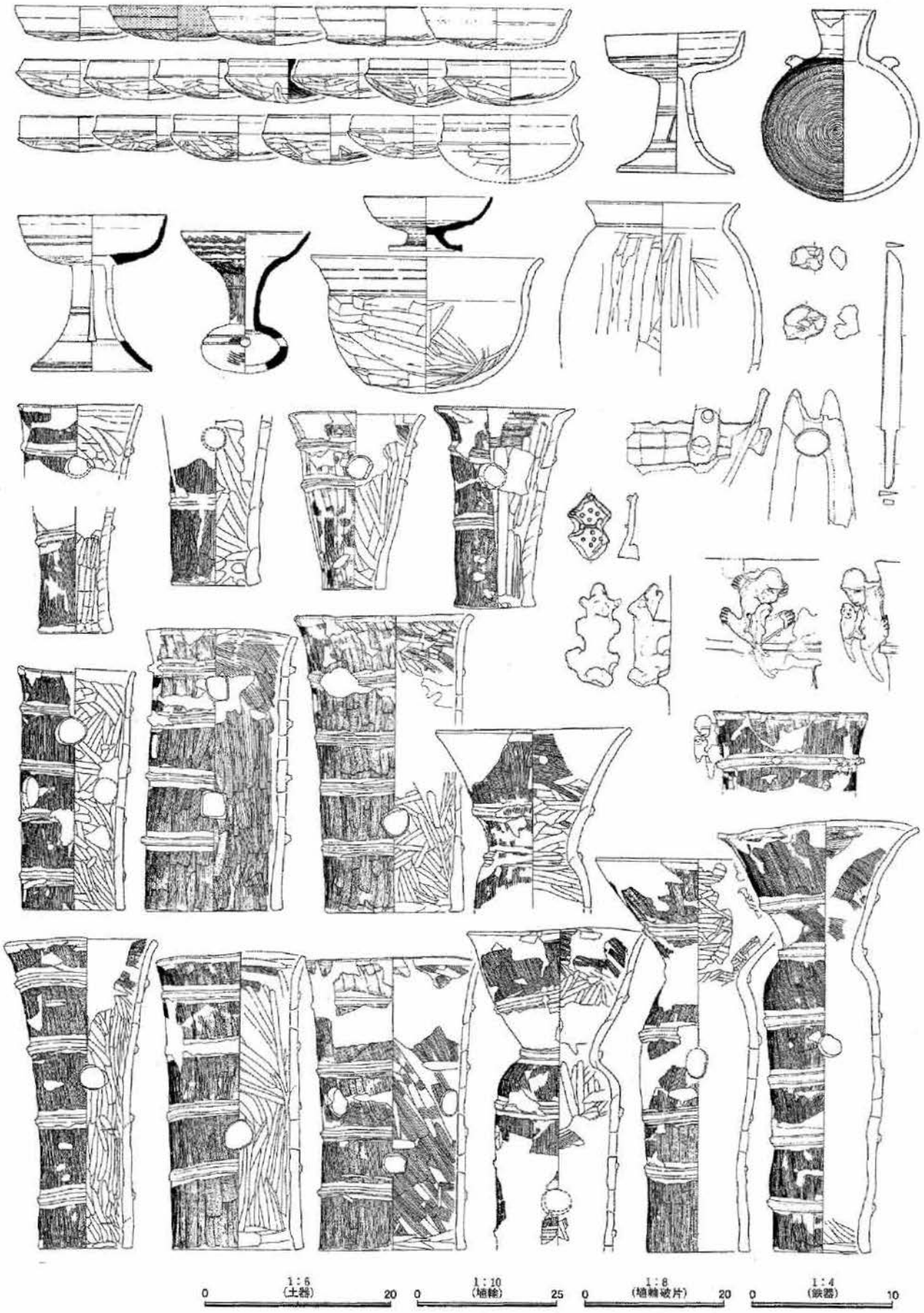


Fig. 6　後二子古墳遺物集成図

Ⅱ　明治 11 年調査の石室出土品 － 陵墓探索調査 －

1　石室出土の土器について

前　原　　豊（前橋市教育委員会副参事）

明治 11 年調査の出土品のうち、土器について扱い、金属製品と装身具は２節で扱う。今回は製作年代不詳であるが群馬県庁文書として保管されてきた群馬県立歴史博物館所蔵「西大室村古墳祭器現形之図」の土器絵図と土器実測図を縮尺１／４で並べて掲載した。また、須恵器の拓影図について掲載した。絵図にある前二子古墳と後二子古墳の金属製品、装身具、歯の副葬品についてもあわせて掲載した。

絵図に描かれた前二子古墳の土器は以下のとおりである。

須恵器
　筒形器台（Fig. ７－１）
　高杯形器台（Fig. ８－３・５）２個体
　提瓶（Fig. ９－７・９）２個体
　瓮（Fig. ９－11）
　直口壺（Fig. ９－13）
　高杯（Fig. 10－15a・15b・15c）３個体
土師器
　杯（Fig. 10－16）
　高杯（Fig. 10－17・19・21・23）４個体
　台付壺（Fig. 10－25）

であるが、このうち須恵器高杯３個体と土師器杯１個体は現存していない。このほかに石室床石改修工事に伴う調査で、坩１個体（Fig. 59－28）出土している。

次に後二子古墳は

須恵器
　提瓶（Fig. 11－48）
　高杯（Fig. 11－51）

の２つであり、現存する。平成３年度の調査で後二子古墳からは須恵器高杯が２点と瓮１点が出土している（Fig. ６）。

１　前二子古墳の土器

須恵器小像付筒形器台（Fig. ７－２、Fig. 13－１）
口径 19.7 ㎝・復元値。高さ・復元値 65.0 ㎝。底径・復元値 33.5 ㎝。筒部上端径・10.9 ㎝。筒部下端径・8.7 ㎝。胎土・細粒。焼成・酸化炎焼成気味の還元炎焼成でやや軟質。色調・筒部は灰黄色、脚部は灰色。成形・杯、筒、脚部の３部分を製作し、接合。残存・口縁部の一部欠損、脚底部を全周欠損。

杯部・全体的に外傾しながら立上り、口縁部は直立。内面に径 3.5～4 ㎝の円孔。杯部底面は丁寧なナデ。口縁端部に３条の沈線。体部には２条の沈線。１本のヘラで施文。沈線の間に４本歯／1.2㎝ の右下がりの波状文。体部の沈線下に消去した波状文。口縁端部には径７～８㎜、厚さ２㎜の円形貼付文。筒の円形貼付には半截竹管による円管文が付けられる。単位は３ないしは４。

筒部…下すぼまりの形状。原則２条の沈線が５カ所施文され６区画に分離。端の２区画がやや狭く内側の４区画が広い。２条沈線は等間隔ではないことから１本のヘラで描出。施文順序は、平行沈線→波状文→長方形の透孔、円形押捺文、円形貼付文。波状文は１・６段目１条、それ以外は２条施文。５本歯／1.3㎝ の右下がりの波状文。長方形の透孔が４単位。透孔は幅 1.6～1.9 ㎝、長さ３～4.6 ㎝。円孔文は１段目に４単位。径 0.8～1.0 ㎝で深さ 0.2～0.5 ㎝で未貫通。６段目に貫通する４単位の円孔文。径 1.6 ㎝。円形貼付文は２～４段目まで３個ずつ、５段目は４個。円形貼付文には円管文が施文。

脚部　やや外反し緩やか開く。底部は全周欠損。２条１単位の沈線が３単位に巡り、４段の区画が形成。１～３段目には２条の波状文。７本歯／1.3㎝ の櫛による右上がりの波状文。１段目の上端には７本歯／２㎝ による連続刺突文が全周に施文。透孔は４単位で１、２段目が長方形、３段目が三角形。１段目 1.7×3.6 ㎝、２段目 1.7×4.8 ㎝の長方形、３段目が下辺 4.8㎝、高さ 3.8 ㎝。透孔の上部には未貫通の４単位の 0.8～１㎝の円孔文。円孔文間には４単位の円形貼付文。このうち３個には円管文が押捺。

小像・脚上面には、脚部上端と同様な７本歯／２㎝ の櫛歯による連続刺突文を施文後に「トリ」、「ヘビとカエル」「小像剥落痕」「カメ」の４種類の小像。

「トリ」は、長さ 4.4 ㎝、幅 1.4 ㎝、高さ 1.6 ㎝で刺突によって目と鼻孔が表現。右の翼と尾羽には、４条の沈線。

「ヘビとカエル」の「ヘビ」は長さ 2.7 ㎝、幅 1.7 ㎝、高さ 0.9 ㎝で刺突によって目が表現され、背中には円管文で鱗が表現。

「カエル」は長さ 1.2 ㎝、幅 0.9 ㎝、高さ 0.4 ㎝で刺突によって目が表現。

「小像剥落痕」は 長さ 2.6 ㎝、幅 1.8 ㎝である。

「カメ」は長さ 2.7 ㎝、幅 2.0 ㎝、高さ 1.0 ㎝で刺突によって目と鼻が表現、背中には円管文で甲

羅を表現。

須恵器高杯形器台（Fig. 8－4、Fig.14－5）

口径・37.5 cm。高さ・40.1 cm。底径・30.7 cm。胎土・細粒。焼成・酸化炎焼成気味の還元炎焼成。やや軟質。色調・黄灰～褐灰色。成形・杯部と脚部を製作し、接合。

杯部・外傾しながら立上り、口縁部は直立。内面底に同心円状の当て具痕。外面に３条の沈線と２条の沈線が巡る。波状文は口縁部と体部に２条。外面底部には柾目板の平行叩き痕が残る。口縁部には波状文が入る。杯部には上下２段に波状文が入るが、上部は９本歯／1.6cm 右上がりの波状文。下部は６本歯／1.2 cm右上がりの波状文。

脚部・やや外傾し緩やか開く。沈線が４カ所、５段区画が形成。透孔は１段目が円孔、２、３段目が長方形、４段目が三角形。いずれも４単位。透孔は１段目の円孔が1.7×3.6 cm、２段目1.7×4.8 cmの長方形、３段目 1.7×4.8 cmの長方形、４段目の三角形が下辺 4.8cm、高さ 3.8 cmである。９本歯／1.8cm で右下がり波状文。

須恵器高杯形器台（Fig. 8－6、Fig.14－6）

口径・36.7 cm、高さ・40.9 cm、底径・29.7 cm、胎土・細粒、焼成・酸化炎焼成気味の還元炎焼成。やや軟質。

色調・褐灰～黄灰色。成形・杯部、脚部を製作、接合。杯部　外傾しながら立上り、口縁端には直立。杯部底面は同心円状の当て具痕。外面には３条の沈線１組と２条１組の沈線が巡る。波状文は沈線の間と下段の沈線の下に施文。外面底部には板柾目叩き板による平行叩きが残る。３カ所の波状文はいずれも８本歯／1.6cm 右上がり。

脚部・やや外傾し緩やか開く。沈線文５カ所、６段の区画。透孔は１段目が円孔、２～４段目が長方形、５段目が三角形。いずれも４単位。透孔は１段目の円孔が 1.7×3.6 cm、２段目 1.7×4.8 cmの長方形、３段目 1.7×4.8 cmの長方形、４段目の三角形が下辺 4.8cm、高さ 3.8 cm。波状文は９本歯／2.6cm 右下がり。

須恵器提瓶（Fig. 9－8、Fig.15－6）

口径・7.4 cm。口縁部・高さ 4.5 cm。高さ・27.6 cm。幅・23.7cm。厚さ・13.2cm。胎土・細粒、焼成・酸化炎焼成気味の還元炎焼成。やや軟質。色調・灰白～褐灰色。器形・正円に作られた優品。腹面はケズリとナデによって仕上げ。断面形は腹面が平らで背面が丸み。Fig. 9－10 は口縁部に波状文が施文されないが、大きさと形状が共通。口縁部やや傾く。成形・胴部を成形した後に口縁部を接合。背面内面には、径約 10 cm粘土板で蓋をした痕跡。口縁部に波状文。胴部背面には同心円状のカキメ。

須恵器提瓶（Fig. 9－10、Fig.15－7）

口径・7.3 cm、口縁部高さ・3.2 cm、高さ・28.6 cm、幅・25.2cm、厚さ・14.2cm、胎土・やや軟質、焼成・良好、色調灰白～暗灰色。器形・正円の優品。腹面・ケズリとナデによる仕上げ。断面形は腹面が平らに作られ、背面が丸みを帯びる。もう１個体と大きさと形状もよく似る。口縁部の付け方はこちらの方がやや傾く。成形・胴部を成形した後に口縁部が付けられる。背面・内面には円形接合痕がよく観察できる。径 10 cm程度の粘土に最後に蓋をして胴部は完成された様子がわかる。口縁部・沈線。胴部・背面には同心円状のカキメ。

須恵器壺（Fig. 9－12、Fig.13－2）

口径・14.7 cm、高さ・14.8 cm、胴部・最大径 11.3 cm、胎土・やや軟質。焼成・良好。色調・灰～褐灰色。成形・口縁部と胴部で製作し接合。口縁部に７本歯／1.7cm 右上がりの波状文。胴部に櫛歯による連続刺突文が７本歯／1.5cm で入る。

須恵器直口壺（Fig. 9－14、Fig.13－3）

口径・13.9 cm、高さ・23.4 cm、胴部最大径・18.9 cm、胎土・やや軟質。焼成・良好。色調・暗褐灰～褐灰色。成形・口縁部と胴部で製作し接合。口縁部に７本歯／1.7cm 右上がりの波状文。胴部に櫛歯による連続刺突文が９本歯／2.0cm で入る。

須恵器高杯（Fig. －15a・15b・15c）

現存していないため絵図より判断。口径・10.6 cm、高さ・13.3 cm、色調・灰色。器形・長脚１段透かし。杯部に波状文。

土師器杯（Fig. 10－16）

現存していないため絵図より判断。口径・11.8 cm、高さ・10.3 cm、色調・丹色。器形・須恵器模倣杯。一般的な模倣杯である。口縁部は直立し長い口縁である。体部はナデとヘラケズリと思われる。群馬県中央部では内斜口縁の杯が多いのに比べ、東部地域は少ないため、須恵器模倣の外稜を有する杯で占められる。角頭状の口縁を有し底部が小さな平底になる杯も墳丘調査で出土している。

土師器高杯（Fig. 10－18・20・22・24）

	18	20	22	24
口径・・・	19.0	17.9	18.1	17.1 cm
高さ・・・	14.7	14.1	13.3	12.8 cm
底径・・・	13.6	13.1	13.1	13.3 cm

４個体とも一括製作であり、胎土や色調、成形も共通する。胎土・良好。焼成・良好。色調・橙色。調整・口縁部内外面ともヨコナデ。外面・横方向のヘラケズリ。脚部・外面ハケメの後ナデ。内面横方向のヘラケズリ。

土師器台付直口壺（Fig. 10－26）

口径・19.0 cm、高さ・31.9 cm、底径・16.1 cm、胎土・密。焼成・良好。色調・橙色、成形・胴部と脚部に顕著な接合痕。脚部に２単位の三角形の透孔。調整・口縁部縦方向のヘラミガキ。胴部・横方向のハケメの後横方向のヘラミガキ。脚部・縦方向のヘラミガキ。

土師器坩（Fig. 59－28）　器形は胴部中位に最大

径を持つ球形胴丸底、口縁部は中段に沈線が入り長く立ち、端部がやや開く。全体に作りがよく表面は磨かれ、赤色塗彩を施す。器高 15.3cm、口径 9.6cm、胴部最大径 12.0 ㎝、口縁高 5.7cm。平成 14 年の石室床面工事の調査で出土した。

2　後二子古墳の土器

提瓶（Fig.11－49、Fig.15－９）
口径・6.8 ㎝。高さ・21.0 ㎝。幅・17.2 ㎝。厚さ・1.6cm。胎土・密。焼成・堅い焼き。色調・灰。成形・背面の蓋は径９㎝程度の大きさである。残存・完形。腹部・回転ヘラケズリ。背部・カキメ。カキメに下に同心円状のハケメ痕がみえる。

須恵器高杯（Fig.11－50、Fig.15－８）
口径・15.1 ㎝、高さ・15.6 ㎝、底径・12.3 ㎝、胎土・密。焼成・堅い焼き。色調・灰色。残存・ほぼ完形。杯部・外面下部は回転ヘラケズリ。脚部・２～３条の沈線と裾部に２条の沈線。その間に長方形の透孔が３単位で入る。杯部底面に窯印「キ」がヘラ書き。

3　まとめ

(1)前二子古墳の土器　前二子古墳の須恵器小像付筒形器台については、類似例としては福岡市羽根戸古墳の筒形器台にはヒト、イヌ、カメ、イノシシや勾玉や島根県金崎古墳（きんざきこふん）の筒形器台には勾玉が付く。国内ではこの２例が類似例である。装飾須恵器としての筒形器台は類例が少ない。さらに朝鮮半島を見渡した場合でも伽耶地域で存在するだけである。類例としては釜山市福泉洞 32 号墳の筒形器台にはウマ、イノシシ、イヌが表現され、福泉洞 11 号墳の筒形器台にはカメが付けられる。朝鮮半島で小像をつけるのは新羅の土器であり、新羅では５世紀から６世紀にかけて蓋や壺などに小像を付ける土器がたくさん出土する。特に慶州月城路 11-1 号墓の壺にはトリ、カメ、カエル、ヘビ、ヒトなどの小像がさかんに登場する。また、カエルにくわえたヘビの表現は多く、慶州鶏林路 30 号墳の蓋が代表例である。このように加耶で出現した筒形器台に新羅の小像が加味されて小像付筒形器台が出現するものと思われる。前二子古墳の筒形器台の動物も慶州の小像の動物と異なるところはない。ここで前二子古墳の筒形器台の小像が一つが剥落しているが、慶州月城路 11-1 号墓の壺の小像例から見るとヒトが付いていた可能性も捨てきれない。時期的には、福岡や島根の筒形器台は 5 世紀後半代であるため、田辺編年の MT-15 に該当する前二子古墳の筒形器台は後続するものである。

高杯形器台については、前二子古墳のほか中二子古墳の調査でも出土している。中二子古墳からは小片であるため全貌は不明である。このほか、保渡田薬師塚古墳では筒形器台とともに高杯形器台が出土しているが、前二子古墳にやや先行するものである。また、伊勢崎市原之城遺跡からは田辺編年 TK-10 期の高杯形器台２個体が出土している。また、高崎市上小塙稲荷山古墳でも TK-10 期の高杯形器台脚部が２個体出土している。いずれも前二子古墳に後続する時期のものである。

前二子古墳の須恵器については胎土や焼成から同一の工人により製作され、同じ窯で焼成された一括資料といえる。産地については藤野一之氏により群馬県藤岡産の須恵器との見解が提出されている。

このほかに土師器の高杯や台付壺形土器をみてもハケメやミガキを多用し、明瞭に稜を有することから５世紀後半から６世紀初頭の特徴を示している。

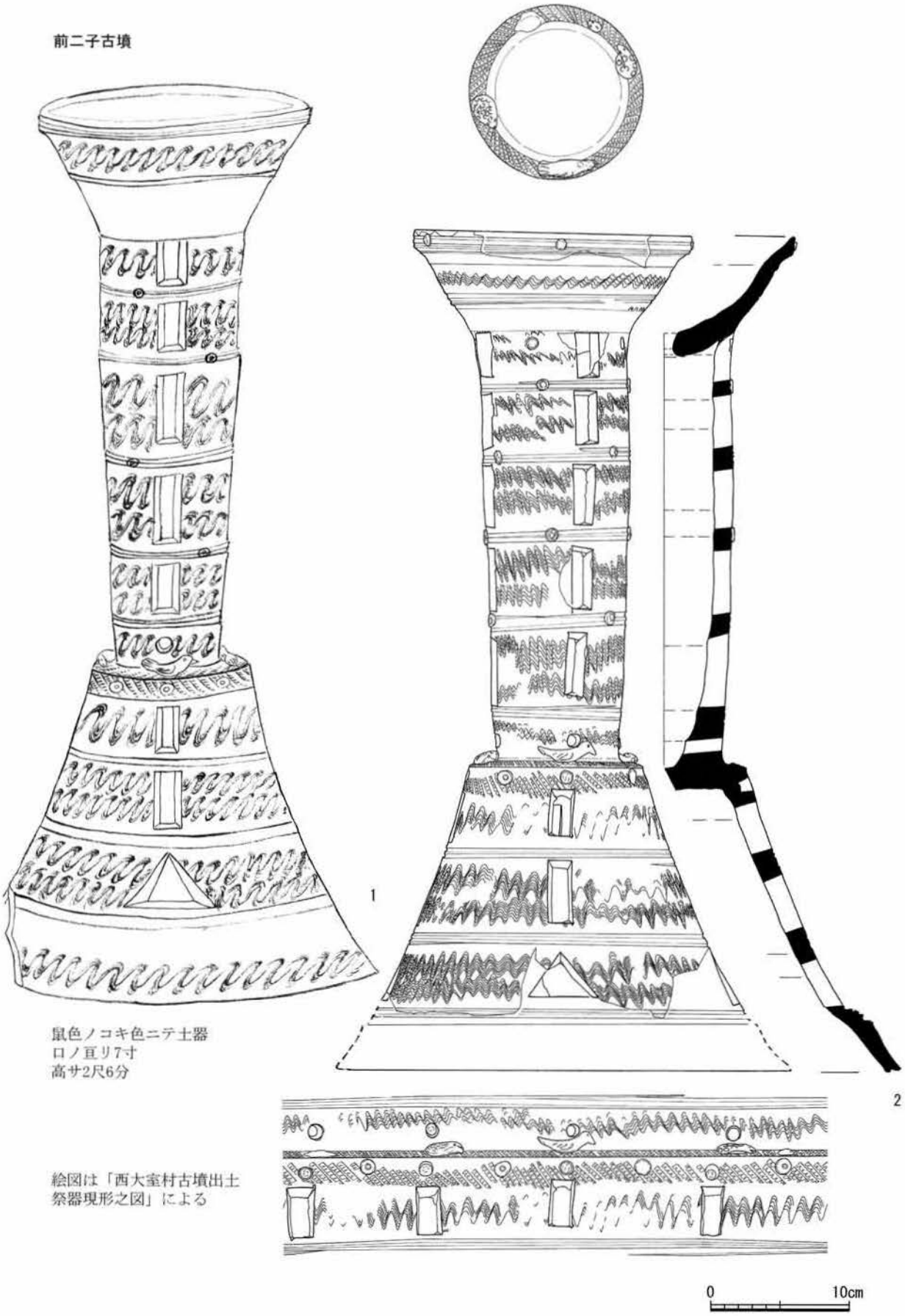
(2)後二子古墳の土器　前二子古墳に比較して提瓶と高杯の２点である。提瓶は小型化する点や釣手状の把手から TK-43 期のものととらえたい。高杯は長脚１段透かしから２段透かしになる時期ととられ TK-10 期としたい。この２点は胎土と焼成が異なることから同一生産地とは断定できない。

また、平成４年の調査で出土した高杯のうち１点は長脚１段透かし（ZT-V）であるが脚部の発達から TK-10 段階と思われ、Fig.11-50 の高杯と同じ窯印「キ」を有する。瓹も頸部の発達する TK-10 段階で、もう１点の高杯（ZT-W）は TK-209 段階のものである。

【参考文献】

小田富士雄 1979「福岡県羽根戸の装飾付器台と子持瓹」『九州考古学研究古墳時代編』
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
愛知県陶磁資料館 1982『須恵器展』
伊勢崎市教育委員会 1988『原之城遺跡発掘調査報告書』
群馬県群馬町教育委員会 1990『保渡田Ⅶ遺跡』
香川県長尾町教育委員会 1991『川上・丸井古墳発掘調査報告書』
東京国立博物館 1992『伽耶文化展』
愛知県陶磁資料館 1995『装飾須恵器展』
前橋市教育委員会 1992『後二子古墳・小二子古墳』
前橋市教育委員会 1993『前二子古墳』
前橋市教育委員会 1995『中二子古墳』
国立金海博物館 1999『加耶の器台』通川文化社
高崎市 1999「上小塙稲荷山古墳」『新編　高崎市史原始古代Ⅰ』
国立慶州博物館 2001『新羅黄金』
柴垣勇夫 2003「装飾付須恵器と特殊須恵器」『考古学資料大観第３巻』小学館
藤野一之 2013「古墳時代における藤岡産須恵器再考」『埼玉考古』48

前二子古墳



鼠色ノコキ色ニテ土器
口ノ亘リ7寸
高サ2尺6分

絵図は「西大室村古墳出土祭器現形之図」による

Fig. 7 前・後二子石室出土の遺物(1)

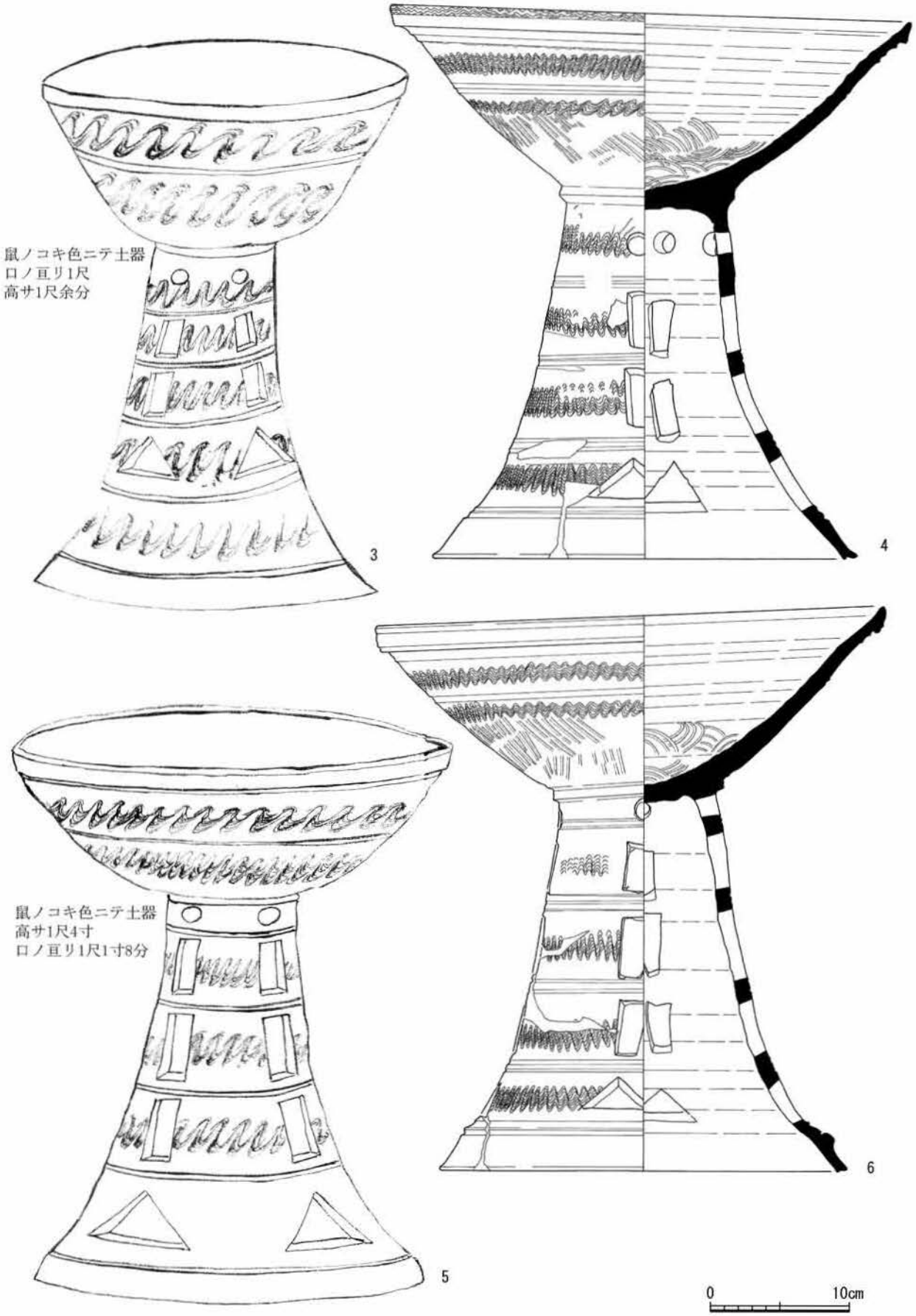


Fig. 8 前・後二子石室出土の遺物(2)

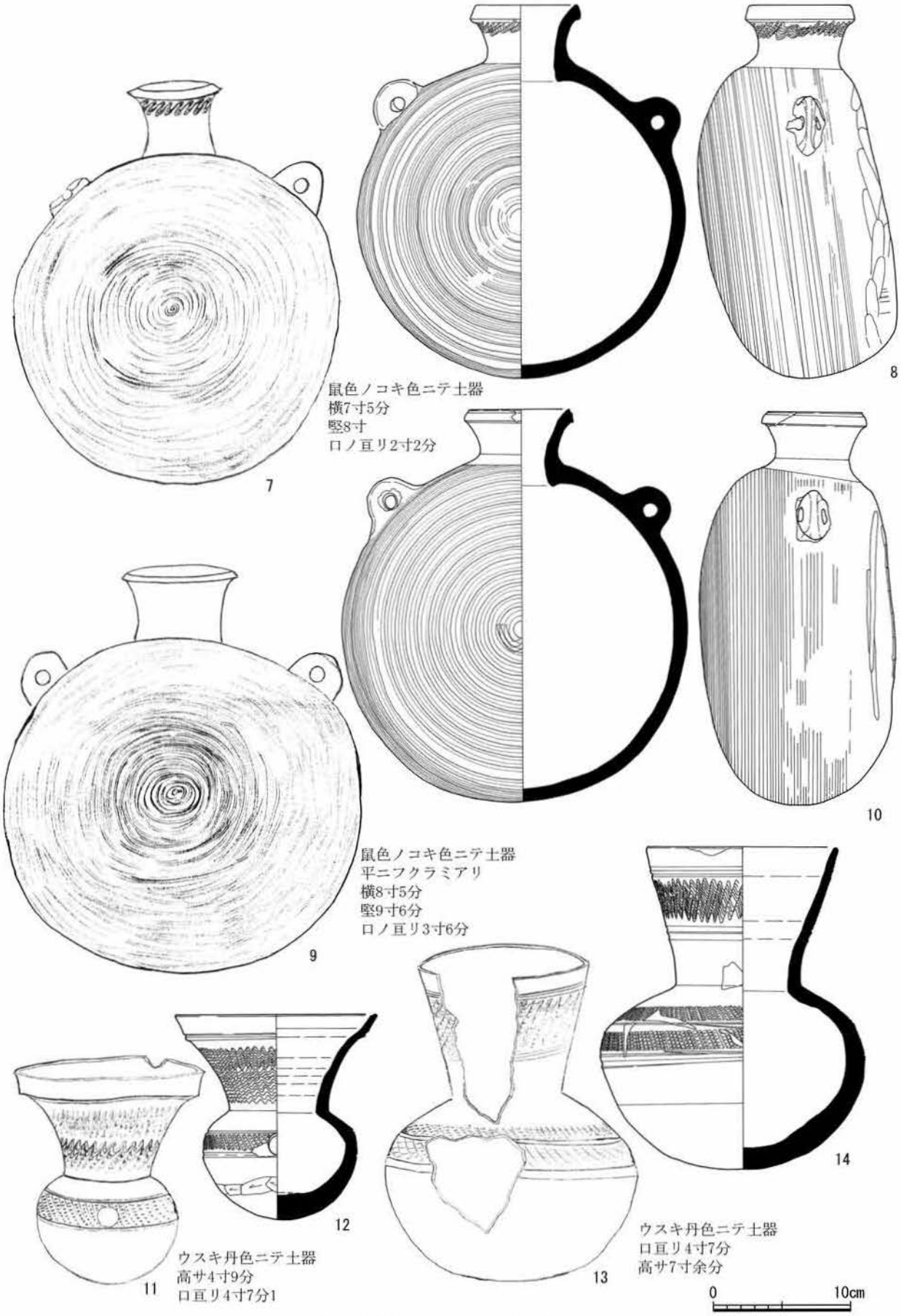


Fig.9 前・後二子石室出土の遺物(3)

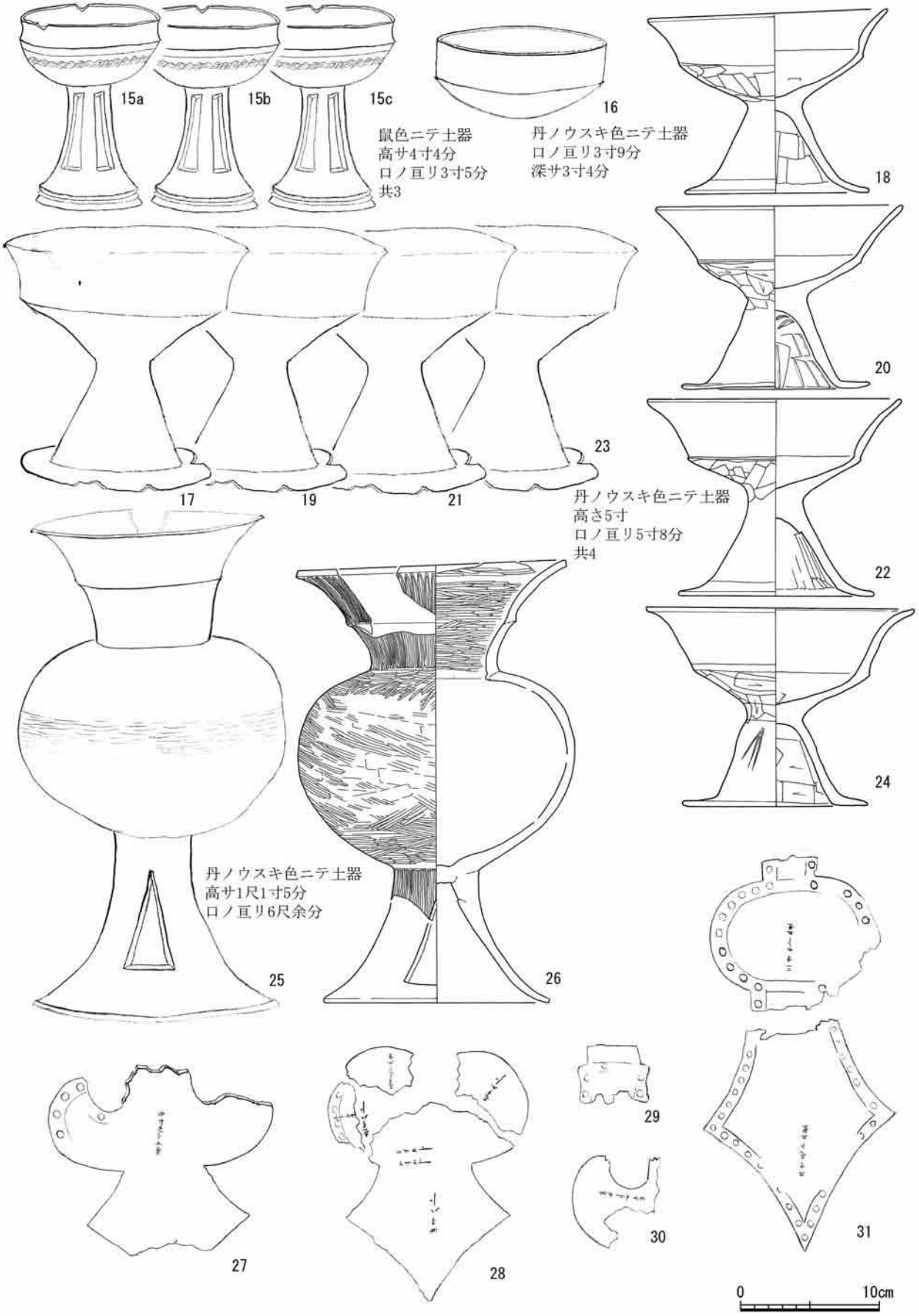


Fig. 10 前・後二子石室出土の遺物(4)

Fig. 11 前・後二子石室出土の遺物(5)

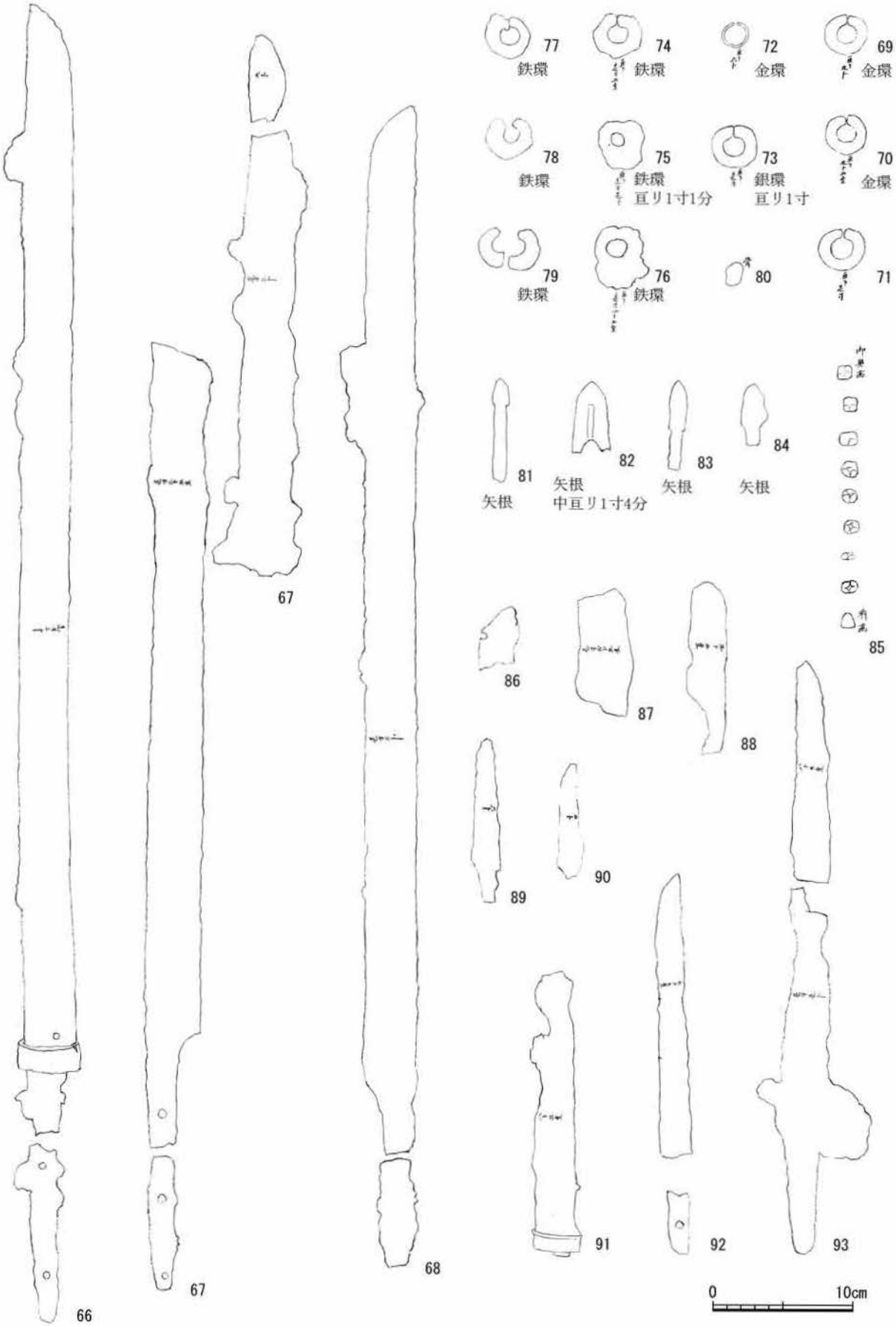


Fig. 12 前・後二子石室出土の遺物(6)

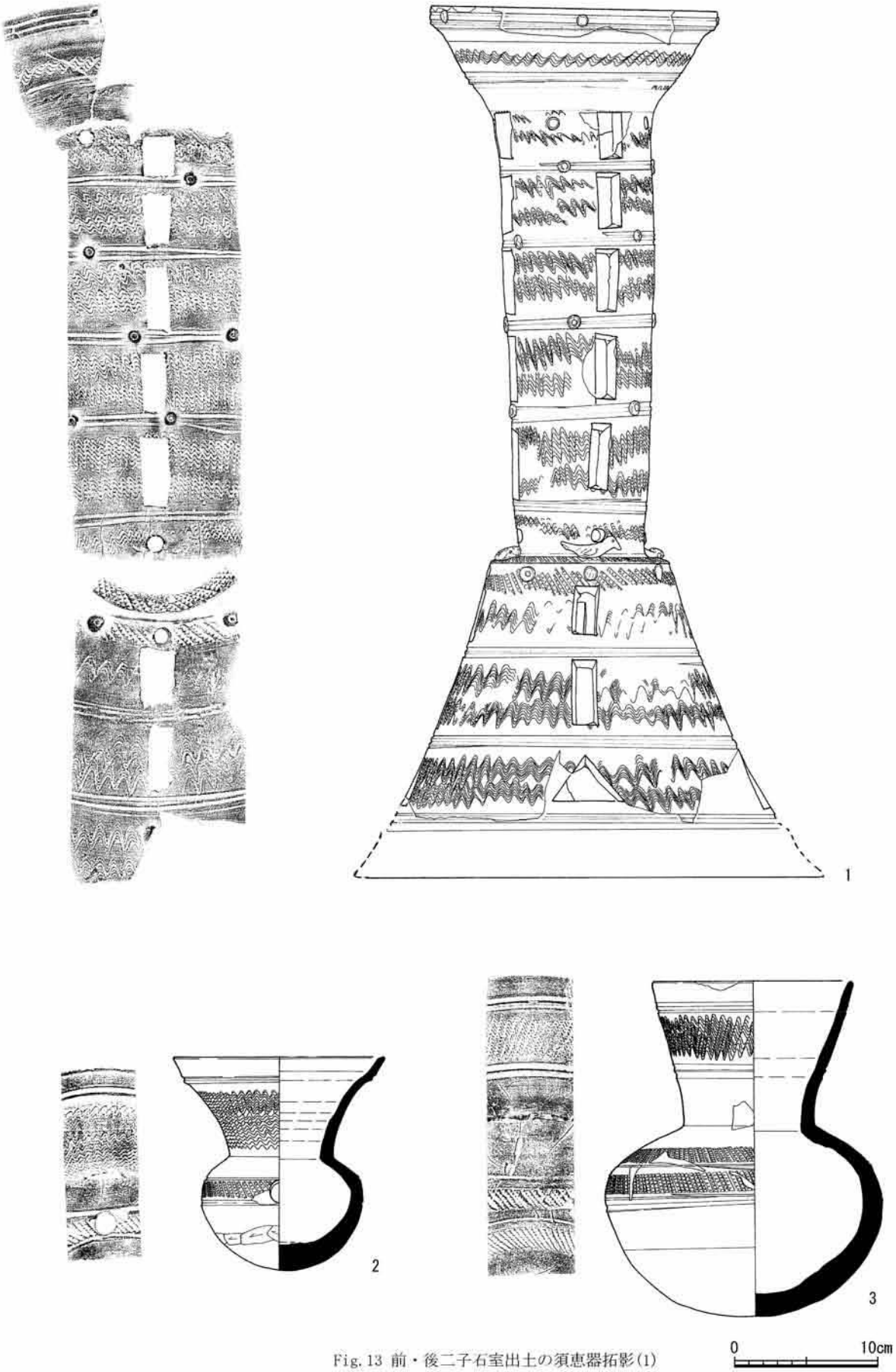


Fig. 13 前・後二子石室出土の須恵器拓影(1)

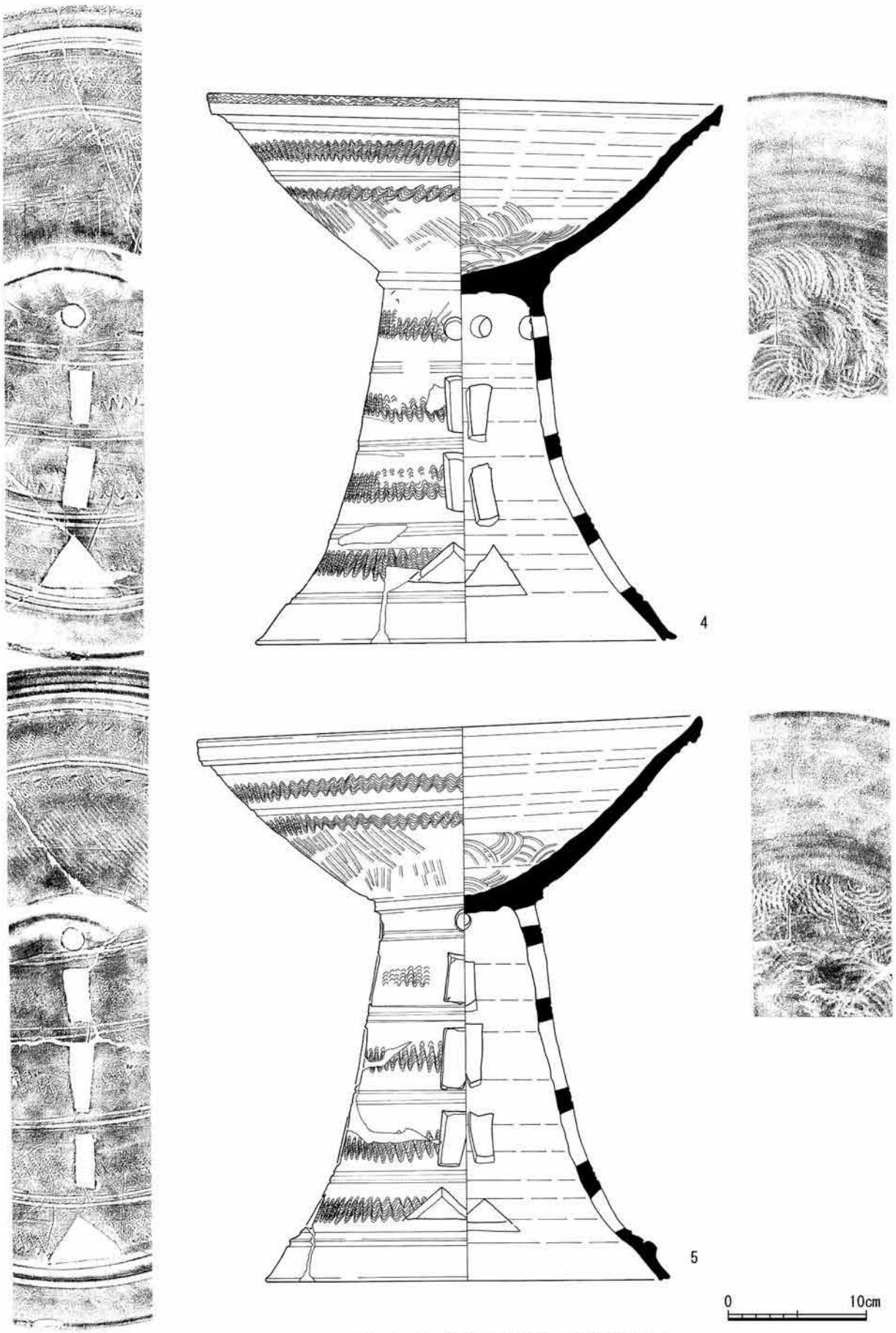


Fig. 14 前・後二子石室出土の須恵器拓影(2)

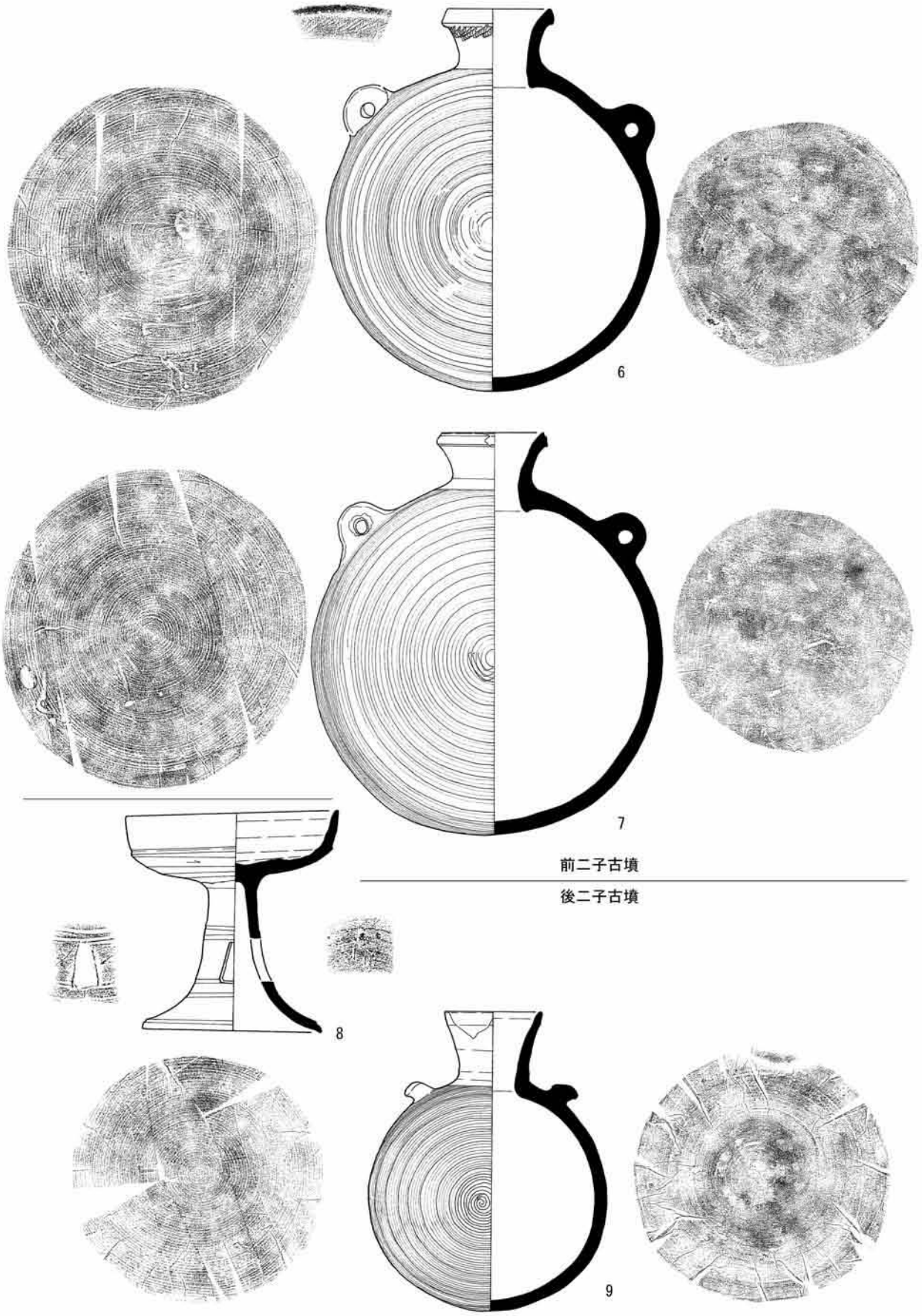


Fig. 15 前・後二子石室出土の須恵器拓影(3)

2　石室出土の金属製品・装身具について

杉　山　秀　宏　（公益財団法人・群馬県埋蔵文化財調査事業団）

1）装身具

鉄製耳環（1～7）　耳環は7個出土している。耳環は、いずれも、鉄製である。径は、2.95～3.20 cmとほぼ3cmを中心にした径で、重さは錆も含めて、10.6～16.0ｇである。組み合わせは、破片となったものが多く、はっきりしない。後二子古墳出土のものと考えられる。

ガラス玉(8)　1点出土している。青色を呈し、径0.95 cm、厚み0.70 cmとやや大きめである。発掘調査で、前二子古墳から青色丸玉130、緑色小玉17、黄色小玉28が出土している。発掘例の青色丸玉は3種に分類できるが、当資料は、径が約0.5～1.0 cm未満の間に収まる中形のものに含まれる。前二子古墳出土のものと考えられる。

2）武　器

捩環頭大刀柄頭（9）　1点出土している。捩りは、右方向に20回以上捩るもので、幅6.05 cm、長さ4.55 cm、太さ1.0 cmである。重さは錆も含めて20.8ｇである。鉄棒に捩りを加えた後、銀を張り、環の内側で重ねている。柄頭の先端は、リング状になり、その先は銀被せが無く鉄芯が出て、木質が付着している。柄頭に装着されたものと思われる。県内の類例としては、安中市簗瀬二子塚古墳例（文1）、高崎市綿貫観音山古墳例（文2）などがある。前二子古墳出土のものと考えられる。

鏃（10～16）　7点出土している。鏃は幅狭のものと幅広のものがあり、幅狭のものは、幅0.90 cmで、幅広のものは、幅1.3～1.80 cmである。長さは完存品で、4.30～4.55 cmである。

鍔（17～21）　5点出土している。鍔は、幅6.30～6.40 cm、長さは完存品で、7.60～8.15 cmである。いずれも無窓鍔である。中央の孔は幅2.1～2.55 cm、長1.5～3.75 cmである。厚みは、0.20～0.50 cmである。鍔の数からすると5本の刀・短刀があったことが想定される。

鉄刀・鉄短刀（22～42）　破片計21点出土している。刀は、ほぼ全体を残す物が1点（40）、刀身の大きな物が2点（41・42）、刀身の破片が8点（27・28・32・34～36・38・39）、鋒が3点（26・29・33）、茎の破片が7点（22～25・30・31・37）の構成である。それぞれの組み合わせを考えると、最低6点の刀があったと考えられる。完存品に近いものは、全長75 cm、刃長70.05 cm、刃最大幅3.70 cmとやや短いものである。これ以外の刀の最大幅は、小型のものが、2.60～2.75 cmのものの一群があり、大型のものは、3.05～4.40 cmの一群がある。刃最大幅は、刃長に比例するので、小型の刀と大型の刀があることになる。完形に近いものは大型の一群に入る物であるが、その中でも刃幅から見ると、小型の部類と考えられる。茎や刃に木質が付着したもの（24・25・31・33・34・37・40・41）がいくつかあり、それらには少なくとも木装の柄があるか、鞘をしていたことが分かる。かつて残りが良かった状況の時は、長さ80～100 cmに至る刀が3本ほど確認できたが、現在は、小破片化して復元が困難となっている。片関のもの（31・37・40）が中心で、斜関（31・37・40）のものが認められ、茎は先端に行くにつれ細くなる細形（23・31・40）で、茎尻は、直線状を呈する一文字尻（22・24）が多いと考えられる。組み合わせを考えると、斜角片関一文字尻細茎の可能性がある。6世紀初頭から7世紀にわたる型式である。大型・小型の刀の組み合わせ等は不明である。(37) は、鏃本孔があるもので、時期的には6世紀に限定される（文3）ものである。捩環頭柄頭と接合する刀身も不明であるが、捩環頭柄頭と接合する刀以外は後二子古墳の可能性が高い。

鉾身（43・44）　鉾身は2点出土している。(43) は、槍先形で、袋部が断面円形のものである。袋部の先端が欠けており、残存長18.55 cmを有している。刃先は断面両丸形の槍先形を呈している。刃から袋部に至る関は、斜め関で緩やかなカーブを呈している。県内の類例としては、北山茶臼山西古墳例（富岡市）・十二天古墳例（藤岡市）・下高田馬之宮5号墳例（安中市）などがある。ただし、十二天古墳例や、下高田馬之宮5号墳例は、刃長がかなり長く、やや形態が異なる。また、北山茶臼山西古墳例も、やや刃が長めで、刃の厚みも薄く、少し形態が異なる。いずれも4世紀後半か

ら５世紀後半に含まれるものである。刃が短くやや厚みがあるのが、当例の特徴と言っていいだろう。

(44) の鉾は、刃部が明瞭な厚みのある鎬造で、断面菱形を呈するもので、袋部と刃先端部は欠損して不明である。県内の類例としては、赤堀茶臼山古墳例（伊勢崎市）・長瀞西古墳例（高崎市）・久保遺跡例（富岡市）がある。鎬造りで厚みのある、断面菱形を呈する形態は、５世紀前半～６世紀中頃に多く類例があるものである。（文４） 前二子古墳に伴う可能性が高いものである。

石突（45・46） 石突は、２点出土している。(45) は、袋上端部に２孔開いており、留金具の破片が残存している。先端は鋭角に尖り、袋部の中には木質が付着して柄があったことを示す。(46) は、やはり袋上端部に留金具が装着されている。先端部は欠失して不明である。袋部の中には木質が付着して、やはり柄があったことを示す。鉾身の２点とセットになるものであろう。平成４年度の発掘調査で、前二子古墳よりもう１点石突が出土しており、３点の鉾があった可能性がある。前二子古墳に伴う可能性が高いものである。

鉄鏃（47～172） 鉄鏃は６種類ある。（文５）

第１類 短頸有腸抉長三角形鏃（47～108）

第２類 長頸段違有腸抉三角形鏃（109～134）

第３類 長頸有棘三角形・長三角形鏃（135～151）

第４類 長頸有棘片刃鏃（152～159・167・168）

第５類 無茎有腸抉長三角形鏃である(169)

第６類は偏平長三角形鏃形品である（170～172）

第１類 短頸有腸抉長三角形鏃(47～108) 刃部長 3.25～4.25 cmで、平均では、3.80 cmである。頸部長は、3.95～5.15 cmで、平均は、4.50 cmである。鏃身は長三角形状を呈する。腸抉（逆刺）の長さは短く、刃部断面は、鎬造りと考えられる。茎には木質が付着し、柄があったと考えられる。平成４年度の調査で 17 点、平成 14 年度の調査で３点の出土があり、総計 82 点出土した。

第２類 長頸段違有腸抉三角形鏃(109～134) 左右で、刃の長さが異なるもので、左の刃長が短く、右の刃長が長い三角形鏃である。刃長右側で、3.50～4.25 cmで、平均は4.10 cmである。刃部左側で1.20 cm～2.35 cmで、平均は 1.77 cmである。左右いずれの刃の腸抉（逆刺）も極めて短いものである。刃部断面は、先端部は鎬造りで、下部はなだらかになり、平造りとなる。頸部長は4.15～9.70 cmで、平均は、7.10 cmである。茎には木質が付着し、柄があったと考えられる。平成４年度の調査で７点出土し、総計 33 点出土している。

第３類 長頸有棘三角形・長三角形(柳葉)鏃(135～151) 刃部長 1.75～3.60 cmで、平均は2.8 cmである。刃部関は、角関で、刃部断面は片丸造りである。刃部形は、鋒よりふくらみを持って外湾した後、直線状を呈するものと、やや内湾して関に至る三角形・長三角形のものである。頸部 7.20～9.40 cmで、平均は 8.50 cmである。関は棘関である。総計 17 点出土している。

第４類 長頸有棘片刃鏃（152～159・167・168） 刃部長 3.05～4.30 cmで、平均は3.45 cmである。刃関は、角関で、刃部断面は、両丸造りである。頸部長 7.05～7.75 cmで、平均は 7.30 cmである。関は棘関である。総計１０点出土している。

第５類 無茎有腸抉長三角形鏃（169） 逆刺の先端が欠損しているが、全長約 5.05 cmで、刃部最大幅 2.60 cmである。茎が無く、刃断面は両平造りである。孔が２孔有し、柄に取り付ける際の緊縛孔と考えられる。そこに木質が付着している。１点出土した。

第６類 偏平長三角形鏃形品(170～172) 偏平な板状の鉄板で、鏃の形を真似て造られたものである。３点ある。完存するものは無いが、残存部の形からすると、鋒からふくらみを有してややすぼまるような形で茎に至るものである。刃部と考えられる部分には刃を意識して形造っている。ただし、明瞭に刃として機能できるものでは無い。柄の存在を示す木質等の付着は茎部と想定される部位にもない。

第１類…梁瀬二子塚古墳から類似しているものが出ているが、逆刺が少し段違いとなっている点が当例と異なる。県外からは６世紀前半の例として江古田金環古墳例（千葉県）などいくつか出土しており、この時期を示す鏃として重要なものである。

第２類…５世紀後半から６世紀前半にかけて類例の多いもので、県外の類例として今城塚古墳例（大阪府）などがある。

第３類…棘を持つ点や大きく厚みのある頸部を持つなど、６世紀後半の標準的な長頸長三角形(柳葉)鏃である。

第４類…棘を持つ点や、明瞭な鏃身角関を有するなど、やはり６世紀後半を示す標準的な長頸片刃鏃である。

第５類…６世紀前半から、群馬で出土し始めて、６世紀代から７世紀代前半を中心に多く出土する無茎鏃で

ある。

第６類…板状品で儀器としての性格が考えられる。保渡田八幡塚古墳例(高崎市)・梁瀬二子塚古墳例(安中市)がある。保渡田八幡塚古墳例は、長頸鏃の極薄の鏃形品で、少し形態が異なる。柳瀬二子塚例は、長頸鏃であるが、やはり極薄の鏃形品で、前二子例と外形が不分明な点が、やや近似している。この手の鏃形品は５世紀後半から６世紀前半に特徴的に出土するものと考えたい。

第１・２・６類は前二子古墳出土で、第３・４・５類は後二子古墳出土の可能性が高い。

両頭留金具(弓飾鋲)(173～181)　９点出土している。全幅2.80～3.50 cmである。弓の幅が想定される木質幅は、1.75～2.35 cmで、弓もこの幅のものが想定される。両頭部の花弁は４弁か６弁のものである。９点で弓１本分の金具である可能性が考えられる。近い時期の例として、保渡田八幡塚古墳例(文６)などがある。５世紀後半から６世紀代を中心に副葬される飾り弓の弓飾鋲である。

3)馬　具

双葉剣菱形杏葉(182・183)　２点出土している。通有の剣菱形と異なり、上段部が扁円形ではなく、棘状に上部内側に撥ねる双葉剣菱形を呈する。厚さ 0.2 cmの鉄地板に厚さ 0.15 cmの金銅板を被せ、鋲で周縁を打ち込んでいる。(182) は上段部の上部内側に跳ねあがる箇所の最大幅は17.85 cm、杏葉本体長は、17.30 cm、剣菱部の幅は12.00 cm、剣菱部の長さは9.85 cmである。幅 3.50 cmの立聞に留金具が連結され、上部の幅 3.40 cm、長さ2.30 cmの方形留金具で、革帯に連結されている。(183) は上段部の上部内側に跳ねあがる箇所の最大幅は17.80 cm、杏葉本体長は、17.15 cm、剣菱部の幅は11.90 cm、剣菱部の長さは9.85 cmである。立聞に留金具が連結され、上部の幅 4.05 cm、長さ 2.75 cmの方形留金具で、7 鋲打ち込んで革帯に連結されている。両者ともに、縁金に鋲は、推定 56 個打ち込まれており、間隔も 0.4～0.6 cm間隔で密である。鏡板地板は厚さ 0.2 cmの鉄板で、それに厚さ 0.15 cmの鉄製縁金を載せ、その上から金銅板をかぶせて叩いている。鉄製の鋲に銀が塗られている。双葉剣菱形杏葉は、20 数カ所からの出土例があり、その出土地は限定され、大和・若狭・上毛野には複数出土例があることが指摘されている。朝鮮半島との関連も想定され、非常に特徴的な遺物として重要である。双葉部が上向きの例は、十善の森古墳例 (福井県) や築山古墳例 (岡山県) などがある。(文７～９) 前二子古墳から出土したものと考えられる。平成 4 年度調査時出土の破片を見るとさらに双葉形剣菱形杏葉の点数が増える可能性がある。

剣菱形杏葉(184・185)　２点出土している。通有の剣菱形杏葉である。２点の法量はほぼ同じである。ただし、他の破片や、平成 4 年度調査時出土の破片を見るとさらに剣菱形杏葉の点数が増える可能性がある。

(184)の上段の扁円部であるが、幅 12.10 cm、長さ 8.20 cmある。剣菱部は最大幅 14.40 cm、長さ推定 14.75 cmである。幅推定 3.25 cmの立聞に、留金具が連結され、幅 2.50 cm、長さ 2.30 cmの５鋲打たれた方形吊金具で革帯に連結している。

(185) の杏葉の上段の扁円部であるが、幅 11.90 cm、長さ 7.85 cmある。剣菱部は最大幅 13.95 cm、長さ 15.50 cmである。幅推定 3.90 cmの４鋲を持つ立聞に、留金具が連結され、幅 2.80 cm、長さ 2.25 cmの５鋲打たれた方形吊金具で革帯に連結している。

両方の杏葉ともに、杏葉本体の縁金幅は 0.75～0.8 cmで、鋲は、推定 55 個打ち込まれている。鋲の間隔は 0.4～0.8 cmで密である。鏡板地板は厚さ 0.2 cmの鉄板で、それに厚さ 0.15 cmの鉄製縁金を載せ、その上から金銅板をかぶせて叩いている。鉄製の鋲に銀が塗られている。

他に、剣菱形杏葉の破片がいくつか出土しており、方形の留金具も１点出土している。

県内の剣菱形杏葉の例は、保渡田二子山古墳・保渡田八幡塚古墳・下芝谷ッ古墳・天之宮古墳・恵下古墳・金井東裏遺跡などから出土しており、ＴＫ４７～ＭＴ１５型式に比定される例である。前二子古墳から出土したものと考えられる。

素環鏡板(198・199)　２点出土している。径 0.75 cmの鉄棒で長さ 7.15 cm、幅 6.70～7.00 cmの楕円形の環体に、長さ 1.5 cm、幅 3.45 cmの長方形立聞をつける。立聞には環体に接して、長さ 0.6 cm、幅 2.1 cmの方形の孔が開く。欠失の多い鏡板もほぼ同じ径の鏡板である。後二子古墳出土の可能性が高い。

轡銜(200～203)　４点出土している。銜の部品が出ている。恐らく２点以上はあると考えられる。２連式の銜 (203) が出土している。それぞれ、8.55 cm、9.15

cmの長さがあり、一方の銜は、２つの環が捩じれて連結している。他は、破片で、厚みや大きさは２連のものに近い。遊環が一つ付いている。

いずれも、厚み0.30～0.35cmで、細めの角棒である。素環鏡板とセットを構成するものである。後二子古墳出土の可能性が高い。

引手金具（205・207）　引手壺が２点出土している。205は幅5.7cm、長さ4.2cmの楕円形の円環部の頂部に円環が造られている。207は一部破損しているが、ほぼ同じ法量のものである。鏡板の内側にある引手の先端部で手綱の革帯と連結するものである。前二子古墳出土の可能性がある。

兵庫鎖（204・206）　２点出土している。引手と引手壺の間をつなぐ兵庫鎖の可能性が高い。207も兵庫鎖の一部の可能性がある。

木製壺鐙金具（208・209）　２点出土している。吊鐙の鐙金具部の残存品。壺鐙に固定するための細長い舌状の脚部で、ハの字形に開く吊金具である。脚上部の幅3.95～4.60cmである。一部木質が付着している。欠損した下の部分に木製の壺鐙に固定するための鉄釘があったと思われる。また、上部には鐙靷につながる鐙靷金具がセットになっていたと思われるが確認できない。

輪鐙（210・211）　２点出土している。いずれも、靴留めが残る環鐙の破片である。幅1.30～1.50cm、厚み0.85～0.90cmで、方形のすべり留めの突出部がある。前二子古墳出土の可能性が高い。

鞍橋縁金具（212～214）　３点出土している。細片であるが、鞍橋飾金具である。幅0.50～0.60cmの鉄地銅板に飾り鋲を間隔密に打ち込んでいる。銅板に金メッキを施し、鋲は銀で被覆されている。鋲の中心間の間隔は0.6cmと密である。前二子古墳の発掘調査でも出土しており、前二子古墳の出土の可能性が高い。平成４年度の前二子古墳の調査で２点、平成14年度の調査で３点の出土があり、総計８点の破片が出土している。

環状辻金具（215～217）　３点出土している。215・216（径5.45cm・5.95cm）は辻金具の可能性が高い。径の大きい217（径6.25cm）は雲珠の可能性がある。断面は長方形で、厚みは、0.30～0.40cmである。有機質の付着は認められず、どのように革帯が付いていたか明らかではない。

絞具（218～225）　８点出土している。大きく５つの形態に分かれる。基部が幅狭で、細く延びていて、先端部が楕円状に大きく拡がるもの２点（218・219）方形でほぼ直線状のもの１点(220)、方形だが、先端部が隅丸形のもの１点（221）側縁部がやや内湾している形態のもの２点（222・223）基部が直線上で先端部のほうが円弧状を呈するもの１点（225）がある。

先端部が楕円状の輪金をつくる、径9mmの鉄棒を曲げて基部が幅狭で、断面隅丸方形のものの完存品(219)は、長6.55cm、最大幅3.50cmで、輪金の基部に鉄棒の端をまきつけて刺金とする。基部が欠けているもの（218）は、刺金が中央より先端部まで残っているものがある。

方形で直線状を呈するもの（220）は、厚さ6mmの鉄棒を直角に近く曲げているもので、断面は方形に近い断面隅丸方形で、絞具と刺金の一部が残っているのみである。

直線状で、先端部が隅丸の形態のもの（221）は、やはり先端部の一部が残るのみである。厚さ9.8mmの鉄棒をU字形に曲げて輪金を作っている。

やや測縁部が内湾しているもの（222・223）は、厚さ6～7mmの鉄棒をU字形に曲げている。鉄棒長4.85～5.05cmである。刺金を持たない。

基部が直線上で先端部のほうが円弧状を呈するもの（225）は、厚さ5.3mmの鉄棒をU字形に曲げている。長5.20cm、幅3.65cmである。刺金を持たない。

それぞれの絞具には有機質の付着は無い。様々な絞具があるが、それぞれ別の部位の絞具として使用されたものと考えられる。

方形金具（226～240）　15点出土している。一辺幅2.50～2.90cm、地板厚0.30～0.55cmである。方形で、中央に革帯を止めるための脚がある。脚はおそらく、鋲状のもので方形金具の中央に打ち込んで取り付けた後、丁寧に鋲頭を研磨して、方形金具の面との凹凸面を無くした後、銅板を張り、金メッキを施している。銅板は裏に0.1～0.3cmで裏に折り返している。後述する責金具とセットとなって、革帯を留めるものである。方形金具を中心として、責金具が四辺につく、辻金具に使用されたと考えられる。平成４年度の前二子古墳の調査で２点出土してあり、総計17点出土している。

コハゼ形金具（241～244）　４点出土している。長さ2.65～2.85cm、幅2.30～2.50cmで、地板厚0.30～0.40cmである。一方が、円弧状を呈するもので、中央に革帯を止めるための脚がある。脚はおそらく、鋲状のも

ので コハゼ形金具の中央に打ち込んで取り付けた後、丁寧に鋲頭を研磨して、方形金具の面との凹凸面を無くした後、銅板を張り、金メッキを施している。方形金具と、コハゼ形金具がセットとなっての辻金具としての想定もできるが、個体数が少ないため、後述する責金具とセットとなる、革帯の先端の飾金具の可能性もある。平成4年度の前二子古墳調査で1点出土してあり、総計5点出土している。

責金具（245～257）　13点出土している。1条～3条のものがある。1条のものの一部は2条のものが分かれて1条となっているものがあると想定される。責金具は、幅広(0.95 cm)のものと、幅狭(0.40～0.55 cm)のものがある。幅広のものは単体での責金具の可能性が高いが、幅狭のものは、2条あるいは3条で責金具として使用されたものと思われる。責金具に良く見られる表面の刻み目は確認できない。厚さは、0.25～0.30 cmである。断面長方形で、内面には有機質が付着してあるものがあり、革帯と考えられる。屈曲の内幅からすると、2.55～3.0 cmの幅の革帯を留めていた可能性が高い。方形金具やコハゼ形金具と共に使用されたものと思われる。平成4年度の前二子古墳の調査で破片が4点出土しており、総計17点の破片が出土している。

金具類（258～261）　いずれも鉄地金銅張で、鉄製円頭鋲を打つ。地板の形態により3種類ある。

楕円形金具（258）1点出土している。平面楕円形の金具で、長2.40 cm、幅3.40 cmで、2つの鋲が打たれている。

爪形金具（259）　1点出土している。長2.45 cm、幅3.65 cmで、2つの円頭鋲が打たれている。

長方形金具（260）1点出土している。長1.90 cm、幅2.90 cmで、2つの円頭鋲が打たれている。

心葉形金具（261）　1点出土している。心葉形で鉄地に銅板を張り、金メッキを施している。大きな鋲が打ち込まれている。馬具の飾り金具と考えられ、綏の座金具の可能性がある。全長2.90 cm、全幅2.45 cmで、地板厚0.35 cmである。

6)農工具

刀子（267～277）　11点出土している。刀子は、刃部3点（267～269）、刃・茎部4点（270・271・271・275）、茎4点（272・273・276・277）である。完存品は無い。刃最大長は7.35 cmで、刃最大幅は2.00 cmである。茎の最大長は、5.65 cmである。茎には木質が付着し、いずれも木製の柄が装着していたことが分かる。茎の先端は栗尻が2例あり、目釘孔は1～2孔開いていて、すべて目釘が残っている。

斧形小型模造品（278）　1点出土している。全長4.0 cm、刃幅2.15 cm、袋部長2.60 cm、袋部径1.00 cm、袋部基部幅1.10 cm、袋基部厚0.10 cmである。鉄製雛形工具で、斧形品である。袋部には木質が付着しており、柄が装着されていたことが分かる。

鉄製農工具模造品としては、平成4年度の前二子古墳の調査で有肩斧形品1、刀子1、鋤1、鑿状工具1が出土しており、農工具の模造品のセットが副葬されたと考えられる。前二子古墳出土のものと考えられる。

県内の類例は、梁瀬二子塚古墳（安中市）からやりがんなの模造品が出土している。(1) 鉄製雛形農工具は前二子古墳出土のものである。

鑿状工具（279～306、311～320、329～336）　鑿状工具は破片で46点とかなりの点数を出土している。頸～刃部を完存しているもの(329)は、頸部長8.60 cmで、頸部最大幅が0.85 cm、頸部最大厚が0.40 cmである。頸部の関は、角関を持つものと棘状の関を持つものの2種類ある。刃はやや斜めに加工しているもの(329)と、直線状を呈しているもの(330)の2種類ある。刃から頸には直線状に移行し、刃関は有さないが、一部、刃の関が斜め関を呈しているもの(320)もある。頸部長は、9.55 cmが最長で、茎長は7.50 cmが最長でかなりの長さである。基本的には鑿状の工具と考えて良い。小型の一群は模造品となる可能性もある。これだけの数量を一つの古墳に収めることは非常に希である。前二子古墳出土の可能性が高い。平成4年度の前二子古墳の調査で1点出土しており、総数47点の破片が出土している。

大型鑿状工具（307～310、321～328）　12点出土している。大型のノミ状工具で、先端の残った唯一の例から、斜めに刃を加工していることが分かった(321)。頸部の長さは、最長で、20.85 cmで、刃部は不明なので、頸部全長はさらに大きい可能性がある。茎も、最長で、8.50 cmで、かなりの長さを持っていることが分かる。この長さの工具というと鑿・鏨の類であろうが、いずれのものかはっきりとしない。一部のものには、頸部にも木質が付着しているものがあり、柄が上にまでいっているものもある可能性がある。いずれにしても、

あまり類例の無い重要な工具である。前二子古墳出土の可能性が高い。

針状工具（315・316、337～340）　6点出土している。針状工具は、棒状の工具で、茎には木質が付着しているので、木製の柄があることがわかる。完存品が無いので全長は不明である。一番長いもので3.80 cm以上、厚みは0.30～0.45 cmである。茎も含めての長さである。針状工具の先端は欠失しているので、詳細は不明だが、尖っていたであろうことが想定される。平成4年度の前二子古墳の調査では、先端が欠失しているものが1点出土している。

7）その他・不明鉄製品

鉤状鉄製品（341～357）　17点出土している。ほぼ完存しているものは、長さは21.60 cmである。幅は0.70～0.90 cmで、平均は0.80 cmである。厚みは0.35～0.65 cmで、平均は0.45 cmである。鉤部の曲がりは、個体によりかなり変異があり、一定では無い。壁面に打ち込んで、布を吊り下げたものと考えられる。類例としては、観音塚古墳例（高崎市）（文10）・観音山古墳例（高崎市）（文11）・藤ノ木古墳例（奈良県）（文12）などがある。（文13）いずれも、布で壁面を覆い隠す時の布を掛けるフックとなるものである。平成4年度の前二子古墳の発掘調査でも、3点出土している。前二子古墳出土と考えてよい。他に、釘類が前二子古墳発掘調査で出土している。

板・棒状鉄製品　（262～266）5点出土している。

山形板状鉄製品（262）　幅1.50 cmで、0.50 cmの厚みを有し、残存幅8.65 cmを有する。木質の付着などは無く、鉄板を山形状に加工したもので用途不明品である。

緩やかな円弧状を呈する板状鉄製品（263）幅1.35 cmで、厚0.45 cmで、残存幅9.20 cmを有する。用途不明の鉄製品である。

先端が屈曲する棒状鉄製品（264）　残存長4.15 cm、幅0.90 cm、断面長方形で、全体に木質が付着しており、木に打ち込んだ鎹の可能性も考えられる。

他に屈曲した棒状鉄製品の一部（265）や、棒状のやや湾曲した鉄製品（266）が2条錆着して出土している。

【参考文献】

（1）安中市教育委員会『梁瀬二子塚古墳　梁瀬首塚古墳』　2003

（2）徳江秀夫ほか『綿貫観音山古墳Ⅱ石室・遺物編』　群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999

（3）臼杵勲「鋼本孔を持つ鉄刀について」『考古学研究』31巻2号考古学研究会 1984

（4）杉山秀宏「群馬県出土の鉄鉾について」『群馬県内古墳出土の武器・武具』群馬県古墳時代研究会 1995

（5）杉山秀宏「群馬県出土の鉄鏃について」『群馬県内古墳出土の武器・武具』群馬県古墳時代研究会 1995

（6）若狭徹ほか　『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会 2000

（7）入江文敏「若狭地方における首長墓の動態」『福井県史資料編13考古』福井県　1986

（8）橋本英将　「双葉剣菱形杏葉の検討」『大谷古墳』上中町教育委員会 2005

（9）伊藤雅文「馬具」『若狭と越の古墳時代　季刊考古学別冊19』雄山閣 2013

（10）高崎市教委　「L 字形金具」『観音塚古墳調査報告書』高崎市教委 1992

（11）徳江秀夫ほか「9. 吊手金具」『綿貫観音山古墳Ⅱ』石室・遺物篇　群馬県教委・(財)群馬県埋文事業団　1999

（12）勝部明生・松田真一・千賀久ほか　「3. 鉤状鉄製品」『斑鳩 藤ノ木古墳』第一次調査報告書　奈良県立橿原考古学研究所 1990

（13）右島和夫　「鉤状鉄製品」『古文化談叢』65集　古文化談叢 2011

【全体について参考とした文献】

高橋城司「前二子古墳」「後二子古墳並小古墳」『群馬県史跡名勝天然記念物調査報告』第一輯　1929 群馬県

尾崎喜左雄「前二子古墳」「後二子古墳」『前橋市史』第1巻 1971 前橋市

石川正之助「前二子古墳」『群馬県史』資料偏3　原始古代3古墳　1981　群馬県史編さん委員会

加部二生「前橋市前二子古墳の出土遺物と年代観」『群馬考古学手帳』1号1990　群馬土器観会

加部二生「アーネスト・サトウ著「上野地方の古墳郡」の学史的位置」『国立歴史民俗博物館研究報告』76集　1998 国立歴史民俗博物館

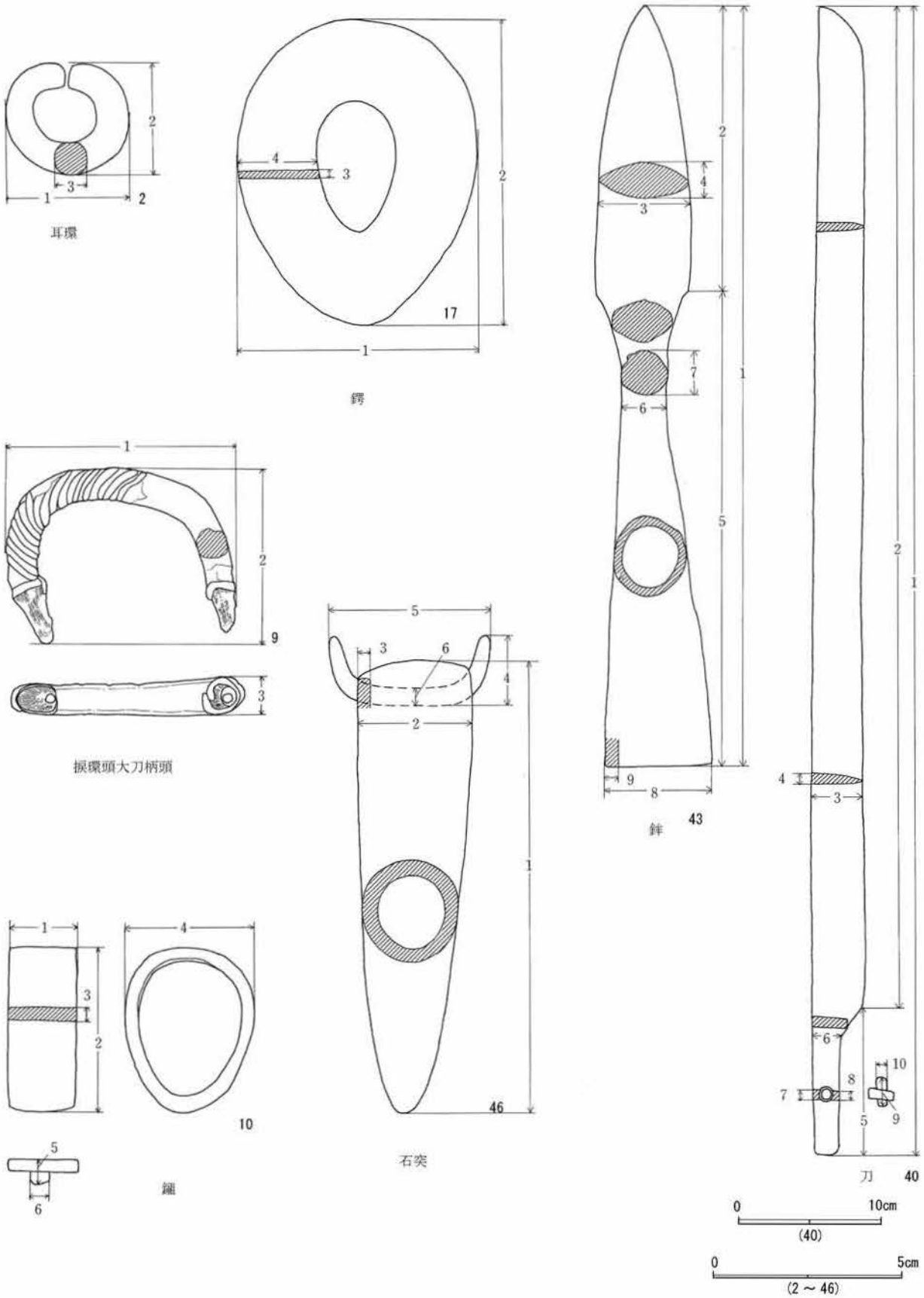


Fig. 16 前・後二子石室出土品計測凡例 (1)

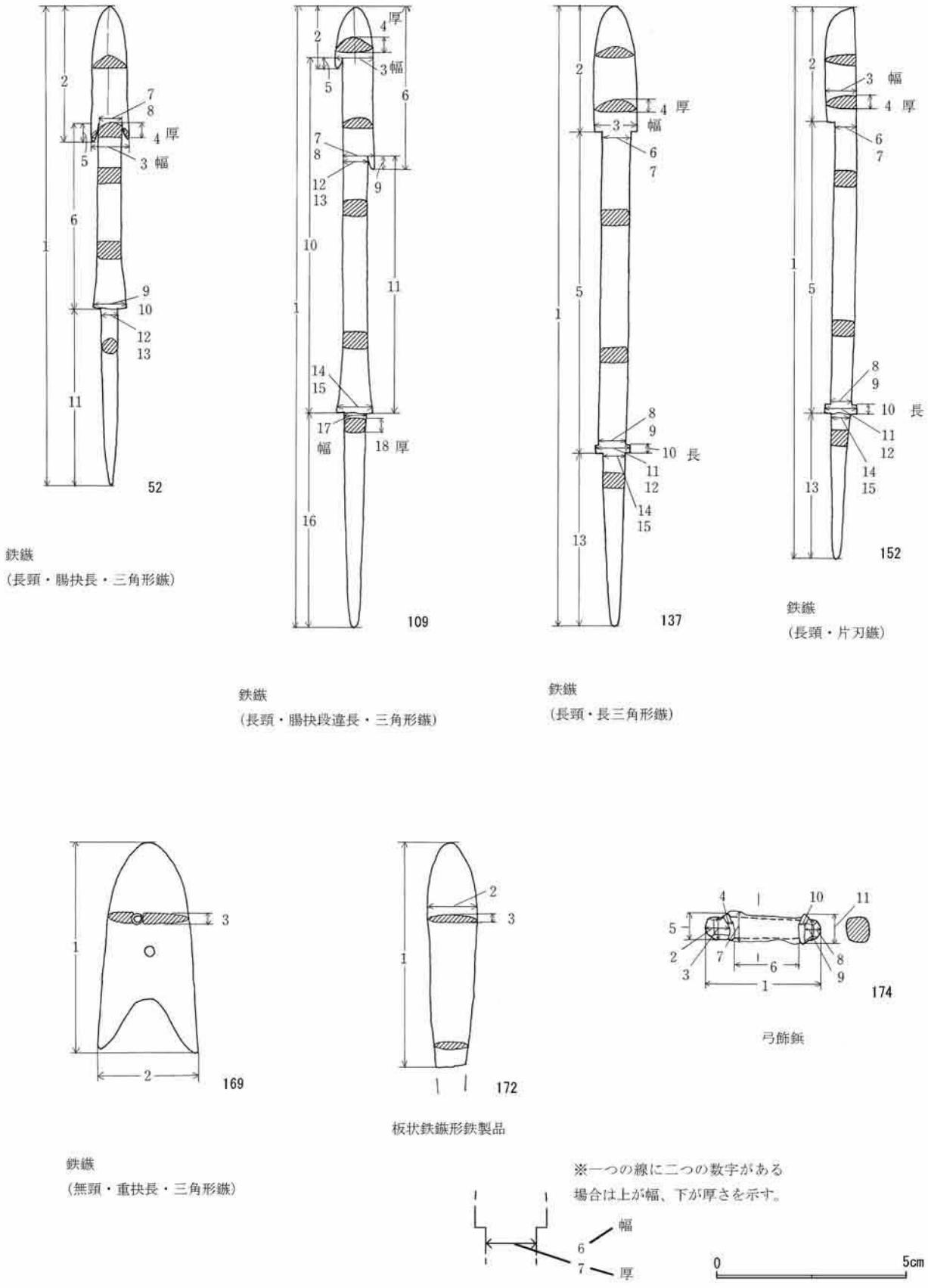
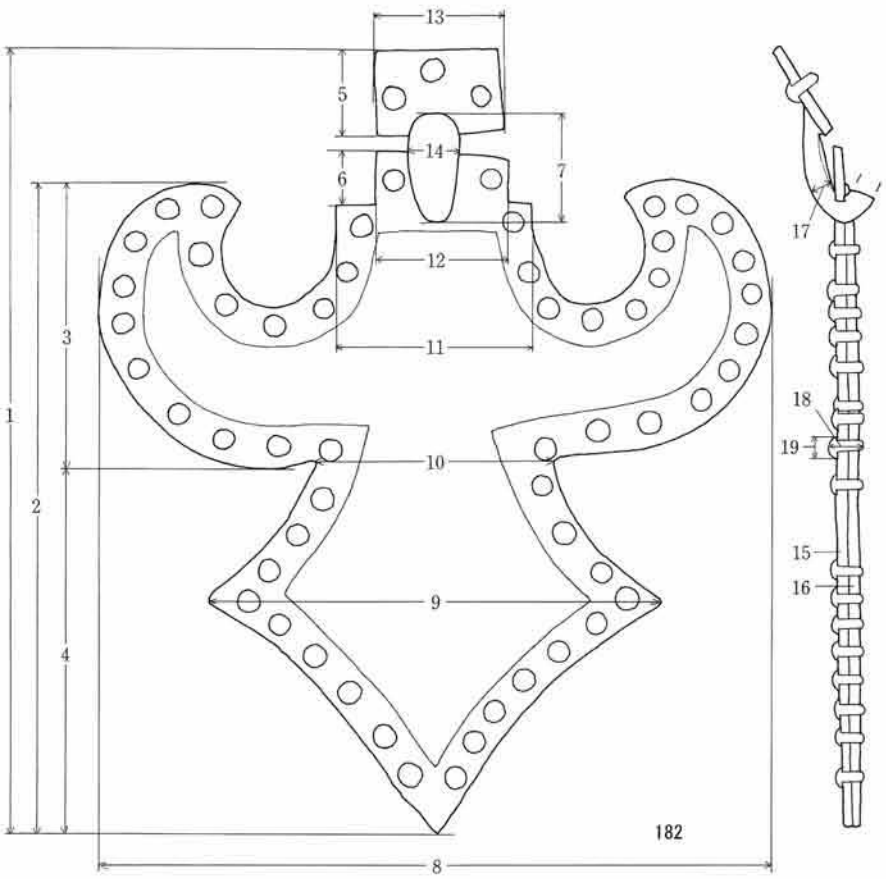


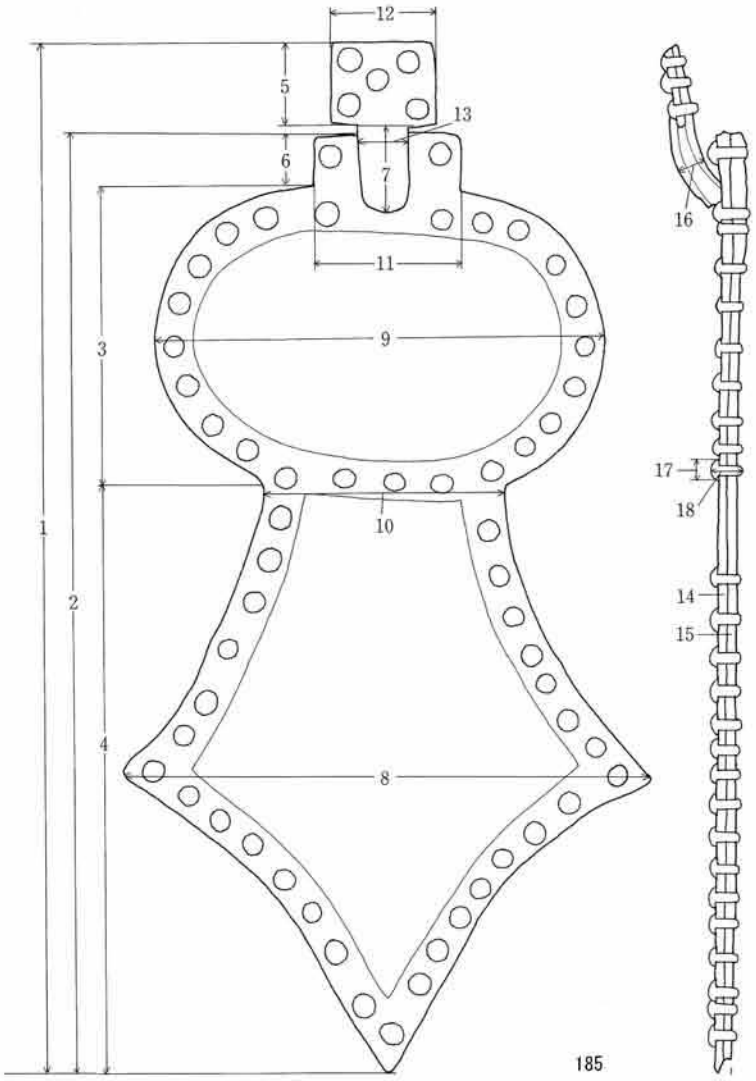
Fig. 17 前・後二子石室出土品計測凡例 (2)



双葉剣菱形杏葉

0 10cm

Fig. 18 前・後二子石室出土品計測凡例 (3)



剣菱形杏葉

Fig. 19 前・後二子石室出土品計測凡例 (4)

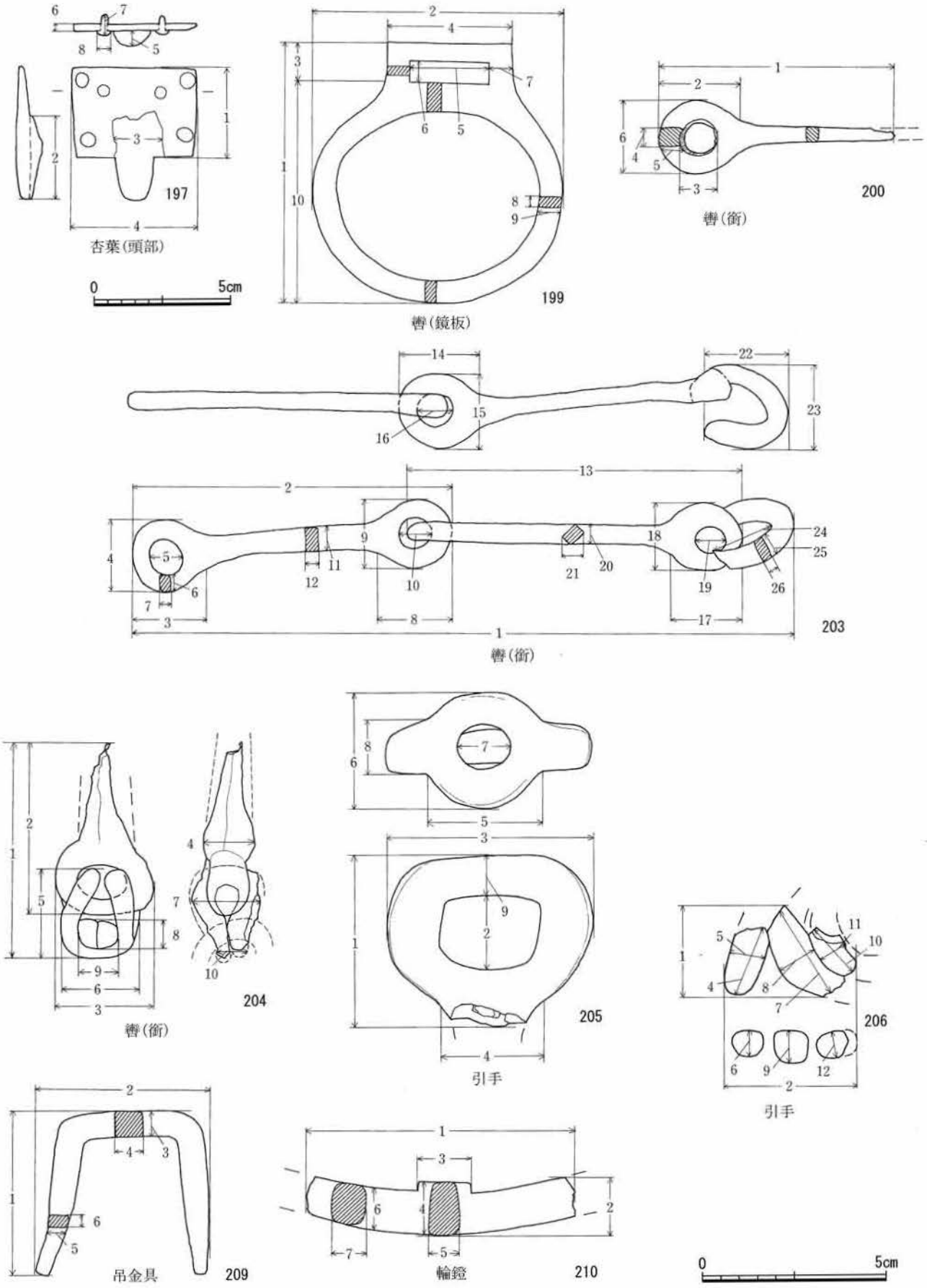


Fig. 20 前・後二子石室出土品計測凡例(5)

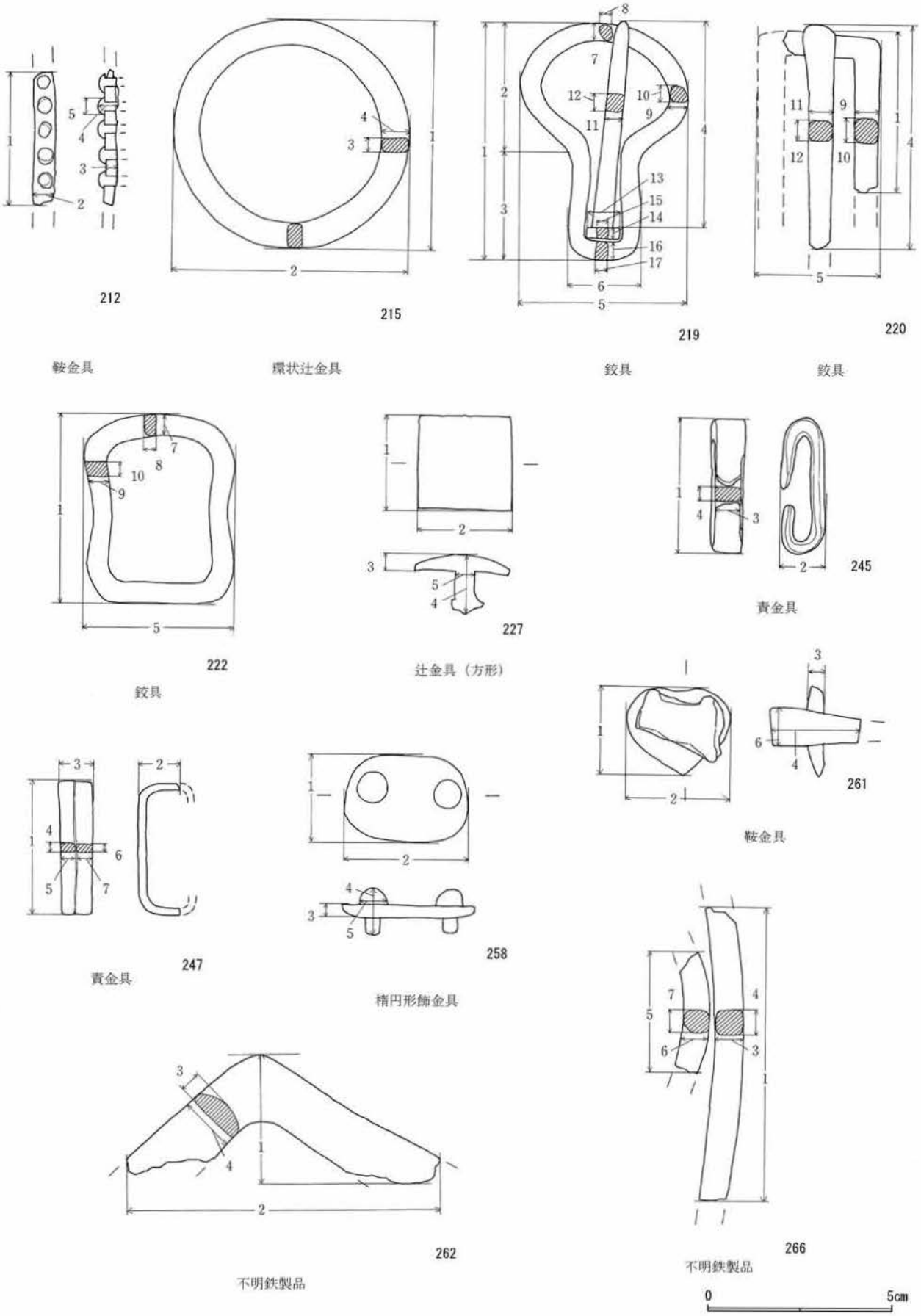


Fig. 21 前・後二子石室出土品計測凡例 (6)

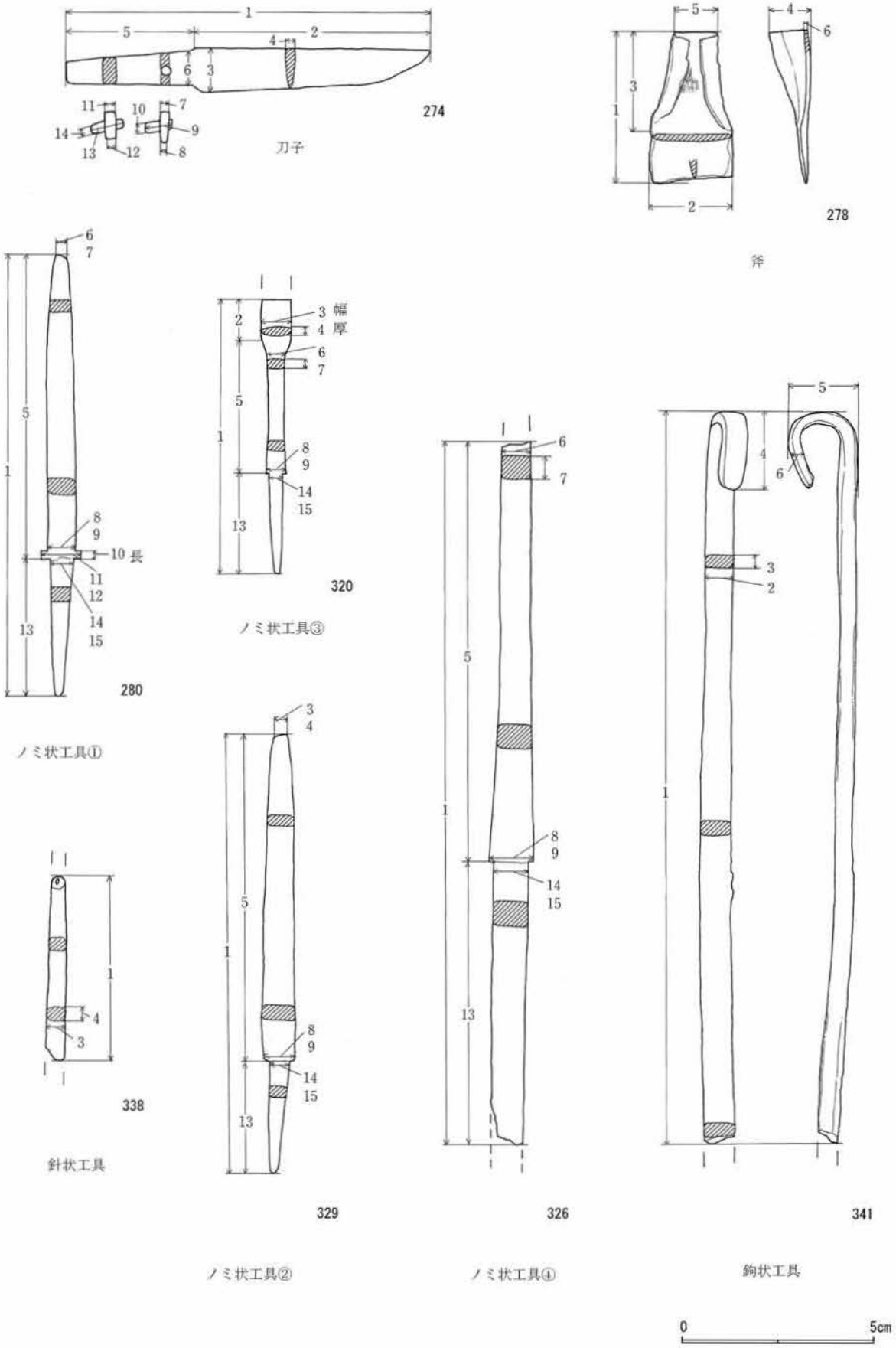


Fig. 22 前・後二子石室出土品計測凡例 (7)

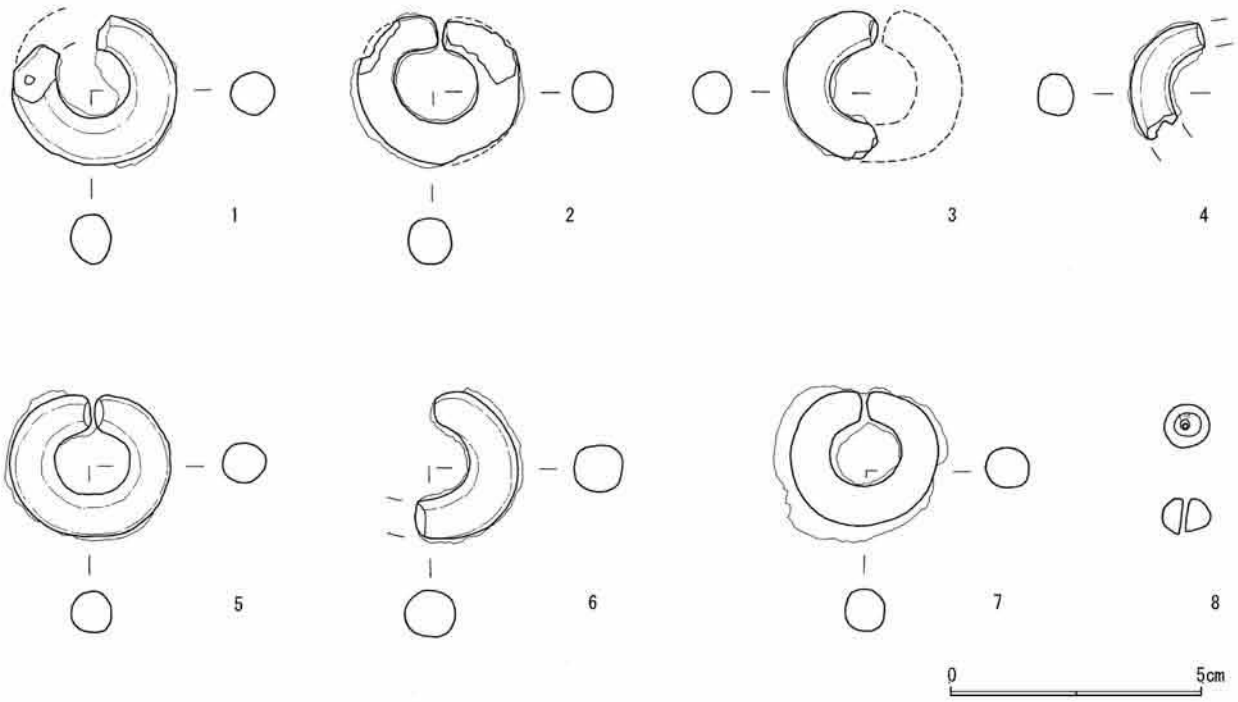


Fig. 23 明治 11 年石室出土品実測図 (1)

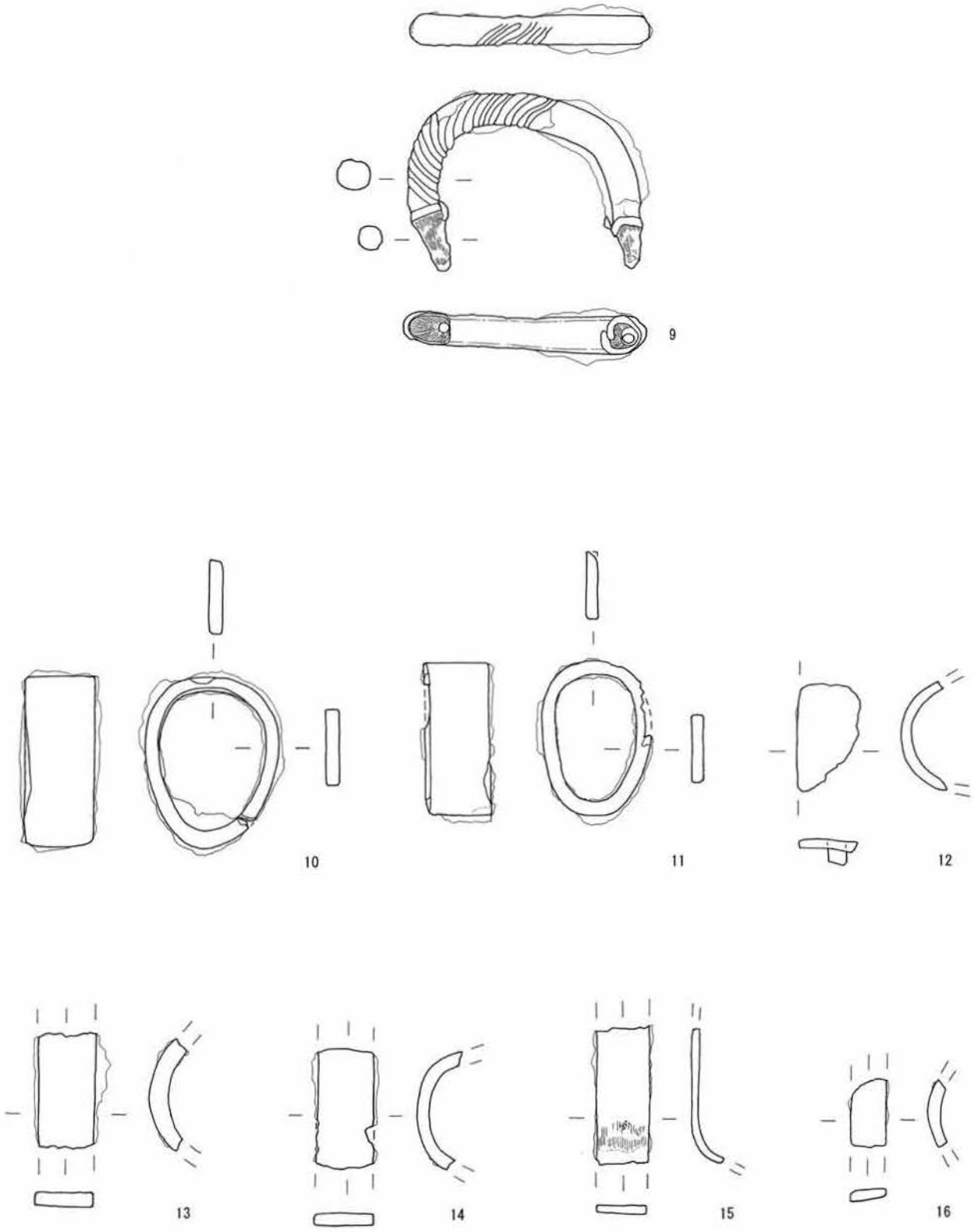


Fig. 24 明治 11 年石室出土品実測図 (2)

0 5cm

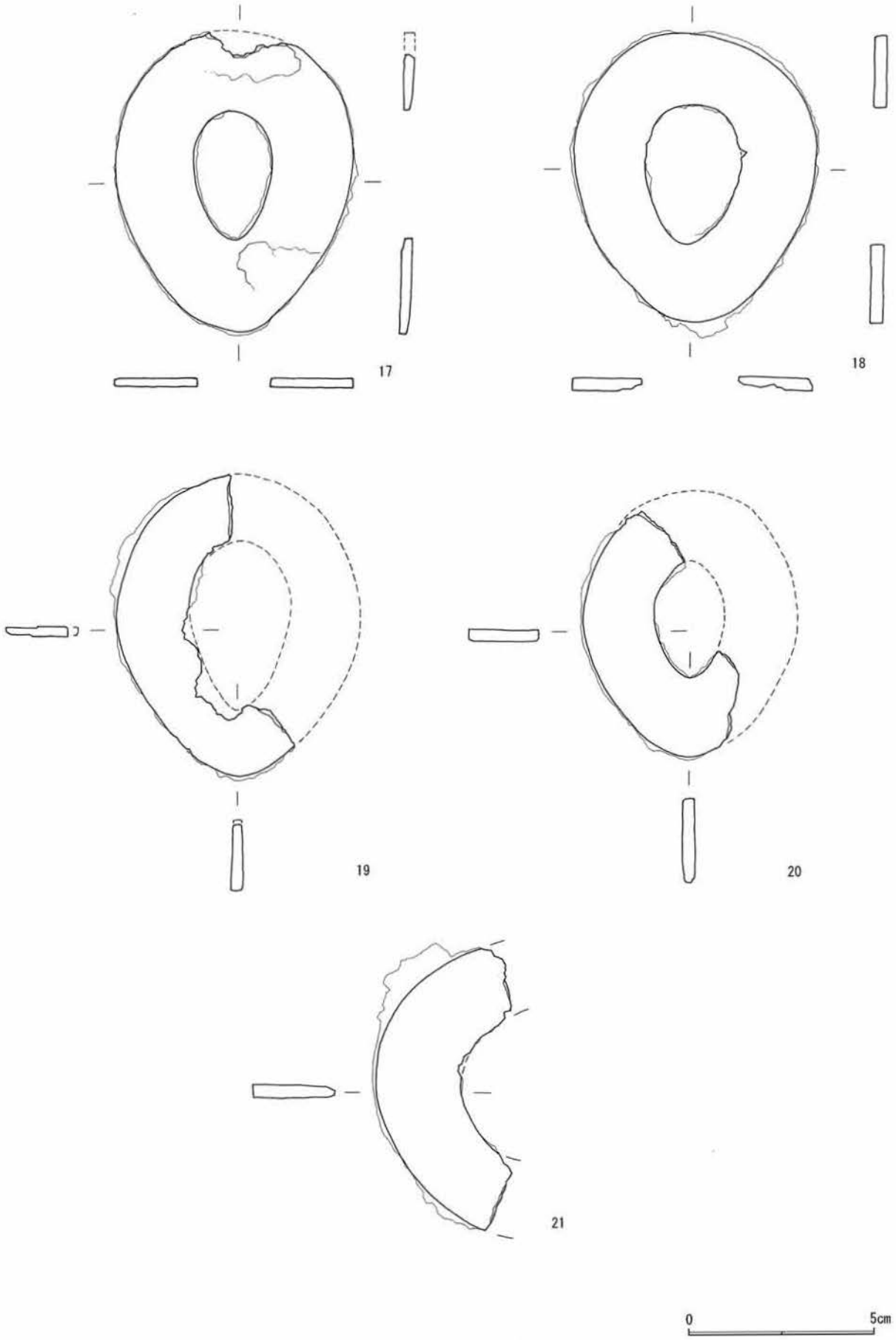


Fig. 25 明治 11 年石室出土品実測図 (3)

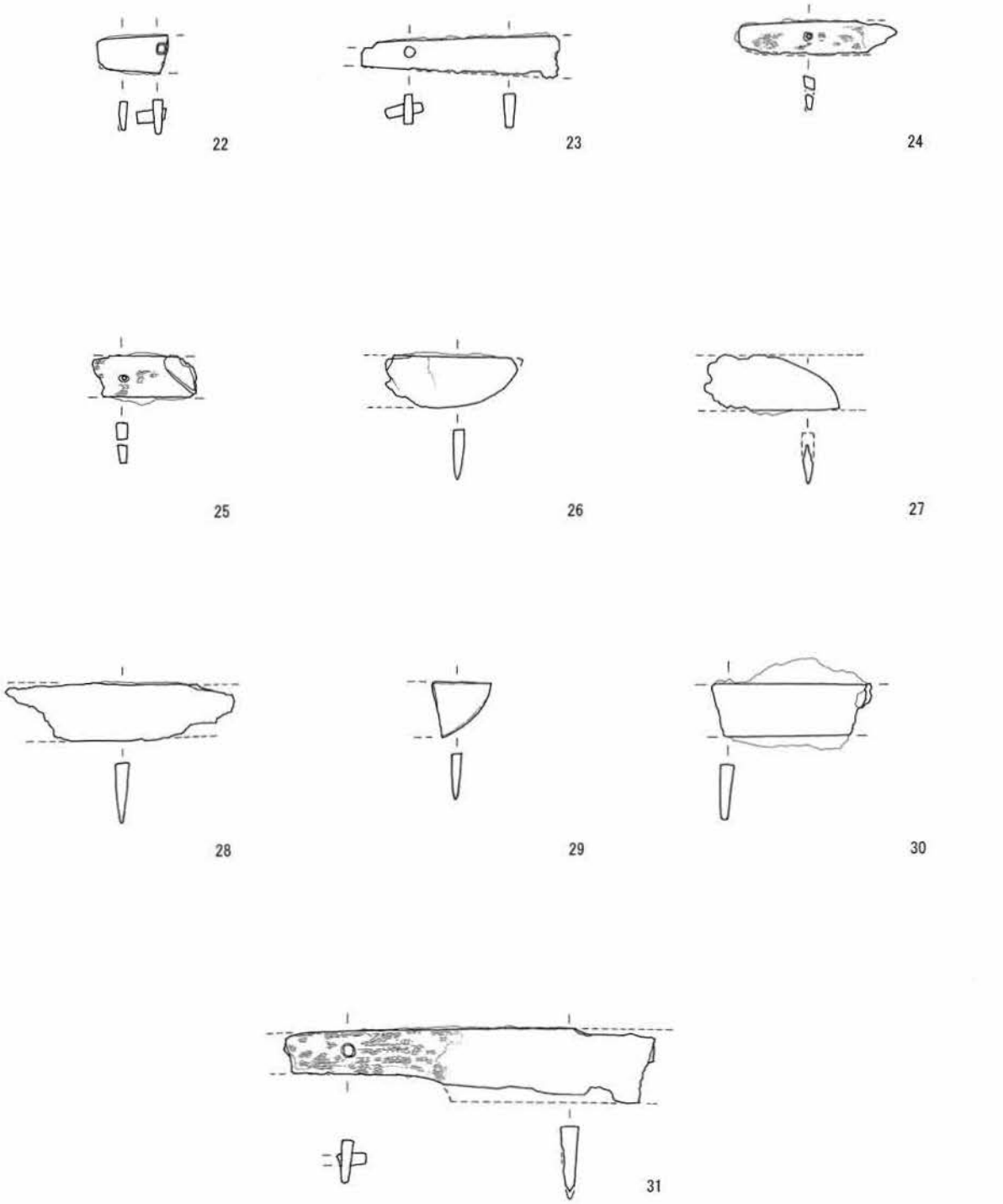


Fig. 26 明治 11 年石室出土品実測図 (4)

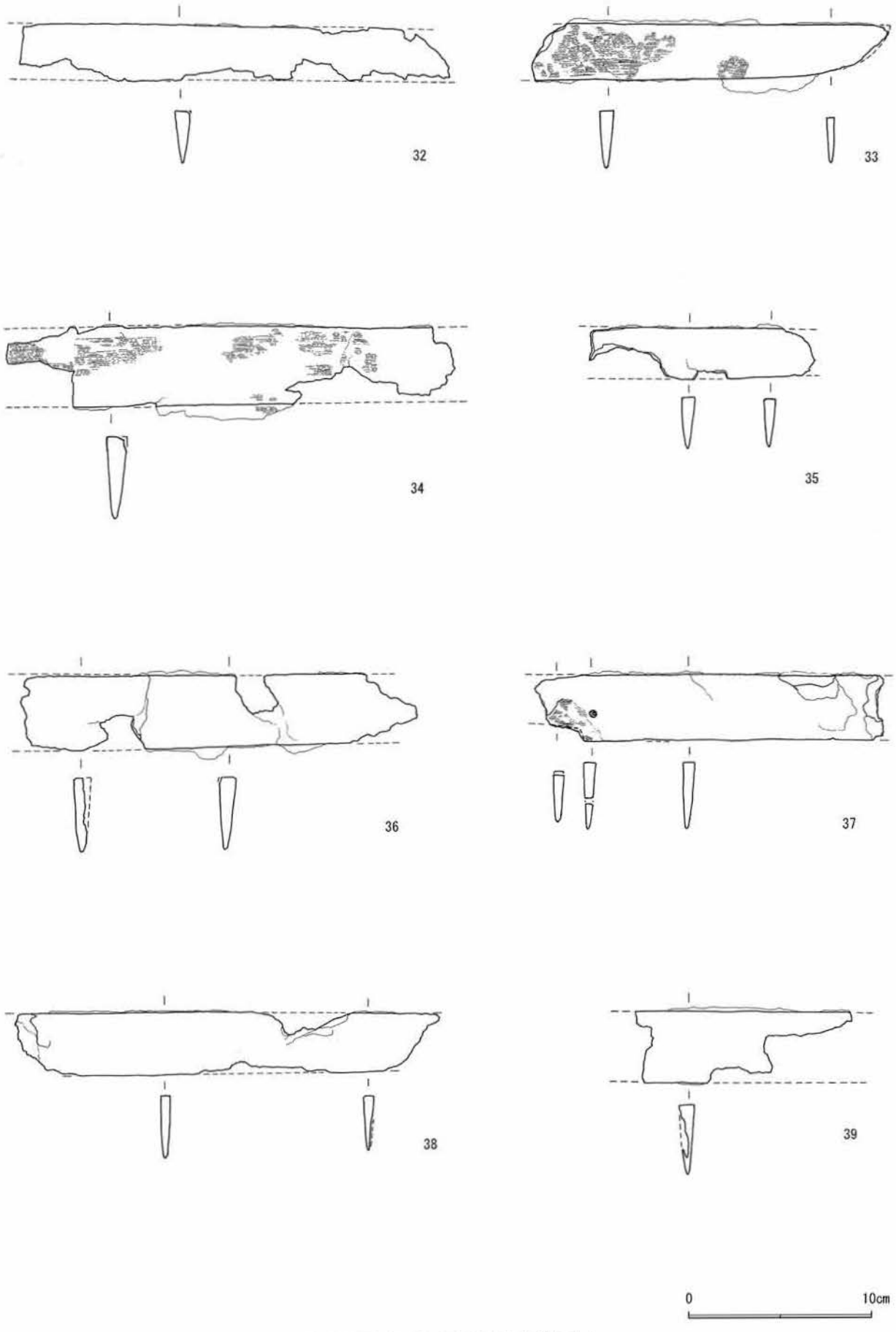


Fig. 27 明治 11 年石室出土品実測図 (5)

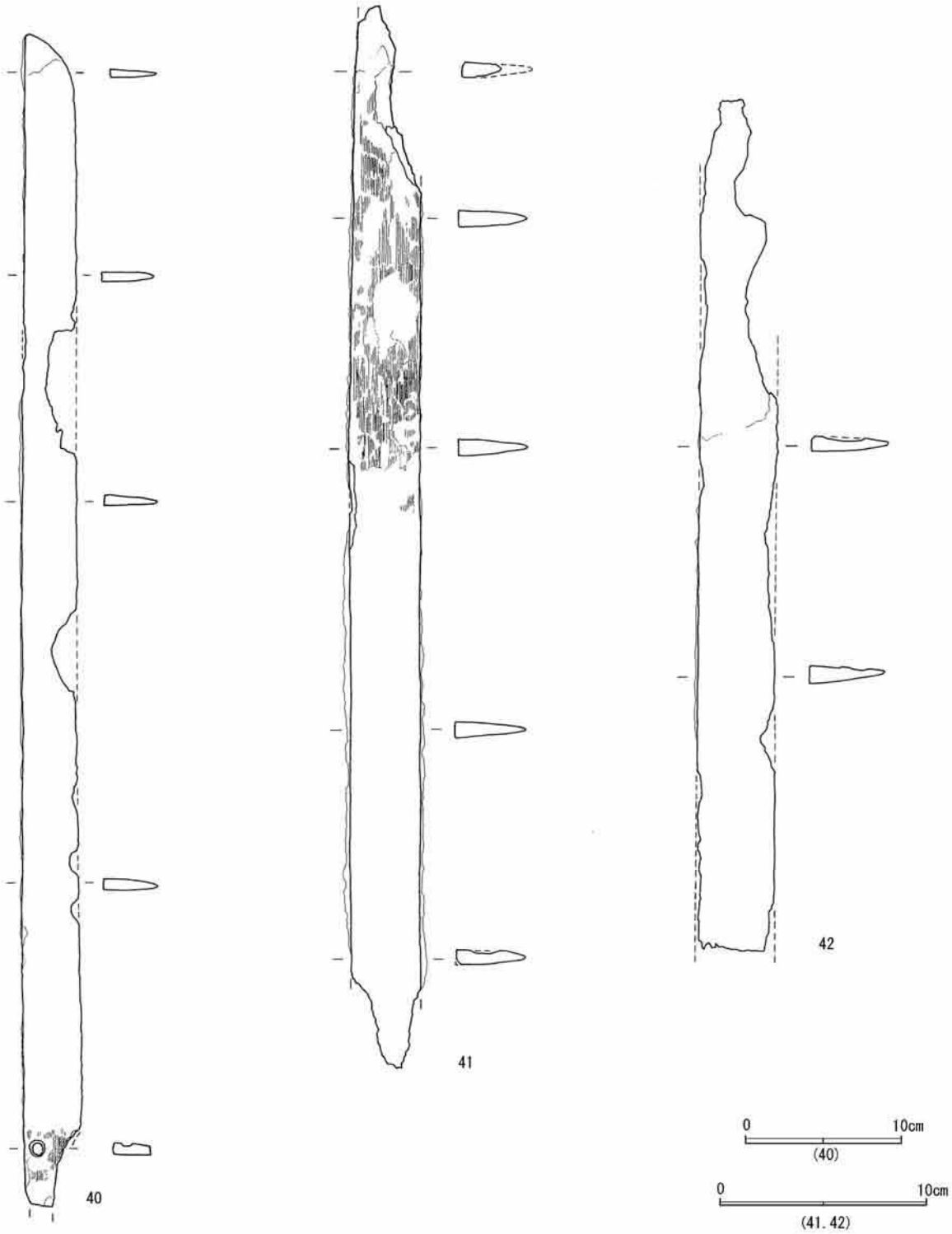


Fig. 28 明治 11 年石室出土品実測図 (6)

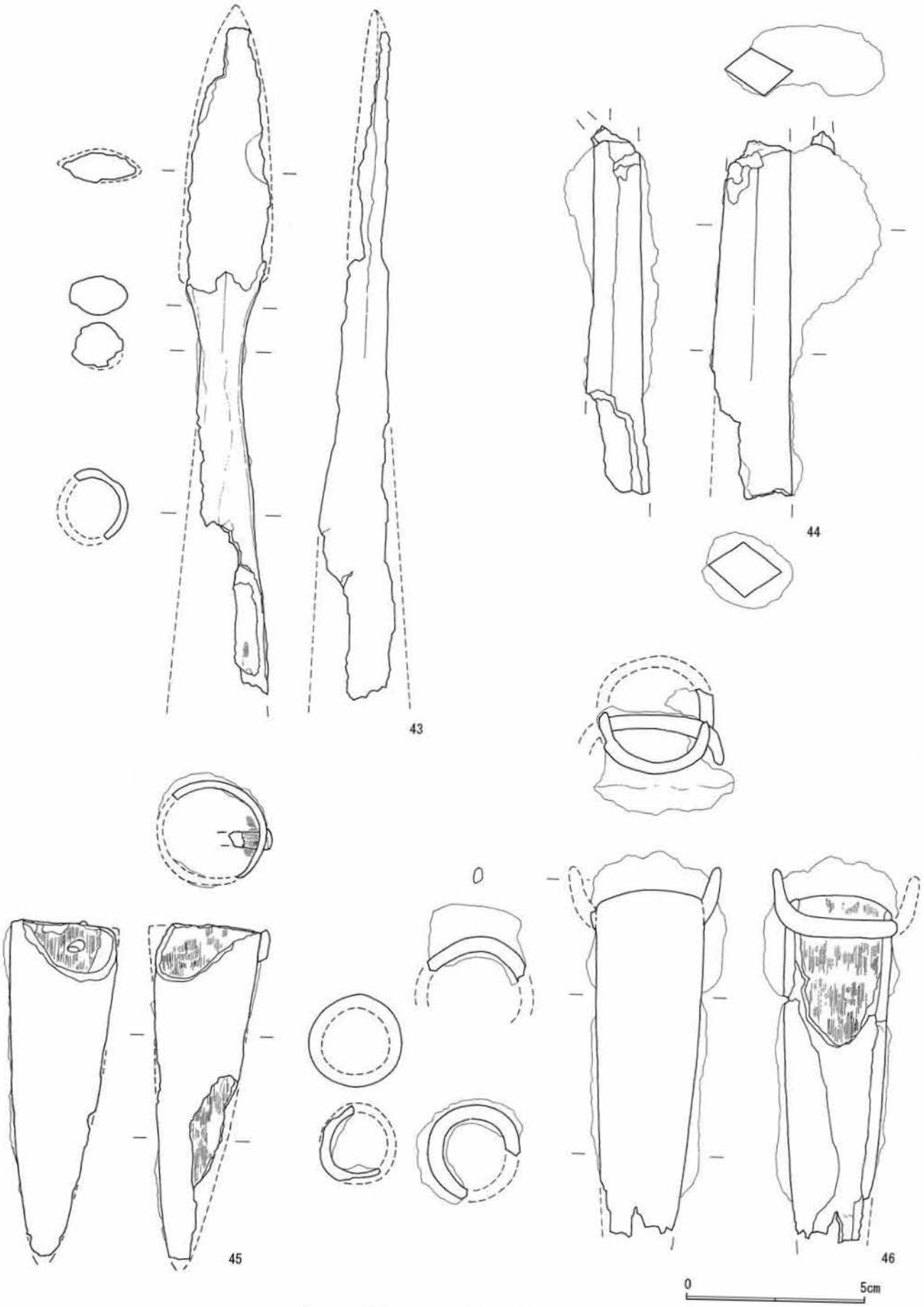


Fig. 29 明治 11 年石室出土品実測図 (7)

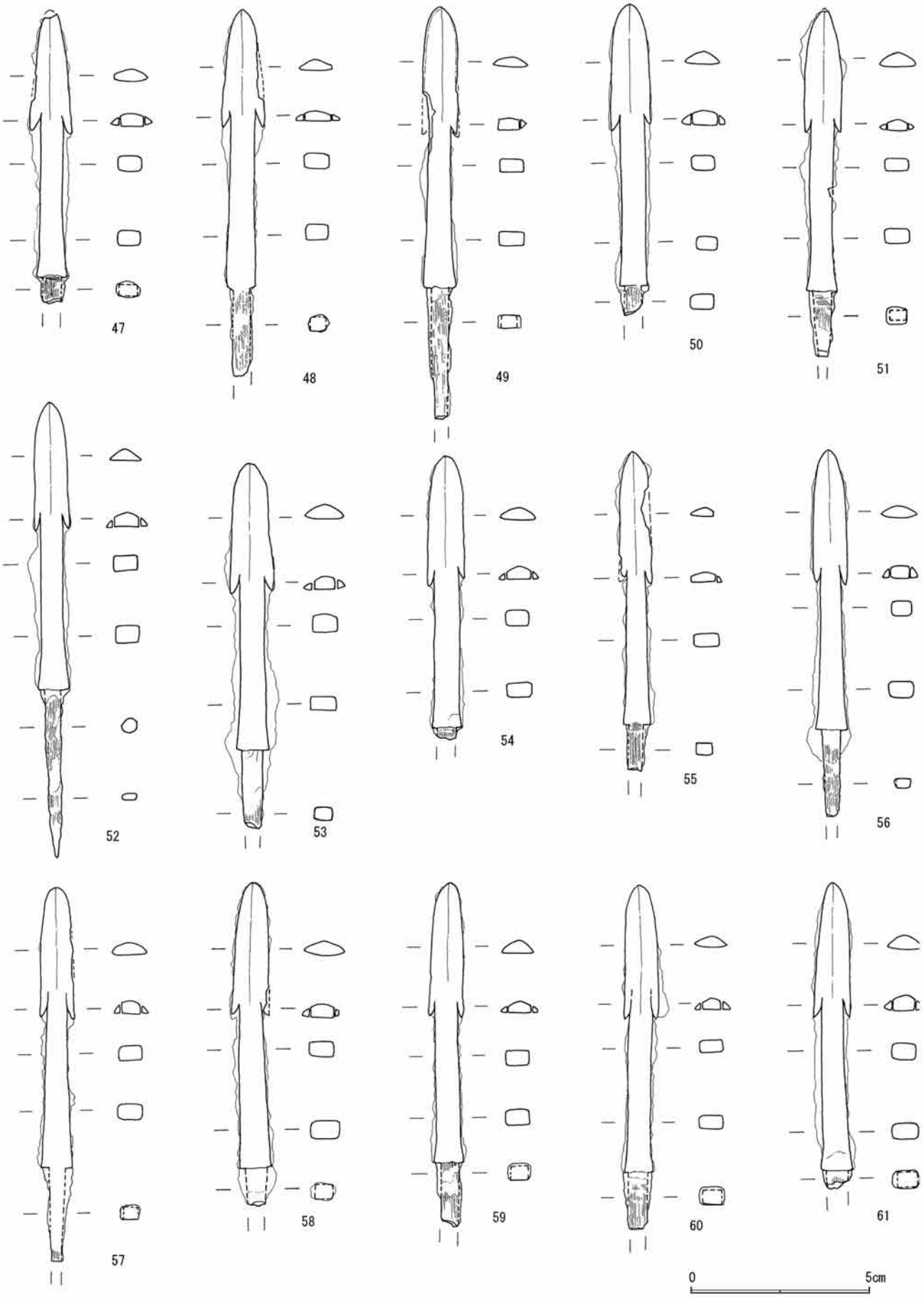


Fig. 30 明治 11 年石室出土品実測図 (8)

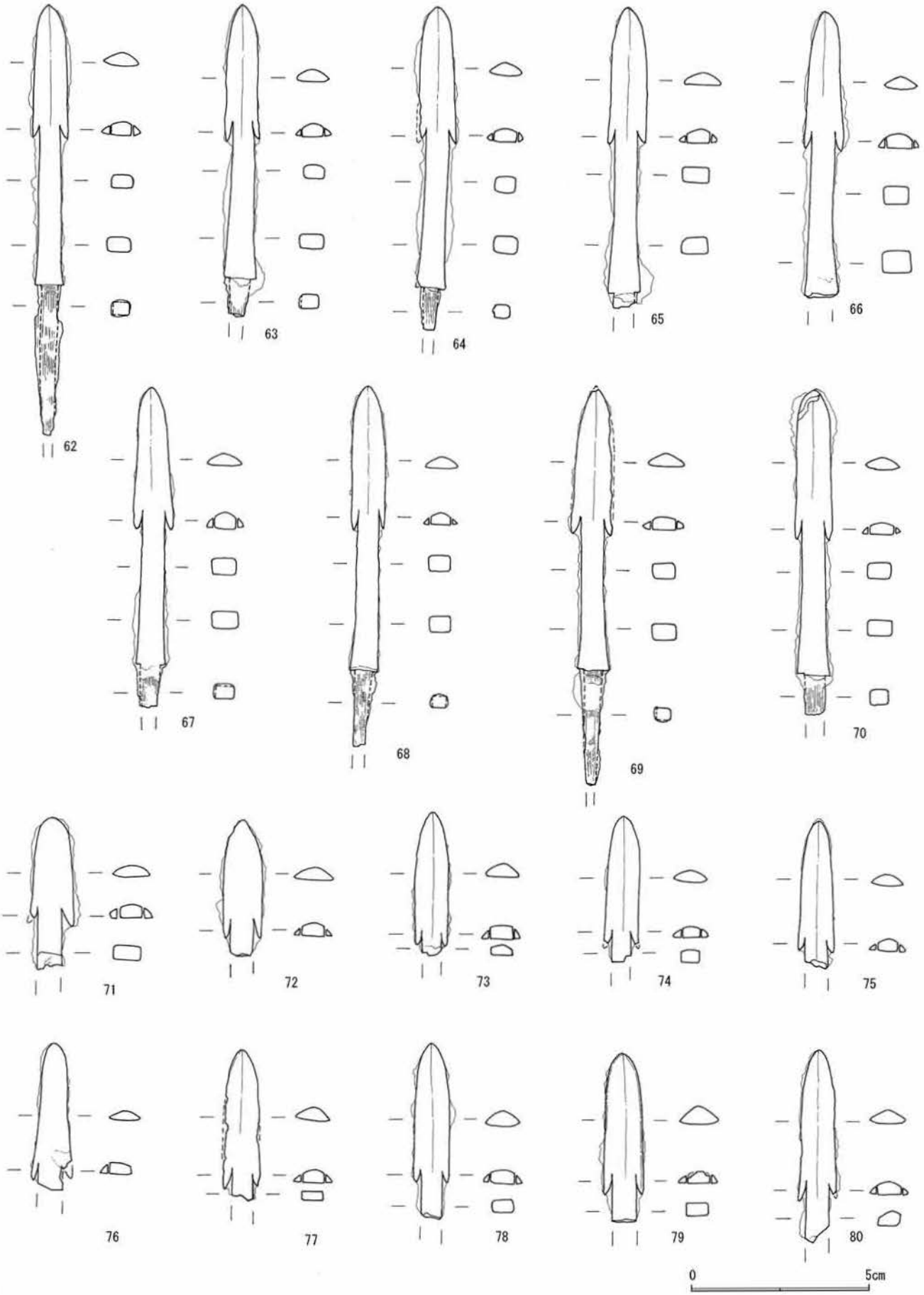


Fig. 31 明治 11 年石室出土品実測図 (9)

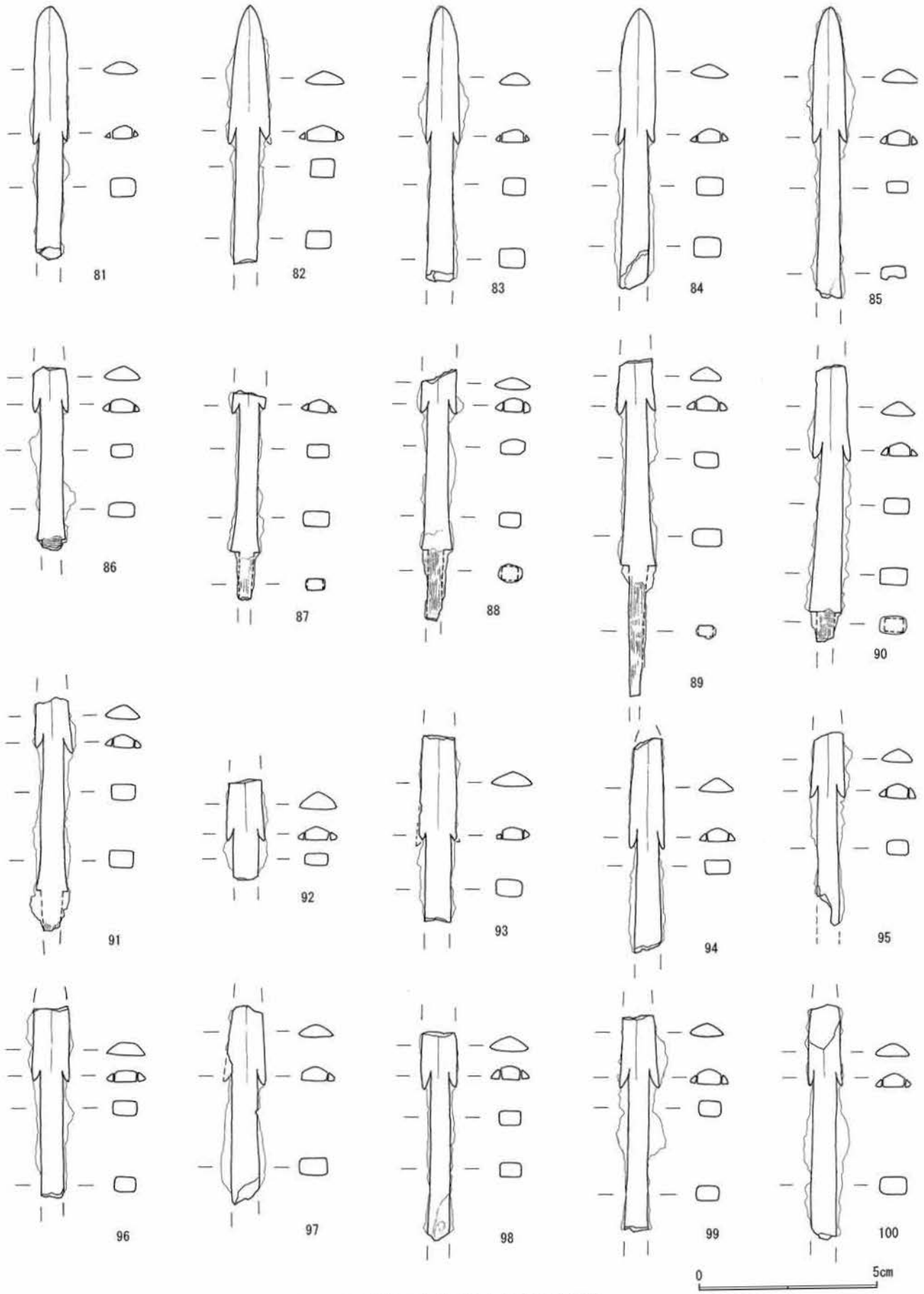


Fig. 32 明治 11 年石室出土品実測図 (10)

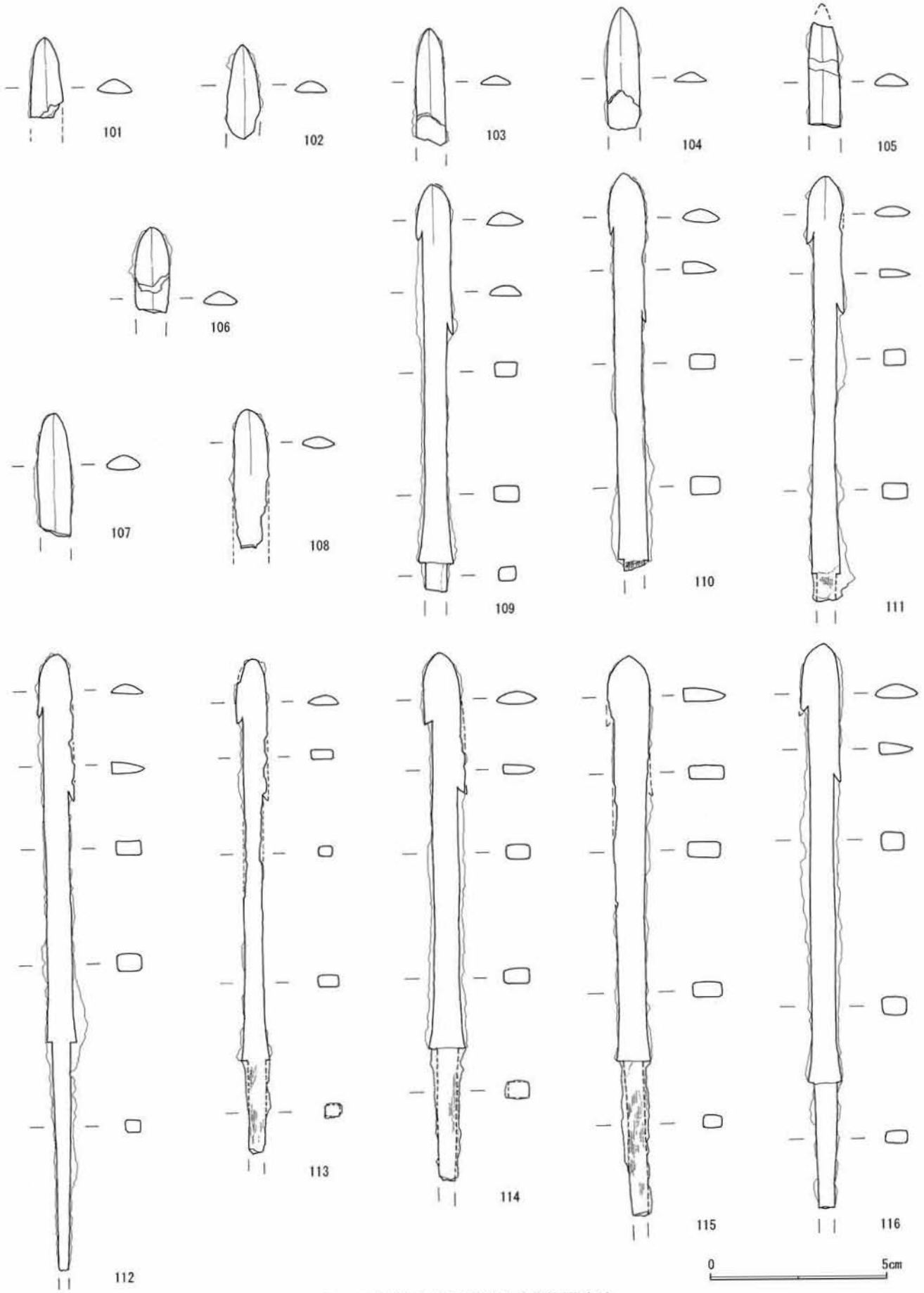


Fig. 33 明治 11 年石室出土品実測図 (11)

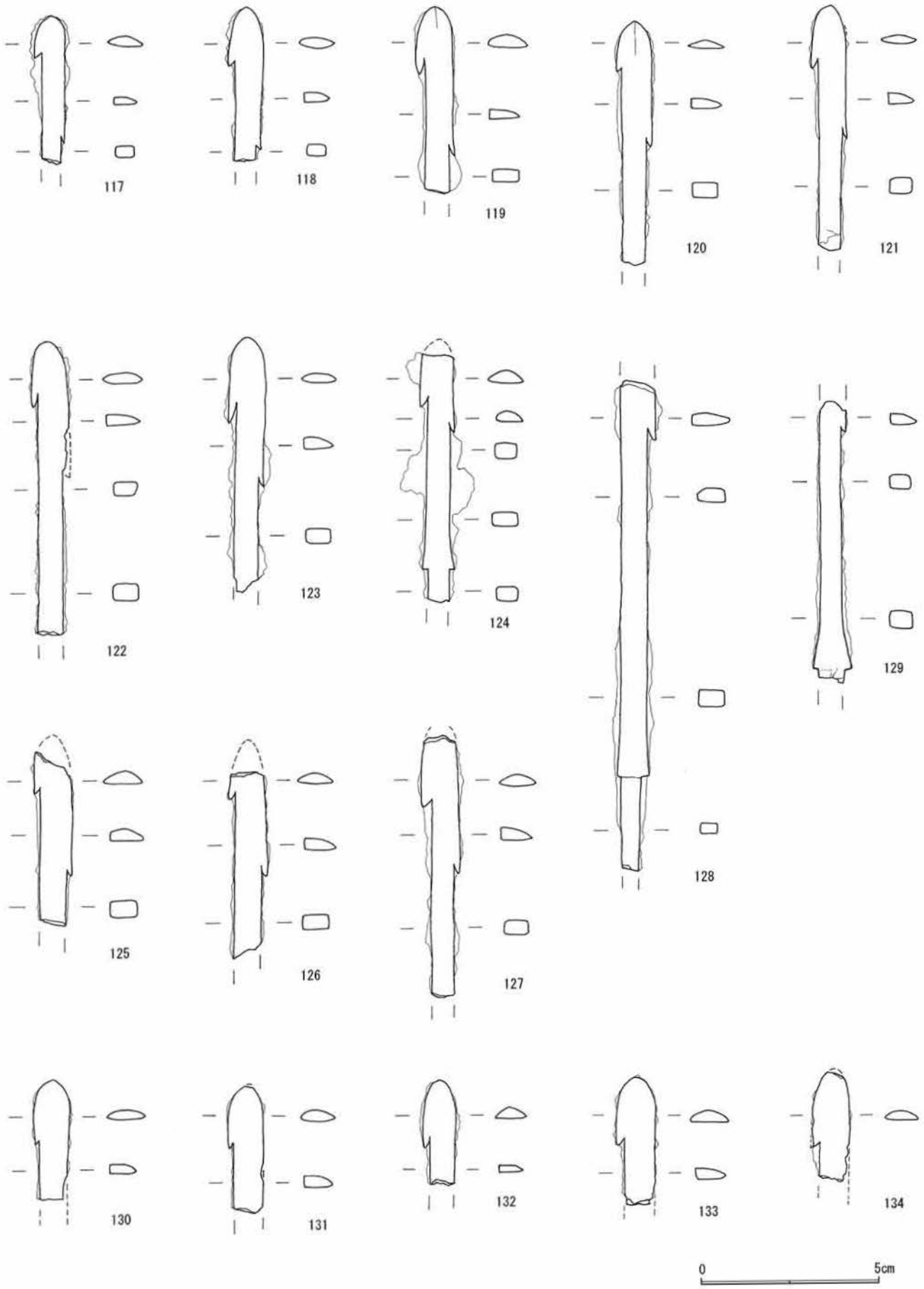


Fig. 34 明治 11 年石室出土品実測図 (12)

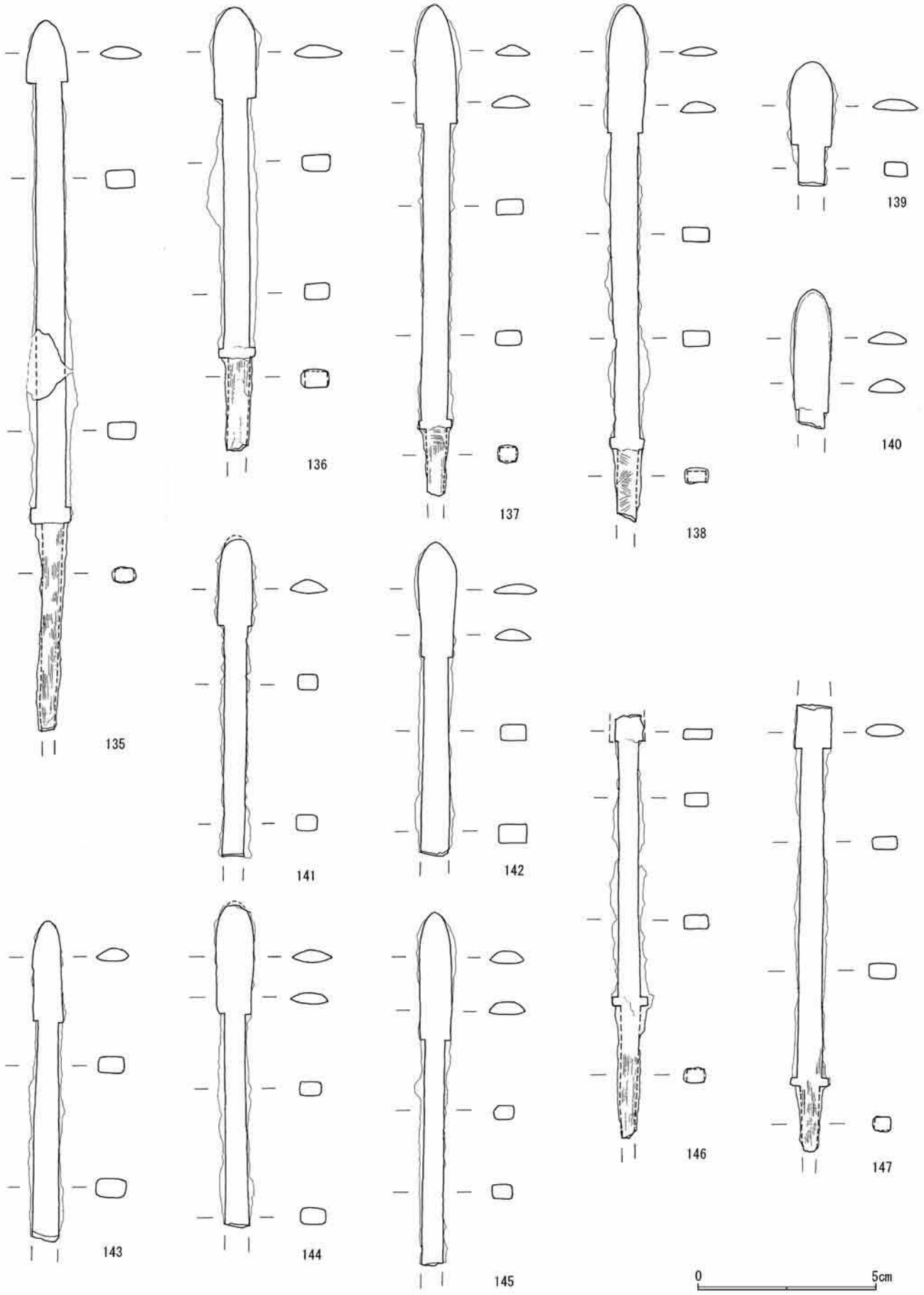


Fig. 35 明治 11 年石室出土品実測図 (13)

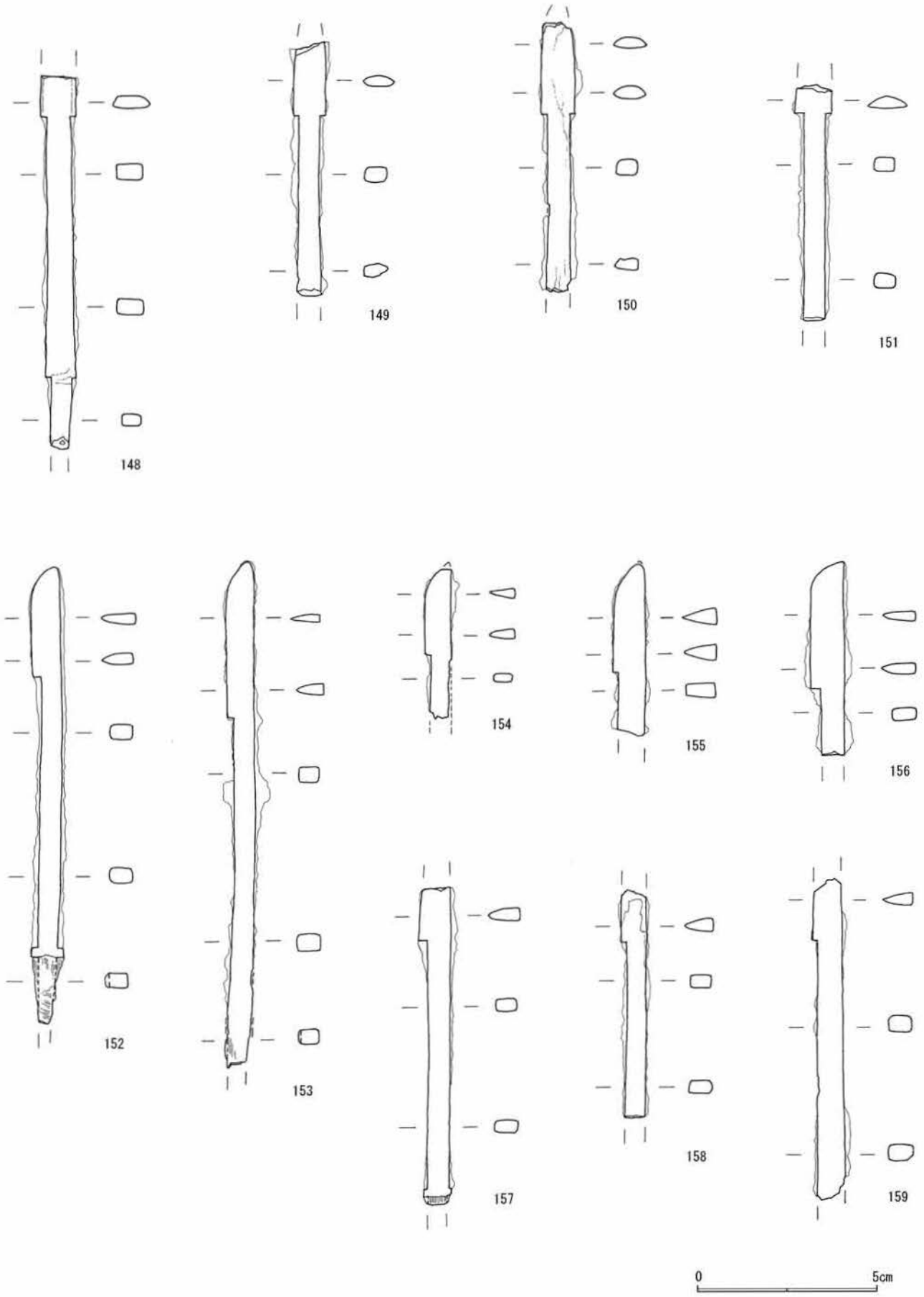


Fig. 36 明治 11 年石室出土品実測図 (14)

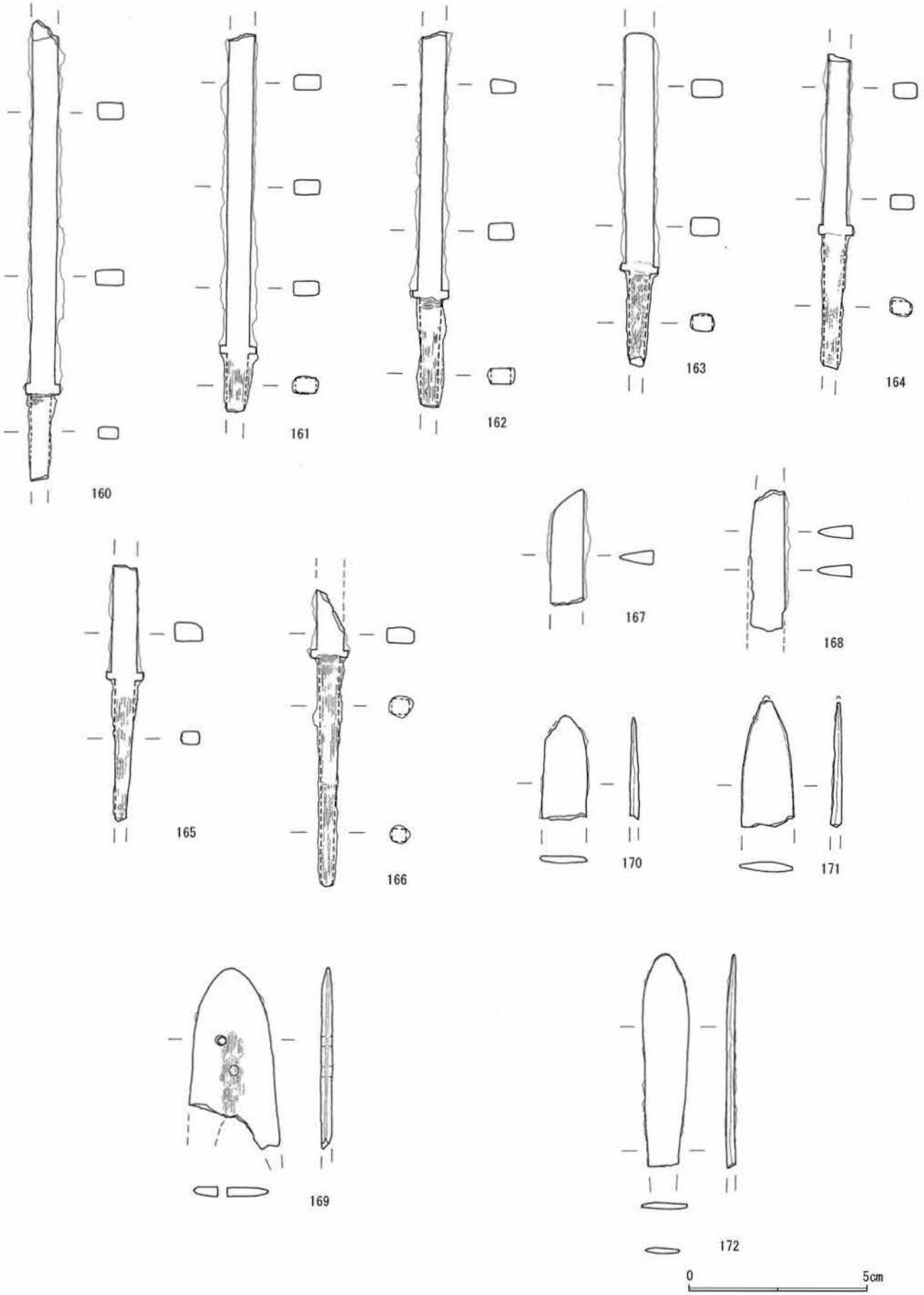


Fig. 37　明治 11 年石室出土品実測図 (15)

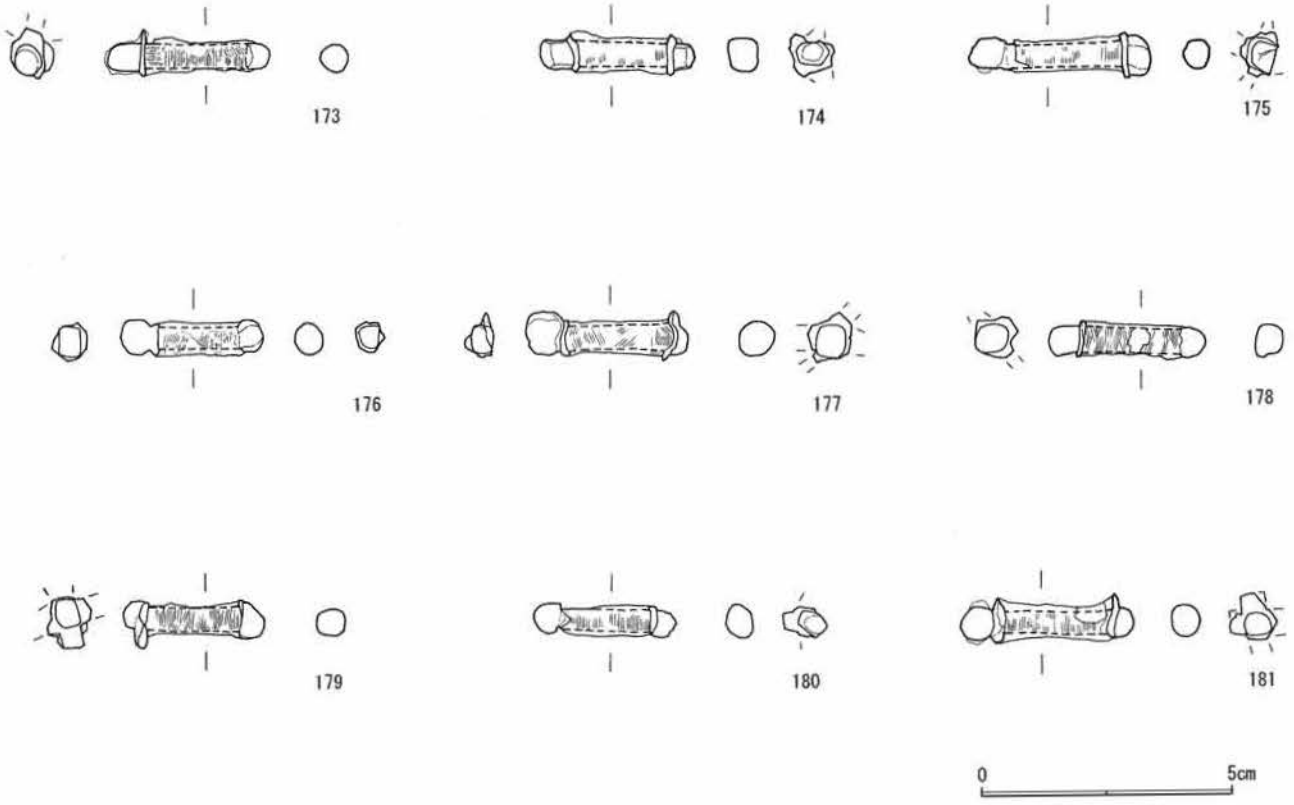
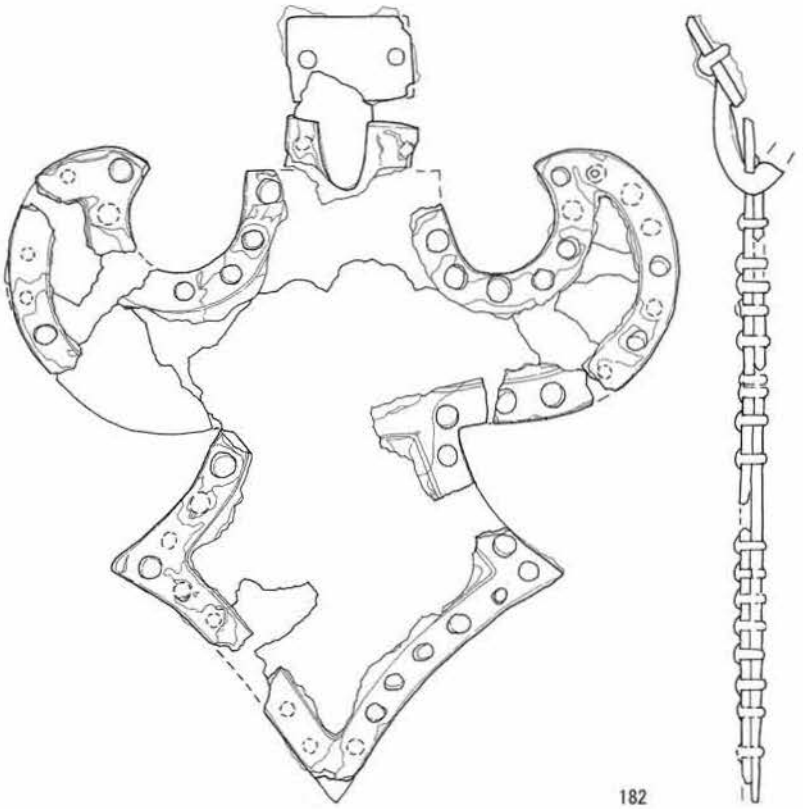
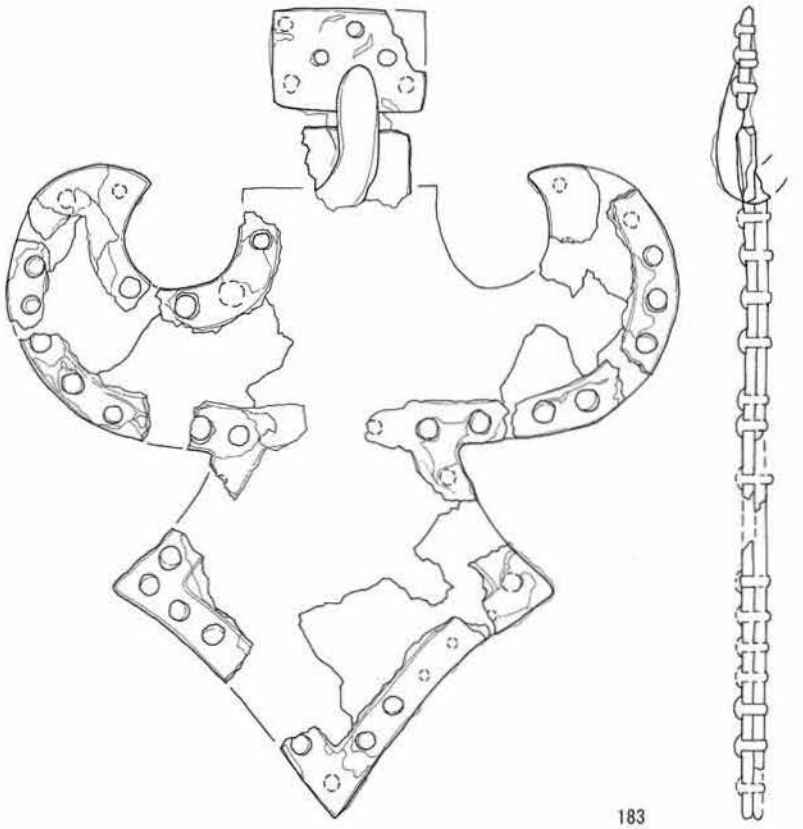


Fig. 38 明治 11 年石室出土品実測図 (16)





0 10cm

Fig. 39 明治 11 年石室出土品実測図 (17)

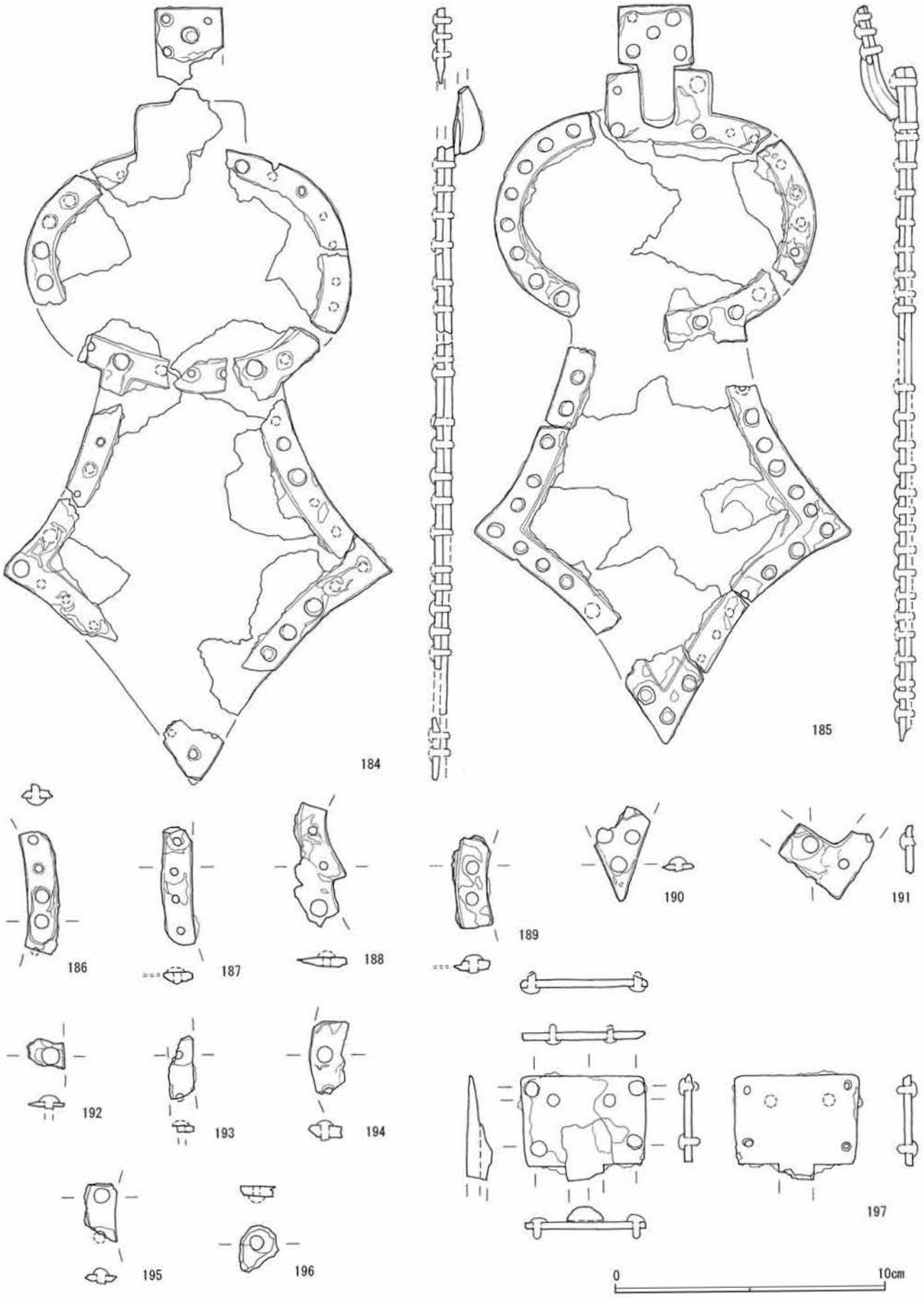


Fig. 40 明治 11 年石室出土品実測図 (18)

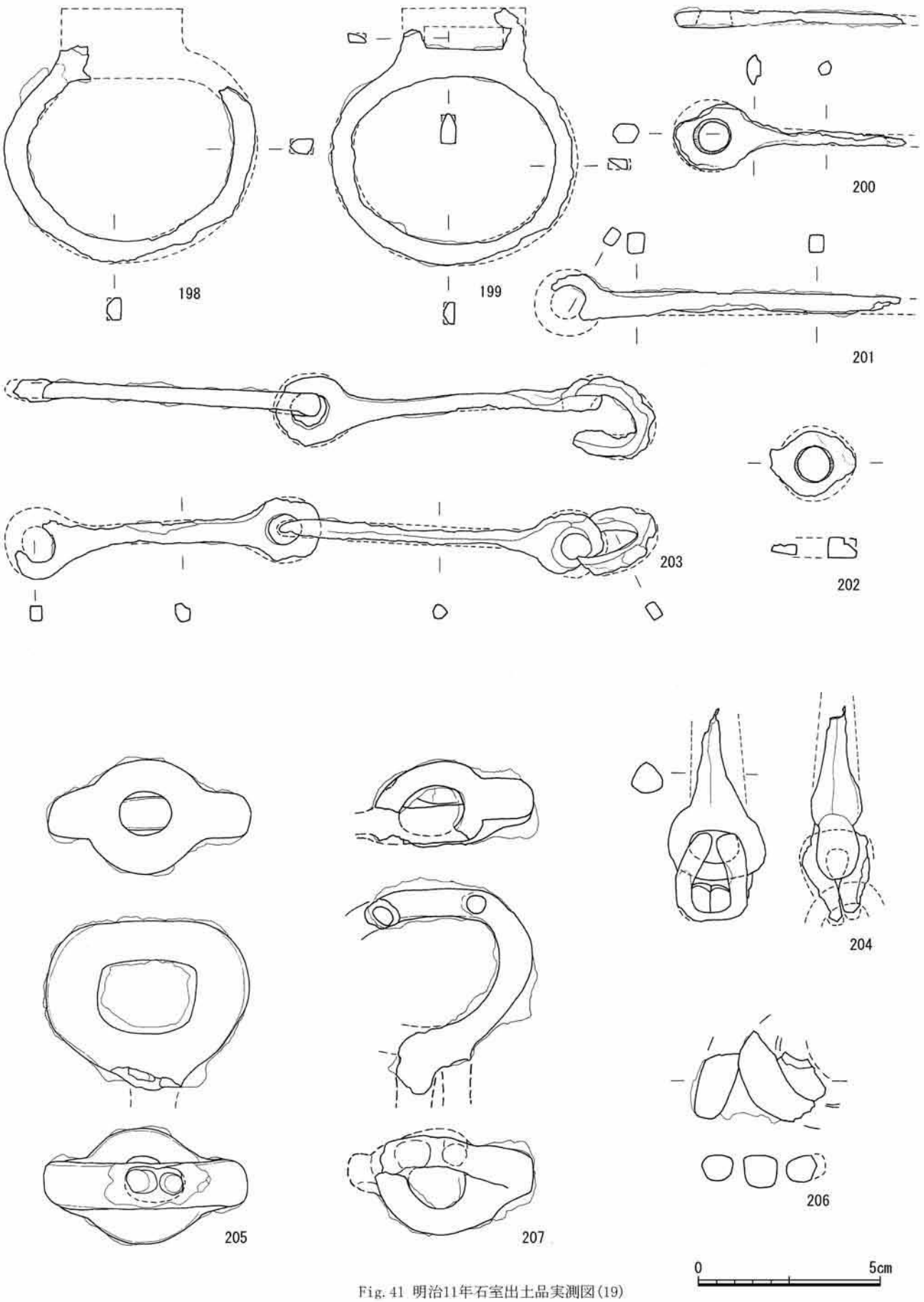


Fig. 41 明治11年石室出土品実測図(19)

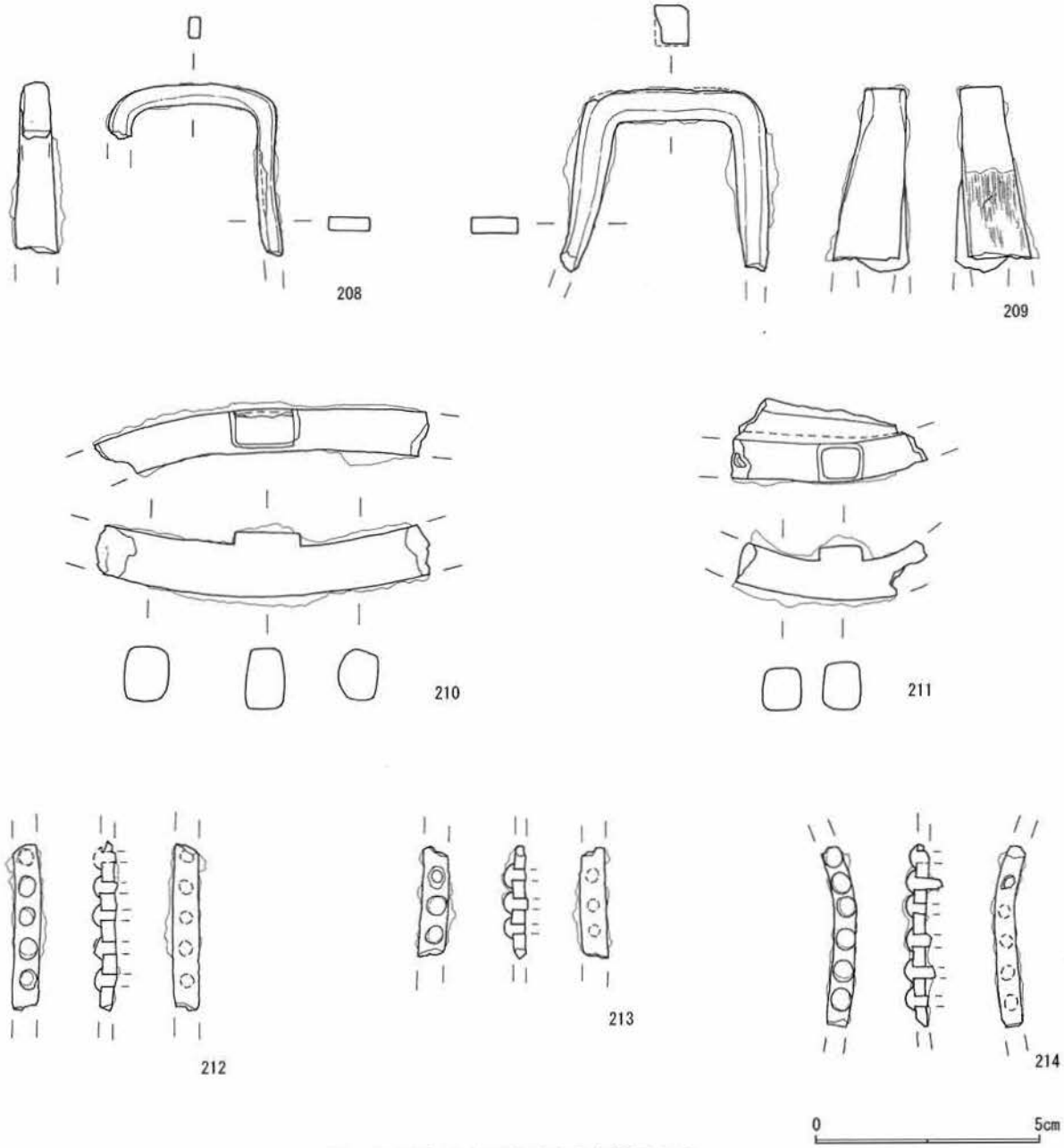


Fig. 42 明治 11 年石室出土品実測図 (20)

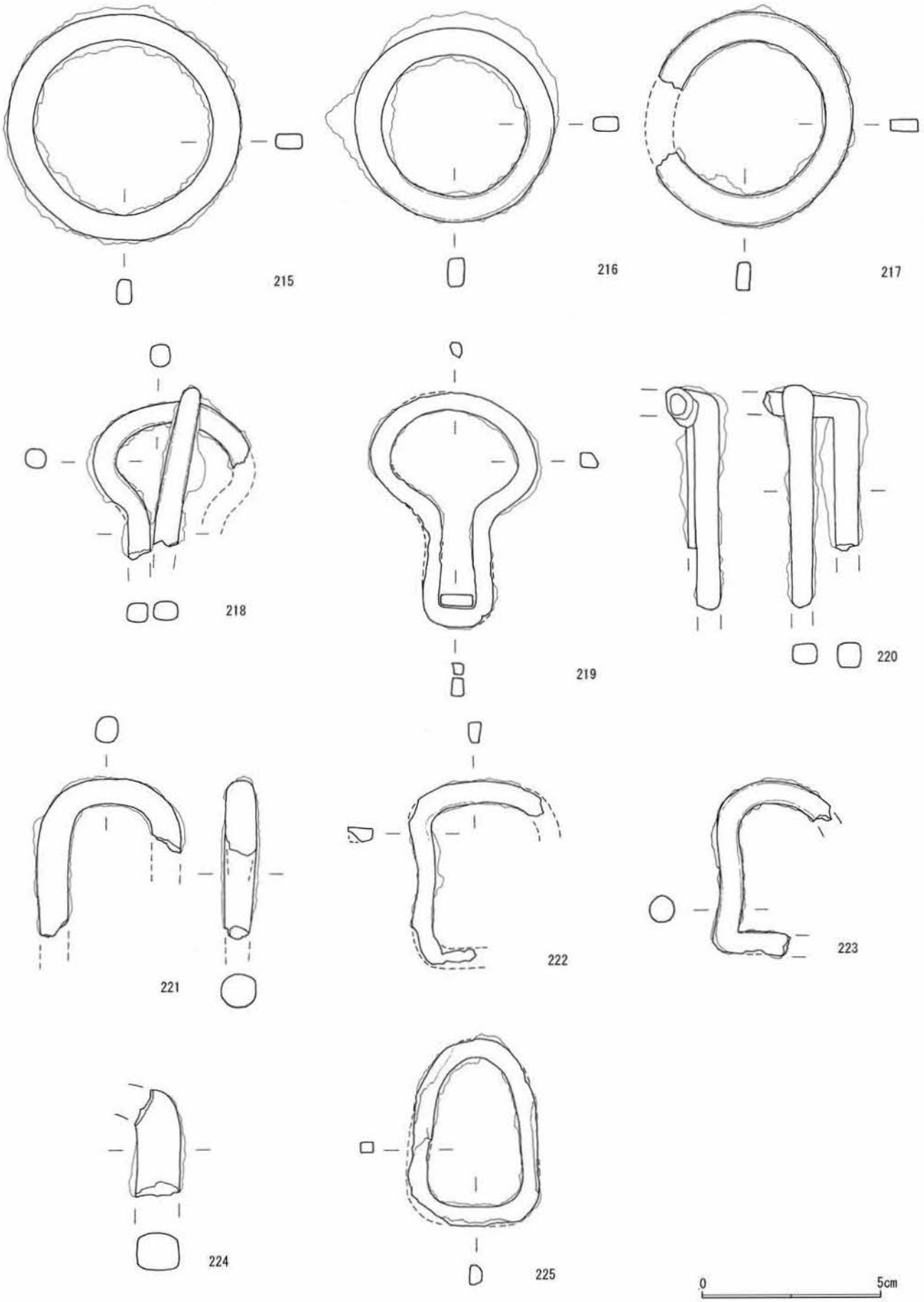


Fig. 43 明治 11 年石室出土品実測図 (21)

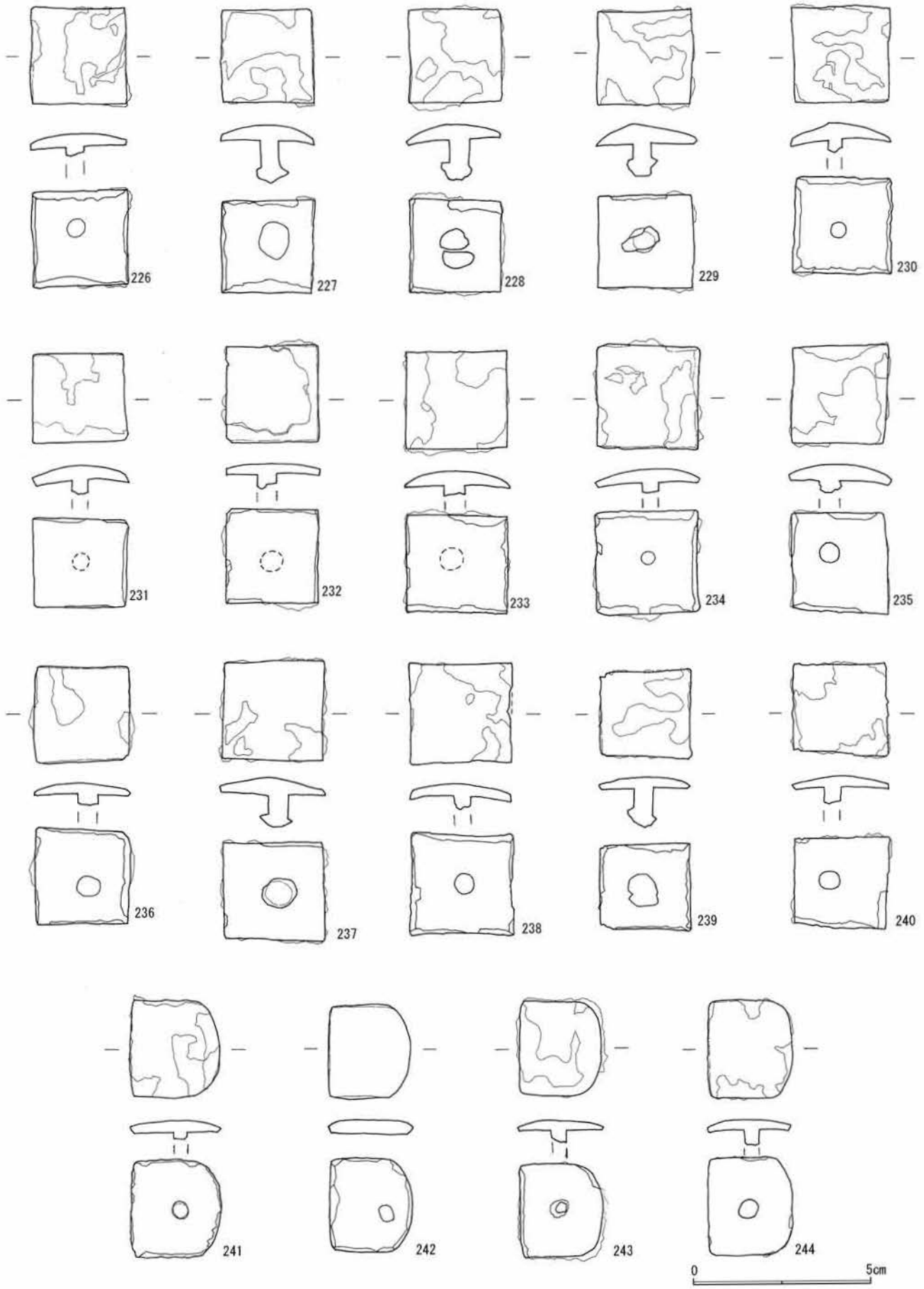


Fig. 44 明治 11 年石室出土品実測図 (22)

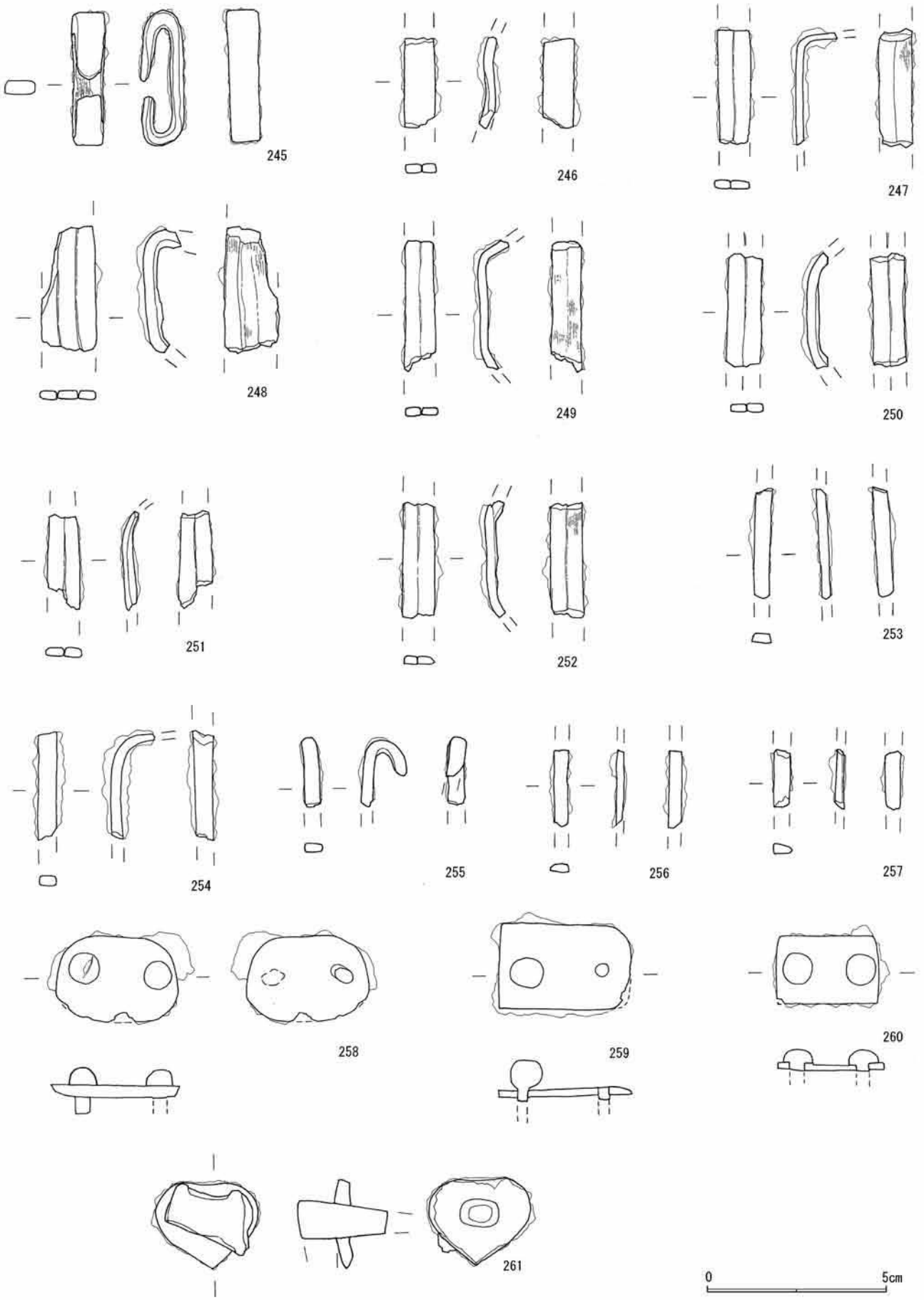


Fig. 45 明治 11 年石室出土品実測図 (23)

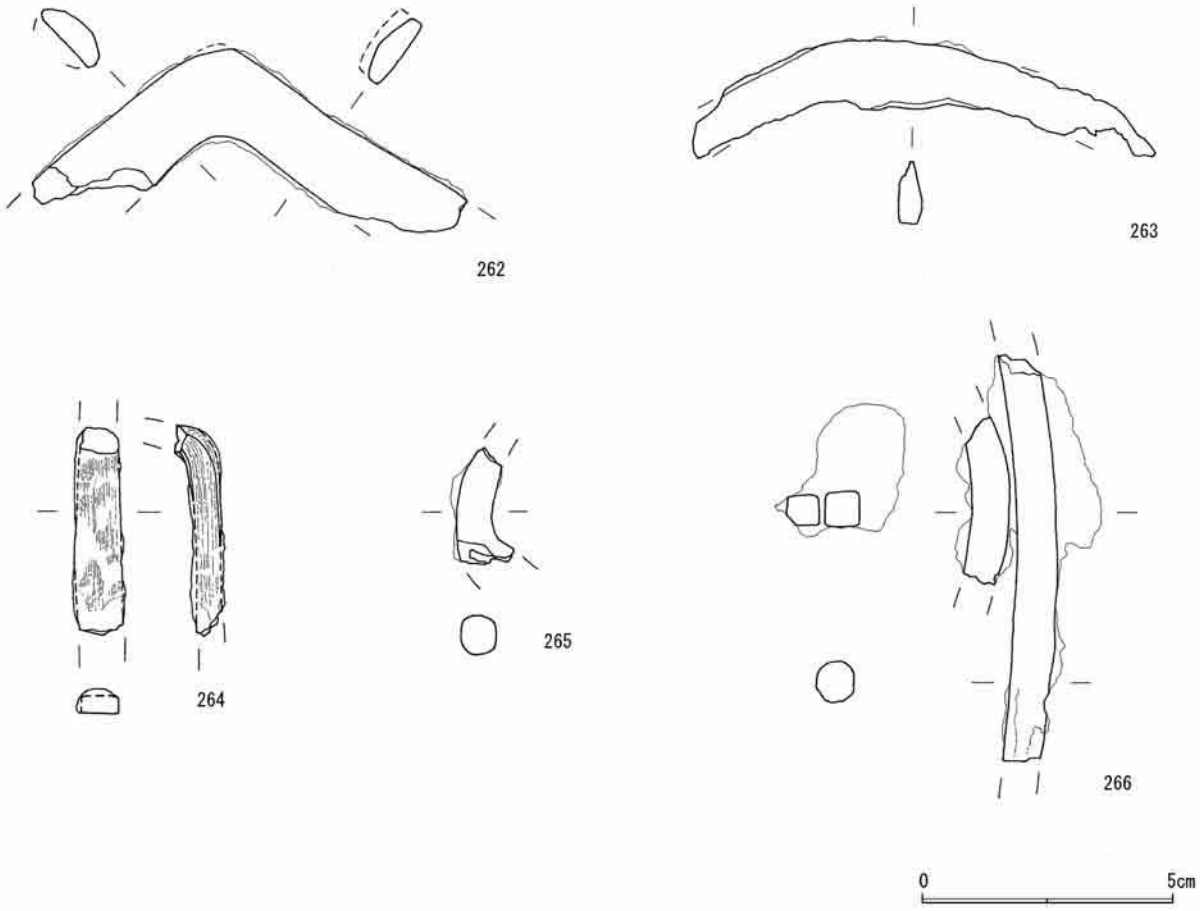


Fig. 46 明治 11 年石室出土品実測図 (24)

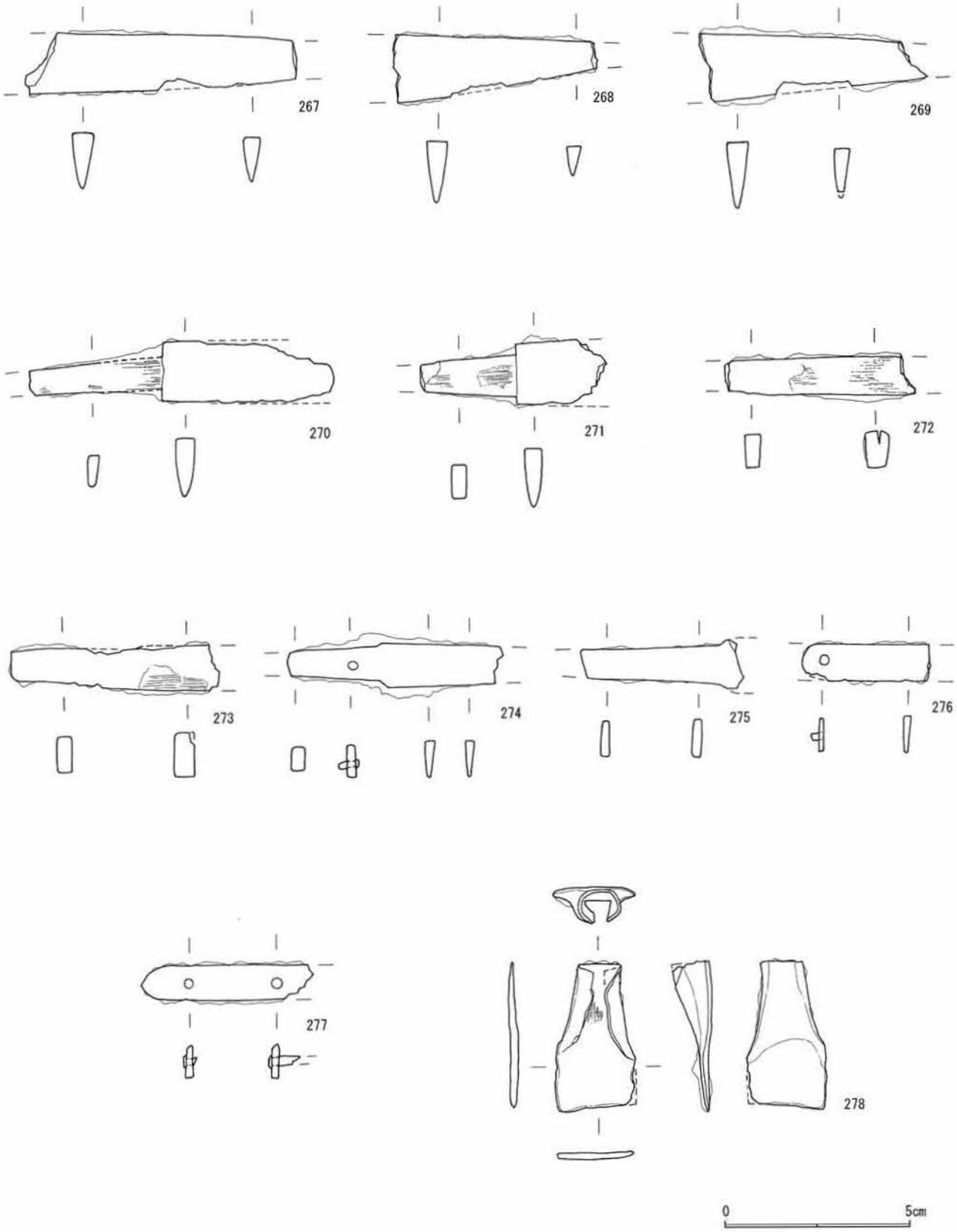


Fig. 47 明治 11 年石室出土品実測図 (25)

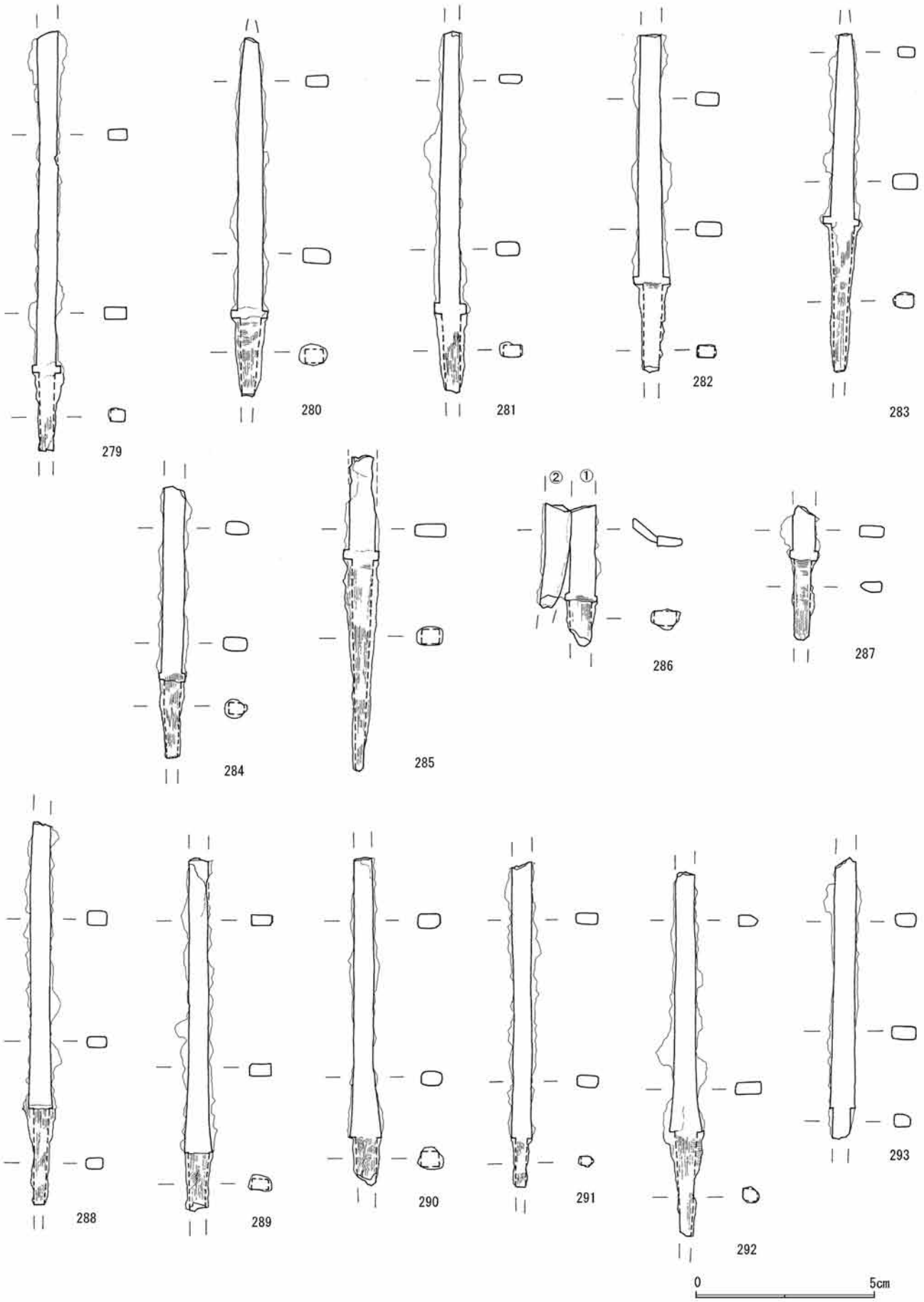


Fig. 48 明治 11 年石室出土品実測図 (26)

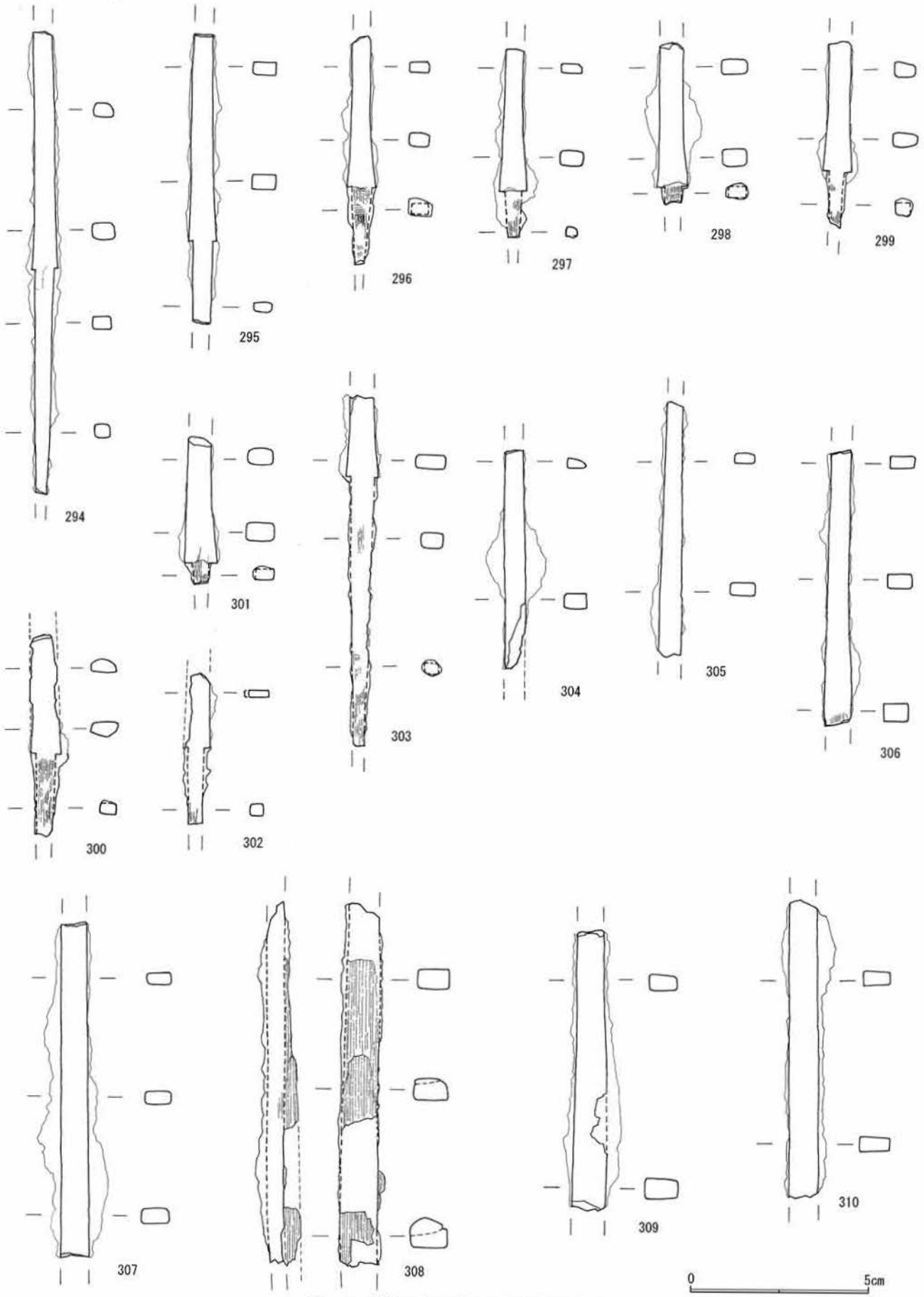


Fig. 49 明治 11 年石室出土品実測図 (27)

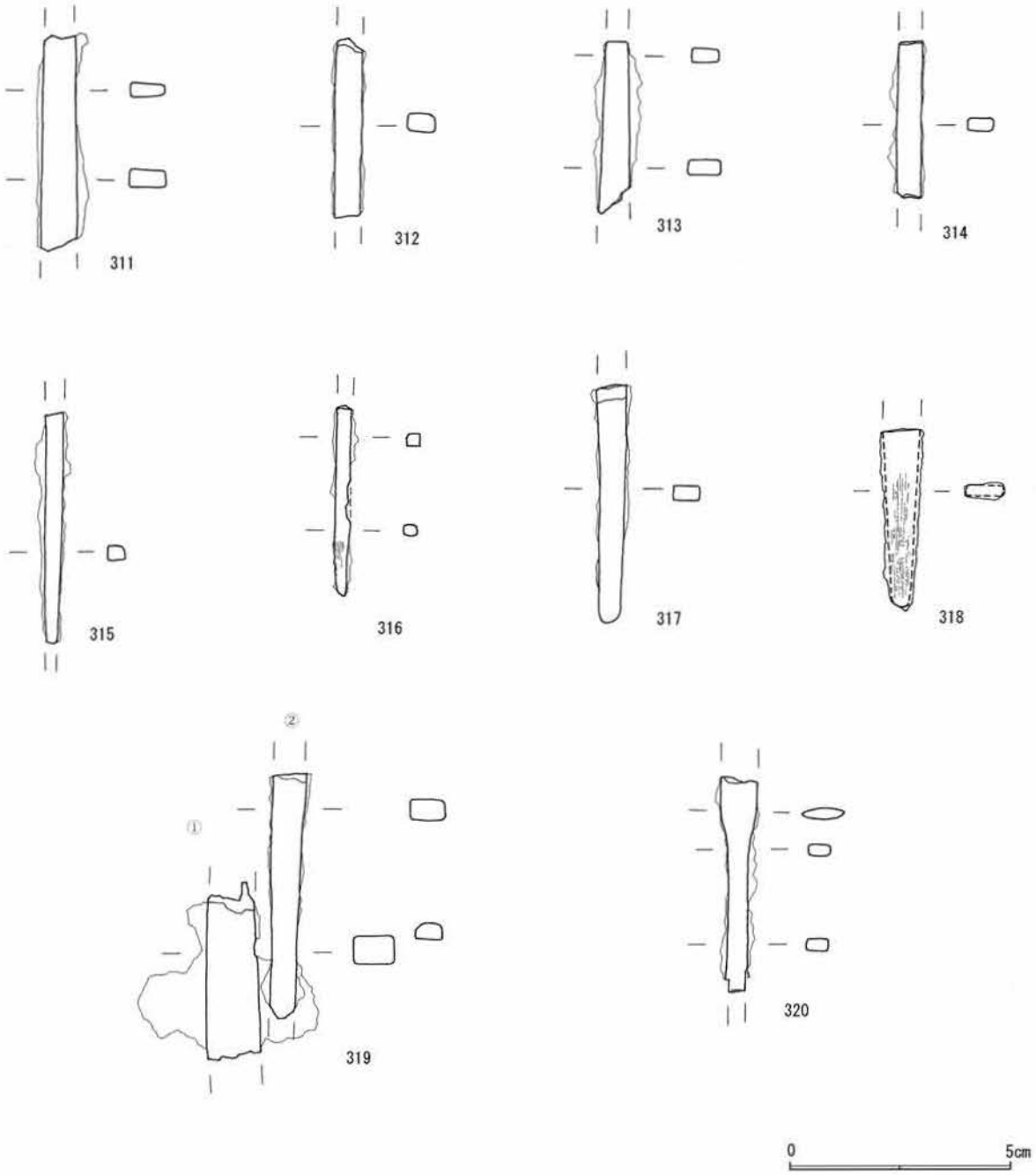


Fig. 50 明治 11 年石室出土品実測図 (28)

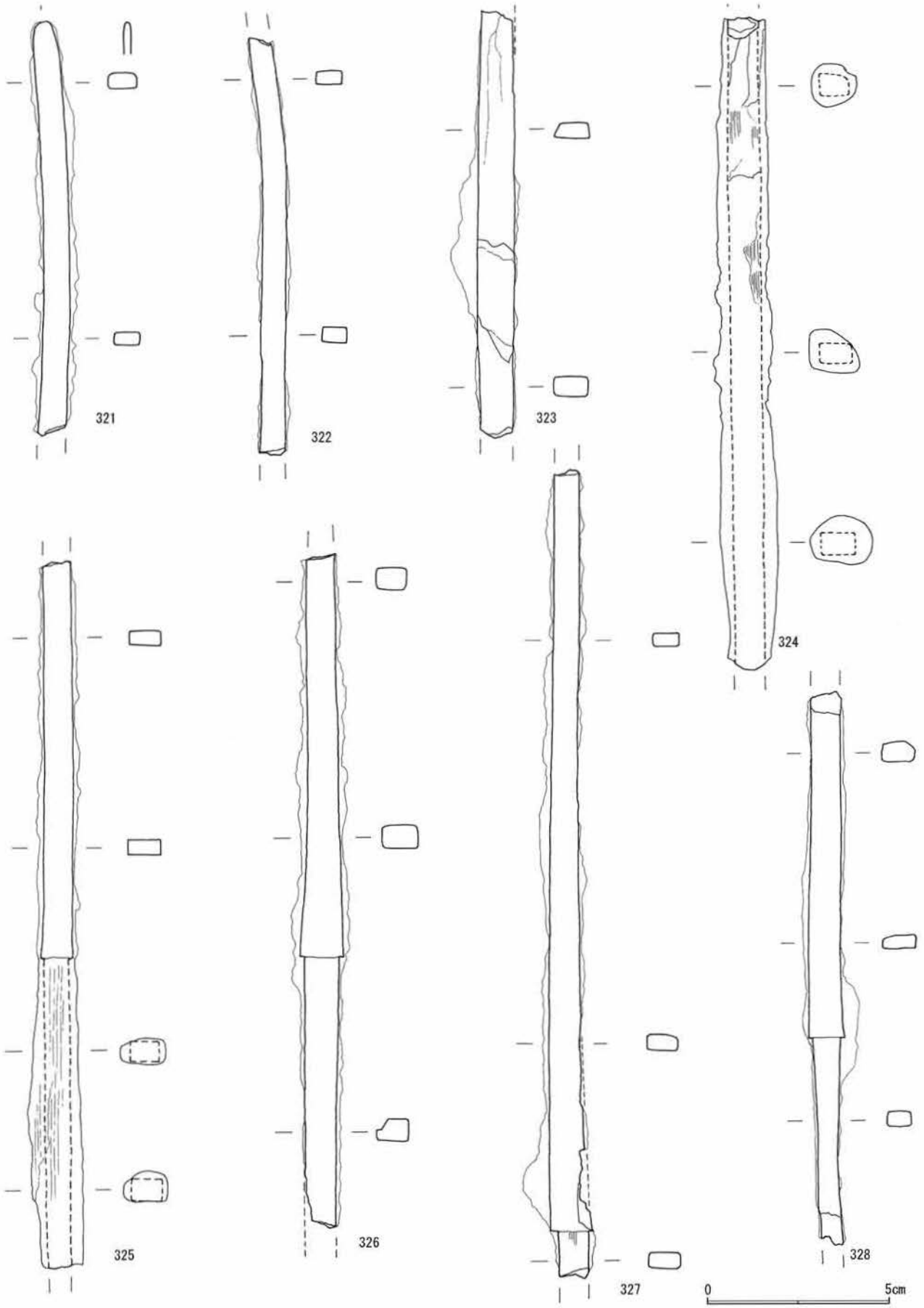


Fig. 51 明治 11 年石室出土品実測図 (29)

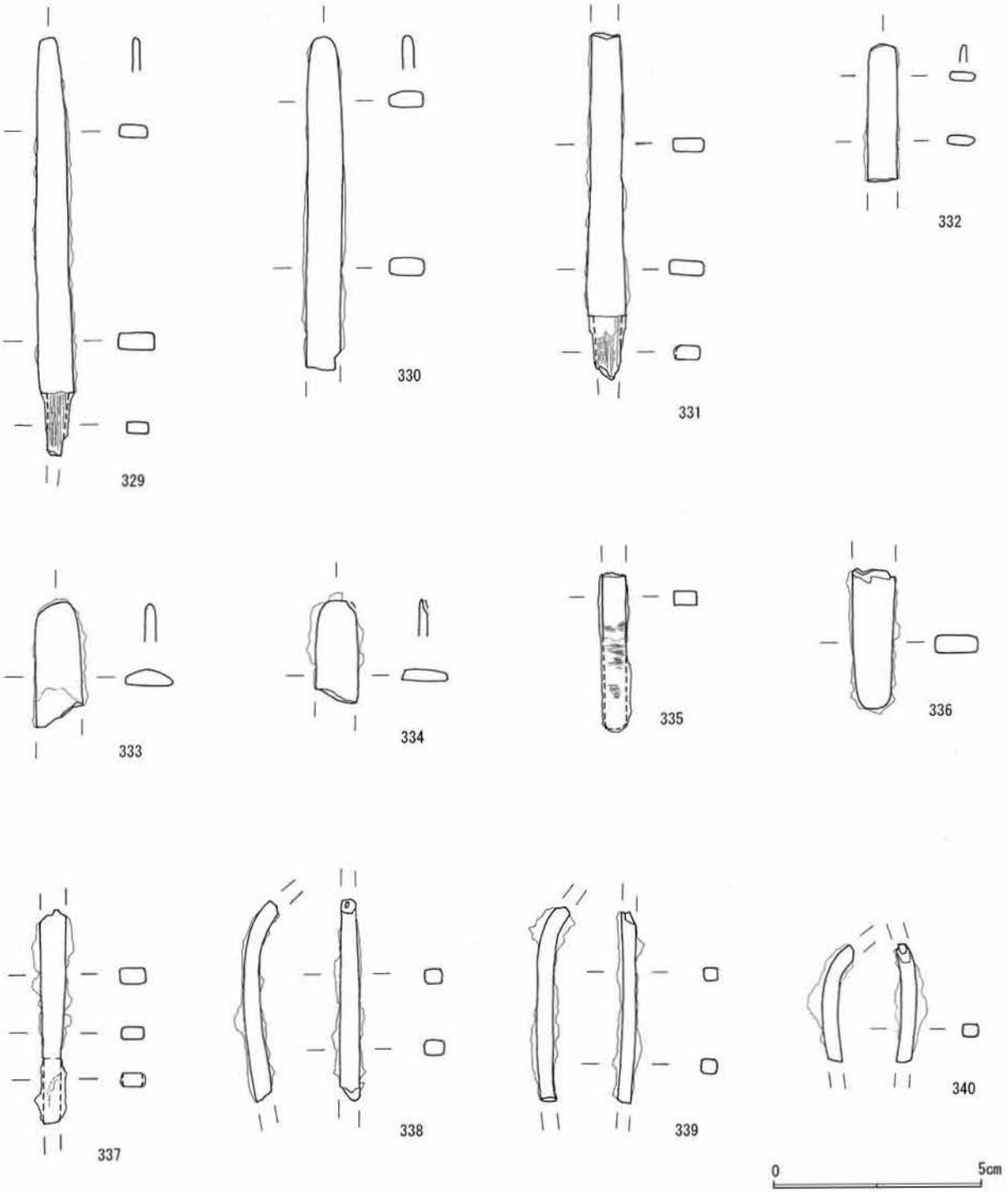


Fig. 52 明治 11 年石室出土品実測図 (30)

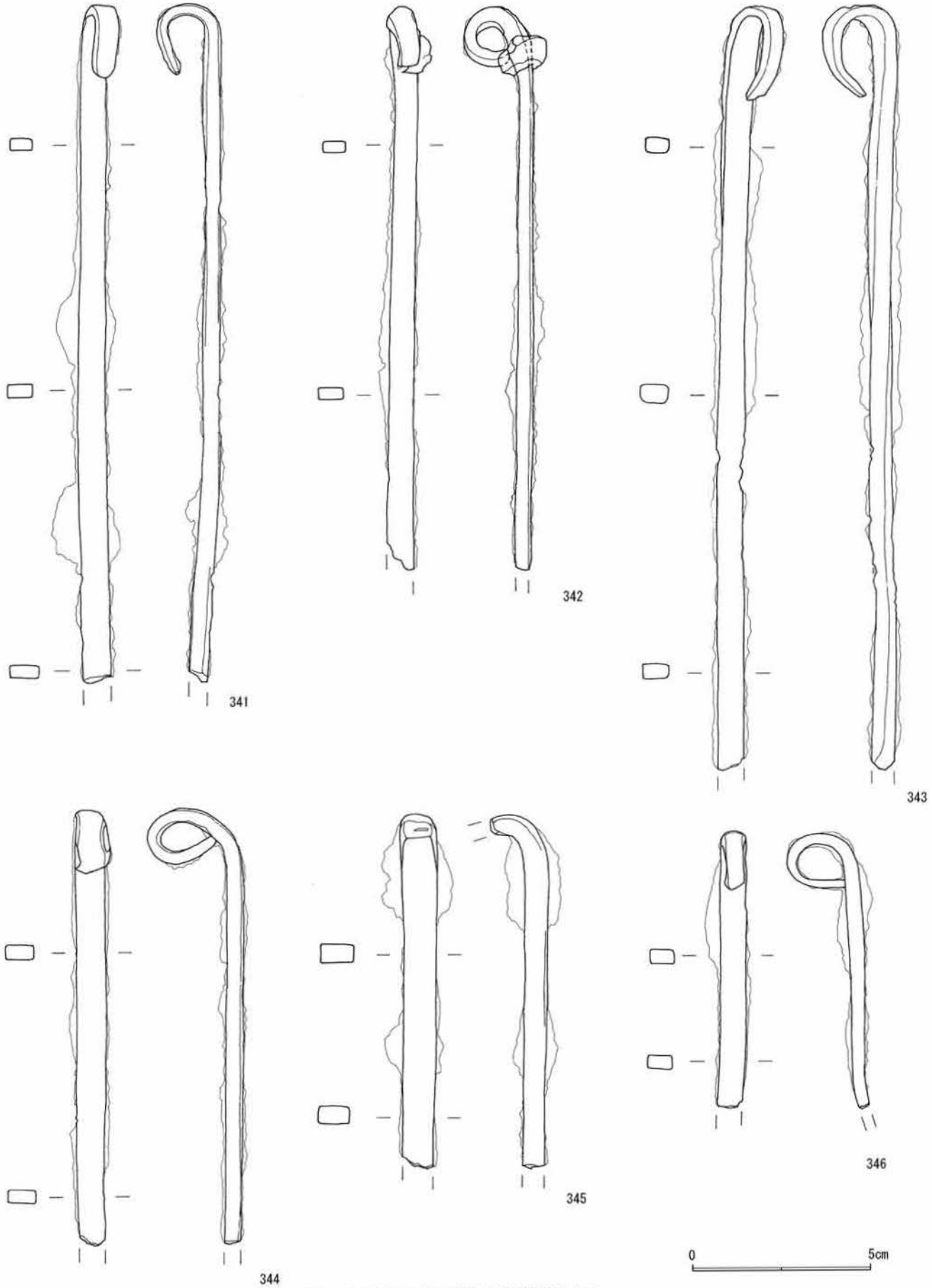


Fig. 53 明治 11 年石室出土品実測図 (31)

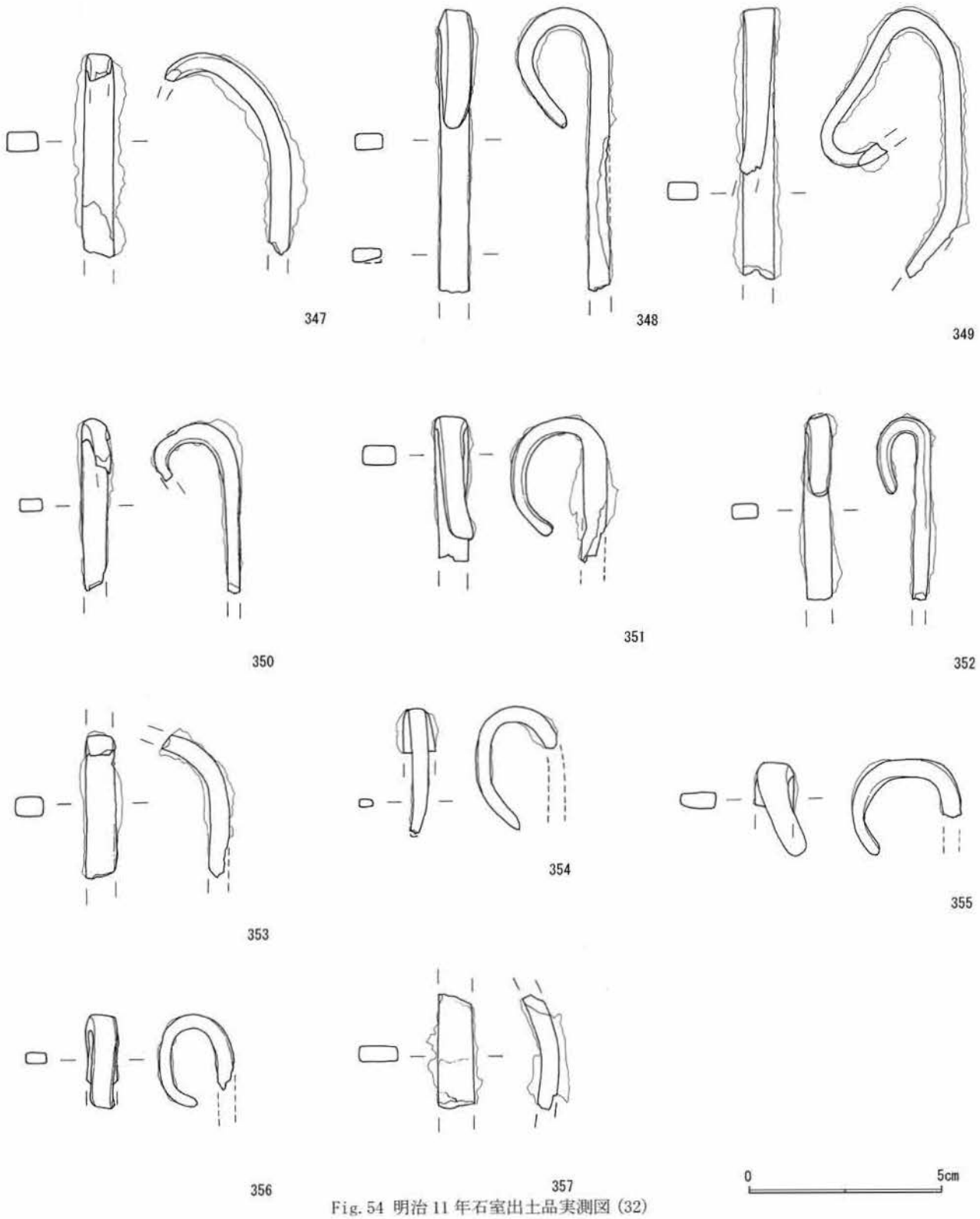


Fig. 54 明治 11 年石室出土品実測図 (32)

Tab. 1　明治11年前二子古墳・後二子古墳出土品計測表

耳環・小玉

No	種類	径1①	径2②	厚③	重g	備考
1	耳環	3.30	(3.0)	0.80	10.6	
2	耳環	3.20	2.95	0.85	19.0	
3	耳環	[3.45]	(2.95)	0.80	6.9	
4	耳環	(1.45)	(2.3)	0.85	3.6	
5	耳環	3.20	2.85	0.80	12.4	
6	耳環	(2.05)	2.90	0.80	9.7	
7	耳環	2.95	2.70	0.80	16.0	
8	ガラス小玉	0.95	0.90	0.70	0.9	

捩り環頭大刀柄頭・はばき

No	種類	幅①	長②	厚③	径④	目釘長⑤	目釘厚⑥	重g
9	捩環頭	6.05	4.55	1.00				20.8
10	はばき	1.80	4.30	0.35	3.4			29.8
11	はばき	1.65	3.90	0.35	2.85			21.8
12	はばき	(1.60)	(2.70)	0.25	(1.15)	0.60	0.45	4.7
13	はばき	1.50	(2.90)	0.50	(0.95)			6.7
14	はばき	1.45	(3.05)	0.35	(1.15)			7.1
15	はばき	1.35	(3.55)	0.20	(0.85)			2.7
16	はばき	0.90	(1.75)	0.35	(0.50)			1.3

鍔

No	種類	幅①	長②	厚③	幅④	重g
17	鍔	6.30	[8.10]	0.25	2.25	41.6
18	鍔	6.40	7.60	0.35	1.85	46.8
19	鍔	[6.55]	[8.15]	0.30	(1.70)	24.6
20	鍔	[5.75]	[7.10]	0.35	1.85	20.8
21	鍔	(3.65)	(7.55)	0.35	2.20	22.8

鉾

No	種類	全長①	刃長②	刃最大幅③	刃最大厚④	茎長⑤	茎基部幅⑥	茎基部厚⑦	茎袋部径⑧	茎最大下部厚⑨	重g
43	鉾	(18.55)	(7.05)	[2.40]	[1.15]	(11.50)	1.25	1.30	[2.80]	0.40	79.0
44	鉾	(10.00)	(10.00)	(2.30)	(1.60)						115.0

小刀・刀

No	種類	全長①	刃長②	刃幅③	刃厚④	茎長⑤	茎幅⑥	茎最大上厚⑦	茎最大下厚⑧	目釘長⑨	目釘厚⑩	重g
22	小刀	(3.30)				(3.30)	(1.80)	0.45	0.30	1.40	0.50	8.9
23	小刀	(9.25)				(9.25)	(2.05)	0.50	0.30	1.70	0.50	27.0
24	小刀	(7.45)				(7.45)	(1.60)	0.50	(0.15)			16.2
25	刀	(4.85)				(4.85)	(1.90)	0.55	0.30			23.8
26	刀	(6.20)	(6.20)	2.45	0.50							23.2
27	刀	(6.30)	(6.30)	2.60	(0.45)							12.0
28	刀	(10.65)	(10.65)	2.75	0.60							49.0
29	刀	(2.80)	(2.80)	(2.60)	0.40							5.7
30	刀	(7.45)	(7.45)	2.50	0.60							88.0
31	刀	(17.25)	(9.85)	(3.30)	0.80	(7.40)	(2.55)	0.70	0.50	(1.40)	0.50	129.0
32	刀	(23.05)	(23.05)	3.10	(0.80)							150.0
33	刀	(19.05)	(19.05)	3.05	0.80							144.0
34	刀	(24.10)	(24.10)	4.40	(1.05)							318.0
35	刀	(12.15)	(12.15)	2.80	0.70							69.0
36	刀	(21.30)	(21.30)	4.05	(0.90)							180.0
37	刀	(18.65)	(16.10)	3.60	0.65	(2.55)	3.60	0.70	0.40			186.0
38	刀	(22.90)	(22.90)	3.30	0.55							135.0
39	刀	(11.70)	(11.70)	3.80	0.80							45.4
40	刀	(75.00)	[70.05]	3.70	0.70	(4.95)	3.55	0.75	0.50			780.0
41	刀	(50.80)	(50.80)	3.35	0.75							500.0
42	刀	(40.70)	(40.70)	3.70	0.80							350.0

石突

No	種類	全長①	袋部径②	袋部厚③	留金具長④	留金具幅⑤	留金具厚⑥	重g
45	石突	(9.30)	(2.90)	0.20				67.0
46	石突	(9.70)	3.00	0.35	1.85	(3.60)	0.55	109.0

鉄鏃（長頸腸抉長三角形鏃）

No	種類	全長①	刃長②	刃最大幅③	刃最大厚④	逆刺長⑤	頸部長⑥	頸部上幅⑦	頸部上部厚⑧	頸部最大幅⑨	頸部最大厚⑩	茎長⑪	茎最大幅⑫	茎最大厚⑬	重g
47	鉄鏃	(8.0)	(3.30)	1.15	0.35	0.60	4.65	0.60	0.50	0.80	0.60	(0.65)	0.50	0.50	9.3
48	鉄鏃	(10.2)	3.25	1.25	0.30	0.55	5.00	0.65	0.40	0.85	0.45	(2.50)	0.50	0.45	10.0
49	鉄鏃	(11.5)	3.60	(0.95)	0.35	0.35	4.55	(0.50)	0.50	0.85	0.80	(3.70)	0.50	0.50	9.8
50	鉄鏃	(8.65)	3.50	1.10	0.40	0.45	4.80	0.70	0.65	0.80	0.45	(0.80)	0.50	0.50	11.0
51	鉄鏃	(9.6)	(3.40)	1.00	0.35	0.40	4.80	0.65	0.40	0.85	0.60	(1.80)	0.50	0.55	8.3
52	鉄鏃	12.70	3.60	0.95	0.40	0.50	4.95	0.65	0.50	0.90	0.55	4.65	0.45	0.50	12.0
53	鉄鏃	(10.2)	3.65	1.15	0.35	0.55	4.90	0.70	0.50	0.90	0.60	(2.20)	0.60	0.55	13.8
54	鉄鏃	(7.9)	3.60	1.05	0.40	0.55	4.50	0.65	0.55	0.85	0.60	(0.35)	0.55	0.45	9.3
55	鉄鏃	(8.9)	3.70	(0.95)	0.30	0.35	4.25	0.45	0.40	0.80	0.55	(1.30)	0.40	0.45	7.7
56	鉄鏃	(10.2)	3.80	0.95	0.35	0.50	4.50	0.50	0.40	0.90	0.45	(2.40)	0.55	0.35	10.2
57	鉄鏃	(10.4)	3.70	0.90	0.40	0.80	4.90	0.50	0.40	0.85	0.60	(2.60)	0.50	0.55	10.4
58	鉄鏃	(9.0)	3.65	(1.00)	0.40	0.30	4.60	0.60	0.50	0.90	0.50	(1.05)	0.60	0.45	12.2
59	鉄鏃	(9.5)	3.70	0.95	0.35	0.50	4.55	0.55	0.50	0.80	0.65	(1.75)	0.45	0.50	10.2
60	鉄鏃	(9.6)	3.75	0.95	0.35	0.85	5.15	0.55	0.60	0.80	0.50	(1.55)	0.55	0.55	9.8
61	鉄鏃	(8.5)	3.70	1.05	0.45	0.55	4.85	0.60	0.50	0.85	0.70	(0.50)	0.65	0.60	11.2
62	鉄鏃	(12.05)	3.75	1.05	0.40	0.40	4.45	0.55	0.50	0.80	0.50	(4.25)	0.45	0.45	11.6
63	鉄鏃	(8.7)	3.75	0.95	0.40	0.55	4.45	0.45	0.40	0.90	0.70	(1.05)	0.55	0.50	9.7
64	鉄鏃	(9.05)	3.80	[1.05]	0.40	0.45	4.50	0.60	0.50	[0.90]	0.60	(1.20)	0.45	0.40	11.8
65	鉄鏃	(8.4)	3.80	1.05	0.40	0.40	4.60	0.60	0.55	0.95	0.60	(0.40)	0.55	0.45	12.0
66	鉄鏃	(8.05)	3.90	1.10	0.45	0.55	(4.70)	0.65	0.65	(0.95)	(0.70)				10.8
67	鉄鏃	(8.95)	4.05	1.10	0.45	0.60	4.35	0.60	0.55	0.85	0.75	(1.15)	0.55	0.50	10.6
68	鉄鏃	(10.1)	4.00	0.95	0.35	0.60	4.55	0.55	0.40	0.80	0.55	(2.15)	0.45	0.45	9.8
69	鉄鏃	(11.0)	(4.00)	(1.15)	0.40	0.55	4.30	0.65	0.50	0.90	0.60	(3.25)	0.55	0.45	10.8
70	鉄鏃	(9.1)	4.25	1.05	0.40	0.60	4.35	0.65	0.45	0.95	0.60	(1.10)	0.60	0.50	10.4
71	鉄鏃	(4.25)	3.00	(1.25)	0.45	0.60	(1.85)	0.65	0.45	(0.75)	(0.40)				5.2
72	鉄鏃	(3.8)	3.25	1.10	0.40	0.60	(1.15)	0.60	0.40	(0.65)	(0.25)				4.0
73	鉄鏃	(4.05)	3.75	0.95	0.40	0.45	(0.75)	0.55	0.55	(0.55)	(0.40)				3.9
74	鉄鏃	(4.05)	(3.55)	0.95	0.35	(0.50)	(1.00)	0.50	0.40	(0.55)	(0.40)				3.0
75	鉄鏃	(4.15)	3.70	1.00	0.35	0.40	(0.85)	0.60	0.45	(0.65)	(0.40)				3.3
76	鉄鏃	(4.1)	3.80	(1.10)	0.35	0.50	(0.80)	0.65	0.40	(0.70)	(0.40)				2.6
77	鉄鏃	(4.2)	3.90	1.05	0.40	0.60	(0.90)	0.55	0.50	(0.65)	(0.30)				4.1
78	鉄鏃	(4.9)	3.90	1.05	0.40	0.40	(1.40)	0.55	0.50	(0.60)	(0.50)				5.9
79	鉄鏃	(4.7)	3.95	1.15	0.40	0.60	(1.35)	0.65	(0.50)	(0.75)	(0.40)				5.3
80	鉄鏃	(5.4)	4.20	1.05	0.40	0.60	(1.80)	0.65	0.55	(0.65)	(0.45)				5.6
81	鉄鏃	(7.05)	3.85	1.00	0.40	0.35	(3.55)	0.65	0.55	(0.50)	(0.50)				7.4
82	鉄鏃	(7.3)	3.85	1.20	0.45	0.45	(3.90)	0.65	0.45	(0.70)	(0.60)				9.5
83	鉄鏃	(7.7)	3.85	0.95	0.40	0.35	(4.20)	0.60	0.40	(0.80)	(0.60)				9.7
84	鉄鏃	(7.8)	3.80	1.05	0.40	0.50	(4.50)	0.55	0.45	(0.80)	(0.60)				10.6
85	鉄鏃	(8.15)	3.80	0.95	0.45	0.40	(4.75)	0.50	0.50	(0.70)	(0.50)				7.7
86	鉄鏃	(5.1)	(1.25)	1.05	0.35	0.45	3.95	0.60	0.40	0.75	0.55	(0.35)	0.55	0.45	5.7
87	鉄鏃	(5.85)	(0.60)	0.95	0.35	0.25	4.20	0.55	0.35	0.85	0.60	(1.30)	0.45	0.45	5.5
88	鉄鏃	(7.0)	(1.25)	0.90	0.40	0.45	4.25	0.55	0.50	1.00	0.70	(1.95)	0.45	0.60	7.5
89	鉄鏃	(9.4)	(1.55)	1.05	0.40	0.45	4.70	0.55	0.45	1.00	0.60	(3.60)	0.50	0.45	9.9
90	鉄鏃	(7.8)	(2.70)	1.05	0.40	0.55	4.80	0.55	0.45	0.95	0.50	(0.85)	0.50	0.60	10.8
91	鉄鏃	(6.5)	(1.60)	1.00	0.40	0.60	4.45	0.50	0.60	0.90	0.70	(1.05)	0.60	0.60	8.0
92	鉄鏃	(2.85)	(1.75)	1.05	0.45	0.35	(1.45)	0.65	0.60	(0.75)	(0.30)				3.6
93	鉄鏃	(5.2)	(2.90)	(1.05)	0.35	(0.20)	(2.50)	0.70	0.50	(0.75)	(0.50)				6.8

94	鉄鏃	(6.0)	(3.10)	1.00	0.40	0.50	(3.40)	0.55	0.40	(0.75)	(0.60)				6.8
95	鉄鏃	(5.4)	(1.80)	0.95	0.40	0.35	(3.95)	0.55	0.50	(0.60)	(0.50)				4.4
96	鉄鏃	(5.35)	(2.10)	1.05	0.30	0.35	(3.60)	0.60	0.40	(0.65)	(0.45)				6.8
97	鉄鏃	(5.6)	(2.00)	(1.05)	0.45	0.45	(3.80)	0.65	0.50	(0.80)	(0.50)				7.5
98	鉄鏃	(5.85)	(1.60)	1.00	0.40	0.50	(4.75)	0.50	0.40	(0.60)	(0.50)				4.8
99	鉄鏃	(6.05)	(2.05)	1.10	0.40	0.60	(4.60)	0.55	0.65	(0.65)	(0.50)				7.7
100	鉄鏃	(6.6)	(2.30)	0.95	0.40	0.40	(4.70)	0.60	0.50	(0.70)	(0.65)				9.4
101	鉄鏃	(2.25)	(2.25)	(0.90)	(0.40)										1.7
102	鉄鏃	(2.65)	(2.65)	(0.90)	(0.50)										1.9
103	鉄鏃	(3.3)	(3.30)	(0.80)	(0.45)										1.8
104	鉄鏃	(3.5)	(3.50)	(0.90)	(0.50)										2.7
105	鉄鏃	(3.0)	(3.00)	(0.90)	(0.40)										2.1
106	鉄鏃	(2.45)	(2.45)	(0.95)	(0.45)										2.0
107	鉄鏃	(3.50)	(3.50)	(0.95)	(0.50)										3.8
108	鉄鏃	(3.90)	(2.70)	(0.95)	(0.35)										3.2

鉄鏃（長頸腸抉段違長三角形鏃）

No	種類	全長①	刃長②	刃幅③	刃厚④	逆刺長⑤	刃長⑥	刃幅⑦	刃厚⑧	逆刺長⑨	頸部長⑩	頸部長⑪	頸部上幅⑫	頸部上厚⑬	頸部最大幅⑭	頸部最大厚⑮	茎長⑯	茎最大幅⑰	茎最大厚⑱	重g
109	鉄鏃	(11.50)	1.55	1.00	0.40	0.25	4.25	0.85	0.50	0.35	9.40	6.80	0.65	0.50	1.00	0.70	(0.80)	0.60	0.50	13.4
110	鉄鏃	(11.20)	1.70	1.05	0.35	0.20	4.20	0.90	0.40	0.35	9.40	7.05	0.75	0.40	0.85	0.60	(0.30)	0.60	0.50	14.8
111	鉄鏃	(11.95)	1.85	1.00	0.30	0.35	3.90	0.85	0.25	0.35	9.65	7.60	0.65	0.45	0.85	0.60	(0.80)	0.55	0.60	13.6
112	鉄鏃	(17.35)	1.75	1.00	0.25	0.30	4.10	0.85	0.30	7.10	9.45	7.10	0.70	0.45	0.85	0.65	(6.45)	0.50	0.60	17.4
113	鉄鏃	(13.90)	1.80	0.90	0.25	0.20	(3.80)	(0.70)	(0.30)		9.65	7.45	(0.65)	(0.30)	0.80	0.50	(2.65)	0.50	0.55	10.0
114	鉄鏃	(14.90)	2.00	(1.05)	0.35	0.10	(3.95)	(0.90)	0.30	(0.15)	9.30	7.40	0.70	0.55	1.00	0.70	(3.70)	0.60	0.65	20.4
115	鉄鏃	(15.75)	(1.80)	(1.20)	0.35		(3.85)	(1.05)	0.40		9.60	7.55	0.85	0.40	1.00	0.65	(4.35)	0.55	0.55	21.4
116	鉄鏃	(15.90)	(1.85)	(1.10)	0.35	(0.10)	3.90	0.85	0.35	0.25	10.60	8.70	0.65	0.50	1.00	0.60	(3.55)	0.70	0.50	20.8
117	鉄鏃	(4.15)	1.20	0.90	0.30	0.20	3.60	0.65	0.25	0.20	(3.00)	(0.70)	0.50	0.40	(0.55)	(0.35)				3.3
118	鉄鏃	(4.25)	1.60	1.00	0.30	0.15	3.95	0.70	0.30	0.15	(2.80)	(0.45)	0.55	0.45	(0.60)	(0.30)				3.9
119	鉄鏃	(5.25)	1.90	1.05	0.35	0.50	4.15	0.80	0.30	0.40	(3.70)	(1.40)	0.65	0.45	(0.70)	(0.40)				5.1
120	鉄鏃	(6.85)	1.40	1.00	0.30	0.10	3.50	0.85	0.30	0.25	(5.40)	(3.45)	0.65	0.35	(0.65)	(0.40)				6.5
121	鉄鏃	(6.90)	1.75	0.95	0.25	0.30	3.75	0.75	0.30	0.35	(5.30)	(3.40)	0.60	0.40	(0.60)	(0.45)				6.6
122	鉄鏃	(8.20)	1.80	1.00	0.30	0.40	(3.70)	(0.90)	(0.35)		(6.80)	(4.50)	(0.70)	(0.40)	(0.70)	(0.50)				9.0
123	鉄鏃	(7.10)	2.35	1.05	0.25	0.60	4.20	0.80	0.35	0.30	(4.90)	(2.85)	0.65	0.40	(0.70)	(0.40)				6.0
124	鉄鏃	(6.95)	(1.50)	0.95	0.35	0.30	(2.10)	0.75	0.35	0.30	4.85	4.15	0.60	0.55	0.90	0.50	(0.90)	0.60	0.60	8.7
125	鉄鏃	(4.90)	(1.20)	1.05	0.35	0.15	(2.75)	0.90	0.35	0.20	(3.70)	(1.55)	0.75	0.60	(0.75)	(0.50)				6.1
126	鉄鏃	(5.15)	(0.70)	1.00	0.30	0.20	(2.80)	0.95	0.35	0.35	(4.65)	(2.20)	0.70	0.45	(0.75)	(0.45)				6.6
127	鉄鏃	(7.35)	(1.85)	1.00	0.35	0.25	(3.65)	0.80	0.35	0.25	(5.45)	(3.65)	0.60	0.45	(0.60)	(0.45)				9.2
128	鉄鏃	(13.70)					(1.40)	1.00	0.35	0.35	(10.85)	9.70	0.75	0.40	0.85	0.65	(2.65)	0.55	0.60	16.8
129	鉄鏃	(7.85)					(0.55)	0.75	0.30	0.15	(7.15)	6.75	0.60	0.40	1.10	0.60	(0.35)	0.75	0.55	9.1
130	鉄鏃	(3.30)	1.75	0.95	0.30	0.15	(2.70)	(0.80)	(0.30)		(1.70)									3.4
131	鉄鏃	(3.55)	(1.75)	1.00	0.35	0.15	(3.35)	(0.85)	(0.35)		(1.80)									3.1
132	鉄鏃	(2.95)	1.90	0.90	0.35	0.35	(2.85)	(0.70)	(0.25)		(1.40)									1.9
133	鉄鏃	(3.65)	1.90	1.10	0.35	0.20	(3.30)	(0.85)	(0.35)		(1.60)									4.7
134	鉄鏃	(3.05)	(2.05)	(1.10)	0.30	(0.15)	(1.90)	(0.80)	(0.30)		(0.95)									2.5

鉄鏃（長頸長三角形鏃）

No	種類	全長①	刃長②	刃最大幅③	刃最大厚④	頸部長⑤	頸部上幅⑥	頸部上厚⑦	頸部最大幅⑧	頸部最大厚⑨	棘状突起長⑩	棘状突起幅⑪	棘状突起厚⑫	茎長⑬	茎最大幅⑭	茎最大厚⑮	重g
135	鉄鏃	(19.80)	1.75	1.15	0.35	12.30	0.70	0.40	0.85	0.80	0.40	1.10	0.80	(5.75)	0.60	0.70	28.6
136	鉄鏃	(12.40)	2.60	1.20	0.40	7.20	0.65	0.40	0.75	0.60	0.25	1.05	0.60	(2.60)	0.60	0.50	20.6
137	鉄鏃	(13.75)	3.35	1.15	0.35	8.50	0.70	0.50	0.75	0.50	0.25	0.90	0.50	(1.90)	0.55	0.60	16.0
138	鉄鏃	(14.45)	3.60	1.05	0.30	8.80	0.80	0.35	0.70	0.50	0.30	0.95	0.50	(2.05)	0.55	0.45	15.0

139	鉄鏃	(3.50)	2.35	1.25	0.30	(1.15)	0.75	0.65	(0.70)	(0.40)							4.9
140	鉄鏃	(3.90)	3.40	1.00	0.35	(0.50)	0.70	0.50	(0.75)	(0.50)							4.6
141	鉄鏃	(8.85)	(2.45)	0.95	0.35	(6.40)	0.60	0.45	(0.50)	(0.50)							9.0
142	鉄鏃	(8.75)	3.20	1.10	0.35	(5.55)	0.65	0.55	(0.80)	(0.55)							11.0
143	鉄鏃	(8.95)	2.80	0.80	0.35	(6.15)	0.55	0.50	(0.75)	(0.50)							13.4
144	鉄鏃	(9.00)	(3.05)	1.05	0.35	(5.95)	0.55	0.40	(0.65)	(0.45)							10.6
145	鉄鏃	(9.85)	3.55	0.90	0.35	(6.30)	0.55	0.50	(0.60)	(0.50)							10.2
146	鉄鏃	(11.85)	(0.70)	(0.75)	0.30	7.40	0.55	0.40	0.65	0.50	0.30	1.00	0.45	(3.70)	0.50	0.50	12.2
147	鉄鏃	(12.45)	(1.20)	1.10	0.30	9.40	0.60	0.55	0.70	0.40	0.25	1.10	0.40	(1.80)	0.60	0.50	15.6
148	鉄鏃	(10.35)	(1.20)	1.00	0.35	7.20	0.65	0.60	0.85	0.60				(1.95)	0.60	0.50	13.8
149	鉄鏃	(7.05)	(2.05)	0.90	0.30	(5.00)	0.55	0.50	(0.65)	(0.40)							8.6
150	鉄鏃	(7.45)	(2.55)	0.95	0.35	(4.90)	0.60	(0.30)	(0.65)	(0.45)							8.7
151	鉄鏃	(6.50)	(0.80)	1.05	0.30	(5.70)	0.60	0.50	(0.60)	(0.50)							7.8

鉄鏃（長頸片刃鏃）

No	種類	全長①	刃長②	刃最大幅③	刃最大厚④	頸部長⑤	頸部上幅⑥	頸部上厚⑦	頸部最大幅⑧	頸部最大厚⑨	棘状突起長⑩	棘状突起幅⑪	棘状突起厚⑫	茎長⑬	茎最大幅⑭	茎最大厚⑮	重g
152	鉄鏃	(12.60)	3.05	0.80	0.35	7.75	0.55	0.35	0.55	0.45	0.30	0.85	0.40	(1.80)	0.50	0.50	11.8
153	鉄鏃	(13.95)	4.30	0.75	0.30	[8.75]	0.50	0.40	(0.65)	(0.55)				(0.90)	0.55	0.50	12.6
154	鉄鏃	(4.15)	(2.40)	0.75	0.25	(1.75)	0.55	0.30	(0.50)	(0.25)							2.1
155	鉄鏃	(4.75)	(3.00)	0.90	0.40	(1.75)	0.70	0.40	(0.75)	(0.40)							4.2
156	鉄鏃	(5.30)	3.45	0.95	0.30	(1.85)	0.65	0.40	(0.65)	(0.40)							6.0
157	鉄鏃	(8.75)	(1.45)	0.90	0.35	7.05	0.65	0.55	0.60	0.50	0.20	0.75	0.40	(0.25)	0.55	0.45	7.8
158	鉄鏃	(6.30)	(1.45)	0.75	0.40	(4.85)	0.55	0.30	(0.60)	(0.35)							4.9
159	鉄鏃	(8.90)	(1.70)	0.80	0.35	(7.20)	0.65	0.50	(0.75)	(0.50)							10.8

鉄鏃（頸部）

No	種類	全長①	頸部長②	頸部上幅③	頸部上厚④	頸部最大幅⑤	頸部最大厚⑥	棘状突起長⑦	棘状突起幅⑧	棘状突起厚⑨	茎長⑩	茎最大幅⑪	茎最大厚⑫	重g
160	鉄鏃	(12.80)	(10.40)	(0.70)	(0.50)	0.70	0.60	0.35	0.95	0.45	(2.40)	0.55	0.50	15.2
161	鉄鏃	(10.50)	(8.90)	(0.70)	(0.40)	0.65	0.60	0.25	1.00	0.55	(1.60)	0.60	0.50	14.0
162	鉄鏃	(10.50)	(7.45)	(0.65)	(0.40)	0.70	0.65	0.30	1.05	0.55	(3.05)	0.65	0.60	11.8
163	鉄鏃	(9.35)	(6.70)	(0.80)	(0.50)	0.85	0.75	0.25	1.05	0.60	(2.65)	0.55	0.65	13.8
164	鉄鏃	(8.75)	(5.05)	(0.60)	(0.40)	0.65	0.60	0.25	1.00	0.50	(3.70)	0.65	0.50	8.6
165	鉄鏃	(7.10)	(3.25)	(0.60)	(0.50)	0.70	0.50	0.25	1.00	0.50	(3.85)	0.55	0.50	6.3
166	鉄鏃	(8.30)	(1.95)	(0.75)	(0.45)	0.80	0.55	0.25	1.00	0.50	6.35	0.60	0.50	6.2

鉄鏃（長頸片刃鏃）

No	種類	刃長①	刃最大幅②	刃最大厚③	重g
167	鉄鏃	(3.20)	0.95	0.40	2.7
168	鉄鏃	(3.95)	(0.95)	0.40	4.1

鉄鏃（無茎重抉長三角形鏃）

No	種類	全長①	刃最大幅②	刃最大厚③	重g
169	鉄鏃	(5.05)	[2.60]	0.30	7.2

板状鉄鏃形鉄製品

No	種類	全長①	刃最大幅②	刃最大厚③	重g
170	板鉄鏃	(2.90)	(1.25)	(0.25)	1.9
171	板鉄鏃	(3.50)	(1.50)	(0.30)	3.0
172	板鉄鏃	(6.00)	1.30	0.25	4.2

弓飾鋲

No	種類	全幅①	頭幅②	頭長③	花弁幅④	花弁長⑤	木質部幅⑥	木質部長⑦	頭幅⑧	頭長⑨	花弁幅⑩	花弁長⑪	重g
173	弓飾鋲	3.25	0.65	0.55	(0.05)	(0.95)	2.00	0.70	0.50	0.50			2.4
174	弓飾鋲	3.10	0.65	0.60	0.10	0.70	1.80	0.80	0.40	0.55	0.20	0.80	2.7
175	弓飾鋲	3.65	0.75	0.55		(0.60)	2.15	0.65	0.45	0.80	0.15	0.95	3.0
176	弓飾鋲	2.85	0.75	0.70	(0.10)	(0.70)	1.75	0.70	0.40	0.65	(0.05)	(0.60)	2.1
177	弓飾鋲	3.20	0.75	0.85	0.15	(0.70)	2.15	0.70	0.40	0.65	0.10	1.05	3.1
178	弓飾鋲	3.15	0.65	0.60	(0.05)	(0.75)	1.95	0.75	0.50	0.55			2.2
179	弓飾鋲	2.80	0.40	0.55	0.20	(0.90)	1.90	0.60	0.45	0.65	(0.05)	(0.75)	2.4
180	弓飾鋲	2.80	0.60	0.60	(0.05)	(0.50)	1.85	0.65	0.50	0.55	(0.05)	(0.55)	2.1

181	弓飾鋲	3.50	0.70	0.65	(0.25)	(0.95)	2.35	0.80	0.35	060	(0.15)	(0.90)	3.2

双葉剣菱形杏葉

No	種類	長①	長②	長③	長④	長⑤	長⑥	長⑦	幅⑧	幅⑨	幅⑩	幅⑪	幅⑫	幅⑬	幅⑭	地板厚⑮	地板厚⑯	厚⑰	鋲長⑱	鋲頭径⑲	重g
182	双葉	(20.75)	17.30	7.40	9.85	2.30	1.40	2.70	17.85	12.00	6.30	[5.10]	3.50	3.40	1.30	0.25	0.25	0.50	0.85	0.50	210.0
183	双葉	(21.30)	17.15	7.30	9.85	2.75	(2.15)	(3.85)	17.80	11.65	6.50	[5.10]	(2.80)	4.05	1.10	0.30	0.30	0.60	0.85	0.60	126.5

剣菱形杏葉

No	種類	長①	長②	長③	長④	長⑤	長⑥	長⑦	幅⑧	幅⑨	幅⑩	幅⑪	幅⑫	幅⑬	地板厚⑭	地板厚⑮	厚⑯	鋲頭径⑰	鋲長⑱		重g
184	剣菱	(28.65)	(25.10)	8.20	(14.75)	(2.85)	1.70	(2.50)	14.40	12.10	6.75	(3.25)	2.50	(1.40)	0.30	0.30	1.05	0.60	0.80		138.0
185	剣菱	27.35	24.95	7.85	15.50	2.25	1.60	2.30	13.95	11.90	6.45	3.90	2.80	1.35	0.25	0.25	0.75	0.60	0.80		198.0

杏葉（破片）

No	種類	長①	幅②	地板厚③	鋲長④	鋲頭径⑤	鋲茎幅⑥	重g	備考
186	杏葉	(4.60)	1.15	0.35	0.80	0.70		4.9	破片
187	杏葉	(4.40)	1.05	0.35			(0.30)	3.6	破片
188	杏葉	(4.65)	1.15	0.35				4.6	破片
189	杏葉	(3.45)	1.15	0.35	0.70	0.65		3.9	破片
190	杏葉	(3.55)	(2.10)	0.25	(0.55)	0.60		3.1	破片
191	杏葉	(2.85)	(3.55)	0.30	(0.55)	0.65		4.7	破片
192	杏葉	(1.15)	1.35	(0.20)	(0.50)	0.70		0.9	破片
193	杏葉	(2.35)	0.90	(0.20)				1.4	破片
194	杏葉	(2.70)	1.20	0.40	0.75	0.60		3.7	破片
195	杏葉	(2.20)	1.10	0.30	(0.60)	0.55		1.9	破片
196	杏葉	(1.70)	(1.45)	0.30				1.0	破片

杏葉（頭部）

No	種類	長①	長②	幅③	幅④	厚⑤	地板厚⑥	鋲長⑦	鋲頭径⑧	重g	備考
197	杏葉	3.35	(2.05)	1.80	4.65	0.55	0.30	0.70	0.50	24.8	頭部

轡（鏡板）

No	種類	長①	幅②	長③	幅④	幅⑤	長⑥	幅⑦	厚⑧	幅⑨	長⑩	重g	備考
198	轡	(6.10)	(7.00)	[1.20]			(0.10)	0.90	0.40	0.60	5.50	14.8	鏡板
199	轡	(7.15)	(6.70)	(1.15)	(3.35)	2.10	(0.60)	(0.60)	(0.30)	(0.65)	5.80	20.2	鏡板

轡（銜）

No	種類	長①	長②	孔径③	厚④	幅⑤	幅⑥	重g	備考
200	轡	(6.45)	2.25	1.10	0.55	0.70	(1.85)	6.4	銜
201	轡	(9.70)	(1.35)	[0.95]	0.35	0.45	(1.30)	14.8	銜

轡（引手）

No	種類	長①	長②	孔径③	厚④	幅⑤	幅⑥	重g	備考
202	轡		2.40	1.00	0.55	0.80	1.80	3.2	引手

轡（銜）

No	種類	全幅①	幅②	幅③	長④	孔径⑤	幅⑥	厚⑦	幅⑧	長⑨	孔径⑩	幅⑪	厚⑫	重g	備考
203	轡	(17.8)	(8.50)	(1.70)	(1.65)	[0.95]	0.45	0.35	1.90	(1.80)	0.95	(0.50)	(0.35)	33.4	銜
			(9.05) ⑬	(2.10) ⑭	(1.90) ⑮	(1.00) ⑯	(1.85) ⑰			(1.70) ⑱	(0.85) ⑲	(0.40) ⑳	(0.40) 21		
			(2.70) 22		(2.35) 23	1.80 24	(0.50) 25	(0.30) 26							

轡（銜）

No	種類	全長①	長②	幅③	厚④	長⑤	幅⑥	厚⑦	長⑧	幅⑨	厚⑩			重g
204	轡（銜）	(5.95)	(4.80)	2.75	1.40	2.50	2.15	(1.90)	0.80	1.10	(0.90)			42.2

引手

No	種類	長①	長②	幅③	幅④	幅⑤	長⑥	孔径⑦	長⑧	長⑨				重g
205	引手	(4.70)	2.10	5.70	2.80	3.30	3.25	1.50	1.30	1.10				59.5
207	引手	(5.80)	3.00	(4.70)	(2.10)	(3.10)	(1.70)	1.10	0.80					27.8

引手・不明鉄製品（馬具）

No	種類	全長①	全幅②	全厚③	長④	幅⑤	厚⑥	長⑦	幅⑧	厚⑨	長⑩	幅⑪	厚⑫	重g	備考
206	引手	(2.55)	(3.65)		(2.00)	(0.90)	(0.70)	(2.60)	(1.00)	(0.90)	(1.60)	(0.90)	(0.75)	15.6	

吊金具

No	種類	長①	幅②	幅③	厚④	幅⑤	厚⑥	重g
208	吊金具	(3.80)	(3.95)	0.50	0.25	(0.95)	0.30	5.9
209	吊金具	(4.00)	(4.60)	0.95	0.75	(1.00)	0.35	22.4

輪鐙

No	種類	幅①	長②	幅③	長④	厚⑤	長⑥	厚⑦	重g
210	輪鐙	(7.45)	(1.65)	1.50	1.45	0.90	1.20	1.00	29.2
211	輪鐙	(4.30)	(1.30)	0.95	1.15	0.85	0.85	0.85	16.0

輪鐙

No	種類	長①	幅②	厚③	鋲長④	鋲頭径⑤	重g
212	鞍金具	(3.70)	0.60	0.30	(0.55)	0.45	1.4
213	鞍金具	(2.45)	0.60	0.30	(0.55)	0.50	1.0
214	鞍金具	(4.00)	0.50	0.25	(0.80)	0.50	1.9

環状辻金具

No	種類	長①	幅②	厚③	幅④	重g
215	辻金具	6.25	6.50	0.40	0.75	25.8
216	辻金具	5.45	5.50	0.40	0.70	29.8
217	辻金具	5.95	[5.80]	0.30	0.75	17.6

鉸具

No	種類	全長①	長②	長③	長④	幅⑤	基部幅⑥	幅⑦	厚⑧	幅⑨	厚⑩	幅⑪	厚⑫	幅⑬	幅⑭	厚⑮	幅⑯	厚⑰	重g	備考
218	鉸具	(4.35)	3.65	(0.70)	(4.45)	(4.35)	[2.60]	0.60	0.55	0.60	0.55	(0.65)	(0.50)						17.2	
219	鉸具	6.55	3.50	3.05		4.65	1.95	0.45	0.35	0.50	0.45			0.90	0.35	0.35	0.50	0.35	16.0	
220	鉸具	(4.45)			(6.15)	(2.70)				(0.75)	(0.70)	0.90	(0.55)						20.6	
221	鉸具	(4.35)				(4.0)		0.70	0.60	1.00	0.90								13.2	
222	鉸具	(5.05)				(3.80)		0.60	0.40	(0.70)	(0.40)								8.7	
223	鉸具	4.85				(3.3)				0.70	0.70								9.6	
224	鉸具	(3.00)				1.20				(1.15)	(1.00)								10.4	破片
225	鉸具	5.20				(3.65)		0.55	0.35	(0.35)	(0.30)								12.4	

辻金具（方形）

No	種類	長①	幅②	地板厚③	鋲長④	鋲茎幅⑤	重g
226	辻金具	2.75	2.70	0.35	(0.65)	0.50	8.9
227	辻金具	2.65	2.60	0.40	1.65	0.50	9.8
228	辻金具	2.65	2.65	0.40	1.55	0.55	11.8
229	辻金具	2.70	2.70	0.55	1.45	0.50	10.4
230	辻金具	2.70	2.75	0.50	(0.85)	0.40	9.1
231	辻金具	2.55	2.65	0.40	(0.75)	0.40	8.0
232	辻金具	2.80	2.60	0.30	(0.70)	0.55	5.8
233	辻金具	2.80	2.90	0.40	(0.70)	0.60	11.4
234	辻金具	2.95	2.90	0.40	(0.70)	0.45	9.7
235	辻金具	2.80	2.80	0.45	(0.80)	0.55	9.3
236	辻金具	2.70	2.70	0.30	(0.60)	0.55	7.3
237	辻金具	2.85	2.90	0.50	1.40	0.60	12.2
238	辻金具	2.90	2.90	0.35	(0.70)	0.45	7.3
239	辻金具	2.50	2.55	0.30	1.40	0.50	8.4
240	辻金具	2.65	2.70	0.30	(0.70)	0.45	8.5

辻金具（コハゼ）

No	種類	長①	幅②	地板厚③	鋲長④	鋲茎幅⑤	重g
241	辻金具	2.75	2.50	0.35	(0.55)	0.35	7.6
242	辻金具	2.70	2.30	0.40			5.0
243	辻金具	2.65	2.30	0.30	(0.60)	0.45	6.8
244	辻金具	2.85	2.40	0.30	(0.70)	0.40	6.8

責金具（楕円形飾金具）

No	種類	全長①	高さ②	幅③	厚④	幅⑤	厚⑥	幅⑦	厚⑧	幅⑨	重g
245	責金具	3.70	1.25	0.95	0.40						5.2
246	責金具	(2.50)	(0.50)	(0.80)	(0.25)						2.0
247	責金具	(3.20)	(1.15)	(0.95)	(0.25)	(0.45)	(0.25)	(0.50)			2.3
248	責金具	(3.50)	(1.05)	(1.55)	(0.25)	(0.50)	(0.25)	(0.60)	(0.25)	(0.45)	4.0
249	責金具	3.60	(0.90)	(0.90)	(0.25)	(0.45)	(0.25)	(0.45)			2.0
250	責金具	(3.15)	(0.65)	(0.95)	(0.25)	(0.50)	(0.25)	(0.45)			2.6
251	責金具	(2.65)	(0.50)	(0.95)	(0.25)	(0.50)	(0.25)	(0.45)			1.4
252	責金具	(3.20)	(0.60)	(0.90)	(0.25)	(0.40)	(0.25)	(0.50)			2.4
253	責金具	(3.00)	(0.40)	(0.50)	(0.30)						1.1
254	責金具	(3.00)	(1.25)	(0.55)	(0.30)						2.8

No	種類	全長①	幅②	地板厚③	鋲長④	鋲頭径⑤	鋲頭幅⑥	重g
258	楕円形	2.40	3.40	0.30	1.35	0.70		10.4

飾金具・鞍金具

No	種類	全長①	幅②	地板厚③	鋲長④	鋲頭径⑤	鋲頭幅⑥	重g
259	飾金具	2.45	(3.65)	0.20	(1.15)	0.90		10.6
260	飾金具	1.90	2.90	0.15	(0.65)	0.80		7.5
261	鞍金具	2.90	2.45	0.35	(2.50)		1.00	17.0

不明鉄製品

No	種類	全長①	全幅②	地板厚③	地板幅④	重g	備考
262	不明鉄製	(3.50)	(8.65)	(0.50)	(1.50)	33.2	
263	不明鉄製	(2.40)	(9.20)	(0.45)	(1.35)	18.4	

255	責金具	(1.95)	(1.30)	(0.45)	(0.30)						1.2
256	責金具	(2.10)	(0.25)	(0.40)	(0.25)						0.5
257	責金具	(1.60)	(0.20)	(0.45)	(0.30)						0.4

不明鉄製品

No	種類	長さ①	高さ②	幅③	厚④	長⑤	幅⑥	厚⑦	重g
264	不明	(4.15)	(0.90)	(0.90)	(0.45)				5.3
265	不明	(2.25)		(1.15)	(0.80)				2.7
266	不明	(8.10)		0.80	0.80	(3.35)	0.75	0.65	37.8

斧

No	種類	全長①	刃幅②	袋部長③	袋部径④	袋基部幅⑤	袋基部厚⑥	重g
278	斧	4.00	(2.15)	2.60	(1.00)	1.10	0.10	5.0

刀子

No	種類	全長①	刃長②	刃幅③	刃厚④	茎長⑤	茎幅⑥	茎最大上厚⑦	茎最大下厚⑧	目釘長⑨	目釘厚⑩	茎最大上厚⑪	茎最大下厚⑫	目釘長⑬	目釘厚⑭	重g
267	刀子	(7.35)	(7.35)	(1.65)	(0.60)											12.8
268	刀子	(5.55)	(5.55)	(2.00)	(0.60)											11.8
269	刀子	(6.15)	(6.15)	(1.80)	(0.55)											15.2
270	刀子	(8.20)	(4.65)	1.60	0.50	(3.55)	0.90	0.35	0.20							10.8
271	刀子	(5.10)	(2.50)	1.70	0.50	(2.60)	1.10	0.45	0.35							9.5
272	刀子	(5.15)				(5.15)	(1.05)	(0.65)	(0.50)							9.7
273	刀子	(5.65)				(5.65)	(1.20)	(0.45)	(0.55)							9.7
274	刀子	(5.80)	(3.30)	1.20	0.30	(2.50)	0.90	0.35	0.35	0.55	0.20					7.9
275	刀子	(4.40)	(0.45)	(1.30)	0.30	(3.95)	1.30	0.25	0.20							3.1
276	刀子	(3.50)				(3.5)	(1.00)	(0.20)	(0.10)	0.35	0.25					2.1
277	刀子茎	(4.65)				(4.65)	(0.95)	0.25	0.20	0.90	0.30	0.15	0.25	0.35	0.30	5.0

ノミ状工具①、②、③、④

No	種類	全長①	刃長②	刃幅③	刃厚④	頸部長⑤	頸部上幅⑥	頸部上厚⑦	頸部最大幅⑧	頸部最大厚⑨	棘状突起長⑩	棘状突起幅⑪	棘状突起厚⑫	茎長⑬	茎最大幅⑭	茎最大厚⑮	重g	備考
279	ノミ①	(11.75)				(9.55)	(0.60)	(0.35)	0.60	0.40	0.25	0.80	0.40	(2.20)	0.45	0.40	8.2	
280	ノミ①	(10.00)				(7.8)	(0.45)	(0.35)	0.70	0.45	0.25	1.10	0.60	(2.20)	0.60	0.60	10.8	
281	ノミ①	(10.15)				(7.9)	(0.40)	(0.25)	0.65	0.45	0.35	0.90	0.40	(2.25)	0.55	0.45	9.3	
282	ノミ①	(9.45)				(7.0)	(0.60)	(0.40)	0.75	0.45	0.25	1.00	0.60	(2.45)	0.60	0.60	9.6	
283	ノミ①	(9.50)				(5.4)	(0.35)	(0.30)	0.70	0.45	0.20	1.05	0.45	(4.10)	0.65	0.55	7.7	
284	ノミ①	(7.55)				(5.45)	(0.60)	(0.40)	0.60	0.40	0.25	0.75	0.40	(2.10)	0.50	0.40	6.0	
285	ノミ①	(8.80)				(2.9)	(0.60)	(0.40)	0.75	0.40	0.30	1.05	0.50	(5.90)	0.60	0.50	6.6	
286①	ノミ①	(3.95)				(2.7)	(0.70)	(0.30)	0.75	0.30	0.15	0.90	0.40	(1.25)	0.65	0.45	7.4	①-長い
286②	ノミ①	(2.95)				(2.95)	(0.70)	(0.4)										②-短い
287	ノミ①	(3.75)				(1.55)	(0.60)	(0.30)	0.65	0.30	0.30	0.80	0.40	(2.20)	0.50	0.40	2.1	
288	ノミ②	(10.65)				(8.0)	(0.55)	(0.25)	0.65	0.30				(2.65)	0.45	0.50	7.7	
289	ノミ②	(9.80)				(8.2)	(0.55)	(0.30)	0.75	0.40				(1.60)	0.60	0.40	8.7	
290	ノミ②	(9.15)				(7.85)	(0.50)	(0.35)	0.95	0.50				(1.30)	0.60	0.65	7.8	
291	ノミ②	(9.05)				(7.7)	(0.55)	(0.30)	0.60	0.35				(1.35)	0.35	0.40	6.0	
292	ノミ②	(10.15)				(7.25)	(0.55)	(0.30)	0.95	0.50				(2.90)	0.65	0.60	9.6	
293	ノミ②	(7.85)				(7.0)	(0.55)	(0.40)	0.70	0.40				(0.85)	0.50	0.40	8.8	
294	ノミ②	(12.90)				(6.6)	(0.50)	(0.40)	0.75	0.50				(6.30)	0.55	0.60	11.6	
295	ノミ②	(8.15)				(5.80)	(0.55)	(0.30)	0.80	0.45				(2.35)	0.55	0.50	9.6	
296	ノミ②	(6.40)				(4.25)	(0.50)	(0.40)	0.80	0.50				(2.15)	0.60	0.50	5.1	
297	ノミ②	(5.30)				(4.00)	(0.45)	(0.30)	0.75	0.50				(1.30)	0.45	0.50	5.1	

298	ノミ②	(4.55)				(4.05)	(0.65)	(0.40)	0.90	0.50				(0.50)	0.55	0.50	6.8	
299	ノミ②	(5.25)				(3.70)	(0.65)	(0.45)	0.80	0.50				(1.55)	0.45	0.50	4.4	
300	ノミ②	(5.65)				(3.35)	(0.55)	(0.35)	0.85	0.45				(2.30)	0.60	0.55	5.0	
301	ノミ②	(4.10)				(3.50)	(0.65)	(0.45)	0.90	0.55				(0.60)	0.50	0.50	4.6	
302	ノミ②	(4.25)				(2.10)	(0.50)	(0.20)	(0.75)	0.40				(2.15)	0.45	0.40	2.3	
303	ノミ②	(9.80)				(2.30)	(0.70)	(0.40)	0.85	0.40				(7.50)	0.65	0.60	7.4	
304	ノミ②	(9.05)				(9.05)	(0.50)	(0.30)	(0.60)	(0.45)							6.2	
305	ノミ②	(7.15)				(7.15)	(0.45)	(0.30)	(0.70)	(0.40)							5.8	
306	ノミ②	(7.70)				(7.70)	(0.55)	(0.35)	(0.75)	(0.55)							9.8	
307	ノミ②	(9.35)				(9.35)	(0.70)	(0.35)	(0.80)	(0.40)							21.2	
308	ノミ②	(10.20)				(10.2)	(0.85)	(0.50)	(1.05)	(0.50)							19.0	
309	ノミ②	(7.85)				(7.85)	(0.70)	(0.50)	(0.95)	(0.60)							12.0	
310	ノミ②	(8.40)				(8.40)	(0.75)	(0.40)	(0.80)	(0.45)							11.0	
311	ノミ②	(4.90)				(4.90)	(0.70)	(0.35)	(0.80)	(0.45)							6.0	
312	ノミ②	(4.10)				(4.10)	(0.60)	(0.40)	(0.60)	(0.40)							2.2	
313	ノミ②	(3.90)				(3.90)	(0.55)	(0.35)	(0.70)	(0.35)							4.0	
314	ノミ②	(3.60)				(3.60)	(0.55)	(0.30)	(0.55)	(0.30)							2.8	
315	ノミ②	(5.25)												(5.25)	(0.40)	(0.35)	2.4	
316	ノミ②	(4.30)												(4.30)	(0.35)	(0.30)	1.2	
317	ノミ②	(5.40)												(5.40)	(0.65)	(0.45)	4.3	
318	ノミ②	(4.00)												(4.00)	(0.85)	(0.30)	2.6	
319①	ノミ②					(4.05)	(1.10)	(0.65)	(1.25)	(0.65)							26.2	①-短い
319②	ノミ②													(5.50)	(0.70)	(0.50)		②-長い
320	ノミ③	(4.90)	(1.25)	0.85	0.25	3.30	0.55	0.30	[0.55]	0.30				(0.35)	0.35	0.30	2.8	
321	ノミ④	(11.35)		0.45	0.20	(11.35)			(0.80)	(0.60)							15.4	
322	ノミ④	(11.50)				(11.5)	(0.60)	(0.40)	(0.70)	(0.50)							10.0	
323	ノミ④	(11.70)				(11.7)	(0.85)	(0.40)	(1.05)	(0.55)							21.6	
324	ノミ④	(17.90)				(17.9)	(0.80)	(0.60)	(0.90)	(0.60)							61.0	
325	ノミ④	(19.40)				(10.9)	(0.70)	(0.35)	0.85	0.60				(8.50)	0.65	0.60	33.2	
326	ノミ④	(18.45)				(11.05)	(0.70)	(0.60)	1.20	0.80				(7.40)	0.95	0.80	43.6	
327	ノミ④	(22.15)				(20.85)	(0.65)	(0.35)	1.15	0.40				(1.30)	0.80	0.65	33.2	
328	ノミ④	(15.10)				(9.45)	(0.85)	(0.50)	1.00	0.65				(5.65)	0.80	0.60	20.6	
329	ノミ②	(10.05)		0.35	0.20	8.60			0.85	0.40				(1.50)	0.50	0.40	7.5	
330	ノミ②	(8.05)		0.30	0.25	(8.05)			(0.80)	(0.40)							6.6	
331	ノミ②	(8.35)				(6.80)	(0.65)	(0.30)	0.90	0.35				(1.55)	0.65	0.40	6.4	
332	ノミ②	(3.35)		0.40	0.15	(3.35)			(0.70)	(0.25)							1.5	
333	ノミ②	(3.05)		0.80	0.25	(2.65)			(1.10)	(0.40)							4.7	
334	ノミ②	(2.45)		0.40	0.20	(2.45)			(1.05)	(0.30)							2.1	

針状工具

No	種類	全長①	刃長②	刃幅③	刃厚④	頸部長⑤	頸部上幅⑥	頸部上厚⑦	頸部最大幅⑧	頸部最大厚⑨	刺状突起長⑩	刺状突起幅⑪	刺状突起厚⑫	茎長⑬	茎最大幅⑭	茎最大厚⑮	重g
335	針状	(3.80)												(3.80)	(0.60)	(0.30)	2.7
336	針状	(3.40)												(3.40)	(1.05)	(0.45)	4.7
337	針状	(5.10)				(3.55)	(0.55)	(0.30)	0.40	0.30				(1.55)	0.40	0.30	2.6
338	針状	(4.80)		(0.50)	(0.40)												3.2
339	針状	(4.60)		(0.35)	(0.35)												2.7
340	針状	(2.85)		(0.35)	(0.30)												1.8

鉤状鉄製品

No	種類	全長①	幅②	厚③	鉤部長④	鉤部幅⑤	鉤部厚⑥	重g
341	鉤状	(19.20)	0.80	0.45	2.05	1.85	0.20	31.0

342	鉤状	(15.95)	0.70	0.35	1.70	1.95	0.35	4.9
343	鉤状	21.60	0.80	0.50	2.65	2.15	0.25	37.8
344	鉤状	(12.35)	0.85	0.45	1.60	2.50	0.30	18.2
345	鉤状	(10.05)	0.90	0.55	(0.60)	(1.65)		24.0
346	鉤状	(7.85)	0.75	0.45	1.55	2.05	0.30	10.2
347	鉤状	(5.35)	(0.80)	(0.50)	(0.70)	(3.40)	(0.25)	13.6
348	鉤状	(7.50)	(0.80)	(0.50)	3.15	2.40	0.40	10.6
349	鉤状	(7.15)	(0.80)	(0.40)	4.10	3.80	0.35	18.4
350	鉤状	(4.55)	(0.70)	(0.40)	(1.55)	2.25	(0.30)	4.9
351	鉤状	(3.80)	(0.80)	(0.65)	3.20	2.55	0.25	9.6
352	鉤状	(4.90)	(0.70)	(0.40)	2.05	1.50	0.25	6.2
353	鉤状	(3.80)	(0.80)	(0.55)	(0.5)	(1.90)		5.8
354	鉤状				(3.3)	(2.10)	0.30	5.1
355	鉤状				2.50	(2.90)	0.30	5.7
356	鉤状				2.50	(1.95)	0.30	5.0
357	鉤状				(3.05)	(1.00)		4.8

Ⅲ　平成４年度の調査－史跡整備に伴う範囲確認調査－

杉　山　秀　宏　（公益財団法人・群馬県埋蔵文化財調査事業団）

１　装身具（Fig. 55・56）

サトウの『紹介』(1)および『書上簿』(2)では、青色のガラス玉300、金環１の記述のみであったが、今回の調査で材質の異なるものも含めて数種類の玉の存在が明らかになった。

ガラス製青色丸玉 130・ガラス製緑色小玉 17・ガラス製黄色小玉28・水晶製丸玉14・碧玉製管玉２・滑石製管玉１・滑石製臼玉１・銀製空玉３・金製耳環１が今回出土した装身具総数である。

ガラス製緑色小玉（1～17）　長径2.30～3.20㎜、厚さ1.25～1.85㎜、重量 0.01～0.039 である。粟玉とも呼ばれることの多い極小の玉である。

ガラス製黄色小玉（18～45）　長径2.10～2.95㎜、厚さ1.15～1.90㎜、重量0.01～0.039 である。b・c ともに他例より推してアルカリ石灰ガラスの可能性が高い。b は銅と鉄、c は少量の鉄を発色剤(3)として着色されている。ガラス玉の多色化は中期中頃以降とされる(4)が、特に顕著となるのは、後期に入ってからで、首長墳を中心に埋納されることが多いことが指摘されている。(5)

水晶製丸玉（46～59）　法量は、長径3.10～5.70㎜、厚さ 1.20～3.30㎜、重量 0.10～0.469ｇある。ガラス製青色丸玉同様個々のばらつきが大きいが青色丸玉の小形のものと法量でみると近い。

ガラス製青色丸玉（60～187）　サトウや書上簿の記述に見られる青色のガラス小玉に相当する。大きさは３つに分類でき、大形のものは３点（185･186･187）あり、厚さ１cm を超え、1.080～1.465cm の範囲に入り、長径も１cm を超え、1.021～1.370cm である。重量は、2.89～3.719 と 39 前後である。このうち最も大きい95 は、瑠璃色地に浅青色の斑文を施した蜻蛉玉である。小形のものは10 点（60～69）あり、長径は、2.25～4.90㎜と５㎜未満内で、厚さ 1.30～4.00㎜と 4㎜以内に納まり、重量は0.09～0.129 と 0.19 前後になる。これら以外の中形は、ある程度の幅を有しており、分離することも可能だが中間的なものが多く、無理して分類しなかった。法量を示すと、厚さ 2.25～10.55㎜、長径5.10～10.60㎜、重量0.31～2.539 の範囲となる。色調はガラス玉では最もポピュラーなネイビーブルーであり、個体により、80 のように発色がやや緑がかるものなどが一部ある。形は、大形は球形状を呈するが、中形・小形品、特に中形品は、上下端に平坦面を有する臼玉状を呈し、造りは量産品ということもあってかかなり雑なものがある。サトウの『紹介』によると分析を依頼した結果、材質はアルカリ石灰ガラスで、微量のコバルトにより着色されていたことが報告されている。

碧玉製管玉（188・189）　青緑色の大小の管玉が１つずつ出土した。大形のものの方が色調がやや深みを帯びた緑色を呈している。共に片面穿孔である。

滑石製管玉（191）　蛇紋岩に近い滑石質の管玉である。両面より穿孔している。碧玉質の管玉に比べ、他の諸例同様細めである。

滑石製臼玉（190）　灰白色を呈する。古墳副葬の滑石製模造品はこの時期にほぼ消滅することが想定され、臼玉においてもほぼ同様のことが言え、その点で、ガラス玉の大量副葬に比べ、１点のみの滑石臼玉副葬は、玉類の材質の変化を如実に示すものである。

銀製空丸玉（192～194）　完形のもの１個（194）以外は半分程の遺存度でつぶれている。金属製の空玉は、各地域の首長墳クラスの古墳に副葬される場合が多く銀製のものは６世紀代になって主流となり、初期横穴式石室墳からの出土が目立っている。(6)

金製耳環（195）・（196：明治 11 年出土）　サトウや書上簿記述の金環と対をなすものである。小さくて細めの耳環である。純金製である。やや変形している。純金製の耳環は５世紀末～６世紀初頭に多い。(7)

２　馬具（Fig. 57）

小破片が多く全形を知り得るものは方形金具を除きほとんど無いので、以下、各種類の個数は破片数で示すことにする。サトウの『紹介』及び『書上簿』には、剣菱形杏葉４・ｆ字形鏡板付轡２・輪鐙１・鋏具、留金

具、鎖等の出土の記述があり、今回の調査では、辻金具類・鞍金具類と考えられる遺物が出土し、本来の馬装の状況が多少明らかになった。なお、杏葉に関しては、双葉剣菱形杏葉と通例の剣菱形杏葉の組み合わせと現在考えられている。(8)

遺物の破片総数は杏葉・鏡板縁金具片82・鞍金具片39・辻金具類（方形金具片4+2？・コハゼ形金具片2・2連責金具片24・責金具片65である。

杏葉金具片（210～217）

ほとんど縁金具片である。地板部分もかなりの数量が出土したが、細片が多く図示できない。縁金具相互の接合がほとんど成し得ないため全体の形を想定することは困難である。210～214・216まで、縁金具の各部分であり、いずれも曲線や屈曲部を呈している。213・214は、剣菱形杏葉の頭部の一部と考えられ、216は同じく剣菱形杏葉の剣菱先端部であろう。215は釣舌金具片の可能性が高い。217は双葉剣菱形杏葉の立聞部の一部と考えられるもので、吊り金具の一部が残っている。縁金具部分は厚さ1.5～2.0㎜の鉄地板に鉄縁板をのせ金銅板を被せた後、銀被せの径6㎜前後の鉄鋲を打ち付けたものである。

鞍橋縁金具片（208・209）　おそらく鞍橋縁金具と想定できるもので、4～5㎜幅、厚さ1.5～2㎜の鉄板に金銅板を被せ径3㎜前後の銀被せ鉄鋲を打ちつけたもので、裏面には木質が遺存している。いずれも直線状を呈しており、接合できる資料がないためその全体の形の復元は困難である。

辻金具類（201～203）　方形金具（201・202）計4個体分出土している。内、ほぼ完形で出土した2例を図示した。大きさがやや異なり、一辺2.8cmのもの（201）と一辺2.6cmのもの（202）がある。中央部は鉄板が厚く、打ち叩いたことで四隅が薄くなっている。裏面には中央部に径4～5㎜の鋲脚が出ているが、この鋲が方形の鉄地板に後から打ち込んだものかどうかは、X線写真で確認しておらず不明である。金銅板を被せて裏面で2～3㎜折り返している。辻金具の中心部になるものと思われる。

コハゼ形金具（203）2個体分出土している。いずれも小破片で、残りの良い方を図示した。造りは方形金具と同じで、鉄地板に金銅板を被せたものである。方形金具の四辺に責金具を間にして4個連結する復元が想定される(9)が、現状では方形金具の方が数が多く別の連結法を想定する必要があるが、出土状況が全く不明の為、復元は困難で、他の良好な出土例から想定するしかないだろう。

責金具（204～207）　2本で一組となる2連のものと1本のものがあるが、1本のものは、2連のものが分離した可能性もあるが、今の所、単装のものと連装のものの2種類あることにして説明する。いずれも、幅4～5㎜で厚さ1.5～2㎜の断面蒲鉾形の長さ4～5cmの鉄板を幅2.4～3cmで両端を折り曲げて造られており、皮紐の幅に違いがあったことを示す。基本的に、連装の方が幅が広いようである。X線写真を撮っていないので明らかにしえず、図示できなかったが、斜め方向の刻みと銀被せが行われた可能性も考えられる。

3　武器（Fig. 57・58）

サトウの『紹介』及び『書上簿』では、鉾2本、鉄鏃多数という記述があり、今回の調査では、新たに、刀の破片が出土し少なくとも刀が1本はあること、及び鏃の型式が3種類あることが分かった。　鉾（石突）1・刀片4+4？・鉄鏃片24（頭部から型式のわかるもののみカウント）

石突（229）　鉾2本の内の1本に対になるものである。全長11.5cm、口径2.8cm、袋部での厚さ2㎜である。基部より3.8cmの所で断面円形から方形に変えており、表面観察では、基部より5.5cmまで袋部を有する。基部より8㎜の所に目釘がある。

刀片（228）刃部の破片である。明瞭に刀の破片とわかるものは4片だが、うち最も残りの良いものを図示した。棟幅6㎜であるが、刃幅は刃先が欠損していて現状では不明である。棟幅より推してあまり長い刀ではないだろう。

鉄鏃片（218～227）　鉄鏃は今回の調査で2型式あることが分かった。いずれも長頸鏃で、以下、各型式毎に述べる。

短頸有腸長三角形鏃（218～222・225）17本と最も出土量の多い鏃である。長頸鏃のうちでも、頸部が4cm前後と短めのものである。刃部は3.7～4cmとほぼ頸部の長さと匹敵する。明瞭な片鏑を有し、逆刺は深い。

長頸段違有腸抉三角形鏃（223・224・226・227）計7本出土している。刃部は片逆刺部も含めると4cmになり、頸部は現存しているもので、4cm以上だが、他例より推して、典型的な長頸鏃の中に入る7cm以上にな

るだろう。以上の鏃は6世紀前半の典型的な鏃と言え、当古墳の年代推定の一根拠となる。

4　石室出土の農工具形小型模造品他 (Fig. 58)

サトウ及び書上簿には全く記述のなかったもので、今回初出である。刀子1・斧1・鋤1・鑿片3・針片20+9?。針以外は模造品の可能性が高い。

刀子形小型模造品 (233)　刃長 6.6cm、刃幅 1.1cm、棟厚2mm、茎長1.1cm、茎基幅6mm、である。茎には木質が残る。刃部は造り出すもののあまり明瞭でない。模造品と考えられる。

斧形小型模造品 (235)　有肩の斧形の模造品である。全長3.6cm、袋部基幅7mm、刃幅1.9cm、袋部径6mmである。袋部には木質が残り、柄の付いていたことがわかる。刃は造り出していない。

鋤先形小型模造品 (234)　鋤先の模造品である。全長2.8cm、柄部幅3.25cm、刃幅3.9cm、折り返し部幅8mmである。折り返し部には木質が残り、柄の付いていたことが分かる。

鑿形小型模造品 (231・232)　恐らく鑿先と考えられるもので刃先は不明瞭で斧・鋤と同じく模造品と考えられる。刃幅5〜8mm、刃厚2.5mmである。

針 (230)　断面方形の一辺1mm未満の針状のものが数点出土している。図示したように基部に木質の残るものがある。おそらく針と考えて良いだろう。

5　その他の石室出土の遺物 (Fig. 58)

大小の釘片21+9?・鉤状金具片3。いずれも今回の調査で初めて出土したものである。

釘 (236〜238)　大形のもの幅7mm、厚さ6mm、長さ2.3cm以上(236)と小形のもの幅3〜4mm、厚さ2.5〜4mm(237・238)がある。木櫃状のものに使用した可能性がある。

鉤状鉄製品 (239〜241)

玄室奥の側壁及び奥壁に鉤状金具の基部と思われる部分 (239) が出土し、先端のフックの部分は、玄室奥側より出土しており、観音山古墳(10)や藤ノ木古墳(11)で出土した鉤状金具と同様の性格を有するものと思われる。基部の幅1、cm、厚さ6mmで先に行くにしたがい幅広くなる。フック部は、幅7〜8mm、厚さ3〜4mmである。

以上の副葬品のセットから、6世紀前半代の年代が与えられ、首長クラスに相当する遺物相であることが言え、6世紀前半の副葬品の代表例として良いだろう。

註

(1)　Emest　Satow「ANCIENT　SEPULCHRAL MOUNDS　IN　KAUDZUKE」「Joumal　of　the Asiatic　Society　of　Japan』vol1.Ⅷ、　partⅢ.1880.

(2)　『室内出品書上簿』1878

(3)　樋口隆康他　『大谷古墳』和歌山市教育委員会　1959 山崎一雄の分析による

(4)　伊藤雅文　「装身具・玉類」『古墳時代の研究』 8　古墳　副葬品　雄山閣　1991

(5)　橋本博文　「梶山古墳出土玉類をめぐって」『常陸梶山古墳』大洋村教育委員会　1981

(6)　小沢　洋　「九条塚古墳の再検討」『研究紀要』(財)君津郡市文化財　1991

(7)　松本百合子　「装身具・耳飾」『古墳時代の研究』 8　古墳　副葬品　雄山閣　1991

(8)　右島和夫　「群馬県における初期横穴式石室」『古文化談叢』第12集　九州古文化研究会　1983

(9)　武田宗久・永沼律朗　『上総江古田金環塚古墳』　市原市教育委員会　1985

(10)　群馬県教育委員会・(材)群馬県埋蔵文化財調査事業団『綿貫観音山古墳Ⅱ石室・遺物編』1999

(11)　奈良県立橿原考古学研究所　『斑鳩藤木古墳第一次調査報告書』　斑鳩町教育委員会　1990

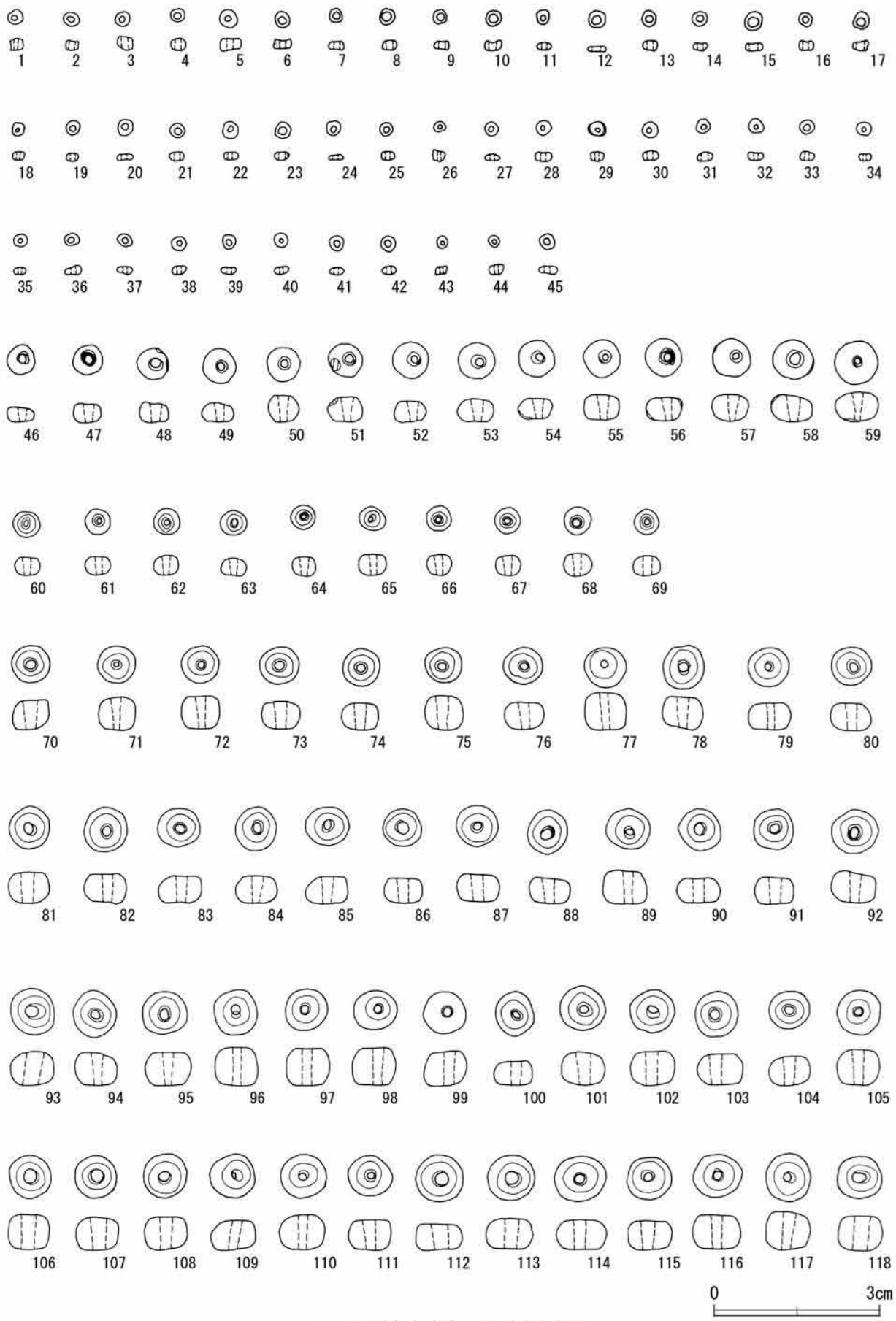


Fig. 55 平成4年度前二子石室出土品(1)

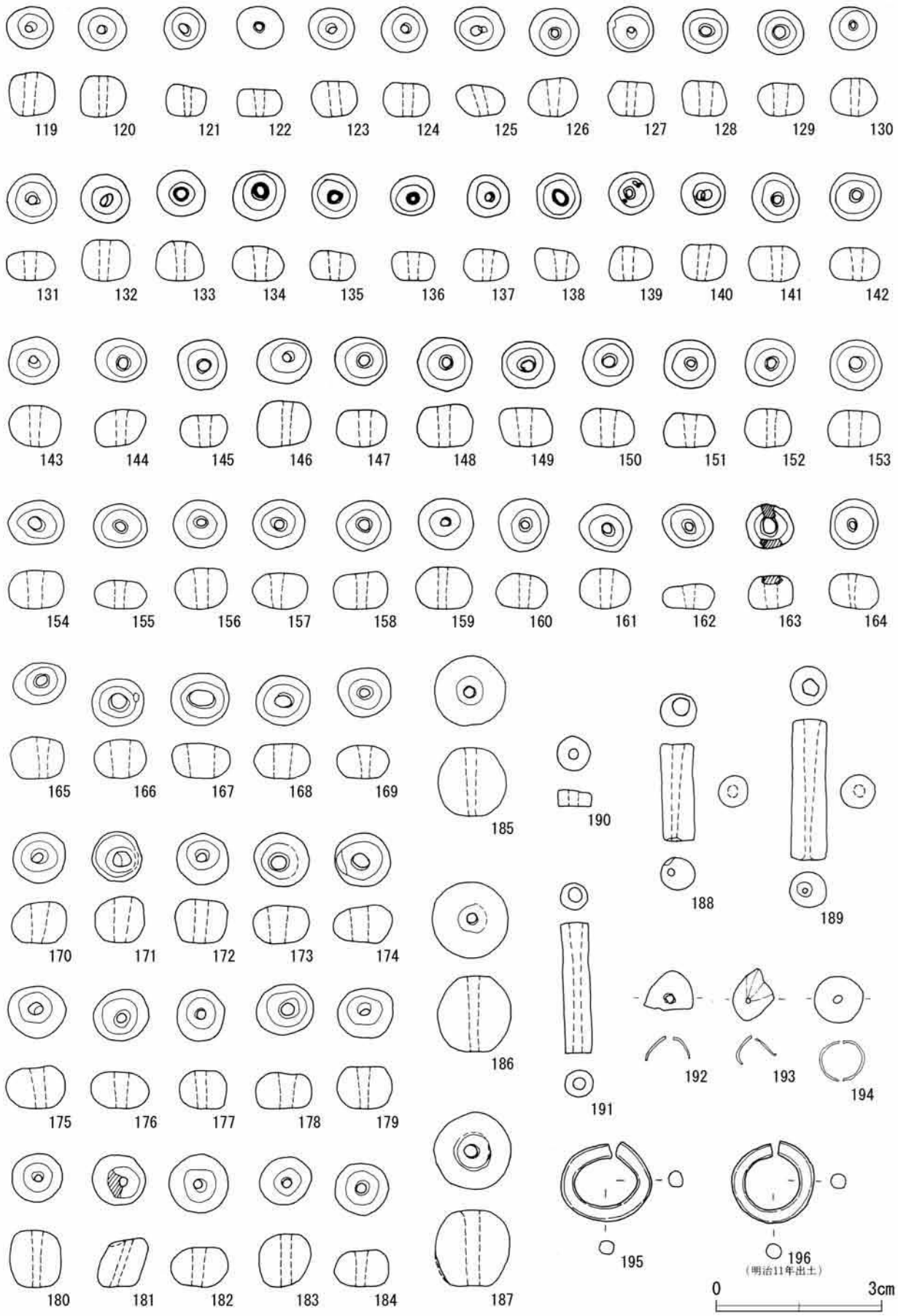


Fig. 56 平成4年度前二子石室出土品(2)

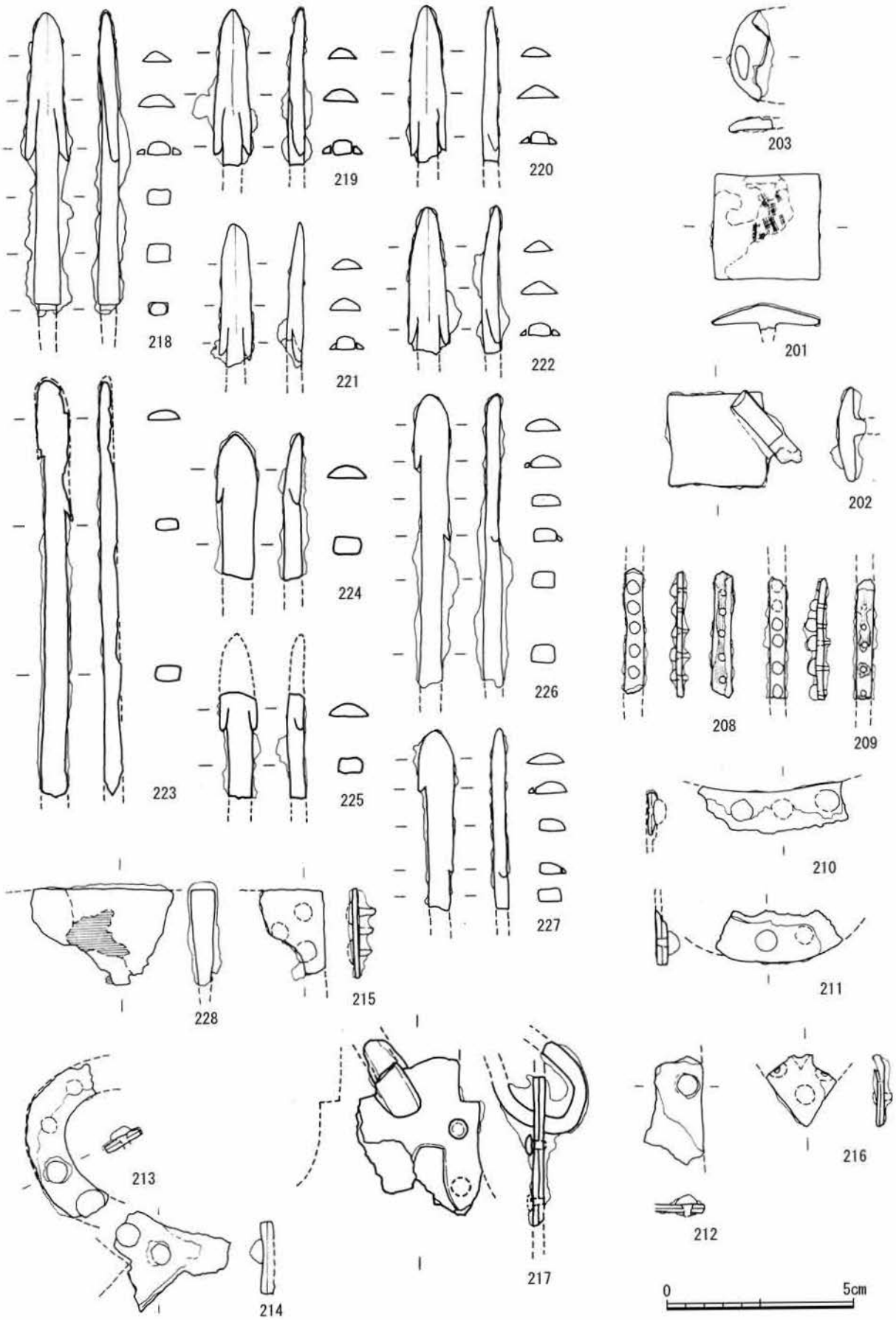


Fig. 57 平成4年度前二子石室出土品(3)

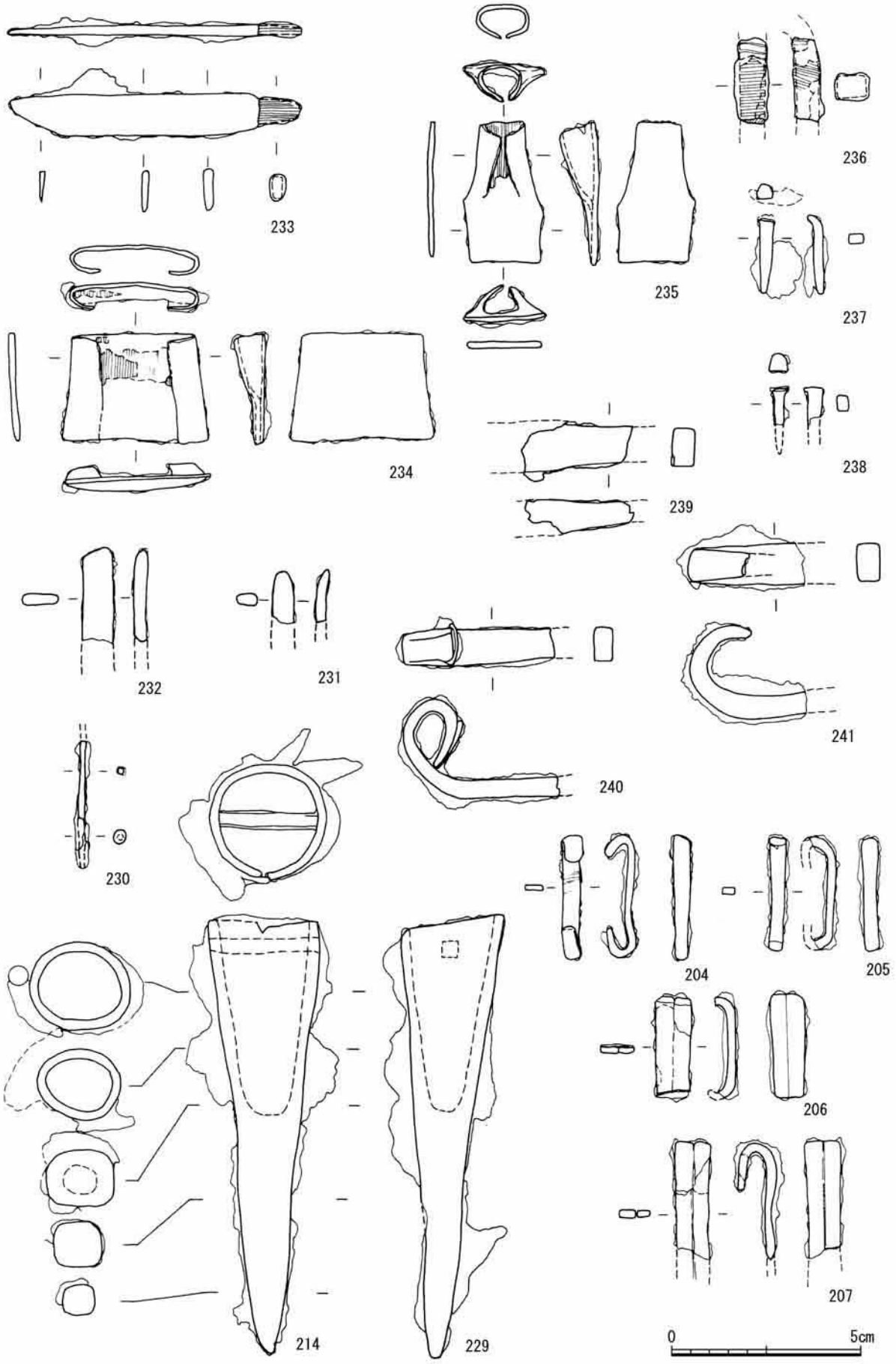


Fig. 58 平成4年度前二子石室出土品(4)

Tab. 2　平成４年度前二子古墳石室出土品計測表

No.	名　　称	外径（長）	幅	厚	内径(cm)	重（g）	備考	報告書No.
1	ガラス製緑色小玉1	0.3	0.29	0.20	0.11	0.03		131
2	ガラス製緑色小玉2	0.25	0.30	0.20	0.12	0.02		132
3	ガラス製緑色小玉3	0.30	0.26	0.26	0.09	0.03		133
4	ガラス製緑色小玉4	0.25	0.30	0.21	0.12	0.03		134
5	ガラス製緑色小玉5	0.36	0.31	0.25	0.11	0.03		135
6	ガラス製緑色小玉6	0.30	0.25	0.20	0.15	0.02		136
7	ガラス製緑色小玉7	0.29	0.22	0.15	0.12	0.02		137
8	ガラス製緑色小玉8	0.31	0.29	0.19	0.18	0.02		138
9	ガラス製緑色小玉9	0.29	0.25	0.16	0.12	0.02		139
10	ガラス製緑色小玉10	0.30	0.30	0.20	0.16	0.02		140
11	ガラス製緑色小玉11	0.30	0.22	0.13	0.09	0.01		141
12	ガラス製緑色小玉12	0.32	0.30	0.10	0.15	0.02		142
13	ガラス製緑色小玉13	0.31	0.25	0.20	0.12	0.02		143
14	ガラス製緑色小玉14	0.28	0.29	0.15	0.14	0.01		144
15	ガラス製緑色小玉15	0.36	0.30	0.15	0.18	0.03		145
16	ガラス製緑色小玉16	0.35	0.25	0.20	0.10	0.01		146
17	ガラス製緑色小玉17	0.32	0.30	0.20	0.15	0.03		147
18	ガラス製黄色小玉1	0.25	0.21	0.15	0.05	0.01		148
19	ガラス製黄色小玉2	0.29	0.25	0.17	0.10	0.01		149
20	ガラス製黄色小玉3	0.30	0.28	0.12	0.11	0.02		150
21	ガラス製黄色小玉4	0.29	0.29	0.16	0.12	0.02		151
22	ガラス製黄色小玉5	0.31	0.28	0.15	0.10	0.02		152
23	ガラス製黄色小玉6	0.30	0.30	0.28	0.14	0.02		153
24	ガラス製黄色小玉7	0.30	0.25	0.10	0.10	0.01		154
25	ガラス製黄色小玉8	0.25	0.23	0.18	0.10	0.02		155
26	ガラス製黄色小玉9	0.20	0.21	0.22	0.08	0.02		156
27	ガラス製黄色小玉10	0.26	0.25	0.15	0.10	0.01		157
28	ガラス製黄色小玉11	0.29	0.29	0.18	0.06	0.03		158
29	ガラス製黄色小玉12	0.28	0.31	0.19	0.10	0.03		159
30	ガラス製黄色小玉13	0.29	0.30	0.19	0.10	0.03		160
31	ガラス製黄色小玉14	0.28	0.25	0.18	0.10	0.02		161
32	ガラス製黄色小玉15	0.28	0.29	0.15	0.05	0.03		162
33	ガラス製黄色小玉16	0.25	0.28	0.20	0.12	0.03		163
34	ガラス製黄色小玉17	0.23	0.27	0.15	0.08	0.02		164
35	ガラス製黄色小玉18	0.22	0.26	0.12	0.08	0.02		165
36	ガラス製黄色小玉19	0.20	0.28	0.17	0.13	0.03		166
37	ガラス製黄色小玉20	0.25	0.29	0.15	0.11	0.02		167
38	ガラス製黄色小玉21	0.26	0.29	0.18	0.09	0.02		168
39	ガラス製黄色小玉22	0.28	0.25	0.12	0.10	0.02		169
40	ガラス製黄色小玉23	0.28	0.25	0.13	0.06	0.02		170
41	ガラス製黄色小玉24	0.29	0.25	0.13	0.10	0.03		171
42	ガラス製黄色小玉25	0.30	0.28	0.16	0.13	0.03		172
43	ガラス製黄色小玉26	0.25	0.20	0.15	0.06	0.01		173
44	ガラス製黄色小玉27	0.23	0.20	0.19	0.07	0.01		174
45	ガラス製黄色小玉28	0.30	0.30	0.16	0.10	0.02		175
46	水晶製丸玉1	0.55	0.50	0.30	0.20	0.10		187
47	水晶製丸玉2	0.58	0.51	0.35	0.30	0.20		186
48	水晶製丸玉3	0.56	0.55	0.40	0.35	0.30		183
49	水晶製丸玉4	0.61	0.60	0.37	0.22	0.20		177
50	水晶製丸玉5	0.61	0.60	0.50	0.22	0.10		188
51	水晶製丸玉6	0.59	0.61	0.48	0.24	0.20		184
52	水晶製丸玉7	0.68	0.65	0.40	0.25	0.30		185
53	水晶製丸玉8	0.65	0.65	0.40	0.28	0.30		180
54	水晶製丸玉9	0.68	0.61	0.36	0.26	0.30		178
55	水晶製丸玉10	0.70	0.70	0.46	0.24	0.30		181
56	水晶製丸玉11	0.69	0.64	0.42	0.31	0.30		176
57	水晶製丸玉12	0.70	0.70	0.50	0.22	0.30		179
58	水晶製丸玉13	0.70	0.73	0.50	0.32	0.40		189
59	水晶製丸玉14	0.79	0.79	0.53	0.16	0.50		182

No.	名　　称	外径（長）	幅	厚	内径(cm)	重（g）	備考	報告書No.
60	ガラス製青色丸玉1	0.46	0.50	0.32	0.15	0.60		99
61	ガラス製青色丸玉2	0.45	0.46	0.32	0.15	0.10		24
62	ガラス製青色丸玉3	0.48	0.48	0.35	0.18	0.10		31
63	ガラス製青色丸玉4	0.66	0.70	0.32	0.15	0.10		115
64	ガラス製青色丸玉5	0.45	0.45	0.38	0.15	0.10		22
65	ガラス製青色丸玉6	0.48	0.48	0.40	0.18	0.10		50
66	ガラス製青色丸玉7	0.48	0.45	0.40	0.18			102
67	ガラス製青色丸玉8	0.48	0.46	0.38	0.18			81
68	ガラス製青色丸玉9	0.50	0.50	0.41	0.20	0.10		33
69	ガラス製青色丸玉10	0.45	0.45	0.35	0.15	0.10		23
70	ガラス製青色丸玉11	0.67	0.70	0.55	0.24	0.40		100
71	ガラス製青色丸玉12	0.69	0.69	0.61	0.18	0.40		32
72	ガラス製青色丸玉13	0.69	0.69	0.60	0.17	0.40		45
73	ガラス製青色丸玉14	0.69	0.70	0.50	0.26	0.30		8
74	ガラス製青色丸玉15	0.69	0.68	0.62	0.22	0.30		106
75	ガラス製青色丸玉16	0.65	0.66	0.62	0.22	0.40		84
76	ガラス製青色丸玉17	0.69	0.70	0.49	0.20	0.40		107
77	ガラス製青色丸玉18	0.72	0.78	0.68	0.12	0.50		122
78	ガラス製青色丸玉19	0.81	0.74	0.60	0.21	0.50		113
79	ガラス製青色丸玉20	0.71	0.75	0.50	0.15	0.40		62
80	ガラス製青色丸玉21	0.69	0.70	0.50	0.22	0.40		55
81	ガラス製青色丸玉22	0.79	0.72	0.55	0.26	0.50		124
82	ガラス製青色丸玉23	0.80	0.80	0.56	0.23	0.70		91
83	ガラス製青色丸玉24	0.70	0.78	0.51	0.24	0.40		41
84	ガラス製青色丸玉25	0.80	0.84	0.50	0.22	0.40		83
85	ガラス製青色丸玉26	0.70	0.80	0.50	0.20	0.40		38
86	ガラス製青色丸玉27	0.70	0.70	0.48	0.25	0.30		130
87	ガラス製青色丸玉28	0.78	0.78	0.50	0.23	0.40		128
88	ガラス製青色丸玉29	0.80	0.72	0.45	0.25	0.40		11
89	ガラス製青色丸玉30	0.74	0.80	0.60	0.18	0.60		39
90	ガラス製青色丸玉31	0.78	0.78	0.46	0.20	0.30		73
91	ガラス製青色丸玉32	0.75	0.70	0.51	0.25	0.30		34
92	ガラス製青色丸玉33	0.81	0.84	0.59	0.20	0.50		85
93	ガラス製青色丸玉34	0.84	0.78	0.60	0.35	0.60		37
94	ガラス製青色丸玉35	0.88	0.78	0.60	0.28	0.60		108
95	ガラス製青色丸玉36	0.78	0.80	0.60	0.23	0.60		111
96	ガラス製青色丸玉37	0.80	0.80	0.70	0.15	0.60		129
97	ガラス製青色丸玉38	0.75	0.76	0.70	0.16	0.50		12
98	ガラス製青色丸玉39	0.70	0.80	0.68	0.18	0.50		21
99	ガラス製青色丸玉40	0.75	0.75	0.61	0.22	0.50		94
100	ガラス製青色丸玉41	0.80	0.70	0.45	0.20	0.30		43
101	ガラス製青色丸玉42	0.80	0.80	0.60	0.28	0.50		36
102	ガラス製青色丸玉43	0.80	0.81	0.65	0.22	0.60		28
103	ガラス製青色丸玉44	0.82	0.78	0.58	0.22	0.50		44
104	ガラス製青色丸玉45	0.70	0.73	0.51	0.26	0.40		20
105	ガラス製青色丸玉46	0.80	0.80	0.63	0.20	0.50		105
106	ガラス製青色丸玉47	0.80	0.75	0.65	0.26	0.30		7
107	ガラス製青色丸玉48	0.78	0.75	0.60	0.28	0.40		101
108	ガラス製青色丸玉49	0.80	0.80	0.60	0.24	0.60		127
109	ガラス製青色丸玉50	0.80	0.80	0.54	0.20	0.50		57
110	ガラス製青色丸玉51	0.64	0.83	0.62	0.20	0.60		109
111	ガラス製青色丸玉52	0.72	0.80	0.55	0.20	0.50		61
112	ガラス製青色丸玉53	0.86	0.85	0.45	0.30	0.50		16
113	ガラス製青色丸玉54	0.80	0.92	0.55	0.29	0.60		104
114	ガラス製青色丸玉55	0.81	0.92	0.56	0.23	0.50		110
115	ガラス製青色丸玉56	0.78	0.80	0.54	0.25	0.50		77
116	ガラス製青色丸玉57	0.78	0.90	0.62	0.18	0.50		97
117	ガラス製青色丸玉58	0.88	0.81	0.60	0.22	0.70		35
118	ガラス製青色丸玉59	0.75	0.80	0.62	0.32	0.60		66
119	ガラス製青色丸玉60	0.80	0.85	0.71	0.23	0.70		90

No.	名　　称	外径（長）	幅	厚	内径(cm)	重（g）	備考	報告書No.
120	ガラス製青色丸玉61	0.76	0.86	0.76	0.18	0.60		87
121	ガラス製青色丸玉62	0.75	0.75	0.58	0.22	0.60		72
122	ガラス製青色丸玉63	0.78	0.84	0.65	0.20	0.50		79
123	ガラス製青色丸玉64	0.74	0.82	0.65	0.21	0.50		112
124	ガラス製青色丸玉65	0.82	0.82	0.60	0.20	0.50		80
125	ガラス製青色丸玉66	0.79	0.90	0.60	0.20	0.50		51
126	ガラス製青色丸玉67	0.85	0.89	0.70	0.23	0.22		48
127	ガラス製青色丸玉68	0.92	0.82	0.62	0.18	0.70		30
128	ガラス製青色丸玉69	0.80	0.80	0.64	0.28	0.50		98
129	ガラス製青色丸玉70	0.80	0.82	0.60	0.44	0.60		17
130	ガラス製青色丸玉71	0.80	0.85	0.70	0.15	0.80		63
131	ガラス製青色丸玉72	0.90	0.90	0.55	0.30	0.60		116
132	ガラス製青色丸玉73	0.89	0.89	0.76	0.28	0.90		114
133	ガラス製青色丸玉74	0.82	0.88	0.70	0.28	0.70		46
134	ガラス製青色丸玉75	0.90	0.95	0.64	0.29	0.80		70
135	ガラス製青色丸玉76	0.80	0.80	0.55	0.27	0.50		119
136	ガラス製青色丸玉77	0.72	0.80	0.52	0.24	0.50		14
137	ガラス製青色丸玉78	0.78	0.75	0.60	0.32	0.50		29
138	ガラス製青色丸玉79	0.84	0.80	0.56	0.32	0.60		103
139	ガラス製青色丸玉80	0.78	0.80	0.62	0.22	0.60		59
140	ガラス製青色丸玉81	0.75	0.80	0.62	0.20	0.60		52
141	ガラス製青色丸玉82	0.90	0.85	0.66	0.22	0.80		54
142	ガラス製青色丸玉83	0.88	0.91	0.60	0.23	0.70		2
143	ガラス製青色丸玉84	0.85	0.90	0.76	0.22	0.90		56
144	ガラス製青色丸玉85	0.80	0.95	0.66	0.26	0.70		6
145	ガラス製青色丸玉86	0.90	0.90	0.60	0.26	0.70		47
146	ガラス製青色丸玉87	0.85	0.98	0.82	0.23	0.90		27
147	ガラス製青色丸玉88	0.90	0.94	0.68	0.30	0.80		126
148	ガラス製青色丸玉89	1.00	1.00	0.78	0.22	1.00		4
149	ガラス製青色丸玉90	0.85	0.94	0.70	0.35	0.90		120
150	ガラス製青色丸玉91	0.88	0.90	0.70	0.28	0.80		10
151	ガラス製青色丸玉92	0.90	0.90	0.60	0.24	0.90		5
152	ガラス製青色丸玉93	0.90	0.90	0.70	0.28	0.90		26
153	ガラス製青色丸玉94	0.91	0.91	0.68	0.30	0.90		18
154	ガラス製青色丸玉95	0.80	1.00	0.70	0.35	0.80		78
155	ガラス製青色丸玉96	0.80	0.96	0.51	0.30	0.60		53
156	ガラス製青色丸玉97	0.85	0.95	0.75	0.30	0.90		74
157	ガラス製青色丸玉98	0.90	0.92	0.68	0.30	0.80		76
158	ガラス製青色丸玉99	0.92	1.00	0.68	0.20	1.00		81
159	ガラス製青色丸玉100	0.92	1.00	0.78	0.18	1.00		86
160	ガラス製青色丸玉101	0.95	0.90	0.66	0.24	0.70		58
161	ガラス製青色丸玉102	0.88	0.95	0.75	0.25	0.90		68
162	ガラス製青色丸玉103	0.78	0.90	0.48	0.25	0.50		82
163	ガラス製青色丸玉104	0.84	0.85	0.60	0.32	0.60		92
164	ガラス製青色丸玉105	0.90	0.85	0.68	0.18	0.80		64
165	ガラス製青色丸玉106	0.75	0.96	0.78	0.28	0.80		93
166	ガラス製青色丸玉107	0.86	0.94	0.70	0.50	0.80		123
167	ガラス製青色丸玉108	0.96	1.05	0.65	0.52	0.80		117
168	ガラス製青色丸玉109	0.90	0.98	0.62	0.35	0.80		121
169	ガラス製青色丸玉110	0.90	0.96	0.60	0.30	0.80		40
170	ガラス製青色丸玉111	0.90	0.96	0.76	0.32	0.90		9
171	ガラス製青色丸玉112	0.90	0.90	0.84	0.32	0.90		13
172	ガラス製青色丸玉113	0.92	0.92	0.80	0.26	1.00		60
173	ガラス製青色丸玉114	0.98	1.00	0.70	0.38	1.00		69
174	ガラス製青色丸玉115	0.98	1.00	0.70	0.34	1.00		19
175	ガラス製青色丸玉116	0.95	1.05	0.75	0.26	1.10		88
176	ガラス製青色丸玉117	0.90	1.00	0.65	0.30	0.90		75
177	ガラス製青色丸玉118	0.92	0.86	0.70	0.21	0.80		49
178	ガラス製青色丸玉119	0.90	1.02	0.68	0.38	0.90		42
179	ガラス製青色丸玉120	0.90	1.00	0.78	0.24	1.00		15

No.	名　　称	外径（長）	幅	厚	内径(cm)	重（g）	備考	報告書No.
180	ガラス製青色丸玉121	0.90	0.90	1.02	0.22	1.20		96
181	ガラス製青色丸玉122	0.90	0.95	0.90	0.15	1.00		65
182	ガラス製青色丸玉123	1.08	1.05	0.75	0.25	1.10		3
183	ガラス製青色丸玉124	0.86	0.94	0.95	0.18	0.90		1
184	ガラス製青色丸玉125	0.95	0.96	0.68	0.26	0.80		67
185	ガラス製青色丸玉126	1.25	1.28	1.25	0.22	2.90		118
186	ガラス製青色丸玉127	1.38	1.38	1.38	0.20	3.60		95
187	ガラス製青色丸玉128	1.40	1.40	1.40	0.28	3.70	蜻蛉玉	125
188	碧玉製管玉1	1.76	0.60	0.54	0.21	1.10		191
189	碧玉製管玉2	3.58	0.60	0.62	0.28	2.00		190
190	滑石製臼玉	0.30	0.60	0.60	0.17	0.30		193
191	滑石製管玉	2.40	0.55	0.50	0.24	1.00		192
192	銀製空玉1	0.74	0.90	0.84	0.22	0.01		195
193	銀製空玉2	0.95	0.76	0.74	0.08	0.02		196
194	銀製空玉3	0.82	0.90	0.82	0.18	0.04		194
195	金製耳飾1	1.45	1.62	0.25	－	2.90		197
196	金製耳飾2	1.50	1.50	0.28	－	3.30		198
201	辻金具類・方形金具1	2.90	2.90	2.80	－	11.40		201
202	辻金具類・方形金具2	2.56	2.70	0.78	－	9.10		202
203	辻金具類・コハゼ形金具	2.45	1.08	0.96	－	1.40		203
204	辻金具類・責金具1	3.28	0.60	0.90	－	1.20		204
205	辻金具類・責金具2	3.00	0.50	0.75	－	1.30		205
206	辻金具類・責金具3	2.76	1.00	0.56	－			206
207	辻金具類・責金具4	3.12	0.98	1.06	－	2.90		207
208	馬具・鞍金具	3.38	0.68	0.60	－	1.40		208
209	馬具・鞍金具	3.22	0.55	0.65	－	1.50		209
210	馬具・杏葉、鏡板金具	1.38	4.02	0.50	－	3.30		210
211	馬具・杏葉、鏡板金具	1.42	3.40	0.66	－	3.50		211
212	馬具・杏葉、鏡板金具	2.90	1.65	0.60	－	2.60		212
213	馬具・杏葉	4.15	2.20	0.55	－	5.10	剣菱形杏葉	213
214	馬具・杏葉	2.70	3.15	0.66	－		剣菱形杏葉	214
215	馬具・杏葉	2.28	1.76	0.80	－	3.20	釣金具	215
216	馬具・杏葉	1.95	1.90	0.52	－	1.50		216
217	馬具・杏葉	5.05	3.40	2.58	－	17.80	双葉剣菱形杏葉	217
218	鉄鏃	7.98	1.20	0.69	－	11.00		218
219	鉄鏃	4.22	1.02	0.50	－	5.00		219
220	鉄鏃	4.20	1.00	0.46	－	3.20		220
221	鉄鏃	4.80	0.90	0.55	－	2.60		221
222	鉄鏃	4.00	1.12	0.60	－	13.00		222
223	鉄鏃	11.16	1.08	0.51	－	13.40		223
224	鉄鏃	4.00	1.00	0.62	－	4.50		224
225	鉄鏃	2.85	1.02	0.55	－	3.10		225
226	鉄鏃	7.94	0.98	0.58	－	11.80		226
227	鉄鏃	4.90	1.00	0.45	－	3.50		227
228	刀	2.70	3.86	0.65	－	11.20		228
229	鉾・石突	11.70	2.98	2.70	－	99.50		229
230	針	3.40	0.20	0.30	－	0.90		230
231	鑿1	1.40	0.60	0.40	－			231
232	鑿2	2.54	0.86	0.40	－	2.20		232
233	刀子	7.80	1.14	2.36	－	7.50		233
234	鋤形模造品	2.92	3.90	0.85	－	5.70		234
235	斧形模造品	3.80	2.14	1.05	－	9.20		235
236	釘	2.32	0.95	0.85	－			236
237	釘	2.02	0.42	0.40	－			237
238	釘	1.06	0.44	0.56	－			238
239	鉤状鉄製品1	2.95	1.30	0.92	－	4.80		239
240	鉤状鉄製品2	4.10	1.15	2.78	－			240
241	鉤状鉄製品3	3.12	1.10	2.50	－	13.20		241

Ⅳ　平成14年度の調査　－ 史跡整備工事に伴う石室調査 －

杉　山　秀　宏　（公益財団法人・群馬県埋蔵文化財調査事業団）

これらの遺物は、すべて床石の移動の際に、床石の下や間に落ち込んだもので、本来は床石上に置かれた遺物と考えられる。今回見つかった遺物を総計すると、青色ガラス丸玉2、同小玉12、同ビーズ玉7、管玉4、水晶製小玉1、滑石製臼玉1の玉類、金銅製馬具片4、鞍橋金具片3、杏葉地板片1、鉄鏃片12、責金具片1などの金属製品、完形の土師器壺形土器、須恵器大形器台片・須恵器高杯片を含む土器片21の土器類等である。これらはすべて明治11年及び整備に伴う調査で出土したものと一連の遺物である。

金銅製品（42・43・45・46）は馬具と考えられるものが出土している。厚さ0.1㎝の銅板に金メッキを施している。周辺部に幅0.38㎝、厚さ0.23㎝の鉄板の縁金具を付け、上から鋲を打っている。縁金具の内側の金銅板に2条の列点文が施されている。完形品がないため全体像は分からないが、おそらく鞍金具の一部と考えられる。

鞍橋縁金具破片が3点（39・41・47）出土している。

剣菱形杏葉あるいは双葉剣菱形杏葉の楕円部の地板破片と考えられるものが1点（48）出土している。

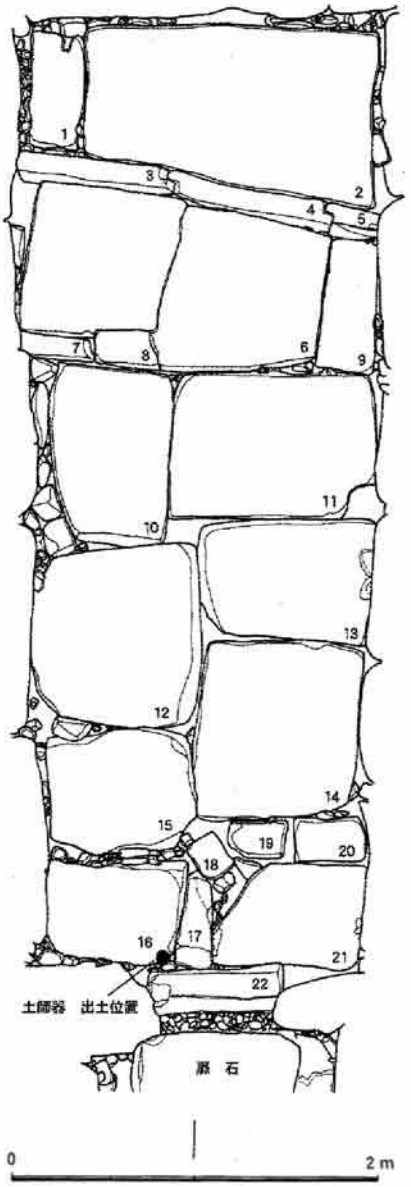
責金具破片（40）が1点出土している。

雲母片（53～56）が、4点出土した。厚さ0.1㎝未満の剥片で、外形は不定形である。井出二子山古墳からの出土例(1)があるが、石室内にまかれたものと考えられる。

鉄鏃がほぼ完形にちかいものが3点（28・29・38）出土しており、いずれも、短頸有腸抉長三角形鏃である。他に破片が9点（30～37・44）出土している。

土師器壺形土器(49)が床石№16と№22の梱石切り込み下から完形の状態で出土したことが注目される。床石下に口縁部を上にしていたものと見られる。器形は胴部中位に最大径を持つ球形胴丸底、口縁部は中段に沈線が入り長く立ち、端部がやや開く。全体に作りがよく表面は磨かれ、赤色塗彩を施す。器高15.3cm、口径9.6cm、胴部最大径12.0㎝、口縁高5.7cmである。

注目されるのは、この土器中の土に凝灰岩の剥片が入り込んでいたこと、明治期の出土遺物中の台付壺形土器と技法が共通していることで、石室構築時に床石下に置かれたものと考えられる。



石室構築に当たり、死者の霊魂を鎮める意や、石室の長期安定を祈念して床面下に埋められたものであろうか。完形での出土はそうした意識下での埋納を示すものかもしれない。上の床石と梱石は動かされた形跡が見られないことから、その性格を考える上で重要な資料である。

【参考文献】

(1)『井出二子山古墳』史跡整備事業報告書　高崎市教育委員会2009

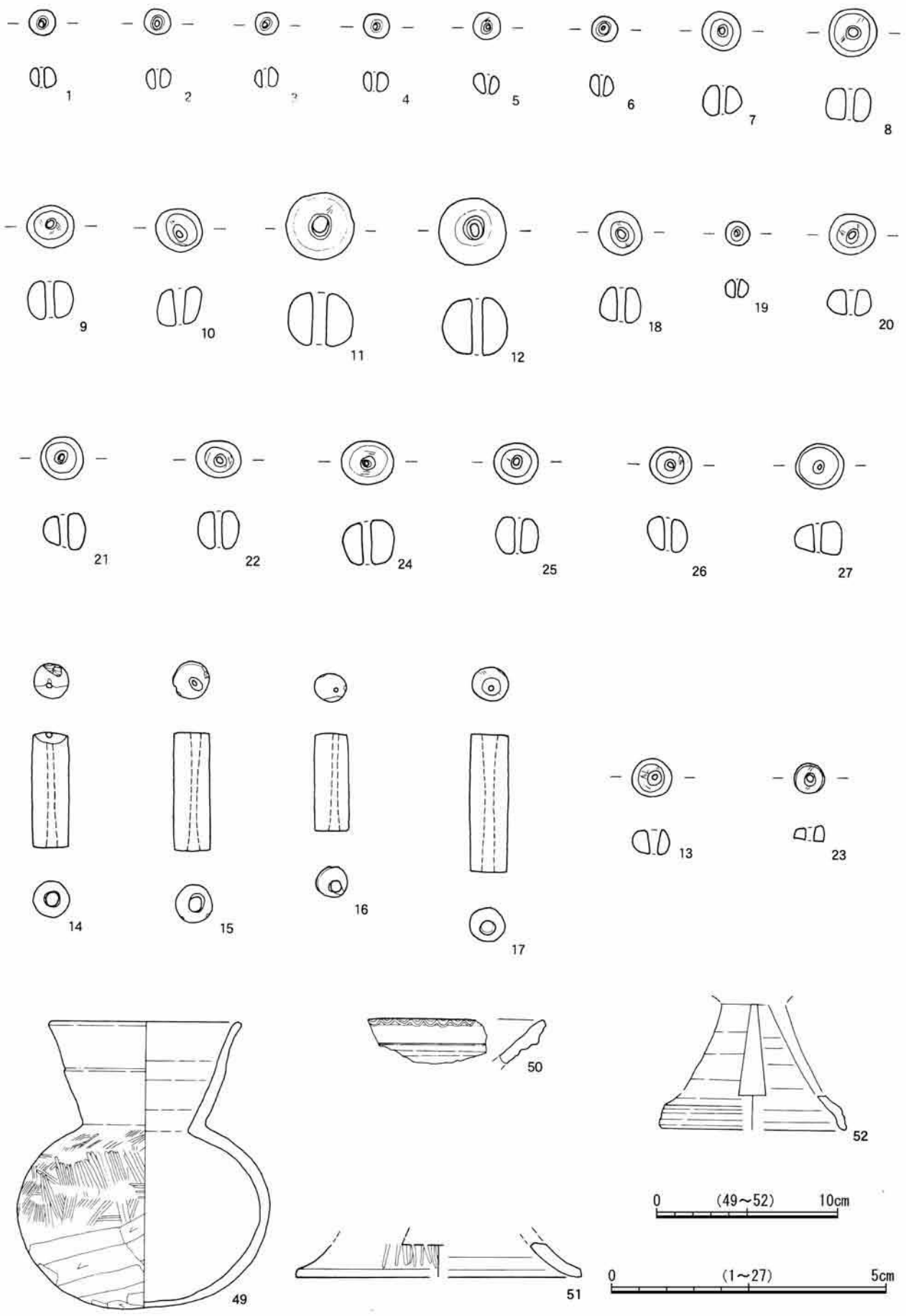


Fig. 59 平成14年度前二子石室出土品(1)

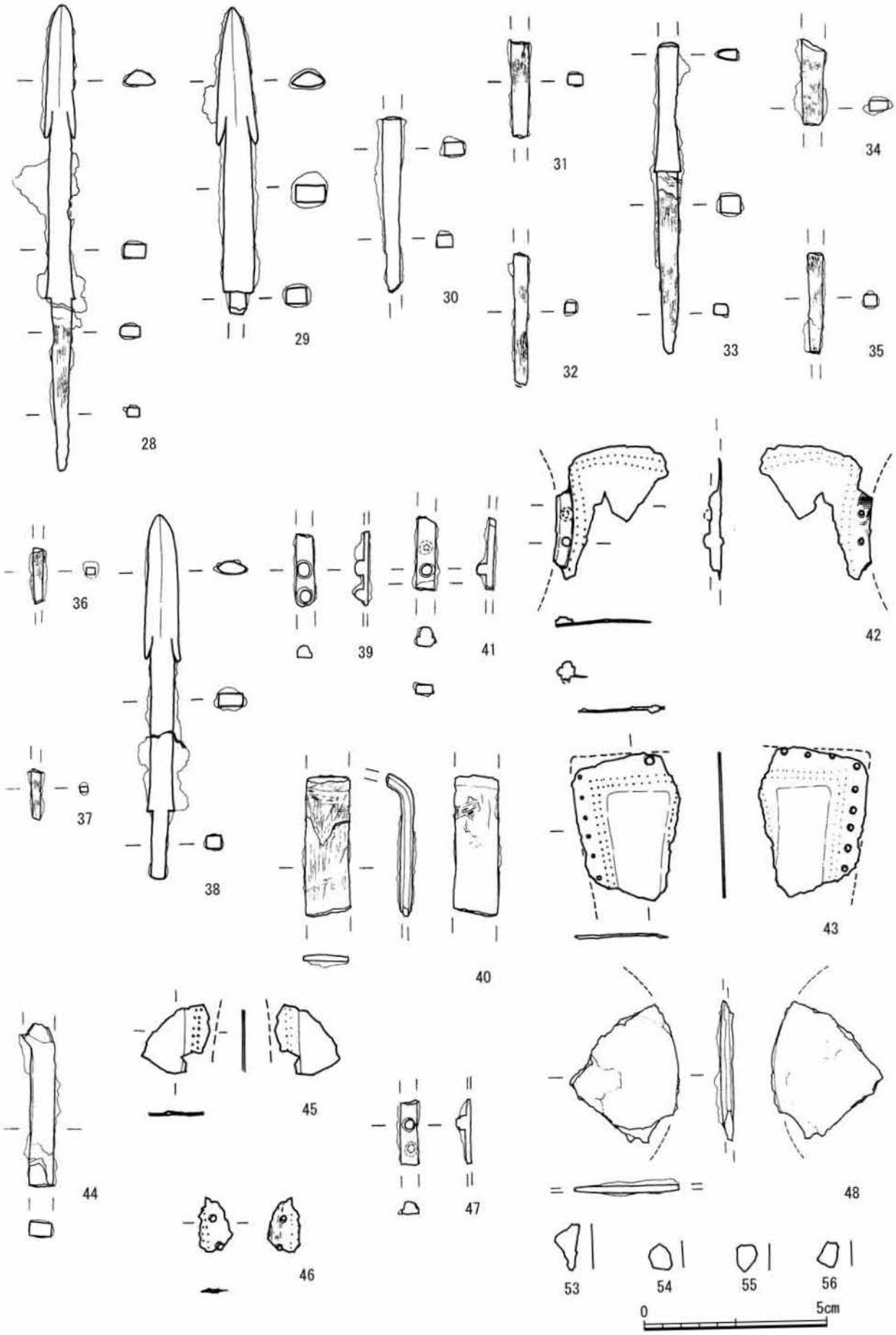


Fig. 60 平成14年度前二子石室出土品(2)

Tab. 3　平成14年度前二子古墳石室出土品計測表

No.	名　　称	長（外径）	幅	厚	内径(cm)	重（g）	備考
1	ガラス製青色丸玉1	0.48	0.48	0.40	0.15	0.10	床石No.10下部
2	ガラス製青色丸玉2	0.46	0.50	0.38	0.16	0.10	床石No.10下部
3	ガラス製青色丸玉3	0.44	0.44	0.40	0.15	0.10	床石No.10下部
4	ガラス製青色丸玉4	0.48	0.48	0.40	0.12	0.10	床石No.10下部
5	ガラス製青色丸玉5	0.50	0.50	0.40	0.14	0.10	床石No.10下部
6	ガラス製青色丸玉6	0.50	0.50	0.45	0.20	0.10	床石No.10下部
7	ガラス製青色丸玉7	0.72	0.72	0.56	0.18	0.60	床石No.10下部
8	ガラス製青色丸玉8	0.88	0.90	0.60	0.28	0.70	床石No.10下部
9	ガラス製青色丸玉9	0.80	0.86	0.70	0.20	0.60	床石No.10下部
10	ガラス製青色丸玉10	0.80	0.88	0.72	0.28	0.60	床石No.10下部
11	ガラス製青色丸玉11	1.24	1.28	1.00	0.30	2.00	床石No.10下部
12	ガラス製青色丸玉12	1.20	1.26	1.08	0.30	2.30	床石No.10下部
13	水晶製丸玉	0.70	0.72	0.50	0.25	0.40	床石No.10下部
14	碧玉製管玉1	2.16	0.68	0.70	0.10	1.60	床石No.10下部
15	碧玉製管玉2	2.20	0.66	0.70	0.25	1.70	床石No.10下部
16	碧玉製管玉3	1.80	0.62	0.58	0.08	1.00	床石No.10下部
17	碧玉製管玉4	2.55	0.70	0.62	0.32	1.90	床石No.10下部
18	ガラス製青色丸玉13	0.80	0.80	0.70	0.24	0.60	床石No.11下部
19	ガラス製青色丸玉14	0.46	0.44	0.34	0.10	0.10	床石No.12下部
20	ガラス製青色丸玉15	0.74	0.85	0.50	0.22	0.50	床石No.12下部
21	ガラス製青色丸玉16	0.80	0.78	0.68	0.24	0.50	床石No.12下部
22	ガラス製青色丸玉17	0.70	0.84	0.70	0.24	0.60	床石No.12下部
23	滑石製白玉	0.58	0.58	0.30	0.20	0.10	床石No.12下部
24	ガラス製青色丸玉18	0.82	0.96	0.82	0.28	1.00	床石No.15下部
25	ガラス製青色丸玉19	0.78	0.82	0.68	0.20	0.70	床石No.15下部
26	ガラス製青色丸玉20	0.70	0.80	0.70	0.20	0.40	床石No.15下部
27	ガラス製青色丸玉21	0.82	0.90	0.60	0.20	0.60	床石No.15下部
28	鉄鏃	12.88	1.00	0.76		12.00	床石No.10下部
29	鉄鏃	8.52	1.20	0.92		12.60	床石No.10下部
30	鉄鏃	4.90	0.58	0.58		3.00	床石No.10下部
31	鉄鏃	2.78	0.58	0.45		1.00	床石No.10下部
32	鉄鏃	3.70	0.46	0.47		1.30	床石No.10下部
33	鉄鏃	8.65	0.70	0.67		6.20	床石No.10下部
34	鉄鏃	2.46	0.64	0.58		1.80	床石No.10下部
35	鉄鏃	2.80	0.48	0.43		0.90	床石No.10下部
36	鉄鏃	1.60	0.36	0.47		0.40	床石No.10下部
37	鉄鏃	1.48	0.30	0.28		0.20	床石No.10下部
38	鉄鏃	10.05	1.06	0.78		10.00	床石No.11下部
39	鞍金具	2.00	0.60	0.40		0.60	床石No.12下部
40	鞍金具	3.90	1.30	0.80		3.50	床石No.13下部
41	鉄鏃	2.06	0.60	0.55		0.80	床石No.15下部
42	鞍金具	3.40	3.25	0.58		1.70	床石No.15下部
43	鞍金具	4.10	3.00	0.36		2.20	15と16間下部
44	鞍金具	4.55	0.95	0.54		3.80	覆土
45	鞍金具	2.08	1.70	0.20		0.30	覆土
46	鞍金具	1.55	0.95	0.18		0.20	覆土
47	鞍金具	1.86	0.54	0.48			覆土
48	杏葉	3.88	3.06	0.44		5.90	覆土
49	土師器・坩形土器	口径・10.3	高さ・15.4	丸底			16と22間下部
50	須恵器・高坏形器台	－	(2.3)	－			床石No.10下部
51	土師器・台付壺形土器	－	(1.8)	[15.8]			床石No.12下部
52	須恵器・高坏	－	(7.0)	[10.4]			床石No.10下部
53	雲母1	1.3	0.7	0.2		0.01	覆土
54	雲母2	0.7	0.65	0.2		0.01	覆土
55	雲母3	0.7	0.55	0.2		0.01	覆土
56	雲母4	0.7	0.7	0.2		0.01	覆土

V　ま　と　め

前　原　　豊（前橋市教育委員会副参事）

6 世紀、赤城山麓の標高 130mの台地上の 3 基の大型前方後円墳が次々と築造された。古墳は南から、前二子古墳、中二子古墳、後二子古墳とよばれる大室古墳群である。いちばん南の前二子古墳は、墳長 91mの大きさで 6 世紀初頭につくられた。真ん中の中二子古墳は、二重の周堀を持つ墳長 111mと大室古墳群で最大の規模を誇り、前二子古墳よりややおくれて 6 世紀の前半につくられた古墳である。後二子古墳は、6 世紀の中葉から後半にかけてつくられ、墳丘長 80mとやや小振りになる。ここでは大室古墳群の先駆けをなした前二子古墳について若干の検討を加えまとめとしたい。また、前二子古墳を考える場合に梅木遺跡と多田山古墳群 69 号竪穴遺構についてもあわせて検討していかなくてはならない。

梅木遺跡はほぼ正方形に堀がめぐる。堀の一辺が約 85mあり、面積は 7200 ㎡を測る。堀底には 6 世紀初頭に榛名山から噴出した火山灰が堆積していることから、5 世紀後半～6 世紀初頭の使用期間が考えられる。このことから、前二子古墳に葬られた人物との関係が考えられます。館の全貌は東側に流れる桂川による氾濫で主要な部分は流出しているため、詳細は不明であるが、前二子古墳の向かう西側に突出部があり、複数の柱穴が検出されたことから、西が門付くこと判明した。

前二子古墳のすぐ東方にある伊勢崎市多田山古墳群 69 号竪穴は 4 m弱の周囲に柱穴を有する長方形の特殊な遺構である。5 世紀末から 6 世紀初頭の土器類、鉤状鉄製品、盾隅金具などの遺物とともに棺床粘土の存在や使用期間が短期間であり、焼失を受けている点など深澤敦仁氏は前二子古墳の被葬者と関連が窺える「喪屋」の可能性を導きだしている。

1　石室開口－明治 11 年の発掘調査－

陵墓探索　前二子古墳と後二子古墳の石室は、1878 年（明治 11）3 月に開口した。当時、地元から県庁に提出された「室内出品書上簿」の一節によれば、村人がキツネやムジナを追いかけて穴を掘ったところ偶然石室にあたり、その内部から多くの遺品が発見されたと書かれている。しかし、実際は、明治 8 年に豊城入彦命の陵墓に認定された前橋市総社二子山古墳が、明治 9 年に指定解除されたことと連動している。当時の群馬県は、新たに豊城入彦命の陵墓の候補を探すため、なかば公的な発掘調査を前二子古墳と後二子古墳で実施したことが、外池昇氏によって指摘されている。なお、残りの一つである中二子古墳についても石室の探索を行ったが、発見にはいたらなかった。

これらの石室探査の裏には明治政府の天皇制の復活を目的とした陵墓決定にむけての全国調査があった。この陵墓の全国調査は、明治 4 年 2 月に太政官布告として全国に通知され、群馬県は 1874 年（明治 7）、教部省に上毛野君・下毛野君の始祖とされる豊城入彦命の陵墓として総社二子山古墳の申請をした。翌 75 年には教部省から豊城入彦命の墓として治定、管理者が置かれることとなったが、1876 年（明治 9）が地元のトラブルによって自然解消のやむなきにいたった。県は大きな打撃に受けたが、総社二子山古墳に代わってすぐに豊城入彦命の墓として注目を集めたのが前二子古墳であった。

前二子古墳の石室開口　群馬県は再度、豊城入彦命の墓の治定を受けるため、前二子古墳の石室調査を組織的・計画的に実行した。これらの経緯については、1878 年（明治 11）4 月 14 日、地元の東大室村の井上真弓が石上神宮大宮司の菅政友に宛てた書簡にくわしく書かれている。『古制徴証』をみると、前二子古墳の発掘に関しては入念な記録が残されている。古墳の平面図、石室内の遺品配置図、出土品略図があり寸法や注書きを施している。とくに前二子古墳の室内並出品位置之図、出土品は入念に描かれている。考古学史上においてもこの時代に詳細な記録図面はほとんど存在していない。現代の学問水準からいっても、当時の絵図の精度はきわめて高く、副葬品配置を知るうえで、欠かせない資料となっている。

失敗に終わった陵墓認定　このように前二子古墳調査の根底には、群馬県が政府からの陵墓治定を切望しており、県の命令で西大室村が動いた結果と受けとれよう。しかし、県が中心となり、入念な計画のもとに実行されたにもかかわらず、政府に提出した報告には、偶然の発見として処理されている。そこには古墳の乱掘を戒める政府の意向、治定されなかった場合の県の体面を守る姿勢が見え隠れしている。

ちなみに、この調査結果は 1878 年（明治 11）3 月に古墳が開けられてから 1 カ月のちの 4 月に楫取素彦県令名で宮内卿宛に「管内古陵墓之儀ニツキ」と、前二子古墳を豊城入彦命、中二子古墳を御諸別王墓として上申した。しかし、これに対して宮内省は 11 月に官員を派遣し調査したが、豊城入彦命とは治定されずに終わった。

5000 人を超える人びとの見学　陵墓指定はされなかったものの、出土品の展覧がおこなわれ、

当時、一大センセーションを巻きおこした。日本全国から 5179 名もの人びとが出土品の見学に訪れている。明治 11 年当時の発掘の記録が残される根岸孝一家文書の中の『古墳神器拝礼人名誌』には、1878 年 4 月から翌年 6 月までに前二子古墳の石室から発掘された古器物の見学した人びとの日付、住所、氏名、年齢が記録されている。当時、公共交通も未発達であったが遠く石川県、滋賀県、愛知県などからも見学に訪れている。

英国外交官アーネスト・サトウの調査　日本の近代考古学は幕末以降明治初期に、「殖産興業」などを目的として、欧米の先進技術や学問、制度を輸入するために雇用された欧米人によって開始された。そういった外国人なかで、イギリス政府から派遣された外交官という立場あったアーネスト・サトウ（Sir Ernest Mason Satow）も天皇制に興味を抱いていた。

このサトウが大室を訪れるのは、発掘から 2 年たった 1880 年（明治 13）3 月の始めである。その様子は、サトウの著した『日本旅行日記』のなかにくわしく記述されている。多忙な公使館の用務の合間をぬって、3 月 8 日には前二子古墳を訪れ、出土品のスケッチや測定して 1 日過ごした。サトウは大室で調査してから 1 カ月後の 4 月 13 日に日本アジア協会で調査した内容の講演をおこなった。そのときの講演内容は紀要の vol. 8 part. 3 に「上野地方の古墳群」（Ancient Sepulchral mounds in kaudzuke）として収録された。

2　史跡整備に伴う調査－平成 4 年と平成 14 年の発掘調査－

前二子古墳は、大室古墳群中で最古の古墳であり、6 世紀の初めに造られた。墳丘が上下 2 段に盛土によって造られた前方後円墳であり、墳丘に沿って周堀と外周溝といった二重堀と堤によって区画されていることも新たに判明した。古墳の形は、6 世紀中葉以降の前方部が大きく張り出す古墳とは異なり、前方部があまり大きくならない、ややずんぐりとした形である。堀を含めた古墳の大きさは、長さ 148m、幅 127m。面積は 15900 ㎡。主軸は東西に向く。墳丘は全長 94m、前方部の幅が 65m、後円部の径 94m、高さ 14m である。墳丘の造成にあたっては、下段墳丘が地山を一部削り出し、その上に僅かながら盛土が盛られる。また、上段墳丘は盛土で造成した後に葺石が葺かれていた。古墳を取り囲む 8m 幅の周堀は、馬蹄形であった。外堀にあたる部分は、幅約 3m の狭いものであった。周堀と外周溝に囲まれた幅 5m と広い中堤が存在する。

形象埴輪と大型の円筒埴輪　調査によって形象埴輪は、外堤から人物埴輪、1 段目の墳丘上部であるテラスから人物や石見型埴輪、墳頂部から蓋や大刀、家形埴輪などがみつかった。外堤、テラス、墳頂からみつかった円筒埴輪は、高さ 1m を超える突帯が 4 条ある径 50 ㎝を超す大型埴輪であった。円筒埴輪の設置場所は、外堤には内外に 2 列、テラス、墳頂部であり、総延長が 670m にもなった。ここに径 50ｃｍの埴輪を並べるには、およそ 1340 本の円筒埴輪が必要とされた。円筒埴輪にはしっかりした高い突帯を巡らし、ほかに古墳に比べ大型の良質な埴輪で構成されていた。円筒埴輪の製作技術にも古い技法であるハケメ調整を横方向に使う埴輪も一部認められたため、6 世紀初めの特徴を表している。

黄泉の国に通じる横穴式石室　さて、前二子古墳の石室の開口位置を観察すると、一見、唐突な位置にあいている。石室の入口は、一般にテラス面などに開口するのが普通であるが、前二子古墳の場合は下段の墳丘部に開口している。

前二子古墳の石室の設置は地形を利用し、大規模な造成はおこなっておらず、わずかに地山を削り、固めた程度である。反対に、後述する後二子古墳は地面を深く掘ってつくられている。

石室の入口にはテラス状の祭壇がみつかった。幅 70ｃｍ、長さ 9・5m のテラス状で、祭壇には 4 本の柱が 3m 間隔で立てられたものと想定される。柱穴のサイズが直径 40～60ｃｍ、深さ 50～80ｃｍであることから、やや大きめの柱が立てられ、それぞれ色彩をもつ旗が葬儀をよりいっそうあでやかなものにしたものと想像される。

初期横穴式石室　羨道は入口から傾斜をもって上がっているが、羨道の奥や玄室は水平に設置されている。全長 14m の長く狭い両袖型横穴式石室は初期の横穴式石室の特色である。群馬県内では、6 世紀の初頭に竪穴式石室の埋葬法から横穴式石室の埋葬法にかわる。前二子古墳の石室も群馬県を代表する初期の横穴式石室である。

石材は壁や天井には、在地の輝石安山岩を用いている。玄室全面と羨道の一部の床面には、凝灰岩製の切石を丁寧に加工し敷いてあった。

石室の入口に立つと羨門があり、さらに奥の玄室には玄門がつく。そして玄門には凝灰岩で製作された幅 1m、長さ 1・5m、厚さ 20ｃｍの扉石が設置される。

玄門の天井側には、まぐさ石、床面は梱石によって仕切られる。玄室にはＬ字状切組を用いた仕切り石が存在する。

凝灰岩製の白い敷石　床面には、全国的にも例のない凝灰岩製の丁寧に鑿で加工された敷石が玄室全面と羨道の半分に敷かれていた。羨道の敷石は 10 枚しか残っていなかったものの、発掘調査で石室前面とテラス面に持ち出されていたものがあったため、羨道にも、全面的に敷かれていた可能性が強い。敷石はほぼ水平に設置され、玄室内には、L 字状切組を用いた仕切り石が存在す

る。このように前二子古墳の石室は、入口の両側に羨門、羨道と玄室を分ける玄門という2つの門石、さらに玄室を閉鎖する扉石、床全面の敷石等など備えた個性的な石室である。現在のところ、敷石や扉石などといったものは6世紀前半の関東地方の古墳には類例は探すことができない。かろうじて、前二子古墳の石室と形状が似る栃木県宇都宮市の権現山古墳で扉石が確認されている。敷石についてもずっと後の時期の古墳にはみられるものである。

布幕でおおわれた石室　もうひとつ前二子古墳の中で注意をしておくべき遺物が存在する。それは通常「鉤状鉄製品」とよばれている鉄製品である。明治の調査では約 20 点の鉤状鉄製品が出土している。今回の発掘調査では、石室に差し込んだ状態で西壁と奥壁2カ所から鉤状鉄製品がみつかった。その後、さらに 2009 年 2 月に再調査をおこなったところ、西壁から新たに3カ所、東壁から1カ所が発見された。これで鉤状鉄製品は、6 カ所から発見された。このことから、石室や棺を布幕で覆う際に鉤状鉄製品を使用したものと考えられる。国内では、鉤状鉄製品は奈良県藤ノ木古墳、群馬県県観音山古墳など6世紀後半の古墳でみつかっているため、前二子古墳の例は国内でもっとも古い例といえる。

また、韓国においては、百済の武寧王陵や加耶の松鶴洞1号墳、全羅南道の長鼓峰古墳からみつかっている。このうち、鉤状鉄製品がみつかっている松鶴洞1号墳や長鼓峰古墳については、前二子古墳の横穴式石室と非常に形の類似した石室であるという興味深い意見が、近年、宮崎大学の柳沢一男氏から提出されている。

まず、慶尚南道に存在する松鶴洞1号墳は韓国の南端、加耶地域の6世紀前葉の古墳である。年代的にも前二子古墳とほぼ同じである。この古墳には、たくさんの埋葬の施設があり、そのなかで1つ注目されるのが、墳丘の上のほうに 1B-1 号と呼ばれる横穴式石室である。長方形の玄室に、細長い羨道の平面の形態をもち、断面でも玄室の天井の部分と羨道の天井の部分の高さが一致し、構造的にも前二子古墳の石室と一致している。また、松鶴洞1号墳の石室では、壁面にクギが打ち込まれていた。

さらに松鶴洞古墳のある西側の地域に長鼓峰古墳がある。この長鼓峰古墳は前方後円墳で、長方形の玄室に細長い羨道がつき、松鶴洞1号墳や前二子古墳の石室とその構造がよく似ている。年代は5世紀の後葉から6世紀の前葉と前二子古墳と近接する時期である。前二子古墳が造営された6 世紀の初頭という時期、同じように韓国にもそれと似たような石室をもつものがあるということは注目すべきである。

3　朝鮮半島とつながる副葬品

石見型埴輪　前二子古墳から出土した埴輪の一つに、最近、石見型埴輪とよばれるようになった形象埴輪がある。それは、西日本でさかんにつくられ、東日本ではほとんどみられないものである。石見型埴輪は、1931 年（昭和6）に奈良県石見遺跡の調査で最初に出土したことから、「石見型盾形埴輪」とよばれていた。しかし、近年の発掘調査で埴輪のほか、木製品が多数出土して資料数がふえたことによって、盾形埴輪というより権威を象徴する儀仗や玉杖をあらわしたという説が有力になっている。現在、和田一之輔氏により「石見型埴輪」とよばれるようになった。和田の研究によれば、石見型埴輪については、5 世紀後半から6世紀後半まで存在し、分布の拡がりは畿内が濃厚であり、西は瀬戸内海北岸である岡山県まで、東は静岡県、飛んで群馬県前二子古墳までであるとされている。

前二子古墳から出土して復元された埴輪は、大阪府羽曳野市軽里4号墳の埴輪と共通する。2つの個体とも比較的よく似ている。それは、「抉り」、「切り欠き」、「粘土の貼付」の仕方である。しかし、「切り欠き」箇所や粘土の貼付箇所が異なっている点や「粘土の貼り付け」が突帯を貼り付けたままにしているなど、前二子古墳には変容が認められる。また、形状や全体のプロポーションも直線的になっているなど、伝播の過程で生じた変容がみとめられる。

関西では石見型埴輪を用いた古墳は、100mを超すような大型古墳からは出土していない。逆に、60m以下の中小型前方後円墳に多い。とくに定型期とされる6世紀前半には大王や盟主的な首長にはとり入れられることが少ない。主に新たに台頭してきたとされる中小首長層に採用された埴輪であった。石見型埴輪は中心地帯である畿内地域のほかとして瀬戸内海北岸に分布が集中し、埴輪と同様な形を持つ石見型石製品は有明海沿岸域に限って認められる。これら2つの地域は5世紀後半から6世紀前半にかけて対韓半島交渉において重要な役割を果たしたことが多くの研究者から指摘されている。このように、石見型埴輪は韓半島交渉にかかわっていた中小首長層の相互のつながりを示す器物の一つとしてとらえることができる。そして韓半島の月桂洞1号墳から石見型木製品が出土しているのである。

いずれにしても、関西から遠く離れた東国での石見型埴輪の出土古墳は、近年になって、富岡市一ノ宮4号墳や安中市琴平山古墳、太田市東山3号墳、小山市飯塚 44 号墳など4例を加えることとなり、ますます重要性を帯びてきている。関西地方での石見型埴輪のあり方は、中小規模の古墳の首長層の絆として古墳に樹立されたことが想定されている。しかし、ここ前二子古墳での石見

型埴輪のあり方は、韓半島という国際情勢をキャッチする革新性を示すものであった。

小像を付けた筒形器台　装飾付の筒形器台であり、かつて「四神飾付土器」とよばれた「小像付筒形器台」である。これは高さ60ｃｍほどであり、円錐型の台の直径が33ｃｍ、土器を載せる台、受け部の直径が20ｃｍという大きさである。小像は、円錐形の基部と筒形の円柱部の付け根にあたる段に小像が4個付けられていたが、1個は剥落して残っていない。残された像は、亀、鳥、そして蛇と蛙の組み合わせである。

この装飾のついた筒形器台そのものの数が国内でも少ないため、あまり類例がないが、福岡市の羽根戸古墳のものに小像が付けられている。羽根戸古墳の筒形器台も前二子古墳と同様に円錐部の下の台部分があって、そこから円柱部があり、壺を載せる受け部がある。そして、円錐部と円柱部の境に小像が付けられている。人物の像、犬が境付近につき、柱の部分に亀が螺旋状によじ登るようについている。この筒形器台は5世紀後半とされるものであり、渡来的な要素、韓国的な要素が濃厚な土器として存在している。

韓国にはこういった小像を付けた土器が三国時代、新羅の都のあった慶州市を中心に多数発見されている。とくに著名なものが韓国の国宝に指定されている鶏林路 30 号墳から出土した壺である。壺の首の部分には亀、鳥、そして蛙を追う蛇、琴を弾く像、性行為の人物像などが表現されている。実用品ではなく埋葬に使用された土器と考えられている。

さらに、釜山にある5世紀前半の福泉洞31・32号墳から出土した装飾付の筒形器台があるが、これも前二子古墳の筒形器台と同様に円柱部と円錐部の段に馬、猪、犬が付けられている。また、前二子古墳とほぼ同時期である 6 世紀前半の新羅、月城路の古墳から出土した蓋には、つまみのまわりに、蛙をくわえた蛇が描かれている。蛙をくわえる蛇ということで前二子古墳の蛙を追う蛇に共通するモチーフといえ、年代的にもほぼ同時代といえよう。

前二子古墳の筒形器台にみられる小像は、福岡市羽根戸古墳例などと共通して半島の系譜が考えられる。とくに土器に付ける小像は、三国時代である 5～6 世紀の新羅や加耶地域の一部に限定された分布がみられることから、三国の新羅にその系譜が求められる。

その他に若狭地方に集中して分布をみせる双葉剣菱形杏葉が4枚存在する。これも松鶴洞1号墳 1-1B 石室でも出土している。2個の金製耳飾は垂飾部分を欠落しているが新羅や加耶製の耳飾の可能性が高い。

平成 14 年度の石室床面敷き直しの調査の出土品の中に雲母片が4点新たに発見された。県内では井出二子山古墳から心葉形の垂飾として出土している。門田誠一氏によれば日本で 10 例、韓国で 12 例が集成されている。日本例では井出二子山古墳例と奈良市阪原阪戸祭祀遺跡を除けば 6 世紀代の古墳である。また、韓国朝鮮半島例は新羅の王陵級の古墳ですべて6世紀代といわれている。新羅の古墳では井出二子山古墳と同様に飾りとして使用されており、他の国内古墳の用途は葬送儀礼に伴うものとされている。おそらく前二子古墳の事例も葬送儀礼に伴うものと考えられる。

4　上野地域と韓半島とのつながり

このように前二子古墳には特殊な石室、鉤状鉄製品、石見型埴輪、筒形器台などいくつかの半島とのキーワードでつながりが認められた。前二子古墳を含む上野地域の中央部の古墳からは、朝鮮半島の百済や新羅の系譜をひいたさまざまな出土品が多数発見されている。高崎市谷ツ古墳の飾履、高崎市剣崎天神山古墳の金製耳飾、前橋市金冠塚古墳の金銅製冠、高崎市観音山古墳では新羅武寧王陵との同型の水瓶など枚挙に暇がない。5世紀には、ヤマトの大王が中国の宋に使者を送り、称号をもらうなど外交を積極的にくり広げると、東アジアの人たちも倭国に渡って来て、知識者・技術者として重用された。渡来人によって、日本に様々な先進技術や文化が持ち込まれたのである。これらの人々に関係する考古資料は近畿に多いが、東日本では上野地域にも多い。わが国最古の歴史書である『日本書記』には、群馬県との関係が考えられる豪族・上毛野氏が将軍として半島へ渡ったり、知識人を呼び寄せる使者を勤めたとする伝承記事がある。

さらに 6 世紀になると朝鮮半島 は高句麗、百済、新羅の三国と加耶地域の政治同盟の間で交流や争いが複雑に絡み合って推移していた激動の時期となる。その激動の渦のなかに倭国もしっかりと組み込まれており、朝鮮半島の情勢に直接的な影響を受けていたとされ、朝鮮半島南部地域と倭国の間には活発な交流があったことが指摘されている。

特に6世紀後半には、倭国と友好的関係にあったとされる百済、加耶の地域が、高句麗や新羅の攻め込まれる状態となった。そこで、倭国の利害関係も有利に導くため、軍事目的も含め、様々な支援がなされ、多くの人々が半島に渡ったことが知られている。6 世紀の上野地域は、関東地方の中でも最も活発に古墳造営を展開し、豪華で、豊富な副葬品を誇っていた。この時期、関東地方はヤマト政権の軍事的基礎を担うようになってきたとされ、ヤマト政権が朝鮮半島へ軍を派遣するとき、関東地方の有力豪族がこれに積極的に加わった事が考えられ、その功績として古墳造営の背後に特別な関係がみえる。

【参考文献】

群馬県 1978「前二子古墳」群馬県史資料編第 3 巻
東京国立博物館 1992『伽耶文化展』
前橋市教育委員会 1993『前二子古墳』
愛知県立陶磁器資料館 1995『装飾須恵器展』
外池昇 1997『幕末明治期の陵墓』吉川弘文館
前橋市教育委員会 1993「前二子古墳」
国立金海博物館 1999『加耶の器台』通川文化社
小山市教育委員会 1999･2001『飯塚古墳群Ⅲ』遺構・遺物編
門田誠一 2000「湯山古墳出土雲母片と関連資料の吟味」『古代学研究』150 号古代学研究会
横浜開口資料館 2001『図説アーネスト・サトウ』有隣堂
国立慶州博物館 2001『新羅黄金』
柳澤一男 2002「日本における横穴式石室の受容を一側面～長鼓峯類型石室をめぐって～」清渓史学 16・17 合輯
上中町教育委員会 2005『大谷古墳』
前橋市教育委員会 2005『大室古墳群－史跡前二子古墳・中二子古墳・後二子古墳ならびに小古墳保存整備報告書－』
東亜大学校博物館 2005『固城松鶴洞古墳群』
和田一之輔 2006「石見型埴輪の分布」考古学研究 60-3
深澤敦仁 2007「「喪屋」の可能性をもつ竪穴」考古学に学ぶ　Ⅲ　同志社大学考古学シリーズ刊行会
新山保和 2008「前二子古墳の石見型埴輪」『群馬県内の器財埴輪Ⅱ』群馬県古墳時代研究会
前原　豊 2009『東国大豪族の威勢・大室古墳群』新泉社
高崎市教育委員会 2009『井出二子山古墳』
大阪府立近つ飛鳥博物館 2010『継体大王の時代－百舌鳥・古市古墳群の終焉と新時代の幕開け－』
右島和夫 2011「横穴式石室の鉤状鉄製品」
　古文化談叢第 65 集
伊藤雅文 2013「馬具」『若狭と越の古墳時代』有山閣

七　群馬県二児山古墳につき井上真弓より菅政友に送った書簡（『古制徴証』）

井上真弓ヨリ菅政友ニ贈レル書状

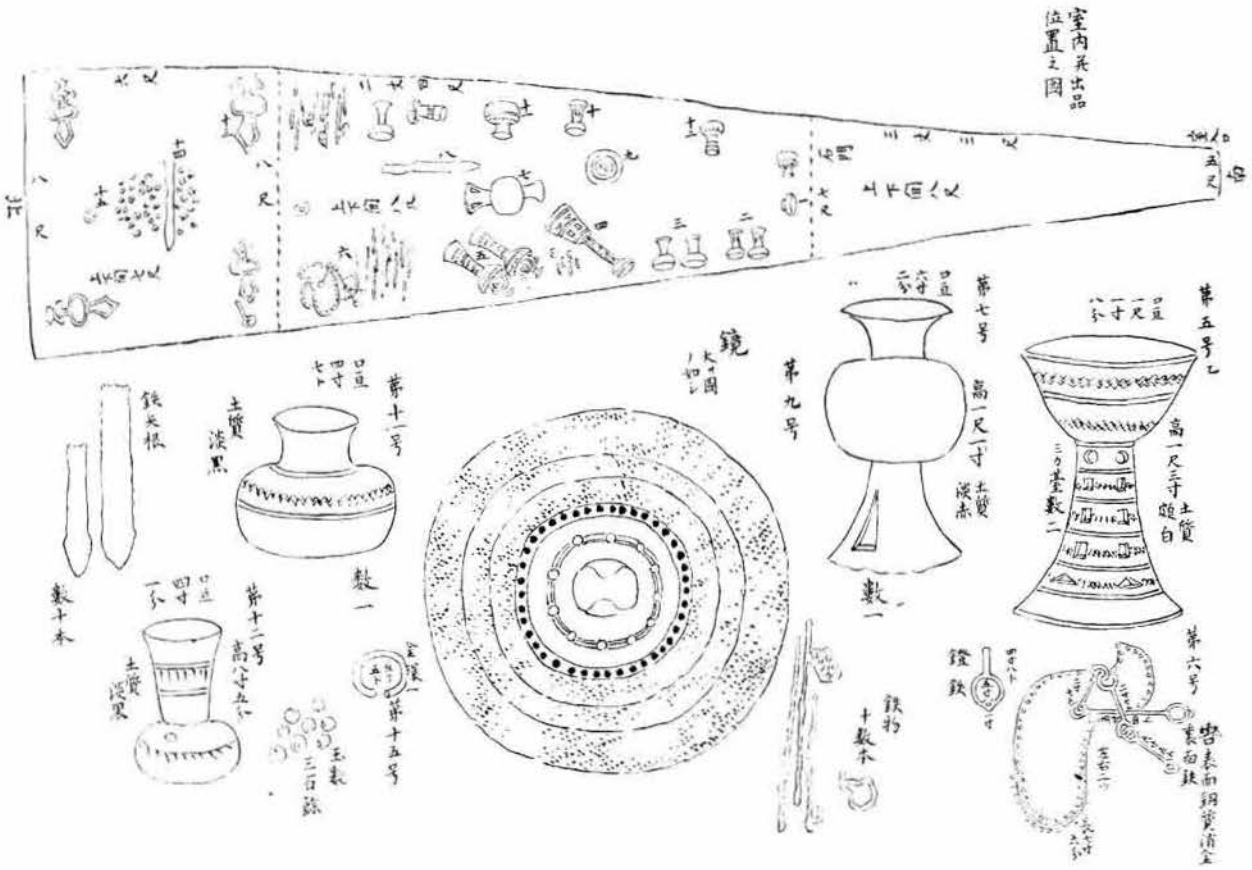
弊地古来より二児山と称する山田あり、皆両並山なり。故に二児山といふ歟。山の腰に段あり。立物の人形を其段の処に垣の如く仕廻したるものと見えたり。今者土きは（土ぎわ）より上ハ打毀りて捨たり。是古の陵墓なる事著明也。今を去る七八年前真弓前橋藩の内命を受て、別紙甲二児山を開発せんと人足数人を打連れ四五日相かゝりしも室口を見出す能ハず、其内事故ありて捨置ぬ。

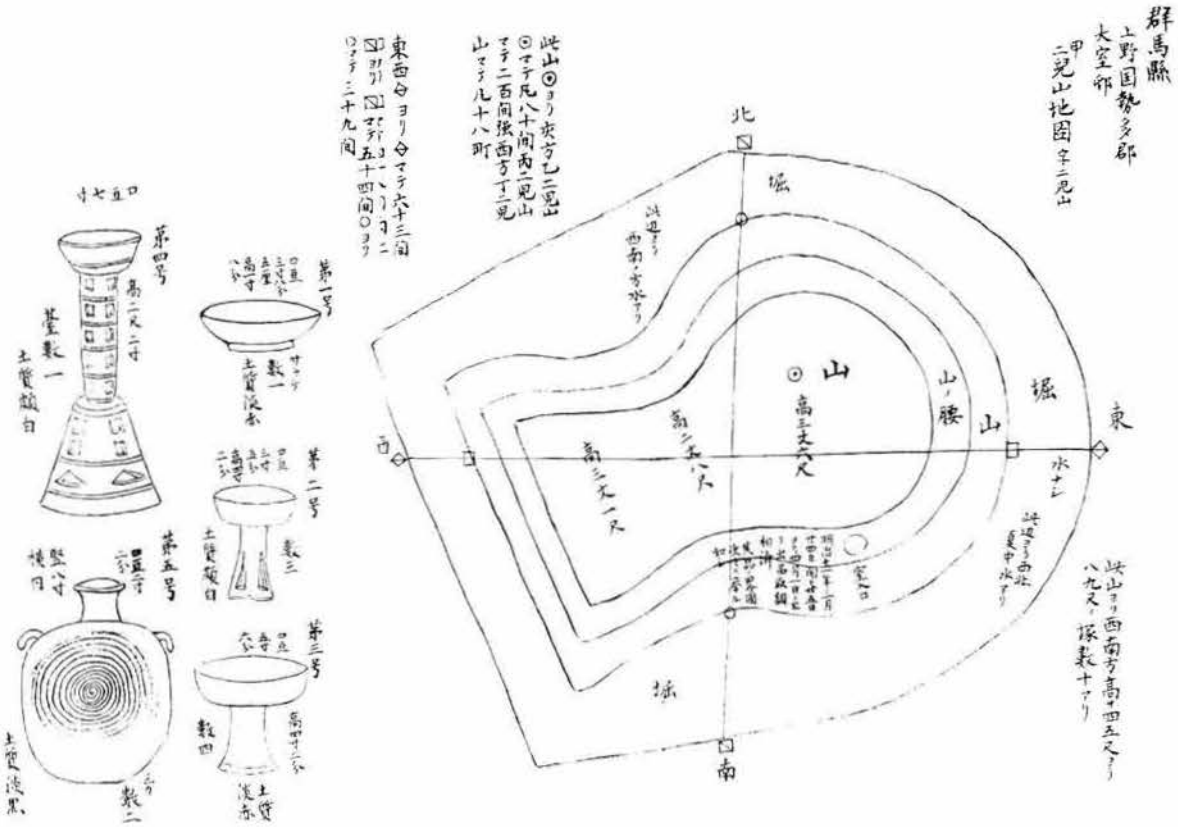
然るに去ル二月下旬真弓帰国せし処、彼ノ二児山に参集する者毎日数十人。皆いふ豊城入彦命御陵なりと。是より先県吏出張の時此山を見て是ハ管内第一等の墓陵なりといひしとて故に如此いひそめしか。村吏県の許可を得て二月下旬彼山を開発せむとす、時に参集するもの又増して毎日数百人。三月廿一日より四月一日までに三山を開発す。室内皆自然の大石を用ゆ。甲二児山室内中つより奥ハ室底皆白石。其間参集するもの毎日数百人、これ実に豊城入彦命の御陵ならむも知るへからず、然りといふとも惜連宝村々ハ考証となるへきもの更にある事なし、室の大なると土器の奇なるを以て其大略の図面を書写し御送り申上候間何卒御考証被成下度奉存候

四月十四日

群馬県上野国勢多郡西大室邨百十七番地
井上真弓

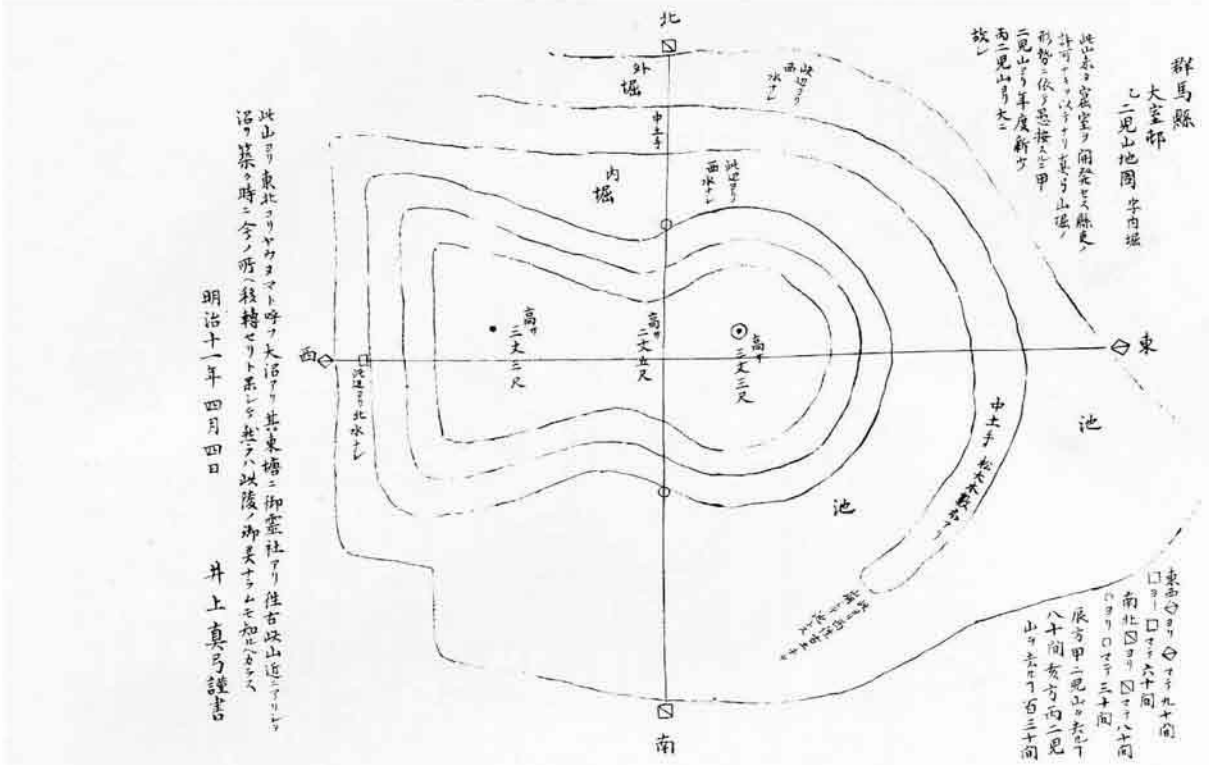
斎藤　忠編著1979『日本考古学史資料集成２　明治時代１』斎藤考古学研究所より転載

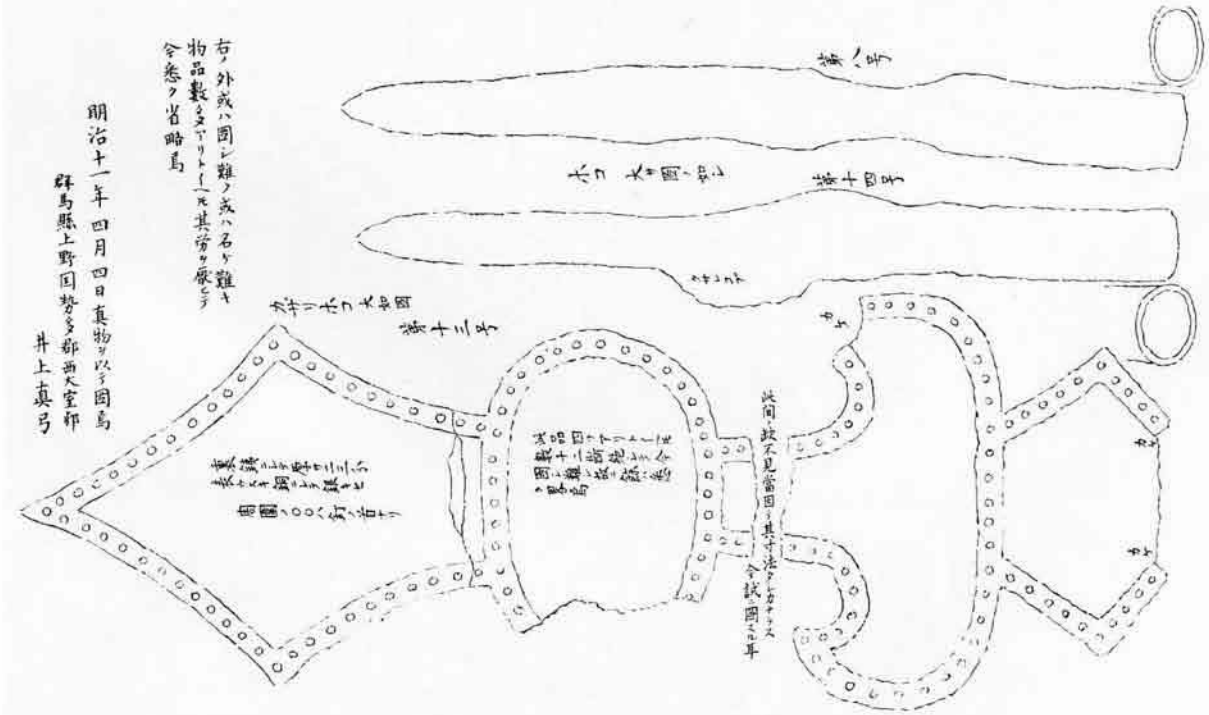




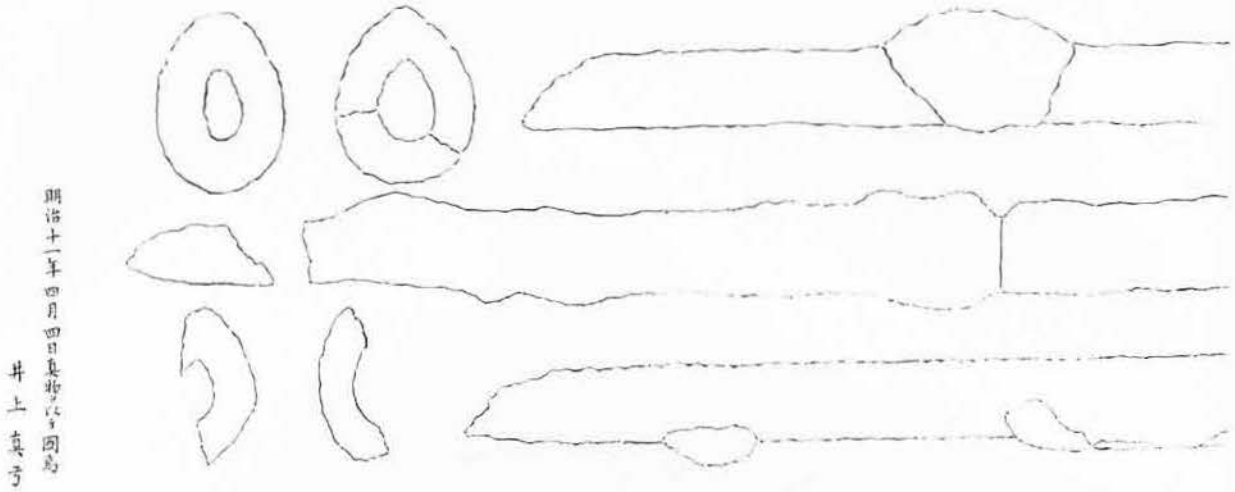
斎藤　忠編著1979『日本考古学史資料集成２　明治時代１』斎藤考古学研究所より転載

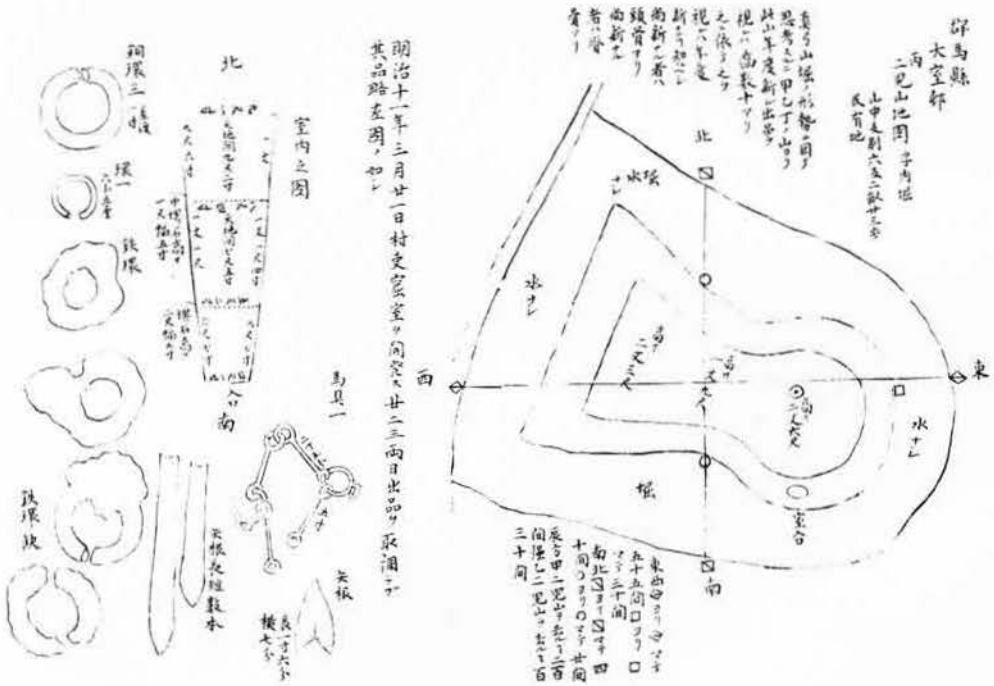
六　群馬県二児山古墳及び出土品図（『古制徴証』）





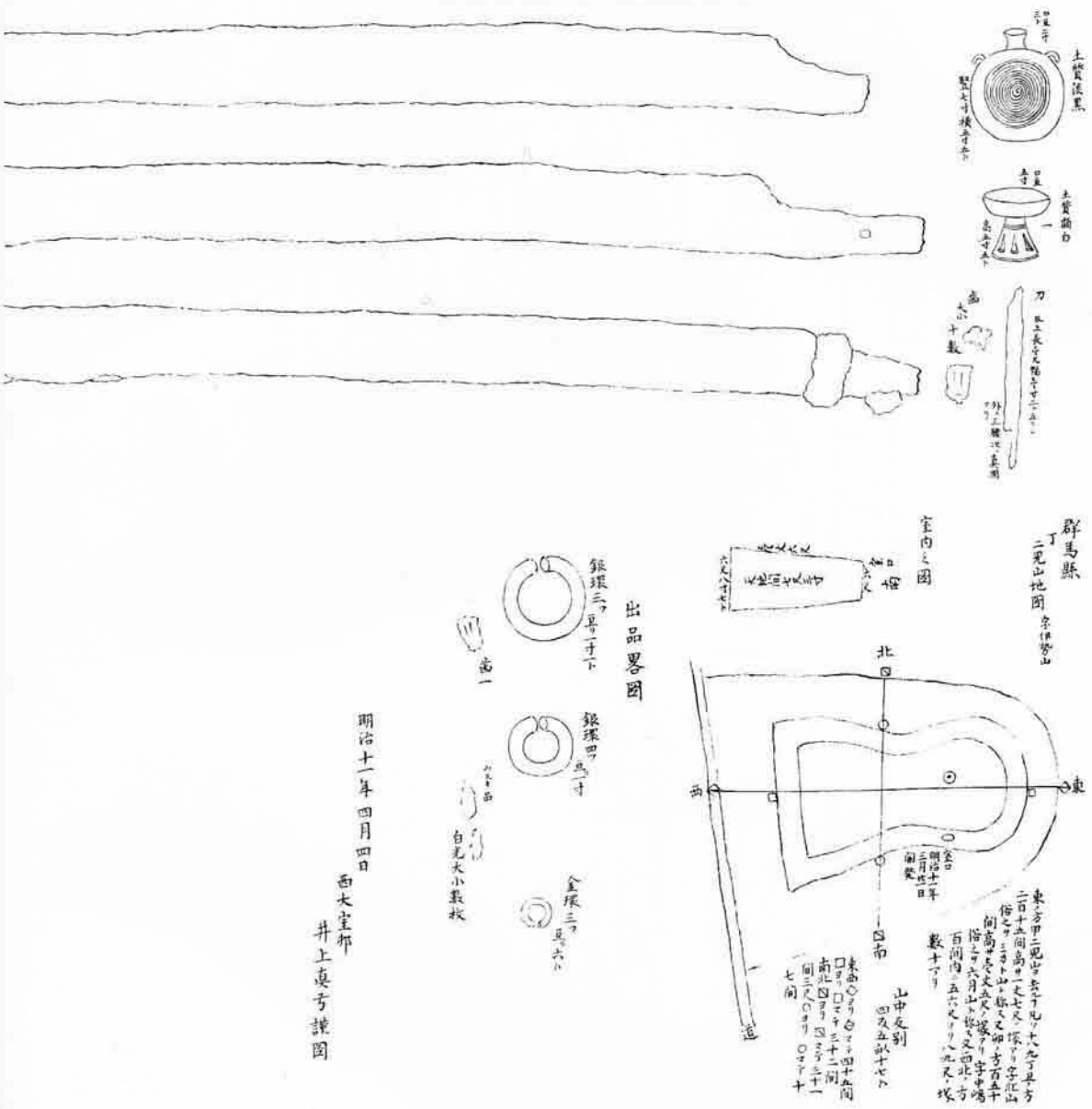
斎藤　忠編著1979『日本考古学史資料集成２　明治時代１』斎藤考古学研究所より転載





斎藤　忠編著1979『日本考古学史資料集成２　明治時代１』斎藤考古学研究所より転載

六　群馬県二児山古墳及び出土品図（『古制徴証』）



荒砥村（現在前橋市）には、前二子山・中二子山・後二子山の三基の前方後円墳があるが、前二子山古墳がこれに該当する。現在、中二子山古墳・後二子山古墳とともに、国の史跡に指定されている。この古墳は、明治十一年（一八七八）三月、村民によって発掘された。このことに関しては『群馬県史蹟名勝天然紀念物』一（昭和四年）に紹介し、「県庁文書」のあることをも述べているが、ここには、『古制徴証』の中の関係資料をなまのまま紹介した。なお、『群馬県史蹟名勝天然紀念物』一には「本県古文書に依れば、本古墳の遺物は、後二子古墳の遺物とともに、明治十一年明治天皇北陸東海御巡幸の際天覧に供せし事があり。其際に於ける岩倉右大臣の口達に基き、同十二年二月、其一部を宮内省へ提出せしことあるも、同年三月又返戻せられたり」とあり、このような経過のあったことがわかる。なお、この古墳に関係した文献として、『上毛及上毛人』七・一八二、『中央史壇』一三―九がある。

斎藤　忠編著1979『日本考古学史資料集成２　明治時代１』斎藤考古学研究所より転載

斎藤　忠編著1979『日本考古学史資料集成２　明治時代１』斎藤考古学研究所より転載

上ヶ大石ヲ以テ墓トナセル墓門アラハレタリ隧道ノ長ニ丈七尺餘アリトソコレモ墓門ノアラハレシモ金環大小六箇発掘各一口古鏡小田柄衝鏡鈴ナトアマタ出シトソ

東大室村ノ領内ニテカノ西大室村ノ南北相對セル古墳ノ中間ニ二児山トヨフ古墳アリコレモ前方後圓ニテ西面ナリ四周ノ隍ウシロノ方ハ二重ニアリ高三丈五尺四圓百五十文許アリ隍外ノ東北ノ隅ニ御靈社アリシカ近年他所ニ遷奉シ故ニ其旧ノ池ノアヲヲ御靈池トヨフトソ彼シ御靈ノ祭神詳ナラストソ

按スルニ件ノ古墳モトヨリ誰墓トヨフヲ知ラス或説ニ村名ノ大室ハ御諸別王ノ御名ヲ訛轉セテ大御諸ノ訛セルハシトヨシリ其ハ實ニ由縁アル考ナレト大御諸ノ訛セルハ猶イカヽナリ御諸ヲカンモロト訛称セルカヤウテ村名ニナレルナル（シ然）ハ三箇ナラヘル中央ノ大墳ヲハテ御諸別王ノ御墓ニテ北南ナル二塚ハ其御一類ノ御墓ナラン群馬縣上毛ニ中央ナルハ或説ノ如ク御諸別王ノ御墓南方ナルハ豊城入彦命ノ御墓ナルヿ疑ナシトヨフ此其地勢ヲ熟視スルニ北方ナルハ少ク高敞ナル地ニ造リ南方ナルハ一層卑キ地ニ造リ中央ナルハ全ク平坦ノ地ニ造レルハ其正位ヲ領スルニ欲タリ加之其三墓ノ状北ナルモ南ナルモ皆中央ノ二児山ニ陪侍セルカ如クナルモ南塚ノ豊城入彦命ノ御墓ナラサル一證ナリマタ其隧道ハ小石ヲ以テ積累スル基蹟ナル状シタルモコノ皇子ノ御墓ナラサル證トスルニ足レリ抑豊城入彦命ノ御事ハ日本書紀崇神天皇四十八年正月條ニ天皇勅豊城命活目尊曰汝等二子慈愛共齊不知何為嗣各宜夢祭以夢占之二皇子於是被命浄沐而祈寝各得夢也時兄豊城命以夢辞奏于天皇曰自登御諸山向東而八廻弄槍八廻擊刀弟活目尊以夢辞奏言自登御諸山云嶺繩結四方逐猪累累焉則天皇相夢謂二子曰兄則一片向東當治東国弟妻悲脳四方是徒扶位乎戊申朔丙寅有立活目尊為皇太子以豊城命令治東国

上毛野君下毛野君之始祖也ト見エタルノミニテ其実詳ヲ知ルヿ由ナシト同書景行天皇五十五年二月條ニ以彦狭島王拜東山道十五国都督是豊城入彦命之孫也然到春日穴咋邑臥病而薨之是時東国百姓悲其王不至竊盜王尸葬於上野国上野下野ハモトヨリ毛野国トシテ一国ナリシヲ仁徳天皇ノ御世ニ二ツ国ニワカタレシ後ノ称ハ此書ニ上野国ト記セルハ後ノ称ヲ以テ書セルナリト見エタリ五十六年八月條ニ詔御諸別王曰汝父彦狭島王不得向任所而早薨故汝專領東国是以御諸別王承天皇命且欲成父業剋行治之早得善政特徴表首帥ムムム挙叩頭而哀之頃首愛羅盡獻其地国以免除昔而誅不服是以東久之無事焉由是其子孫於今有東国ト見エタルナトニ據考フルニ御墓ハ上野国ニアルヿ推察スルトモノカラ猶事征国造本紀ノ下毛野国造條ニハ難波高津朝御世元毛野国分為上下ト見エタレハ上野下野ハソノカミ一国ナリシヿ分明ナリ然レハ二墓ニアル所ノ古墳及ビ土人ノ口碑上地ノアサナトモヲ普ク按セリ（シ）後ナラテハ此御墓ノ所在ハ論スヘキヤウナカル可シ

以上實撿註記如件

明治十一年十一月二十日　六等属大澤清臣○

十等属大久保忠保○

斎藤　忠編著1979『日本考古学史資料集成２　明治時代１』斎藤考古学研究所より転載

天川村ニモマタ前方後圓ニツクレル西北面ノ古墳アリ字ヲ二兒山トヨフ高三丈四圓百十丈許アリ後圓ノ後ノタタニ庚申ト刻セル研石アマタ建タリ環隍ハ埋メナラシテ畑トナセリ

按スルニ件ノ三墓ヒレナルコトヲ知ラス但シ天川村ノ二兒山ハ豊城入彦命ノ御墓ナリトス或説モ聞エレト例ノ想像ナレハ信スルニ足ラス

緑野郡白石村ニ古墳大小百五十有餘アリ其最大ナルモノ字ヲ二兒山ト呼ヘリ高二丈三尺四圓百丈許ニ前方後圓ニ似リ水工目ル沙礫ヲ布キ土中ニ立並ル土輪モアラハレタリ當年四月ニ墓門ヲ発キシニ土中ヨリ生偶人ノ破損セル三頭マタ石槨内ヨリ小鏡二面鈦数本金環十餘鏃及ヒ祭器類ノ碎ケタル又歯等モ出シトソ石槨ノ左右ハ一圓許ナル石ヲ以テ積累ネ上ハ自然ノ大石数枚ヲ以テ蓋トナセリ環隍ノ址モカツク存セリ

落合村宗永寺ノ東北隅ニモ前方後圓ニ築上ル北面ノ古墳アリ高二丈五尺四圓百二十丈許ニシテ周囲ニ圧アリ後圓ノ頂上ノ後ノカタニ釋迦文殊普賢ノ石像ヲ安シ其下段ニ羅漢ノ石像十餘軀ノ置キ前方ノカタノ頂上ニ小祠ヲ南面ニ建タリ古墳ノ狀イサヽカ壊タレタレト墓門ハアハケシニ見エサルニ名蹟志ニ五六十年前石櫃ヲ堀出シ中ヨリ太刀鏡曲玉ナト出テ寺ニ蔵セリトイヘル如何ナルコトカ又ヨノ近ト邊ニ石棺ノ暴露セル古墳モアレハ彼處ヨリ出シ品ノ此處ノコトニ移シシナルヘシ或家ヲ七輿塚トモマタ羊大夫ノ家トモイヘリ

按スルニ羊大夫ノ一區ノ俗説アリ然レトモノ墳墓ニ関セサルコト明カナレハ皆キテ贅セス但シ白石村落合村ナトニ猿田ト呼ヘル字イトタクカハ皆キテ落合村ヨリ白石村ニカヨフ小徑内ニモ佐太町トヨヘル字アリ此等ニ據ルニ猿田モ佐太ト訓スヘケレハ姓氏録ニ池田朝臣上毛野朝臣同祖豊城入彦命十世孫佐太公之後也マタ上毛野坂本朝臣上毛野同祖豊城入彦命十世孫佐太公之後也トミエタルニ由アリカシハ白石村ナル二兒山ハ佐太公ノ墓ナルヿ必セリト或説ニ云ハハヲトニナルヿニテ落合村ナル羊大夫ノ墓トイヘルモマタ其一類ノ墓ナルヘシ

勢多郡今井村ニモ東南ニ向ヘル前方後圓ノ古墳アリ三モ字ヲ二兒山トヨヘリ高二丈四圓百丈許アリ後圓ノ頂上ニ北面ナル小堂アリ天満宮ヲ奉齋セリトソモトハ観音像ヲ置ケリシヲ維新後今ノ如ク改メシナリトソ四周ニ隍ノ址タヽニ存シ土輪モアラハレ出タリ

下大屋村ニモ大黒塚トヨフ古墳アリ南方羊ハ崩レテ畑ニナシメレト前方後圓ニツクレル狀カツヽ存セリ高一丈周圍詳ナラスマタ隍ノ址モ詳ナラス文政年中ニ崩シ、ケ蓋天小二口土偶人一軀出シトソ

按スルニ或説ニ字ノ大黒ハ大國ニテスナハチ續日本紀和銅七年ノ條ニ十月丁卯役五位下大宅朝臣大國為上野守ト見エタル大国ノ住地ニテ物故セシテ葬リシ塚ナルヘシトヨヘリ大国ノ家ハコトニ然ルニヤト思ハルヽモノカラ其古墳ノ狀及ヒ土偶人ノ出シナトヲ考ルニ和銅年間ノ墓制ニアラス孝徳天皇ノ朝ニ墓制改定ノ令アリシ以前ノモノナルヿサラニ疑ナキモノヽヤ

西大室村ノ西ノ宮林中ニ古墳アリ字ヲ二兒山トヨヘリ西北ニ向ヘル前方後圓ノ塚ニテ高一丈餘四圓心丈許アリ後圓ノ西面ニ割石ニテ積累ネタル墓門アラハレ出タリマタ村落ノ東南ノ方ニモ二兒山トヨヘル古墳南北ニナラヒテ三個アリ南ナル古墳モ前方後圓ニシテ西方ニ向ヘリ高三丈五尺四圓百十丈許アリ四邊ニ環隍ノ址存シ後圓ノタタノ南面ノ中腹ニ割石ノ小ナルヲ以テ積累ネ大石ヲ蓋トセル墓門アラハレタリ隧道ノ長六丈三尺アリトソ當年四月ニ墓門ノアラハレシヨリ隧道ノ中央ニ笠切等ノ祭器大小十七其奥ノ方ノ四隅ニ儀仗ノ粉金具各一枚中央ニ小鏡一面金環一箇粉及二本瑠璃色ノ小玉三百顆イテシトソマタ北ノハシナル古墳モ前方後圓ニシテ西面ナリ高二丈六尺四圓百丈許アリ四辺ニ環隍ノ址カツヽ存シ後圓ノ南方ノ中腹ニ割石ノ小ナルヲ以テ積

斎藤　忠編著1979『日本考古学史資料集成２　明治時代１』斎藤考古学研究所より転載

宗門者諸陵掛検証写

明治十一年十一月廿五日

卿○　六等属　大澤清臣○

輔○　十等属　大久保忠保○

書記官○

掛書記官㊞　属○　○○

先般群馬県下古墳検査被命候ニ付即巡視仕候ニ付別紙之通

御参考迄ニ御供覧申候也

別紙

群馬縣下古墳巡回記

（楹邨ノ記中ニ曰ク大室両村ノ外ハ環形石棺土器紙玉等ノ時代ヲ想ヒ出ル時遺蹟ヲ）

上野国群馬郡植野村ニ前ノタタ方ニ後ノ方圓ク西面ニ築上タル古墳アリ字ヲ二見山トヨフハ其形状ノ三並ニ見ユルヨリ俗称ナリ高二丈余四圍百丈許アリ環隍ノ址ハ存セサレ共北方ノ畑地ノアサナク隍ノ内トヨフハ其餘波ナルヘシ全面ニ被礫散在シ南方ハ破壊タレテ土輪アマタ露レイテ且前方ノ南方ニモ後円ノ南方ニモ自然石ニテツクレル墓門アラハレタリ後円ノカタナルヲ東口トイヒ前方ノカタナルヲ西口トヨフ一ツ此西口ノ發レトキ勾玉丸玉土器ナト出シトソ西口ノ頂上ニ後世豊城入彦命ト刻セル碑石ヲ建タリ

按スルニコノ古墳ヲ以テ豊城入彦命ノ御墓ナリトヨフハサル證アルニアラス八ツ里老ノ口碑ニモアラス唯寺古ノ物品ノ出シヨリ說ヲナセルナリ猶ニ一丘雙墓ナルナト當時ノ墓制ナラス證トスルニ足レリ

総社町光厳寺ノ傍ニ高二丈四圍四十三丈許ノ古墳アリ四辺壞毀タレト圓體状カツク存セリ字ヲ朝天山トイフハ頂上ニ辯財天ヲ安シタレハナリ冢ノ全面ニ沙礫散在シ南方ノ最下ニ墓門露ハレタリ其高六尺二寸深九尺二寸アリトソス（テ切石ニテ造リ上ハ大石一枚ヲ以テ蓋フ其奥ニ閻王像数軀ヲ置クハ後人ノ所為ナリ疑ナシ）マタ其西北ニ秋元山トヨフ古墳アリ之モ四辺壞毀ヲ或ハ截ラレテ小石ナト積累ネタレハ今ハ其形状サタカナラネト中段以上ノカタチニ拠ル

（楹邨ノ天朝ノ誤聞ナルヘシ）

ニ素ハ圓體ニツクリシモノナリ高三丈四圍六十五丈許ニテ全面ニ沙礫ヲ布ク南方ノ中腹ニ墓門アリ其中ニ石棺アリトソ今ハ墓門ヲ塞キタレト其形状ハ並河永ノ擬集古録ニ以大和石為冢ニ向南深四丈餘廣六尺石棺長七尺横三尺六寸ト記セルカ如クハタ石棺ノ隅ニ蛾ノ穿テレ穴アリトソ冢ノ頂上ヲナラシテツクリ領主ナリシ秋元某等五六代ノ墓所トシ西南ノ中腹ヲ崩シナラシテ光厳寺代々ノ墓所ト為セリマタ其西北二町許ニ高三丈五尺四圍五十五丈許ノ古墳アリ字ヲ愛宕山トヨフハ頂上ニソノ石祠ヲ置ケレハナリ之モ圓體ニシテ沙礫ヲ布タリ南方ノ中腹ニ墓門露ハレタリ其高八尺五寸深二丈三尺ハ（テ自然石ニテ積累ネ上ハ大石ヲ覆ヒテ蓋ト為セリ其中ニ石棺アリ長六尺横三尺七寸アリ前ノカタニ蛾ノ穿テレ穴アリマタ其墓門ノ前ノ地ヲ表シテ土人ノ墓所ト為セリ

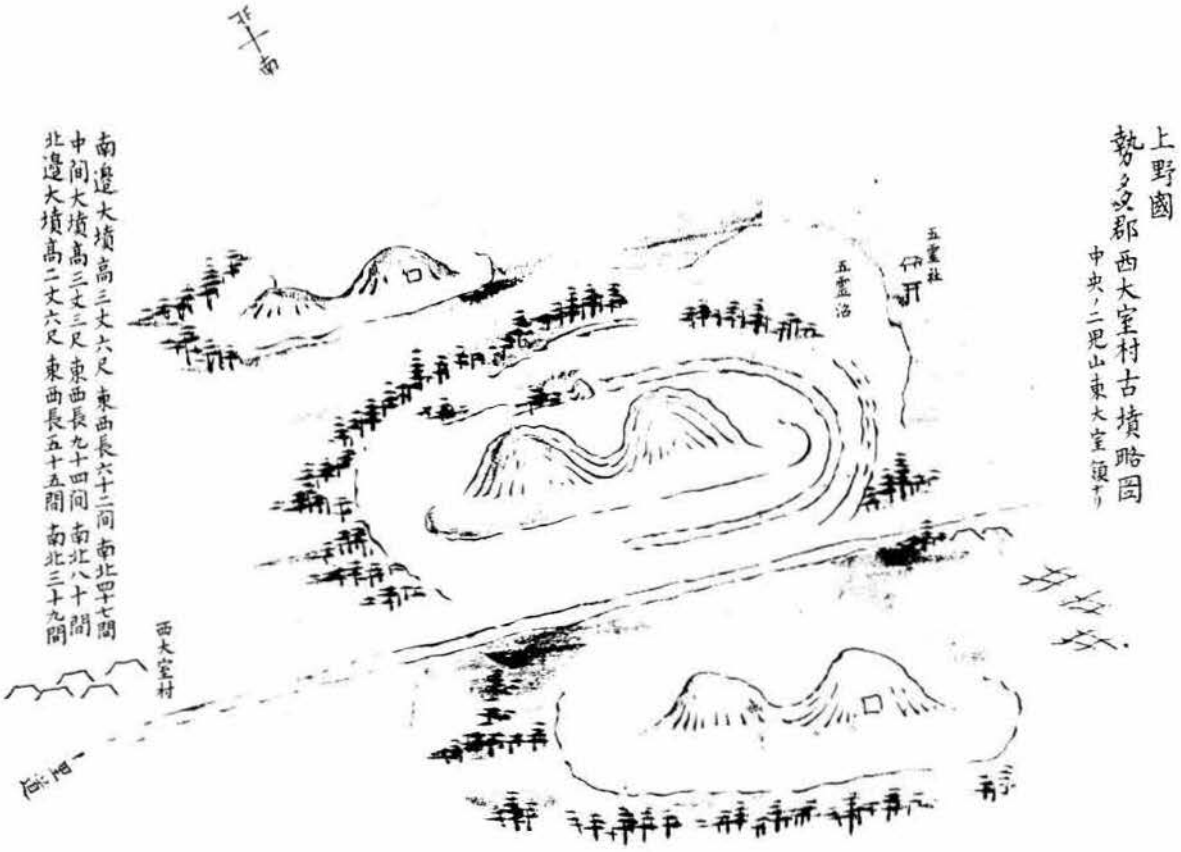
按スルニ件ノ三墓ノ状何レモ中世ノモノニテ上世ノ制ニアラス其ウチ秋元山愛宕山等ノ古墳ハマノ古ヲ辯財天山ノ古墳ハ一層新シクオホエ然ハ国號考ニ彦狭島王ヲ築奉シ地ハコノ總社村ニテ里人王イン塚トヨトイヘリ今其王イン冢ノアサナ知ル人ナケレハ三墓ノウチ何レノトモ分難シト何レニテモ其時代ノ制ナラサルヿ前ニ為カ如シ

保渡田村ニ八幡塚薬師塚ナト呼ヘル前方後圓ノ古墳アリ八幡塚ハ南面ニシテ高二丈四圍百丈許アリ後圓ノ頂上窪ミテ石櫛ノ蓋石アラハレ出タル傍ニ石ノ小祠ヲ置ケリ祭神詳ナラストソ薬師塚ハ西面ニシテ高二丈五尺四周百十丈許アリ南麓ヲ崩シ平シテ西光寺トヨフ寺ヲタテ後圓ノ頂上ヲモ崩シ虎シテ薬師ノ小堂ヲ建タリ其前ノカタニ長九尺横四尺許ナル練石ノ石棺出タリ天和年中ニ如此発キシ時勾玉管玉古鏡及儀仗ノ梓ノ及ナト出シトフ二塚トモニ四邊ノ地ヲ畑ニナシタレハ環隍ノ址サタカナラネト土輪ハ数タアラハシ出タリ

『古制徴証』に掲げられたものである。明治十一年（一八七八）十一月二十五日、大沢清臣等が、群馬県下の古墳を視察したときの復命書の写しであり、この頃の古墳のとらえ方がよくわかる。なお、文中の注の余書の号楹邨は小杉楹邨である。また、この視察は、次の二子山古墳の発掘に関連したらしい。

斎藤　忠編著1979『日本考古学史資料集成２　明治時代１』斎藤考古学研究所より転載

三　群馬県西大室山古墳図（『古制徴証』）



（縦一三・四×横一九・四センチ）

斎藤　忠編著1979『日本考古学史資料集成２　明治時代１』斎藤考古学研究所より転載

あ と が き

前二子古墳がある大室古墳群は、現在はそれを含めた 37ha に及ぶ広大な敷地が大室公園として整備されている。公園全体は市の公園緑地部が中心となって都市公園として整備され、大室古墳群の部分は、史跡公園として前橋市教育委員会が中心となって整備したものである。その場合、両者の間に緊密な連携がはかられ、細部にわたって有機的な関係を持たせていることが最大の特徴である。

現在、土日･祝日を中心に大室公園には、連日数多くの人が訪れて賑わっている。その際、いわゆる緑地公園部分からスムーズに史跡公園部分へと足を運ぶことになり、はてしなく広がる赤城山の裾野に抱かれて一大古墳群がある歴史的景観を満喫しながら散策することを可能にしている。

完成なった背景には、平成元年から平成 17 年に及んだ一大調査・整備事業があった。私もその一端に関わらせてもらったところであるが、刻々と進む古墳群の基礎調査をつぶさに確認することができたのは、古墳研究にたずさわるものとして、これ以上ない経験であったことは言うまでもない。

大室古墳群を構成する主要古墳は、早くに国史跡に指定され、調査・整備前から古墳時代の上毛野地域を理解する上での枢要な古墳として、多くの研究者によって検討が及ぼされてきていた。しかし、本格的な考古学的発掘調査が及ぼされたのは、今回の一連の事業がはじめてのことであり、古墳群の評価を一新させる 成果を輩出させたことは言うまでもない。

今回のシンポジウムでは、この一大整備事業を中心的に指導した白石太一郎氏、この調査に強い関心を持っており、調査中の現地に時々足を運んだ柳澤一男氏、高久健二氏、そして一貫して古墳群の実際の調査・研究を主導した前原　豊氏と筆者が一堂に会して見解を披瀝し、討議を重ねたことは、ある意味、一連の調査の総括的な役割の一端を果たすことができたのではないかと思っている。

今回のシンポジウムでは、特に前二子古墳に焦点を当てて議論をしたところである。それは、古墳群の調査の中では、本古墳に最も長期間を費やして基礎的調査が実施され、極めて多くの知見が得られたことも関係している。古墳群形成の口火を切った前方後円墳であり、古墳群全体の理解のカギを握っていると思われるからである。

前二子古墳を取り巻く考古学的状況が大きく進展したことも重要だった。豪族居館としての梅木遺跡、前二子古墳のモガリ屋の可能性が非常に強い多田山古墳群 69 号竪穴遺構の発見、さらには、明治期の石室調査で出土した副葬品の全貌が明らかにされたことの意義は非常に大きい。

今回のシンポジウムの表題に掲げた「東アジアから見た前二子古墳」は、前二子古墳を構成する諸要素の一つ一つをたどっていくと、それほど遠い先にこの東アジアという枠組みがあるのではないことが、講演やシンポジウムの内容からも浮き彫りになってきた。と同時に、多くの新たな研究課題が確認されたことも明らかである。

前二子古墳、あるいは大室古墳群、さらには古代東国文化の解明はこれからである言っても過言ではない。そして、その解明のプロセスこそ、考古学・歴史学研究の醍醐味である。

県民の多くの方々に興味関心をもってもらい。解明のあゆみの輪の中に加わってもらいたいと願うところである。

なお、今回のシンポジウムの遂行、さらには本書の刊行には、前橋市教育委員会文化財保護課のみなさんの献身的な従事があってはじめて成ったものであることを申し添えておきたい。

（右島和夫）

平成26年度国宝重要文化財等保存整備費補助金
史跡前二子古墳等　地域の特性を活かした史跡等総合活用支援推進事業

大室古墳の教室

古代東国文化シンポジウム

東アジアから見た前二子古墳
記録集・資料集

発　行　日　2015（平成27）年２月７日 第２刷
発　　行　前橋市教育委員会事務局文化財保護課
〒371-0853　群馬県前橋市総社町3-11-4
TEL.027－280－6511
印　　刷　朝日印刷工業株式会社